

煤

煙

水中に溺るゝ如き手つきして
頭のあらぬ偶像をだく

日が落ちて、空模様の怪しく成つた頃である。
東海道線の下り列車は、途中で故障を生じた
ので、一時間餘りも後れて岐阜驛へ着いた。車
掌が「ぎふ、ぎふ」と呼びながら、一つ宛車輛の
戸を開けて行く。其後から、乗客は零れる様に
プラットホームへ降りて、先を争つて線路の
上に架けた橋を渡らうとした。

小島要吉は三年振りで此停車場に立つた。今
頃故國の土を踏まうとは昨日迄も思つて居な
かつた。去年の夏大學を卒業した時でさへ、歸省
して見ようなどと云ふ心は起らなかつた。小
さい時から都へ出たが、いろ／＼因由が有つて、
故郷へは歸らない。一生歸りたくない。天が
下に自分の生國といふものが無ければ可いと思
ふことさへあつた。それが今度止むを得ない
事情で、突然歸つて来て、早くも聞慣れた土音を

耳にし、見慣れた風俗を眼にすると、幾許も他
國に放浪して、自分だけは他所の人間に成済し
たつもりで居ても、矢張此處の土と水とで出来
た人間だなど云ふ感じが俄に強く成つた。要吉
は妙な心持に成つて、一番後から橋梁を渡らう
としたが、偶と便所の側に、兩人の繩附が巡查
に連れられて竹の子笠を被つた儘立つてゐるの
が眼に着いた。他の乗客が通り過ぎるのを待合
せて居るものらしい。何處から護送されて来た
ものか、一人は人相の悪い老翁で、じろ／＼と前
を通る人の顔を眺めて居たが、最一人は肩の疼
めた女で、流石に俯向き加減に成つて面を見せ
なかつた。要吉は思はず足を留めた途端に、顔
を上げた女と眼を見合せた。二十四五の色の悪
着、白眼の勝つた女であつた。固より知らぬ
女である。で、只斯う云ふ者を見た時に誰もす
る可厭な感じがした許りで、其儘通り過ぎた。
改札口で切符を渡して居る時、直ぐ自分の背後

から其兩人が隨いて来るのを見た。
荷物を受取るのに良暇取つて、人力車を雇つ
て駈出した頃は、町の見世に燈火が點いて居た。
兩側に柳を植ゑた八間路といふのを眞直ぐに
駈けさせると、間もなく芝居小屋の機だの看板
だのがごた／＼して人通りの劇しい十字街へ出
た。其處を突切つて、滑川に沿うて行く、暫
く監獄の裏手に成る。高い黒板塀の角で、又前
の繩附を見かけた。果に吹かれながら腰細を
打たれて、巡查の前をとぼ／＼と歩いて行く。
要吉は最一度好く女の顔を見定めたいやうな氣
がして、車の上から振返つた。能くは分らぬが、
其女は懷妊してゐる様に思はれた。外套の襟を
立てて、兩人は今夜何處で寝るのだらうと思つ
た。兩人は同じ犯罪で捕られて行くのか、それ
とも互に知らぬ同志で、偶／＼一緒に護送され
るだけか。同じだとすれば何んな犯罪だらう。
放火か、亭主でも殺したのか。何れにしても込
入つた事情がある様に思はれてならぬ。又下ら
ぬ妄想を始めたなど、自分で打消して見たが、
今更女と罪惡とが未來永劫離れ難いものの様に
思はれて、摩り落ちさうな空模様と一緒に、要
吉の胸を壓し附けた。
要吉は自分の不行跡な生活を想ひ出した。去

年の冬、かねて妻と極つた隅江を故郷から招び寄せたには寄せたが、女の身に成ると、却て招び寄せられない方が可かつたかも知れぬ。一日もほつと思つた日は無からう。それが此春腹の兒が出来たと分つた時、産をする爲と云ふので實家へ歸した。其後で要吉もほつと息を吐いた。隅江は實家で女の兒を生み落したと云ふが、生れた兒も弱く、自分もそれから三箇月にも成るのに、未だぶら／＼して居るさうだ。當人からは只一日も早く快く成つて東京へ行きたいと云つて寄越した計りだが、母親のお絹からは是非一度歸れと幾度も云つて來た。それにお絹は又お絹だけで別に相談したい事があるもので、外でも無い、要吉の家に賣れ残つた山林を抵當に金子を借りようと云ふのである。お絹は平生の氣性にも似合はず、要吉に橋突いて執拗く云つて來た。それには又それを云はせる者が有るので、要吉は其人と母と、引いては自分と三人の關係に想ひ到る毎に、常に咽喉を扼されるやうな心持がした。初めは手紙で間に合はせる積りで居たが、周囲の紛糾した事情に堪へなく成つて、何事も一思ひに造切つて仕舞ふやうな了簡で、急に新橋を發つて來た。が、偕て此處迄來た上で考へて見れば、自分の様な意志

の薄弱な者が、面の當り會つた上で、何を爲し得よう、何を言ひ得よう、其結果は醜れた絲を一層纏れさせるだけに過ぎない。要吉はこの儘此處から、引回さうかと思つた。車は監獄の裏から寂しい町を幾町か走つて、堤へ上つてやがて長良橋へかゝつた。川風が寒い。石河原へ引上げた新造の船の横腹を藁を焚いて焦して居るのが、橋の上から見える。長良の町端から往還を左へ折れて、一里計り走れば、要吉の生れた村へ着くのだ。一筋の道が背間の中を仄白うつゞく。氣候が急に冷たく成つた所爲か、其邊の村々をそ／＼と歩く若衆一人にも出會はない。人力車の輪が憐々と轟く。要吉は帽子を眉深に冠つて頸垂れたまゝ、何處を如何して來たとも知らない。村の取附の水車を小舎で、杵の音が耳へ這入つた時、初めて眼を覺した様に頭を上げた。人力車の輪音を聞附けて、犬が小舎から走り出して吠え始めた。其處から二町計り行つて、用水の上の土橋を渡ると直に生れた家だ。要吉は門前で車を降りて、潛りを押さうとしたが、分銅の工合が悪くて開かない。扉に凭れたまゝ、少時躊躇つた。何だか自分の家へ戻つたやうな氣がしない。知らぬ他國に行暮れて、一夜

の宿を借りに寄つた様な心持である。そしてる間に中から扉を引いて、弓張提灯を持つた五十近い女が顔を出した。「まア要さぢやないか。餘り遅いで、今與三松の宅へ訊きに出かける所ぢやがな。さあ早うお溜入りやすな。」扉に片手を掛けたまゝ、お絹は身を開いて要吉を通した。要吉は一寸母親の顔を見て頷いた計りで、黙つて潛りをくぐつた。車夫が後から草靴を兩手に下げて這入つて來た。お絹は一寸門外を見廻したが、追ひ纏る様に隨いて來て、「與三松は如何した、あれは如何したぞい。」「え、與三松？ 知りません。」「まア停車場まで迎へに遣つたのに。屹度人込でうろ／＼して居て、見外して仕舞つたんぢやろ。」「左様でしたか、私も氣が附かなかつた。」要吉は行儀よく並べた圓い石の上を母屋の方へ歩いて行つた。小さい平家造りである。湯を立てたのか、庇から煙がもう／＼と立昇つて、ばち／＼と豆鼓の爆る音がする。偶と見ると、一人の女が風呂桶の前に蹲んで、肌を見いだ兩の肩に濡手拭を二重かけたきり、小氣味よく

發育した乳房の邊りをあか／＼と火に照されて居るのが眼に映つた。足音を聞き附けて此方を向いた拍子に、黒い瞳がきらりと流れた。戸口まで立上つて来て、

「欠張要様ぢやつたらうがな」と聲をかけた。

「あ、お倉か」と言つたまゝ、要吉は側を擦り通つて縁鼻にどさりと腰を下した。

「與三松に會はんのぢやとさ」と、お絹が張合の抜けたやうに言つた。

「まア何の事だ」とお倉は舌打して、「それに今頃迄何處を迂路々々してけつかるんだらう、あの御間めが」と、口汚く罵つた。與三松はお倉の弟である。

「歳が行かんもんぢやで仕方がないわな。其間戻つて来るぢやろ」と、今度はお絹が取成す様に言つた。

お倉は風呂の蓋を取つて、手を突込んで湯の加減を見て居たが、「要様、直ぐお風呂へお通入りやして如何ぢやな、着替へんさる前に。」

「左様ぢや／＼、左様するが可え」と、車夫から荷物を受取つて、座敷へ運んで居るお絹も言つた。

要吉は立上るのも懶い位疲れて居るので、跣して居たが、お倉が急ぎ立てる様に言ふので、

一日肩の張つた洋服を脱ぎ棄てて、下駄を突かけて土間へ廻つた。湯氣の一杯立昇つて居る風呂場へ飛込んで、頭を桶の縁へ凭せたまゝ、ぢやぶりと音をさせないで沈んで居た。

お倉は門側の物置から柴を一把抱へて来たが、どさりと其處へ下して置いて、「お湯の加減は宜しいかな」と訊いた。要吉は返辭をしないで、うつとりとお倉の容子を眺めて居た。お倉は風呂の下を覗く様にして、長い火箸でつゝいて居たが、手に餘る黒髪を弛く束ねて櫛で留めたのが、俯向く拍子にぐらりと肩へ落ちた。

お倉は周章で櫛を拾つて、兩腕を上げて手早く束ねようとした。小さい頭が太く長い頭の上に乗つて、腕から胸へかけて若い男かと思はれるほど氣持よく筋肉が發育した中にも、何處か女らしい婀娜さも見えて、時間から浮出した様にすらりと立つた姿は、名工の手に成つた銅像の様に思はれた。

一體此女は幾歳に成るのだらうと思つた。要吉が知つてからは、何時でも此通りの容貌をして、此通りの身體附をして居る。

お倉は此村に一軒ある××の娘であつた。親爺は村内に死人があつた時墓穴を掘るのが役で、冬に成れば夜番もする。其手原には川魚を

捕つて賣る。又百姓の閑な頃には浪花節を語つて近隣村を打つて廻つた。人からは其方の藝名で辰丸々々と呼ばれて居た。母親は又産婆を稼いで、此近所果隈の女房でお倉のお袋の手にかゝらぬ者はなかつた。こんな家内中が稼いで、好い錢を儲けながら、それで居て、家は年中風車で、村でも氣の好ささうな檀那場では必ず借錢をした。お倉も十七八の時分から娼妓に賣られて、初めが泊津、次に吉原、それから静岡の二丁間、大阪の難波新地といふやうに、五六箇所も住換へて稼いで来た。勿論其間には金持の嗜居に引かされたことも有つたし、所好な男と前借を踏んで逃げ出したことも有つた。

それが如何云ふものか半年と續かず、其度毎に男を棄てて、何時でも此村へ戻つて来た。そして親爺の側で百姓の手傳ひをして居た。左様して居る間に金が金に詰つて来ると、嫌な顔もせず又稼ぎに出かけた。これだけ永く娼妓などして居れば、酒の香が身に沁みて、土臭い田舎が可厭に成りさうなものなのに、お倉は一向平氣だつた。何んな荒い野良仕事をさせられても嫌とは云はなかつた。時たま兩親と喧嘩することもあるが、そんな時は何日でもお絹の許へ逃げて来た。そして一日も二日も家へ歸らな

いで遊んで居た。

日頃から此二人は合口で、お絹も自分が若い盛りに町から在郷へ嫁入りして来て、山のこけ猿の様に手が荒れて仕舞つたといふことを、生涯の不平にもし又自慢にもして来たやうな女だから、お倉の外に一寸話の合ふ者は無かつた。

お絹の實家は今潰れて仕舞つたが、元名古屋に有つたので、お絹は誰に向つても好く自分が十三の歳から御殿へ上つて、前様のお側でお宮仕へをした時の話をした。別けて好くするのは、秋になると御簾中様のお供をして、出来町の先のお林へ茸狩に行つた話であつた。髪を兒輪に結つて、羽二重の裾襦袢を着て、擦絲の帶を堅結びにして、赤い鼻緒の草履を穿いて、御簾側に引添つて、しやなら／＼と濟まして行く。自分の家の傍を通る時に、近所のお友達や母親達が見物して居て、あれ彼處にお絹さまが行く／＼と小聲で囁くのが聞えると、胸が躍つて嬉しかつたと云ふのである。要吉も此話は小さい時から側で何度となく聞かされた。それが如何云ふものか、子供心にも伴話のやうに思はれて成らなかつた。お絹が其時の様子を衣裳の色合や模様まで、目に見る様に委しく話せば話すほど、餘計に誰の様に思はれた。お絹は又お倉に對し

ても負けぬ氣に成つて、昔、新地の枕水といふ妓樓に居た菖蒲太夫の全盛を説いて聞かせた。

大阪の札指の零落れた家の娘で、其頃年紀はまだ十七にも成らぬ位、それは／＼蠟様見るやうな可愛らしい妓であつたが、可哀想にさる大盡に身受けされると、間もなく病み附いて死んださうな。お絹の談話工合から見れば、尾張大納言も菖蒲太夫もさのみ選庭が無いやうに見えた。

此様にしてお絹とお倉とは殆ど毎日の様に話し合つて暮した。お倉は何日も意氣地が有るのか無いのか、莫迦か伶俐か分らない女であつた。第一あれだけ永くあんな種業を勤めて來ながら、左様いふ女に有勝ちな、色澤の悪い病み萎けた容子は少しもなく、子供こそ生まないが身體は何日もみづ／＼と脂切つて、皮一重下には若い血汐が漲つて居る様に見えた。これからして誰の分らない女で有つた。

先刻から要吉は茫然して湯の中に浸つて居ると、お倉が不意に風呂の縁へ手をかけて、「背中を流さうかな」と訊いた。要吉は夢から覺めたやうに飛上つたが、「いや、最う、出る、出る」と、急に手拭をぢやぶ／＼進り出した。

「まあ靜手として被坐しやいよ」と、お倉は抑へ附けるやうにして背中を流して呉れた。

此時要吉はお倉の二の腕に入墨をして、灸で消した痕があるのを見附けた。強い腕の力で背中に擦られて、好い心持に成つて、「お前幾歳やに成つたんだね」と訊いた。
「三十四」と言下に答へる。
一寸まごついたが、「まだ一人身か」と訊ね直した。

「えゝと笑つて居る。
要吉は風呂から上つて、お絹が斯多た食膳に向つた。お絹は盆を持つて側に坐つて、お給仕をしながら、種々三年の間に變つた村の噂をした。併しあれ程差迫つた手紙を出して、要吉を呼び寄せた肝心の用事に就いては何事も言はなかつた。成るべくそれに觸らない様にして居る容子も見えた。そして一番多く隅江が産をした當時の騒動やら、それから後の消息を語つた。

「彼娘が慣れもんぢやでな。それに月足らずではあるし、生れた當座はこれで育つかしらと思はれる程小さな兒ぢやつた。なあお倉さま。」
「本當に自宅の阿母でさへ、あんな兒が育つと云ふは珍らしいと云つてたんぢや。」

お倉は風呂から上つて、湯氣の立つ身體を拭き拭き大きな聲で返辭をした。

「隅江さ此頃は最う大抵快く成つた様ぢやが、一時はどつと床に就いてな。それに彼娘の阿母さんと云ふが、左様云つては悪いが、私が見て居ても眞實の娘とは思はれん位構つて遣らんぞでな。」

お倉は要吉の顔色を眺めては、ぼつり／＼と話した。そして何かと云ふとお倉の方を向いて同意を求める様に「左様だつたね」と訊ねた。少し振に會つた爲でもあるが、我子にも氣を置いて居るやうな氣色を見ると、要吉は何となく可憫らしくて成らなかつた。

「未だ戸外へ出歩かれないやうな鹽梅ですか。」
「そ、そんな事も有るまいよ。明日にでも使者を遣れば、屹度飛んで来るだらう。」

「なに、それにも及びません。」

それから暫く経つてから、要吉は好い位に談話を切上げて、子供の時に起臥した寢間へ這入つて、記憶のある夜具を引被つて枕に着いた。停車場へ行つたといふ與三松が歸つて来て、お倉にがみ／＼言はれて居るのを夢現の境にして、其後はぐつすり寝込んだが、間もなく何者にか驚いて眼を覺した。枕頭には古い行燈の

油に滲んだ紙がぼんやり照されてゐる。何處からともなく鉦を叩く音がして、大勢の聲を揃へて唱へる御誂歌が聞える。それが竹數の向うへ廻つて遠く微かに聞えるかと思ふと、又はつと大きく近く聞える。秋の夜長に成ると、何處の二堂とか藥師堂とかの建立と稱へて、田舎では好く老人や若い者や、男も女も一緒に連れ立つて勸進に出掛けるのだ。要吉はそれが耳について久しく眠れなかつた。

二

明くる朝要吉が寢床を出た時は、障子に日影がかん／＼と當つて居た。曇つた空は昨夜の間に名残なく晴れた。楊枝を銜ながら縁側へ出て見ると、藏の前の明地に竹屋の佐兵衛が來て居る。庇の樋を取替へるために備はれて來たものらしい。裏の竹藪から太い眞竹を伐り出して鋸で壁に引き割る。引割つてから節を丹念に剔つて取るのだ。佐兵衛は要吉の顔を見ると、冠つて居たお釜の様な帽子を取つてお叩頭をした。

「樋を代へるんだね。毎歲今頃取替へるものかしら？」
「有り、左様と云ふ譯も御座いません。何時

でも田畠の閑な時見て遣つときますぢや。」
青竹を割つて樋を造ると云ふことが、要吉の心に適つた。何となく田舎へ戻つたといふ感じが深い。それに興を催して、まだ楊枝を銜へたまゝ其處へ蹲んで、凝手と佐兵衛の鋸を引く手を見詰めて居た。

藏の前の明地といふのは、元當屋根の柱が煤びて黒い母屋が立つて居たので、大地震の折に七分通り倒れかけたのを、恰度祖母や父の亡くなつた後で、家内は小人数で逼塞して居た時分だから、ついでに取り出して仕舞つて、其頃の離家に庇を繼がせて住まふやうにした。それが今の小さい家だ。母屋の跡は其後十餘年來明地の儘で捨ててある。べん／＼草も生えた。裏の物から根を張つた芽生えの笹も茂つた。子供は其中を狂ひ廻つて遊んで育つた。夏と秋との收穫には隣家から麥の穂や籾を載せて貰ひに來た。年の暮には小作人が集つて、樹で米を量つて、新穀の俵へ入れて藏へ納めた。或年の秋祭には其處へ小屋掛けして、村々居を興行したことさへあつた。屋敷跡で居を打つ様ぢや、最う其家の運勢も末だと云つて、村の年寄どもが識つたさうな。それが識を爲したわけでもあるまいが、お細の手一つに委ねて置いた身代は見る見

る傾いた。要吉は十四の歳から東京へ勉強に出されたが、それが大學を卒業するころには、最う小作人も年貢米を量りに、寄つて來なくなつた。

勿論其中には不作もあつた。三年續いて耕地の上を洪水が溢れて、米一粒野菜一把取れないこともあつた。左様成つては、年貢米を宛にすることが出来ない上に、片方では要吉の學費が段々かきむので、其頃から少しづつ田地を減し始めた。お絹は子煩悩であるから、我が子が成業するために、身代の無く成るなどは何とも思つて居なかつた。只それが向う五箇年の學費があるつもりで、豫算を立てて金子を調達して、お絹に預けて置くと、一年餘りの間に何處へか消えて仕舞ふ。又三箇年位はと思つて拵へると、一年足らずの間に無く成る。お絹は自分でも氣を揉んで非常に心配して居るが、其中から無くすることは矢張無くして居た。こんな合で元々多くも無い身代だから、今では雜木りて薪や柴しか刈れない山林が數町歩と、租税が高いのと年貢が重なるので、誰も買手の無い小作人の宅地が七箇所許り残つて居るだけに成つた。それだから要吉は學生時代から少し宛は筆で稼いで、學費を細く様にして居たが、學校を出た

其日から自分の腕一つで世に立つ外はなかつたのである。

「要きや〜。顔が洗へたら直ぐ御飯を喰べなさらんか」と、家の中からお絹の呼ぶ聲がした。

二三度呼ばれてから漸と開附けて、要吉は知らぬ間にお絹が汲んで置いた金盥の湯で、べちやべちやと顔を洗つたまゝ家の中へ這入つて行つた。茶の間ではお絹が膳立をして、長火鉢の側に子然として待つて居た。要吉は座に着いたが、茶碗が二つ伏せてあるのを見て、「阿母さんも喫らないで、待つて居て呉れたのですか。それは何うも〜」

「久し振で一緒に馳ばれよう思つてな」と、お絹はいそ〜と箸を上げたが、「何も口に適ふやうな物が無うてお氣の毒ぢやなも」

「なに澤山です」

「それでもな、お前さんが所好ぢやつたと云つて、佐兵衛が山の芋を持つて來て呉れたで、早速汁にして見た。さ、加減見てお呉れな。」

お絹は努めて愛想好くしたが、何處かきよときよとして我子を憚る容子が見えた。斯うして親子差向ひで顔を見合せて居ながら、二人の間には遠い距離が出来たやうで、何うも打解けた

心持に成れない。要吉は後にお絹に或關係の男があることも、それが何日からも知れぬ昔から續いた間柄で、今如何することも出来ない」と云ふことも知つて居た。其男といふのは矢張名古屋生れの畫工で、要吉の父が生前から知合であつたさうだが、或事情から一時國を離れてなかつた。それが父の歿後又繁々出入するやうに成つて、來る度に毎も手土産など貰つて來ては、要吉を自分の子の様に可愛がつた。それがたゞお絹に取入る爲ばかりでなく心から可愛く思ふらしかつた。尤も其時分は要吉もほんの子供で、何の事やら譯は分らず、お絹が伯父様と呼べと云ふから、其通りに伯父様、伯父様と云つて懐いて居た。其伯父様はいろ〜家の中の世話を焼いたが、岐阜が大失火で丸焼けに成つた頃、好い仲間があるから芝居小屋を建てよう云ふので、お絹を説伏せて田地を大半賣入させたが、板葺の小屋が出来上つて、田舎廻りの旅役者で一興行濟んだ頃には、もう人手に渡ると云ふ様な事もあつた。其外これに類した事は幾許もあつたが、要吉は別に氣に留めなかつた。それが段々物の譯が分つて來ると、最う伯父様とは呼ばなく成つた。其男の方でも流石に遠慮して和遠さかつた。其後要吉が東京へ出た

後では、又自分の家の様に入り浸つて居ると云ふことを薄々聞いて居た。それ許りでなく、其頃から氣が荒く成つて、家中を引掻きまはして、有金を掴み出して使ひ捨てる。それでも足らんで、お絹を口汚く罵つて、打つたりはたいたりすることも有つたさうだが、お絹の方に未練があつて、如何しても別れられないで居た。そんな目に會ひながら、直ぐ其後から忘れて仕舞つて、二言目には伯父様がノと要吉の方へ決して惡うは言つて寄越さなかつた。其男が酒にでも酔拂つて、一俵はこんな月田令で朽果てるやうな平凡畫工ではない。立派な腕を持ちながら、手蔑が無いため一生一頭の上らぬのが残念だ」と、空の煙を疊へ投げ附けて啼り立つ時などは、お絹は隠られて紅くなつた肘を撫でながら、涙を流して幾度も點頭いた。何でも男の言ふことを正直に信じて居た。此男の手にかけては、お絹は宛然新細工の様に如何にでも成るのであつた。要吉も是等の事情を大抵は知つて居た。それで心の中では憤慨もし苦々しくも思ひながら、自分から進んで如何することも出来なかつた。一體、要吉は何事に依らず成る様に成らせて置くことしか出来ない男で、それには又始終東京で暮して遠く離れて居たから、

都合の好いこともあつた。けれども、今日の當りお絹の落着かない容子を見て、心では既う自分を無外して居るのだなと感附くと、我を忘れて母親が憎らしく成つた。で、箸を下に置いて、凝手とお絹の顔を見入つた。

昨宵釣洋燈の火影で見た時は、さのみとも思はなかつたが、今朝見ると、お絹の老け様は一通りでなかつた。昔から名代の洒落者で、今も身振みがよく、何日頃の流行かは知らぬが、黒天驚絨の襟を掛けて青筋の張つた頸筋の色の際立つて白いのや、眼の縁に小皺が寄つて紫色に見えるところなどは、昔ながらの様でもあるが、頬がげつそりと瘡けて額が抜け上つた爲に、何處となく顔が野卑に見えて、これが自分を生んだ親かと情なき位であつた。昔、要吉が七八つの時には、他所へ連れて行つても、阿母さんと呼ばれるのを嫌がつて如きんくと呼べたものだ。今こんなに成つて居ながら、まだ年齢を隠す心持が失せないのか、好く氣を付けて見ると、いやに黒光ると思つた髪は染めたものであるらしい。これ程迄にして男に飽かれまいと努めるのか。いかにも人間の弱點を目前に見せ附けられた様で、要吉は漫ろに淺ましく成つた。淺ましいと云ふよりは、母親が可憫ら

しく成つた。これで見れば、お絹はお絹で始終屈託が絶えぬのだ。左様思つて見ると、可哀想に容子が落膽して居る。要吉は胸が詰るやうな氣がした。

「如何かお爲たのか、何もお食べんやうぢやが。」お絹は氣遣はしさらに要吉の顔を見上げて言つた。

「ねえ、阿母さんと、要吉は一生懸命に涙を飲み込んで、「私は今度成らうことなら阿母さんと一緒に東京へ歸らうと思つて來たんだが、如何だな、阿母さんも一つ奮發して、こんな家なぞ離れて出掛けては——私も左成りや安心します。」

お絹は驚いたやうで有つたが、「私もな、左様思はんことも無いが」と、頸を襟へ落して考へ込んで仕舞つた。

二人は暫く無言で相對した。

良有つて、要吉の方から口を開いた。

「山林を抵當にして、何れだけとか金子を借りる話だつたが、實際そんなに貸す人が有るのですか。」

お絹は急に元氣づいた。聲に張も出て、襟當に有るのぢやとさ。それがね、お前は知らぬぢやろが七五郎と云つてな、若い時から村を飛び

出して永いこと行方の知れなんだ人ぢやが、去年不意に臺灣から大金を儲けて戻つて来て、あの蟬に有つた自家の宝地な、彼處を買つて立派な普請はするし、それはえらい勢ひぢや。其人が自家の判さへ捺きや、幾許でも貸さうと云ふんぢやげな。」

要吉は俯向いたまゝ聞いて居たが、「ま、貸す人があるにしても無いにしても、阿母さんも彼人の爲に金子を工面するのは、好い加減に止めたら如何です。随分久しいものぢやないか。彼人の爲には自家も何度となく餘計な損をして来たのですからね。」

「それだから」と、お絹は相手の言葉を抑へる様に、「今度青山様の御道具がお拂下げに成るに就いて、それを引請けて、名古屋へ来て居る西洋人に嵌める事が出来さへすりや、大變なお金に成ると云ふのぢや。左様なれば、從來損した位は一度に埋合せが着くと云つてぢやが、何分側から競争する者もあるので、早い處手附を打たにや成らぬが、それが未だ手に入らぬので、伯父様も毎日氣を揉んでおいでぢや。」

「だつて、左様いふ物は又其道の商人があつて、素人に儲けさせる迄放つて置く筈がない。それに舊大名の道具が今頃拂下げに成ると云ふの

も訝しいし、左様いふ事は得て詐欺師の種に使用されるものですぜ。」

「いゝえ、そんな事はお前、伯父様も左様云ふ方には眼が利いてるで間違ひは無いわな。此間私も一寸見せて貰つたが、六枚折の屏風一雙で三千圓もすると云ふんでな、それは見事な物ぢやつた。」

「三千圓の屏風は如何でも可いが、私はどうも其んな事に係り合ふ氣には成れませんね。」

斯うきつぱり言ひ切られると、お絹は又しよげて仕舞つた。

「伯父様も一生懸命に成つてお坐ぢやがなア」と、未練らしく言つたが、「それにな、實は彼人も仕事の方が面白うなうてな。晝きにかゝると何うも手が震へて不可んさうぢや。近頃は身體も減切り弱つて、私も困つて居るわな。」

「矢張酒毒ですか。」

「左様ぢやらうな」と、お絹は溜息を吐いた。

伯父といふのは、名古屋から出る七寶殿の圖案を渡世にして居たのであるが、舊時代の職人で、新しい意匠の持合もなく、左様でなくとも餘り歓迎されぬ所へ手が利かなく成つては、今後如何することだらう。あれでも繪を畫く人の端くれかと思ふと、要吉は何だか才なく

して藝術に依頼する者の末路を見るやうな心持がして、如何やら我身につまされた。それと共に日頃成るべく避けて考へまいとする或事を想ひ出さずには居られなかつた。それは自分が或は此身を持崩した老畫工の血を別けた子かも知れないといふ疑懼である。こんな事はお絹も流石に言はないし、要吉も決して口へは出さなかつた。併し兩人顔を見合せると、暗黙の間にそれを計して居るのであつた。

要吉は其事を底迄突留めて確めて見るだけの勇氣が無かつた。只成るだけそれを想ひ出さな様に、考へない様にする外に術はなかつた。それを思ひ出せば、要吉の眼には必ず蒼い顔をして誰かの上に横はつた亡父の儼が泛んだ。要吉が五歳の春亡く成つたと云ふから、實際父の面影と云つては何一つ記憶えて居ない。人に聞けば八年も病褥に横はつて居たと云ふ。其永の歲月、お絹は些とも可厭な顔を見せないで、他人からも感心される程忠實に病人を介抱したさうだ。それだけが切めてもの慰縁であつた。

要吉は不意に、「阿父様の二十三回忌は來年でしたかね」と訊いた。

お絹は妙な顔をして我子を見返したが、

「左様、來年ちやつたらうな。」

「阿母さん、阿父様も氣の毒な人ぢやつた。些たア阿父様のことも思つて上げて下さい。」

「私が」と、お絹は眼を圓くして、「私が阿父様の事を忘れて居るつて、お前迄が其んな事を思つてお呉れか」と、俯向いてしく／＼泣き出した。

が、又顔を上げて早口に言出した。

「私はこれでも阿父様の忌日命日を忘れて暮したことはない。けれど、あの伯父様はな、お前知るまいが、阿父様の生きてぢやつた頃から随分自家の利益に成つた人ぢや。そりや芝居小屋なんかで損したことも有るにや有つた。それを言出されると、私はお前の前へ顔を上げられんが――」

「阿母さん」と、要吉は鋭く言ひ切つた、「私はそんな事言出しちや居ない。」

「そ、それが」と、お絹は狼狽して、「そんな事お前は言出しは爲なさらぬ。けれどもが、それを思ふと私の胸は眞に切ない。それと云ふが、伯父様だつて皆お前の利益を思つて、自宅の身代を殖したいばかりで計畫んだ事ぢやけれど、何うも思ふ様に成らなんだのぢや。お前だつて伯父様のことを餘り惡う思つては濟まい、濟

むまい。」段々泣聲に成つて、しどろもどろな事を言ふ。

要吉は黙つて見て居たが、やがて「阿母さん、ま、泣くのは止めて下さい、泣かなくとも譯は分つて居る。私は斯うして東京から態々來た位だから、阿母さんもそれ程に思つて居るんだもの、決して證文に印を捺すのを拒むつもりは無い。勿論私もあんな賣れ残りの林など當にしちや居ないんだから、阿母さんの好い様に爲さるが可いのさ。だが、愈々抵當に入れて金子を借りる」と成りや、もつと好く事情も調べた上で、確に見込が着いてからにしたい。ね、左様でせう、それが至當でせう。」

お絹は返辭をしないで、子供の様にしやくり上げて泣いて居たが、急に袖で眼を拭つて顔を上げた。

「最う解つたで何にも言つてお呉れでない。今度伯父様が見えたら譯を言つて斷りませう。ね、私も好く得心が行つたで、最う心配してお呉れんが可え。」

要吉もお絹が當て附けたやうな變り方に氣が附かんではないが、別に何とも言はなかつた。やがて二人は冷えた飯を茶漬にして、飲み込む様にして食事を終へた。

三

今朝も空一面に蒼く晴れ渡つた。三反計り昇つた太陽の光線を眞正面に浴びて、要吉は町から長良の町の方へ新道を歩いて行つた。近頃縣道に編入されて道標請をしたので、幅の廣い道が何處までも眞直に續いてゐる。こんな道を少し急ぎ足に歩いてると、何時となく胸が廓然として心持の好いものだ。電信線が一本だけ道に沿つて低う張つてある。それへ幾羽とも數へ切れない雀が行儀よく並んで棲んで居て、人が近づくとぱつと立つ。要吉はそれに氣を取られて、殆ど何も考へないで歩いて居た。

幾度も市場へ野菜を曳いて行く荷車を追ひ越した。其間自分も後から來た郵便脚夫に追附かれた。假頭笠を被つて、荒い麻の囊を棒の先に結び附けて擔いだのが、飛ぶが如くに行つて仕舞つた。要吉は其後影を見送つて居たが、偶と可厭なものに眼に映つたので、俄に惡寒でもする様に足を留めた。

前面の道から十間程横へ入つた大根畠の中に、六坪か七坪の小さい篠竹の敷がある。土俗道三の首塚と稱へて、要吉が小兒の時分には、稻葉山の麓のおぼろが池と共に諸人恐れて近寄ら

なかつた。藪の中には一基の墓石が半ば土に埋もれてると云ふことだが、要吉は嘗て見たことはない。舊記によれば、道三は俗名を齋藤庄九郎といふ。京都の油賣で其性悍惡、美濃に來つて國司土岐氏に寄寓して居る間、欺罔つて其一門を盡しにし、此國を横領した。一時は惡運強く世に時めいたが、老後子の義龍に代を譲つて、其身は別に砦を築いて隠居するに及んで、忽ち仲違ひして父子干戈を交へ、長良川を挟んで陣するに至つた。一戰して道三の軍破れ、纔に身を以て逃るゝ所を、百姓の爲に竹槍で突殺された。弘治丙寅二年四月歿す。行年六十五歳とある。其後首は河原に捨てられたが、近臣それを拾つて此所に埋めたといふ。村の百姓は固よりこれだけの事をも知らない。只此藪には道三の執念が何日迄も残つて居て、若し過つて足を踏み入れた者があれば、直に悔ろしい祟りがあると宣傳へて居る。それも要吉が子供の時分の話で、それから十四五年も経つた今日でも、小學校へ通ふ子供達が道草を喰ひ過ぎて、夕暮れ人顔の藪に見え出した時など、矢張此藪を怯て頭を隠して駆け抜けるか如何かは分らない。

何と思つたのか、要吉は前後を見廻して、

む様に畑中の小徑を傳つて、此藪へ近づいた。垣根に手をかけて、及び腰に成つて藪の中を覗いて見た。竹に絡つた葛だの蔓草だのが未枯れて、大分奥の方まで見透されるが、別に怪しいものも眼に留らなかつた。それでも中へ踏込んで見る氣には成れないと見えて、靜手と手を掛いて立つて居た。

此時要吉の眼に明々と泛んだ匂がある。坊主頭の白髪が五分許り延びた、而拵せて、身丈の鬨抜けて高い老婆が七つ許りの男の兒の手を引いて、朝まだ日が上らぬ間に、人目を憚つて狐鼠々と此藪へ近づく。やがて扶から三寶と土蓋とを取出して、御酒を此藪の主に供へた。先づ自分か地に跪いて、合掌して長い祈念を凝した。それから側に怖々立つて居る孫にも、自分の通りにせよと教へた。男の兒はがつ／＼藪の根を合せながら、教へられた通り小さい手を合せて拜んだ。老婆は、「最うこれで可いぞよ、さあ歸ろ」と言ふ。男の兒は泣出しさうな聲で、「お祖母、お祖母」と呼びながら、一生懸命に老婆の手に縋つて、逃出す様に走つて村の方へ戻つて行く。

此老婆は二十年前に世を去つた要吉の祖母で男の兒は要吉自身であつた。

四年の間月の初めの朔日には、夏も冬も、この藪に此二人の影を見ないことはなかつた。只何かして朔日に雪が降つたり、雨風の烈しい朝などは、老婆一人で來ることもあつた。老婆は歸りの道すがら孫に向つて言つて聞かせた。「此様にして毎月お前を連れて來て、道三の墓へお詣りして御説をするのも、昔お前の祖父様が餘り氣が荒かつた爲ばかりぢや。あの時私が幾許留めたか知れんのに聞き入れなさらんて、昔から祟りがあると云ふ道三松を到頭伐つてお仕舞ひなされた。それから自家は道三に祟られたのぢや。」

祖母はこれから後は語らなかつた。要吉の子供ごろには何の事とも譯は分らなかつたが、只道三が怖いと云ふことだけが、小兒の頭に深く沁み込んだ。道三といふと穂栗頭の白い刺々した鬚の生びた、片眼で色の青黒い大入道の様には思はれて成らなかつた。明日の朝は又祖母に連れられて、例の處へ行かねば成らぬなと思つて寢ると、其夜は屹度大入道が來て要吉の背中に負はれようとした。それに驚かれて一時顔色の悪く成つたことさへ有つたが、そんな夢を見たといふことは、祖母を初め誰にも言はなかつた。それを口外すると悪いやうな氣がして居た

のである。

其後誰か聞いたと云ふこともないが、何日となく要吉の知り得た事實を繰合せると、要吉の祖父に當る人で、祖母の連合といふのは此村の里正であつた。若い歳から親の跡目を継いだので、血氣に任せて我儘な振舞ひをすることも随分多かつたさうな。或時何のためかは能く分らぬが、道三松を伐らうと言出した。其頃祖母は長良の常願寺といふ寺から嫁に來た當座であつたが、それは餘りなと云ふので、切に留めた。けれども、留められると尙張合が有るもので、血氣盛りに祟りなし、退込んで俺の遣口を見て居れと云つたやうな調子で、一向聞入れる様子もなく、翌日から杣を備つて來て、大小三本あつた老松の中で、初めの日は左の一本を伐つた。其日は何事もなかつた。それ見たことかと云ふ様に勢ついで、次の日も右の一本を倒した。三日目には愈中の一本で、四五百年も経たかと思はれる此大木を伐り倒せば、それでお仕舞ひと云ふのだから、皆朝早くから出掛けた。祖母も其日は流石に氣が弛んで、閑かな目向で張物をして居る所へ、備はれた杣の一人が息せき切つて駈けて來た。突然祖母の袖を掴んで、「大變だ、大變だ」と語り、何を言ふのか分

らなかつた。漸く今此處へ旦那が釣られて戻つて來ると云ふことだけ分つた。祖母は的切り倒れる松の下に成つて負傷をしたに違ひないと思つたので、其儘使の者を捨て置いて、ひとりで駈け出した。途中まで行くと、向うから祖父が人の背に擔がれて來るのに用會つた。取敢ず座敷へ擔ぎ入れて帶圍の上に寝かしたが、其時も祖父はまだ正氣を失つて居た。杣は皆異口同音に言つた。今朝も毎もの通り向ひ曳きの大銀で勢よく伐り込んで、九分通り伐れたところで、いざと云ふので皆片側へ寄つて、此方から綱で引張ると、流石の大木もめき／＼と軋んで、見る／＼凄まじい地響きを立てて倒れたが、怖ろしや、其刹那伐口からばつと血を噴いた。それが眼に映ると、根元の方に見張つて居た祖父は即座に卒倒して仕舞つた。其場に居合せた者は、誰も彼も皆血が噴いたのを見たと言つた。それで自分達も何んな祟りを受けるか知れぬと言つて、青く成つて戦へて居た。祖父はそれから息を吹き返すには返したが、兩眼は其儘盲ひて、熱は何日迄も退かなかつた。醫も、加治所禱も、祖母が心づくしの介抱さへ更に驗が見えないで、四十日餘りも経んだ果に、三十一を一期として息を引取つて仕舞つた。

祖母は其頃懷妊つて居たので、間もなく男の兒を儲けた。元來氣丈な女であつたから、そんな幼孩を力に二十の歳から六十の餘まで、さまざま憂い日辛い目も堪へ忍んで、四十年の間寡婦を通して來た。其子が成長して、お絹といふ嫁を貰つて、祖母はもう是れで安心して眼が瞑られると云ふ段に成つてから、一生の杖でも柱でもあつた息子が父病褥に親しむ身と成つた。それが人の惡む脫疽といふ病で、永年煩つて、終ひには一間に閉ぢ籠つたまゝ、見るもみじめな最期を遂げた。息子が病氣に罹つた時、一番力を落したのは祖母で、或年京都へ上つて六條の本山に參詣したついでに、名高い易者があると聞いて訪ねて行つて見て貰つた。易者は祖母の顔を見ると、直ぐに首を振つて、「お前さんはえらい業人だ。何でもお前さんの家では山姥ある樹を伐つたことがあるに相違ない。それがお前さんの家へ代々祟るので、お前さんの息子だけぢやない、孫があれば、孫も同じ様な病氣に成るか、それが逆へば氣が狂つて早死をする。氣の毒ぢやがお前さんの家の血統が絶えなければ、其祟りは退くまいよ」と、圖星を指した様なことを言つたきりで、向うを向いたまま、後は何を訊いても相手に成つて呉れなかつ

た。それでは取附く島もないので、必死に成つて願つた末、やう／＼易者は、「まあ其祟りの元へ好く説つて見るのだな。それも験があるか無いか、私は請合はぬ」と言つた。それだけの言葉の端を手頼にして、祖母は若く成つて故郷へ戻つて来た。それからである、祖母が世を終るまで、毎月の朔日には、雨の日も風の日も、人目を避けて此道三の墓へ詣るやうに成つたのは。

小さい時は、要吉も實際祖母の云ふ通り左様いふ祟りや呪ひが有るものと信じて居た。世の中は只眞暗に見えた。自分の一生は、雨のしよぼしよぼ降る晩に、野中の細道を提灯一つ力にとぼ／＼通るやうな氣がして心細かつた。

祖母は八つの歳に死別れた。それから母親の手一つで育つて、随分甘やかされたが、如何いふものかお細には餘り懐かなかつた。お細が例の伯父様と一緒に岐阜の町へ出掛けて歸宅の遅い時などは、子供心の寂しさに、門の柱に凭れながら黙つてひろ／＼とした野末を眺めて居た。冷たい涙が二筋頬を傳つて流れる。こんな時には歸つて来ない母よりも、死んだ祖母が戀しく成つて、聲を出して、「お祖母、お祖母」と

呼んで見たこともあつた。

良長では、そんな家の祟りと云ふやうなものに對する恐怖の念は薄らいだが、其代り疾病の遺傳が有りはせぬかと云ふことが氣にかゝり出した。手を切り足を斷ち、木の斷株の様に寝たきりで、何から何まで人の世話に成つて、それでじり／＼と命數の盡きるのを待つ。そんな事が堪へられようか。いや左様成るまで、斯うして手を束ねて待つて居る方が、猶更堪へられない。眞夜中偶と眼を醒まして、蒲團の上に坐つたまゝ、生甲斐のない前途を想像して、戰慄したことも何度有るか知れぬ。其都度父のことを憶ひ出しては思ひ返した。其通りの生涯を経て通つた人が、既に自分の前に有るのではない。自分は其不幸な父が怪しい晩年の、唯一の慰藉であり希望でもあつたと云ふではないか。それだけでも自分が此世へ生れて来た甲斐はある。自分と云ふ者が此世に存在した意味はある。假令父と運命を共にし數奇を分つとも、父の爲に犠牲と成つたと思へば、悔いる所はないとまで思ひ詰めた。

父の例と云つては、直接要吉の記憶には残つて居なかつた。が、其頃父の按摩を頼まれて來い／＼したお倉のお袋がいろ／＼話して聞かせて呉れた。この婆の語に依ると、要吉が生れる迄は、父は飽迄迄家の跡目が自分一代で絶える覺悟をして、人から養子など勧められても、頑として聞入れなかつたさうだ。それで生前から氣に入つた小作人に家屋敷や田地を分けて遣りなどした。それが子供の顔を見てから急に思ひ止まつたと云ふことである。要吉は此話を聞いて父が自分を生れるものと思つて居なかつたを知つた時には、何とも名狀し難い妙な心持がした。父は其身限りで小島の家の血統が絶えるものと思つて居た。或は絶やさうと計つて居たのかも知れない。「只一代延びた」と、要吉は冷やかに考へた。

要吉が東京へ出たのは、最初陸軍に身を投ずるためであつた。恰度日清戦争が終つた頃で、地雷火の洗禮を受けて、身體が跡方もなく粉碎されると云ふことが心を惹いたのだ。が、間もなく其志望を放棄した。陸軍へ進入すると云ふことは、身體が木の斷株に成る前に、先づ頭が木の斷株に成らなけりやならぬことが解つたからだ。陸軍の方でも要吉の様な士官を得なかつたのは勿怪の幸ひだらう。

一年振りで歸省した時には、前とは大分心持も變つて居た。此夏要吉は例の婆から一大事を聞いて仕舞つた。或は其頃の家の亂脈を見かねたのかも知れぬが、或日要吉に向つて斯んな事

を言つた。「先の旦那は本當に氣の寛大な人ぢやつた。世間ではお絹さまの悪い噂が立つて、要吉だつて誰の子か分るもんぢやない、其證據には些とも似て居らんぢやないか、とそんな事を言ひ觸らし居ると告げたら、只寂しうに薄笑ひして私の宅で私の家内が生んだのぢや、私の子に相違ないではないかと言つたきりで、相手に成らず、餘計な告口したやうで、却て此方の顔が赧く成つた」と。婆は別段何とも思つて居ないのであらう、こんな事を平氣で言つたが、聞いた要吉は足下の大地が摩り落ちて行くやうな氣がした。此上開組して見る勇氣は出なかつた。其後も此事については何人とも口を利いたことがない。今でも未だ婆の言つたことを虚偽とも眞實とも思ひ定めては居らぬ。何方も可厭であるが何方にしても一身の破滅は免れない。只人間は何んな境遇にも慣れて仕舞ふものである。其後の要吉が放縱な生活は、其時すべての理想に對する信仰を失つた爲だとは、流石に自分でも考へることを恥ぢて居た。

それが今通りますに、久らく忘れて仕舞つて居た道三の首塚が目に着くと、自ら祖母の傍が眼に泛んだ。六七十年前に此蔭蔭で起つたといふ家の悲劇が憶ひ出される。松の樹の幹

から血を噴いた。そんな事が有るものかとは、要吉には如何しても思ひ切れない。それは恐らく一種の幻覺でもあつたらう。けれども祖父は確にそれを見たのだ。その爲に生命まで取られたのだ。祖父で無かつたら、そんな血は見えなかつたかも知れぬ。けれども祖父に取つて、松の樹を伐つて血が出るのは、人の腕を切つて血が出るよりも確な事實であつたのだ。祖母は堅くそれを信じて居た。父は分らない。が、其人は生きながら影に成つた魂を見るやうな人であつた。要吉も此家傳の幻惑を免れぬのではなからうか。昔、祖母が此墓の前へ連れて來て手を合せて拜ませた時、小さい心に種子を蒔いたのだ。何日かは其種子が芽を吹かずに止むまい。

要吉は組んで居た手を解いて、念の爲に小敷を一週りして見た。それから又元の所へ出て、だらりと手を垂れたまゝ立つて居た。

「要様、何してるのぢやな、そんな處に立つて？」

不意に聲を掛けられたので、要吉はぎくりとして振返つた。お倉が道から此方を向いて立つて居た。

「え、なに」と、要吉は強ひて何氣ない顔をして、

煙の畔を傳つて道の上へ戻つて來た。

お倉は今土の中から引いた許りの蕪菁を一杯詰めた手籠を提げて居た。裾を高く端折つた下から白い腰巻を見せて、朝露に濡れた脛には菜の枯葉がへばり着いてゐる。

「早うから何處へお出掛けやアした？」

「うむ、一寸常願寺まで。」

此寺は祖母の生れた家であるが、又隅江の實家でもある。要吉と隅江とは又従兄妹同志で有つた。

「あ、お在所へ。何かな、隅さまは貴方が此方へお出のこと最う知つて見えるかな。」

「いや、未だ知るまい。」

「ま、それぢや早う行つてお上げなさい。そりやア可愛らしいんですよ。見やしたら、屹度連れて行きたく成る位だに。」

「赤ん坊かい。」

「えい。一寸何んな氣持がするの、殿方てえものは？」

「何が。」

「初めて子持に成つてさ。」

「左様さね」と言つたが、「成程、お前は子供を生んだ覺えが無いんだね。如何だい、遣らうか。」

「そんな事言ふもんぢや有りませんよ、冗談にも。大切なお兒を利等風情に」と、お倉は眞顔で言つた。

「だが、子供は眞個一人欲しいと思ふことが有りますよ。亭主なんざ一生欲しいとは思ひませんが。」

「そんなものかい。」

「だつて」と、何やら言ひ掛けたが、不圖氣を變へて、「今夜彼方でお泊りやアすか。」

「いや歸るつもりだ。何故？」

「何故と云ふこともありませんが」と、お倉は言葉を探して、「阿父さ、今頃旬外れの鮎が捕れたで差上げたいと云つてましたから——」

「それは有難う。ぢや又。」

要吉は踵を回して五六歩踏み出したが、お倉が又「ちよいと、ちよいと」と呼んだので振り返つた。

お倉はうそ／＼笑ひながら戻つて来たが、何と思つたか聲を潜めて、「貴方、東京で何か隅さまに心配させやしたことが有らんぢや無いか。」

「何を言つてゐるんだな」と、要吉は事もなげに斥けたが、お倉の眼附を見ると又氣になるので、「隅江が何かお前に言つたのかい。」

「いゝえ、何も聞きやしません。ですが、そんな事位利が見りや大抵解りまさせね。」

「莫迦な」と、要吉は空睨いた。

「そんな事如何でも可い、早う行つてらつしやい。左様なら」と、お倉は尻上りに言つて、後も向かずに、村の方へ歸つて行つた。

お倉に別れると要吉の心は又沈んだ。自分は既に人の親であると思ふと、それが今初めて起りでもした様に愕かれる。父は其身一代で家の跡を斷たうとした。そこへ自分と云ふ者が生れて、父は其生涯の祕密を抱いたまゝ、死んで行つた。切めて自分の代には父の志を果さうと決心したことも有つた。それが矢張り知らぬ間に——若し左様云ふことを許されるなら——知らぬ間に次の代が出来て仕舞つた。生れて来る子は、何も知らずに、此屍はれた家の一員と成つて、其小さい肩に父の呪詛を分けて擔はねばならぬ。斯う成れば最う手の下しやうは無い。生命の流れは今後幾萬年を経て、時の流れの悉きるまで續くかも知れぬ。斯う考へて来て、要吉は思はず兩手で胸を搔抱いた。強い恐怖の念に襲はれたのだ。死は不可思議である。而も生は更に不可思議である。其渾り難い神秘に、これから行つて面の當り食はなければ成らぬ。

要吉は幾度も途の上で振返つた。何だか怖ろしい物を避けて見ないで居る様にも思はれて、氣がさして、故らに眼を放つて前的小藪を見遣つた。小藪は光の波の深ふ中に、只前に黒く立つて居た。

四

やがて要吉は柱を赤く塗つた寺の門をくぐつた。本堂の屋根に草が一二本立つたまゝ枯れたのが眼に着く。正面の雨滴落に錦物の天水桶が揺るである。近寄つて中を覗くと、足の長い蟲が青く濃んだ水の上を彼方此方走つて居る。それを見詰めたまゝ、何の爲にこんな處へ来たか忘れて仕舞ひたいやうな心持に成つた。

森とした寺内で俄に大が氣た／＼ましく吠え出した。要吉は自分が吠えられる様な氣がして、ふいと顔を上げると、庫裡の戸口にぼろ／＼の檻を下げた乞食が一人立つて居た。犬はそれを遠巻に吠える。戸の中から女が手を出して、盆の米を装の中へ明けて遣つた。乞食はそれを貫つて糞の口を緊めると、遽で逃げるやうに門の方へ出て行く。内からしつ／＼と犬を制する聲がした。それでも却々吠え止まぬので、盆を持つたまゝ隅江が出て来たが、男の姿を

見て、

「まア」と、眼を睜つた。

要吉は女の側へ近寄つた。

「あの犬は自宅に飼つてゐるのか。」

「いゝえ、角の床屋の犬ぢやさうですが、始終自宅へ来て居て、人様に吠え着くので困つて仕舞ひます。」

斯う言ひく、隅江は前に立つて戸口を入つたが、戸外から来た者は眼がぼつとして、家の中が薄暗い。縁の高い上り框には、黒塗の杵の腰高障子が閉めてあつた。それを開けると、又

ぱつと明る。

要吉は靴を脱いで上つた。今迄其處で隅江が針仕事をして居たものと見えて、緋い唐縮緬の鏡を取つた座蒲團の周圍に、縫ひかけの紅胡の裏が放り出されて、押斗を抜いた儘の針箱だの線卷だの鉢だのが散らばつてゐる。が、此處へ上ると直ぐに要吉の眼を引いたのは、縁側の方を尻にして、小さい蒲團の下に寝かされたもので有つた。被けた蒲團が堆いので、顔は未だ見えない。其間隅江が奥から座蒲團を持つて來て勧めたので、要吉は黙つて其上に坐つた。

「まア何日お歸りやアした。些とも存じませんでしたが一」

「一昨日の晩着いたばかりだ。急に思ひ立つたので知らせる暇が無かつた——」

「まア好かつた」と、隅江は口になく嬉しそうに顔をして、「あんなお手紙でしたけれど、それでも一遍來てお呉れやアすと可えがと、何の位思つて居たか知れませんか。」

要吉は返辭をしなかつた。兩人の視線は申合せた様に小さい蒲團の方へ注がれた。足許が少しうごめく様である。

「最う見て造つて頂戴したか。」

「うゝむ」と、笑つて頭を振つた。

隅江は蒲團の側へ擦寄つて、上から平手で觸つて叩いた。要吉も及び腰に成つて枕元を覗き込んだ。薄赤い頭の毛がもじやくと生えて、顔の少し膨んだ小さな生物が見える。何だか怖ろしい物でも見たやうに要吉は急いで身體を退いた。何うもこれを見て親子と云ふやうな心持は起らない。それが世間の人は左様でないのに、自分一人起らない様に思はれて、何となく気が咎めもした。

子供は薄目をして眠つたまゝ、呼吸もしない様に見えるが、時々うつゝで口を窄めて、乳を吸ふやうにびく／＼させた。

「お夏ちゃん、もう起きなさい」と、相手に解る

やうな物言ひをして、隅江は子供の背へ手を廻して抱き上げた。未だ頭が据らぬのか動かす度にぐら／＼して、見る眼に危うさである。要吉は思はず手を出して留めようとした。

「さ、眼々開いて、此方向いて御覽。これ誰方だえ、誰方が解るかえ」と、隅江は男の方を向かせて、子供に親の顔を見せる様にした。

要吉は黙つて母子を見た。頭の中を往來した心持は自分にも解らなかつた。

其時急に小兒が顔を盛めたかと思ふと、形に似合はぬ大きな嘔をした。

「嘔したの、お夏ちゃん。大人の爲る様なこと何でも爲ますわね」と、隅江は子供の顔を覗いて嬉しそうにした。

「お前子供が可愛いかと、突然要吉が附かぬ事を訊いた。

「ま、面白いこと言やアすな」と隅江は俯れて眼を睜つた。

要吉は笑はなかつた。

「可愛う御座いますわな」と、隅江は伏日になつて、小兒の頭の毛の中へ唇を附けたまゝ言つた。何故そんな事を訊くのか、要吉の心持は隅江には解らない。これ迄も男の心の中で考へることが、自分なぞの考へとは段々懸離れて、

寄附(よづ)かれないやうな氣(き)は始終(しじう)して居(ゐ)た。けれど小兒(こゐ)に對(たい)してさへ、自分(じぶん)と一つ心持(こころもち)には成(な)つて呉(くれ)ぬのかと思(おも)ふと、今更(いまさら)奇邊(きへん)ないやうな氣(き)がして成(な)らぬ。それにつれて、去年(こぞ)東京(とうきやう)へ出てから半歲(はんさい)の間の幸(さい)かつたこと、心細(こころこま)かつた事(こと)などが順繰(じゆんぐり)りに憶(おも)ひ出(で)されるか、恨(にく)むことも嘲(あざわら)ふことも知らない女(おんな)は、矢張(やが)駄(だ)つて俯向(うつむ)いて居(ゐ)る外(ほか)はない。

要吉(よきち)も女(おんな)の顔(かほ)の曇(くも)つたのが眼(め)に着(つ)いた。直ぐ女(おんな)の胸(むね)で思(おも)つて居(ゐ)さうな事(こと)が心(こころ)に泛(ひろ)ぶ。それが如何(いか)にして進(すす)ることも、如何(いか)して貰(もら)ふことも出来(こ)ないやうな氣(き)がする。斯(か)う成(な)ると、要吉(よきち)の様な毎(まい)も境遇(きやうぐ)に支配(しはい)されて、自分(じぶん)で境遇(きやうぐ)を作(つく)ることの出来(こ)ない男(おとこ)は、むら／＼と力(ちから)の抜(ぬ)けた怒氣(どき)を發(は)して、如何(いか)とも成(な)らば成(な)れと投(な)げやる外(ほか)は無(な)かつた。

暫(しばしば)く兩人(ふたり)の談話(だんわ)が途切(とぎ)れた。

縁側(えんがは)の障子(しやうじ)は陰(かげ)しいほど明(あ)る。茄子(なす)の蒂(へた)を糸(いと)で繫(ひ)いで席(せき)に吊(つ)したのが、風(かぜ)の吹(ふ)く度(ほど)にかきかさと障子(しやうじ)に觸(ふ)つて、其影(そのかげ)が長(なが)く成(な)つたり短(みじ)く成(な)つたりする。要吉(よきち)はそれを見詰(みしめ)めて居(ゐ)た。

其間(そのま)子供(こども)が泣(な)き出(で)したので振向(ふむ)いたが、隅江(すみゑ)は子供(こども)を抱(かか)へたまゝ、此方(こなた)を向(む)いて居(ゐ)た。要吉(よきち)が振返(ふりかへ)ると、急(いそ)に眼(め)を反(そむ)して、牛乳(ぎゅうにゅう)の吸口(くち)を小兒(こゐ)の口(くち)に含(くは)ませた。髪(かみ)も薄(うす)く成(な)つた様(よう)であるし、一體(いったい)に薙(た)れた所(ところ)爲(な)るか、以前(いぜん)は左程(さほど)でもなかつた雀斑(そばか)が目(め)に立(た)つて、顔(かほ)が汚(きた)く見(み)える。元(もと)からは附(つ)かぬ質(しち)の女(おんな)ではあつたが、産後(さんご)の爲(ため)でもあらう、いかにも容子(ようし)が懶(なま)るさうで、これでも嘗(かつて)て要吉(よきち)が放縱(はうじよう)な空想(くうさう)を系(けい)がく對象(たいしやう)に成(な)つた女(おんな)だとは、如何(いか)しても思(おも)はれない。

「身體(からだ)はもう快(かい)いのか」と、つい釣込(つこう)まれて要吉(よきち)は慌(あわ)しく訊(き)いた。

「最(さい)う大抵(たいてい)快(かい)く成(な)りましたが、未(まだ)だ如何(いか)かする」と眩暈(めいげん)がして――

「それぢや暖(あたた)かく成(な)るまで、悠然(ゆうぜん)此地(こち)で養生(やうじやう)して歸(かへ)るが可(よ)い。」

「えゝ」と聞(き)えない位(くらい)の聲(こゑ)で言(い)つたが、少時(せうじ)してから、今度(こんど)は何時頃迄(いつときころまで)此方(こなた)にお坐(い)やアすなも。」

「さ、用事(ようじ)が済(す)めば直(すぐ)歸(かへ)る積(しほ)りだ。」

「左様(さやう)も急(いそ)いでお歸(かへ)りやアすのかな。阿父(おと)さん一度(いちど)愈(い)ひたがつてだに。」

「先刻(さきご)から見(み)えぬと思(おも)つて居(ゐ)たが、今留守(いまる)か。」

「伊勢(いせ)の一身田(いつしん)の方(かた)へなも、此間(このま)から――」

「左様(さやう)か、そりや残念(ざんねん)だ。」

「けども阿母(おと)さんは直(すぐ)き歸(かへ)ります。」

「さア今日(けふ)は左様(さやう)もして居(ゐ)られない。一寸(ちやうど)敷(しき)阜(ふ)へも廻(まわ)る用(よう)があるから」と言(い)つたが、急(いそ)に立上(たちあ)る様(よう)子(ご)もなかつた。

何時迄(いつときまで)話(わ)して居(ゐ)ても、別(べつ)に纏(まと)つた話(わ)の種(たね)があるでもなければ、又一向(いっこう)談話(だんわ)も湧(わ)けない。要吉(よきち)は物足(ものたり)らなかつた。それが皆(みな)自分の所爲(せうゐ)であると思(おも)ひながら、矢張(やが)物足(ものたり)らなかつた。男(おと)と女(おんな)とが差向(さむ)ひで坐(ま)つて、誰(たれ)の前(まえ)で話(わ)しても差支(さしつか)のないやうな話(わ)でなけりや出来(こ)なく成(な)る。それで子供(こども)だけは生(な)む。これが世間(よこしま)一通(いっとう)りの夫婦(ふうふ)と云(い)ふものであらう。要吉(よきち)は取返(とりかへ)しの附(つ)かぬ物(もの)を落(お)して來(き)たやうな心持(こころもち)がした。

暫(しばしば)くすると隅江(すみゑ)の母親(はは)といふ人(ひと)が戻(もど)つて來(き)た。寺(てら)のお庫裡(くら)などには似合(にあ)はない、至(いた)つて無愛想(むあいさう)な機嫌(きげん)買(か)ひの女(おんな)で、角額(かくがく)で鼻梁(はなば)に節(ふし)のあるのが要吉(よきち)の氣(き)に喰(く)はなかつた。隅江(すみゑ)が其子(こ)で矢張(やが)鼻梁(はなば)に節(ふし)があるのを平常(へいじやう)から氣(き)にして居(ゐ)た。

一通(いっとう)り挨拶(あいさつ)が済(す)むと、要吉(よきち)の方(かた)からいろ／＼東京(とうきやう)の様(よう)子(ご)や、自分(じぶん)の一身(いつしん)の事(こと)も好(こ)い加減(かへん)に取締(とど)めて話(わ)したが、そんな遠い所(ところ)の話(わ)は別に此女(このおんな)の興味(きうみ)を惹(ひ)かなかつた。それが故郷(こきやう)の話(わ)に成(な)ると、急に調子(てうし)について話(わ)し出(で)した。お網(お)が山林(さんりん)を抵當(ていどう)にして金子(かね)を借(か)りようとして居(ゐ)ることも、

ちやんと聞いて知つて居て、お絹さんにもあれでは困ると繁元く繰返した末に、「自家へは些とも相談に見えたことは無いし、此方から口出すのも變ぢやで見ては居るが、全體お前さんは如何する氣ぢやな」と言つて、口を結んだ。

自分の親の不始末を明らかに並べられて、要吉は何とも言へなく成つた。隅江もはら／＼して聞いて居たが、

「阿母さん、そんな事ア言はんでも宜しいがな、彼方の阿母様の爲やすことぢやで。」

「言はんならんがえ、お前。自家だつて面目ないぢやないか」と、萎む氣色もない。

要吉は逃げ出したいやうな心持がした。

五

日が落ちてから急に風が生暖かく成つた。要吉はのそりと我家の關を跨いだが、如何したのか、まだ灯火が點いて居らぬ。家の中が闐然として、隅々が薄暗い。立つたまゝ一寸思案したが、又引回して戸外へ出ようかとも思つた。途端に梯の向うで、どさ／＼と物の倒れる音がして、ひいと忍音に女の泣く聲が洩れた。何やら皺皺れた男の聲で罵つて居る。要吉は驚いて一足下つたが、女の泣聲がお絹だと分つたか

ら、矢庭に合の襖を開けて飛び込んだ。

「要さか、好え所へ戻つてお呉れだ」と、お絹は我子の足許へ轉び伏した。

「如何したんです、阿母さん」と、要吉は急込んで訊ねた。

「如何も斯うもない、ひ、人を打つたり蹴つたり、私や、私や斯んな目に逢ふ覺えはない、覺えはない」お絹は涙が喉に詰つて、言ふ事が能く聞取れない。

相手の男は云ふ迄もなく例の老害工であつた。それ迄は火鉢の向角に中腰に成つていきり立つて居たが、要吉の顔を見ると流石に羞んで見えた。俄に挨拶も出来ないと思つて、濡い面をしながらもち／＼と尻を叩いた。要吉は二人の顔を見較べたまゝ、嘲の様に茫然突立つて居た。何か言はうとしても、舌が上顎に密着いた様で聲が出ない。

お絹は其處へ倒れたまゝ、屏で見して居たが、急に向直つて、「さ、要が来たに、要と直接に談して見るが可え。私は要の言つたことを取次いだだけぢや。さ、談しなさんか、談しなさんか」と詰寄せた。それでも相手が何とも言はないのを見ると、又はら／＼と涙を零して、「私やな、これ迄貴方の言ひなさる事を一度だつて

諸かなんだことは無い。貴方のためには、要の手前や世間へも氣がねして、何の位心配して来たか知れん。此頃始終身體の工合が悪いのも皆、貴方の爲ぢやないか。それと思つたら一度位都合が出来んかとて、こんな無法な目に會はすと云ふことが――」

「それぢやで無理に拵へて呉れとは言やせなんだ」と、男は大きな聲で押被せるやうに言つた。

「お前が確に出来る」と云つたので、先方とも約束したのぢや。それを今更そんな女や子供の言ふ様なことを言つて破約が出来ると思ふか。ね、要吉、左様ぢやないか」と、此方に向けて急に聲を優しくした。「お前には好く話をせにや分らんが、ま、聞いてお呉れ。」

「いえ、聞くに及びません」と、要吉はわな／＼顔へながら言ひ放つた。先刻から一刻も座に堪へないやうな心持がして居たのを、自分の前をも憚らないで母親を呼捨てにして、我物氣に振舞はれては、最う我慢が出来なく成つたのだ。「何んな話か知らんが、今夜は聞いている暇が有りません。談話がしたかつたら又出直して来て下さい。」

「さう、お前までが左様言やア仕方がない」と、

男も顔色を變へた。「だが、全體、お前は私を何だと思つてゐるんだ。え、思ひ當ることは無いのか。」

要吉はぎよつとした。若し此男がお絹に對すると同じ様な明らかにさな態度で、自分に對する様に成つたら、今此處で此胡麻鹽頭の頸筋の肉の厚い老爺の口から、自分の一番恐れて居るところ——實際の親だと云ふことを言ひ出されたら如何しよう。如何する事も出来ない。一度そこへ考へ及ぶと、何とも云はれぬ憎惡の念がむらむらと湧いて、夢の中で魔される様に、手足が自由に利かないやうな氣がした。何がなしに早く此滑稽な幕が閉ちて仕舞ひたく成つた。

「早く歸つて下さい。何でも可いから早く歸つて下さい。」要吉は手を掛けて押出さむ許りにした。

「歸れと言やア歸る。」

老工は何と思つたか素直に立上つた。一寸お絹の方へ眼を遣つたが其儘何も言はないで出て行つた。

要吉は戸口まで送つて出て、茶の間へ引返さうとすると、上り框の上にお絹が心配さうな顔をして立つて居る。要吉は直ぐ其顔色を讀んで可厭な心持がした。

「阿母さん、灯を點しちや如何です。」
「あゝ」と、勢のない返辭をしたが、久らく經つてから大儀さうに洋燈を出しに行つた。

要吉は暗がりの火鉢の前に坐つて、火箸の先で豆の様に成つた火を掘出しながら、次の間でお絹がこゝろゝ爲せる物音を聞いて居た。

其間洋燈が來て、急に一間の中が生々として明るく成つた。お絹は如何したのか夕飯を止めると言つた。要吉は強ひては勸めず、今日行つた常願寺の様子など氣の紛れさうな話をいろ／＼して聞かせた。お絹は「あい、あい」と返辭だけはしたが、空耳を走らして聽いては居なかつた。そして、時々ひとりで屈託さうに溜息を洩した。

要吉は先刻から始終それが耳について、何か言はうとしては又引込めて居たが、到頭怪へ切れなくなつて口を切つた。

「阿母さん、あの人のことが未だ心配に成るのですか、そんなに。」

「いゝえ、あんな人の事なんぞ、些とも心配してやしません」と、お絹は努めて平氣な聲で言つたが、「只、ねえ、彼人も身體の工合が始終悪いのだし、今夜の様に憤ると、屹度又お酒でも飲んで後が悪いのぢやが、誰も側で見て居て世話

して遣る者も無いしねえ。」
お絹は襦袢の袖を引出して、竊と眼の隅を拭ふやうであつた。

要吉は見るに堪へない様な氣がしたので、遽てて眼を瞑つた。可憐ぢやないか。如何してこんな女——左様だ、こんな女を非難することが出来よう。飽迄わが身の因果に負けて居るのだ。この外見の弱さうな身體が續く限りは、絶えず其ために苛まれて生きて居る外はないのだ。お絹自ら知らないで左様成つてゐる。縦し知つたところが、これだけ深く因果が根ざしては最う如何することも出来なからう。それに自分は此女の腹から出たのではないか。同じ血が脈管を通じて、同じ因果の芽が身體に宿つて居るのだ。これ迄の自分のことを考へると、大抵は目に見えぬ因果に支配されて來た。過去の自分は其因果が造つたのだ。將來の自分も矢張左様成行くのを免れないかも知れぬ。今夜の事は何だか自分の鏡を見せられた様にも思はれる。而も餘り好ましい鏡ではない。
「阿母さん」と、要吉は思ひ入つた様に喚んだ。
「あゝ」と、氣の無さうな返辭をして、お絹は掌で顔を撫で廻した。
「そんなに心配しなさんが可い。金子は借り

ることに爲ませう。今夜は最う追つかけても間に合ふまいが、明日の朝には貴方から左様言つて上げて下さい。」

「本當にえ」と、お絹の顔は急に輝いた。「本當に左様して呉れちゃと、私も安心しますがえ。」

「本當ですとも。急に要るのなら、明日にでも其手續をしたら可いでせう。」

「左様なりや、伯父様も彼様は言つて歸つたものの、何んなに嬉しがるか。大變儲かると云ふ話ぢやものね。」

「そんな事は如何でも可いです。」

左様言はれても、お絹は今迄と打つて變つて、こゝと子供の様に喜んで居た。要吉は其様を見ると涙が胸一杯に突掛けて来るのを辛と怏へへした。

お絹は不意に顔を上げて、何やら附耳を立てて居たが、

「あれ、雨ぢやないか。」

成程檐端に細々と土に沁み込むやうな雨滴の音がする。何時の間に天氣が變つたのだらう。

「もう寝ませうか」と要吉が言つた。

「左様ね。」

お絹は雨戸を繰りに立つた。

六

要吉は蒲團の上で起直つたまゝ、凝乎と戸の節穴から射す夜明の光を見詰めた。頭筋の邊りが汗でぬたいた。昨宵は夜通し夢に歷はれたものらしい。一番終ひに番場の渡船場で船から上つて口口村を通らうとすると、十二三の女の兒の姿びた青梅の様な顔をしたのが、犬の耳を切つては袂へ入れて鹽漬にして居るのを見た。それだけは明々と覚えて居るが、如何してこんな夢を見たのか解らない。最う一度枕に頬を附けて見たが、驚附かれさうにもないので、起上つて臺所の方へ出て行つた。井戸端で顔を洗はうとすると、戸外は一面にひどい霧だ。冷たい清水の中へ手拭を突込んで、頭を好く冷した。少し甦つた様な心持がする。何と思つたか帽子を被つて表へ出ようとする、茶の間に居たお絹が、

「今御膳ぢやに早うから何處へお出だえと、聲を掛けた。

「うむ」と口の中で言つたきり、戸外へ出て仕舞つた。

四方の山は霧に隠されて、遠いのも近いのも全然見えない。土手の上の葦屋が一軒霧の中か

ら浮出して見えるが、裏口が明いてゐるのか、朝餉を食ふ籠の火が蛇の舌の様にちらちらと天井迄燃え上るのが目に附く。用水について下ると、自然に土手の上へ出る。長い堤の上をすた／＼歩いて見た。半の様に凝つた霧がほてる前に打突かると、口を塞がれるやうで息苦しい。袂も何時の間にかしつとりと成つた。霧と河下の鐵橋を渡る汽車の音が非常に近く聞える。

其間に朝風がそよ／＼と動き初めた。紅葉山の黒い顔が先づ現はれた。河面を見下すと、濁れ／＼に成つた水の上を見る間に霧が剥けて行く。此邊の川は秋から冬へかけて河床が露はれて、白く曝れた鋼鉄の様な石がごろ／＼轉つてゐる。河原の向うはひろ／＼とした枯野で、野へでも焚いたのか一面に黒く見える。野原の中を細い徑が蟬つてつゞく。人を埋めに行く道だ。枯野の奥は村の三昧である。三昧の樹立には、未だ薄い霧が残つて居るやうに見える。

それを見ると、要吉は急に其處へ行つて見たく成つた。で、直ぐに土手を下りて、着物の裾をからげて、素足で膝迄ある秋の水を渡つた。それから石河原を横倒しに走つて、間もなく目指す林へ着いた。

林の中はたゞ石の様に寂びて、木の葉一枚動かない。鳥も啼かぬ。人間が今息を引取るといふ部屋へ迷ひ込んだやうな心持である。要吉は足を緩めた。

其時ふと人の近寄る氣勢がしたので、立停つて頭を上げた。身丈の圖抜けて高い大男が、黙つて前に立つて、凝乎と要吉を見下して居る。それが何處やら懶さうで、頭髮の延びた工合と云ひ、色澤の悪さと云ひ、見るも不快で、而も見ずには居られないといふ顔であつた。着物は此邊の百姓に似合はない絹布を重ねて着てゐるが、帯は細帯で、素足に冷飯草履を穿いて、帽子を被つて居ない。眞正面に頭の上から要吉を見据ゑたまゝ動かうとせぬ。要吉も氣味の悪い男だとは思つたが、路の左右は丈の長い草が露に濡れて生えて居るので、これも道を譲らうとはしなかつた。暫く無言の儘で互に眼を見合せて居た。何と思つたのか件の男は踵を回して元來の方へ戻り出した。要吉は少時惘れて突立つて居たが、其男の姿が見えなくなると、急に思ひ出した様に跡を追ひ掛けて見た。小徑が喰ひ違つて四辻に成つた處迄駈けて行つたが、其時は最う何處へ行つたのか、怪しい男の姿はいくらも見えなかつた。延上つて彼方此方と見渡して

も、矢張影さへ見えない。何處かへ隠れたのぢやないかと思ふと、更に薄氣味が悪く成つた。

「狂人かも知れない」と呟いた。

林の中の小徑で見慣れぬ男に邂逅した。只それだけの事に過ぎない。それだけの事が何だか不祥の意味が有る様に思はれて、要吉は何うも心持が好くない。こんな事に頭を悩ますのは愚だと思ひながら、矢張其男のことが氣に懸つて成らぬ。あの顔、あの眼の色、如何も一生忘れさうに無い。何故だらう。俺は如何かしてゐるなと思つた。

三昧は林の縁に在る。荒れ果てたもので、何處からが墓地の地境と云ふこともない。只道がやゝ廣く成ると、枯れた芒や茅薈に圍まれた少し計りの平地があつて、正面の堂の中には三體の石佛が安置してある。真中に雨曝しの石の蓮臺を据ゑたのが、半ば草に埋まつてゐる。葬禮の時には此上へ棺を載せるのだ。村に棲む者は、男も女も、早晚この蓮臺の上へ昇き据ゑられる運命を擔つてゐる。一人も残されない。要吉は一寸其側に立つて見渡したが、直ぐ祠堂の裏手へ這入つて行つた。

そこは一面の卵形で、此中に要吉が父祖の墓も在るのだ。尤も要吉の家には先祖といふも

のが無いので、二三代前まで位の所でなけりや、何れが誰の石碑やら分らない。只父の石塔だけは久しく捨て置いて、近年漸く建てたので、新しいから直ぐ分つた。

要吉は父を知らない。知らないだけに其當體を理想化して居た。固より神も佛も信じない。けれども父の靈魂だけは、自分のためには何今存在して、常に自分と精神上の交通が有る、有得るといふ考へは始終去らなかつた。父が昨年世間と懸離れて生活したのも、永く自分一人の心に生きむが爲であると思ふことさへ有つた。

其後父子の關係について、いろんな疑はしい事實を知るにつれて、却て自分は何處までも父の子である、少くとも精神上に於ては、自分は父が唯一の眞の子であると、堅く思ひ詰める様になつた。今朝此處へ來たのも、暫しの間全く他の關係を離れた、世の中に父と唯二人居るやうな心持に成つて、心ゆく限り泣いたら泣いて見たかつたのだ。

それが來て見ると、其儘石塔の素通りした。父の戒名と並べて、石に刻んだ何々信女といふ朱文字が眼に映つたからだ。恐らくお絹の思案ではあるまい、寺の坊主か何かの細工であらう。縱令お絹の心から出たとしても、世間の

人が左様するから自分も左様するものだと思つたのだらう。それは如何でも可い。只要吉は此兩人の名を並べて見ることが逆も堪へられなかつた。

昨宵の光景がまざ／＼と眼に泛んだ。如何思つたとて、自分は父の子で無いかも知れぬ。自分の存在には初めから汚點が打たれたのだ。其汚點は肉體の中に潜んで居るのだから、自分を減さない限りは如何することも出来ない。この手、この指、皆不義の結晶に外ならぬ。いかにも野的だ。併し人間が生れるなぞと云ふことは、元々餘り貪婪と選ばない。何れにしても五十歩百歩だ。「自然は被倫なり。」人間の事は要するに此一語に盡きてるんだ。斯う云ひ放つて見ると、何だか世界を眞黒に塗つて置つたやうな氣もする、只それに依つて心は少しも浮立たない。如何することも出来ないからだ。今在る状態はそれに依つて少しも動かないからだ。總ての人類が既はれた所で、呪ふ者はそれに依つて幸福とは成らない。

要吉は墓地の外へ出たまゝ茫然立つて居たが何處へも行く處が無いやうな氣が仕出した。人間は何處かへ行かなけりや成らぬ。けれども父を埋めた墓場へ來てさへ、自分の手を取つて

哭れる者が無いとすれば、他に何處へ行く處が有らう。何處へも行く處がなくて、それでも未だ死ねなけりや、急に寒氣がして、ぞつと爪先まで惡寒が通つた。

何の目的もない。要吉は只眞直に自分の前の笹葉を掻分けて這入つて行つた。思ひ掛けないことには、其處に二畝ばかりの畑が開墾されて、ひよろ／＼した莖の赤い蕎麥が小さい白い花を着けて居た。そこへ落せた灰色の汚い野良猫がつか／＼と出て來て、要吉の顔を狡猾さうな眼附で眺めて居たが、又彼方の藪蔭へ走つて行つた。要吉は何心なく猫の駈けて行く跡を見遣つたが、偶と父最前の男のうしろ影を見附けた。畑の方へ差出した百日紅の人の腕ほどある枝へ紐を懸けて、其端を結び合せて居るらしい。何を爲るのかと、要吉は息を凝して見てゐたが、稻妻の様に其意味が頭へ閃いたかと思ふと、自分でも知らぬ間に飛出して、男の肩をむす／＼掴んで居た。

「何を爲るんだ。をかしな事を爲ちや不可い」と、思はず大きな聲で叱り附ける様に言つた。男は振返つて、例の險しい眼でじろりと要吉の顔を見たまゝ、何とも言はない。「をかしな、異しな事を爲ちや不可いぢやない

か」と、要吉は同じことを繰返した。

此時男は初めて口を開いて、

「如何してだ」と、只一言反問する様に言つた。

要吉は水を浴びせられた様にひやりとして、其低い聲が一時に惱天まで沁み渡つた。成程人間が此婆婆に厭きて死んで行くのに、他人がそれを妨げて、縱令一瞬間たりとも生を強ふる權利が何處にあらう。自分の思慮が足らぬ所が、計し難い越權の處置を他のヒューマン、ビイングの上に加へた様に思はれて、少時口籠つたまゝ、返答が出来なかつた。やがて氣を取直して、

「死んで不可いと云ふ理由は勿論無い。只私の眼に留つたから不可いと云ふんだ。人間は他人の目前で自殺することは許されない。」

「左様か」と言つたまゝ、男は周章てる容子もなく、徐に枝に懸けた紐を外して、丸めて袂へ入れた。それから要吉を尻目にかけたまゝ、べたべたと草履の音をさせて、彼方へ歩み去つた。

今度は跡を追つて見る氣もなかつた。少時茫然と突立つて居たが、空も林も如も見えない。心は次第に底の知れない淵へ沈んで行く様である。やがて氣が附いて、男の立去つた後から自分も器械的に林を出たが、それから半時間後に

は、何處を如何して歩いて來たか、家へ歸つて井戸端で足を洗つて居た。お絹は惻れた様な顔をして見て居たが、要吉の唯ならぬ顔色に恐れを抱いて、何處へ行つたかとも訊かなかつた。朝飯の膳を拵へて勸めて見ても、要吉は頭を振つて欲しくないと言つた限り、座敷へ入つて夜着を引被つて寢て仕舞つた。

何うも寢苦しくて連も寢附かれさうになかつたが、何時の間にか寢入つたと見えて、眼を覺したのは午後の日影も大分薄く成つた頃であつた。眼が覺めて見ると、身體は細の様に疲れて、額に手を當てると煙けるほど熱い。少し頭を動かしてもづきんと痛む。そこで成るべく靜乎として仰向けに成つて居たが、臺所の方へお倉が來て、何やら息を喘ませて談して居るらしい。お絹も聞いて居ながら、返辭の様子が少し周章して居るやうだ。練が聞いているので、二人の話聲が此處まで傳抜けに聞える。初めそれが耳觸りに成つて煩いと許り思つて居たが、偶と一言思ひ當ることが有つたので、急に肘を立てて耳を澄ました。

一内の與三松が死骸を釣込んだ所まで見て來たと云ふが、彼所の主婦さんも娘もそりや平氣なもので、涙一つ零さなんださうな。」

「ま、それでも如何いふ人達ぢやらう。」
「左様ぢやるか。娘だつて連子だと云ふし、主婦さんだつて何うせ金に惚れて隨いて來たのに違ひないもの。私も一度しか會つたことはないが、一寸見てもそりや一物ありげな女さな。これからは彼處の内も皆あの主婦さんの仕たい儘ぢやで、折角建てた家も藏も賣拂つて戻つて行くぢやと云ふ噂ぢやが、それかと云つて、誰一人人物の言ひ手は無かる」と言ひかけて、お倉はひとり失笑しきうにした。「いゝえ有るの、只一人有るんぢやさうな。あの糸ツきの許の唄衆なも、あの女の今日の周章で方といふは無かつたさうぢや。」

「あの女がえ、左様かな。」
「糸ツきは親身の兄でもお仁善しぢやで何も言ふまいが、あのお辰さと云ふが却々利かん氣ぢやでなも。七五郎が村を逃出してから、去年臺灣で大金儲けて歸つて來るまで、十年の餘も盲目の親を引受けて面倒見て來たのぢやもの、切めて七五郎が一日でも煩つて寢て居たりや、どうせ他人に遣つて仕舞ふ身代なら、幾許何でも半分や三つ一は兄弟に譲つて死にさうなものぢやつて、消書でも無いかと家中捜したんぢやさうなが、書いた物は何一つ無いし、死人に

口無し、如何したとて彼方の身代はそつくら彼のお主婦さんと娘の物に成るんぢやとさ。それでもお辰さは未だ未練が有つて、親戚を一軒々々頼んで廻つても口利いて貰ふ積りぢや、此方の言分が通らん間は葬禮も出させんで、一人で力んで御座るさうなが、御葬禮が出んと、自宅の阿父さが困るだけさな。」

お倉は一人でのべつに饒舌つた。
「左様だがよ」と、お絹は矢張浮かぬ聲音をして、「まあ如何して無理に死ぬ様な氣に成れたんぢやらうか。金子は有るし、普請はつい近頃出來上つた許りぢやと云ふし、何が不足でそんな心を出したもんか。」

「それがなも、誰でも解らんと云つてだがな。あんなに田地を買つたり、金子を貸したりして、立派に遣りかけたのぢやが、誰一人近しう交際つた者は無いさうな。それに糸ツきは彼様云ふ人だしなも、側に居る主婦さんや娘でさへ全然氣が附かなんだと云ふのぢやもの、他人に解らう筈はないわな」と言つて、一寸首を傾けたが、「だけど、人の死ぬのは大抵譯の分らんものぢやぞな。」
お絹は思はず溜息を吐いた。
「ふら／＼と左様云ふ氣に成ると、自分で承

知して居ながら、如何しても後へ引けんと云ふでな。何にしても人の生命程分らんものはない。」

そこへ要吉が着醒めた顔をして奥から出て来た。お絹はそれを見ると、

「まア好う寝んでちやつたな。何處が悪いのぢやないかと心配して、三度も見に行つたがな。朝から何も喰べんぢやで屹度お腹が空いたらうに。」

要吉は手を振つて制した。御飯は未だ欲しくないと言ふ積りであつたが、口の中が乾燥い

で聲が能く出なかつた。お倉は上り櫃に腰掛けたまゝ、要吉を見上げてにや／＼笑つて居たが、

「要様、昨日は如何ぢやつたな。」

「如何と云ふこともない。」

「彼んなことを。それでも最う餘程大きく成つてでしたらう。」

「あゝ。」

「あ、忘れて居たが、お前にとて今頃珍らしい鮎を持つて来てお呉れたぞえ」と、お絹が口を容れた。

「いえ最う昨日からお約束しといたのぢやわな」と、お倉は急に尻を上げて、「又話込んで仕舞つたが、今夜も他所村に産が有ると云つて、阿

母を招びに來て居たで、私も斯うしては居られんのぢやつた。容器は又今度貰ひに來るわな。お倉はそゝくさとい出て行つた。

その後でお絹は茶を淹れて要吉に侑めようとしたが、お湯の方がいふので、言ふがまゝに湯呑に注いで渡した。

「今お倉やの話ぢやが、七五郎が三昧で首吊つて死んで居たといな。今し方あの興三松が林へ

柴刈に行つて見附けたさうな。それから駐在所の巡查を招んで來るやら、村方の人が走つて見

に行くやら、向うの土手は一しきり大騒ぎぢやつた。あんな人が死んで行くなんて、本當に思

ひがけない。つい三四日前に伯父様が會つて、お金子の話もしたのぢやさうなが。——伯父様

と云へば如何したのか、使者を遣つても未だに見えぬが。」

お絹は要吉が鮎の腹鼓のやうな韻附をして、自分の話を聞いて居さうもないのに氣が附く

と、下を向いて口を噤んだ。林に首縊りがあつたと聞いた時、要吉は直ぐ

あの男だなと思つた。思つただけで別に驚きはしなかつた。それが當前の様に思はれた。自

分はちやんとそれを満期して居たのだ。お倉の話の聞いている間も、あの男の家の様子やら何

やらが一々自分の考へて居た通りの様に思はれた。初めからあの男の身の上を知つて居たやうにも思はれた。何の爲に死んだのか、自分だけ

にはあの男の心の奥まで解つてゐる。一生の間、唯一度出會つた、而も死ぬる間際に出會つ

た。あの男も自分と出會はなければ成らなかつたのだし、自分もあの男と出會はなければ成ら

なかつたのだ。兩人の間には眼に見えない連鎖が繋がれてあつたかも知れぬ、いや、あの男は

單に自分の心の影に過ぎなかつたのでは有るまいか。あれが自覺しない自分の半面で、如何し

ても離れることが出來ないのでは無からうか。實在の人間としては餘り玄妙に過ぎる、不可思議に過ぎる。要吉は自分も墓穴の中へ引入れら

れさうな心持に成つた。お絹はと見ると、兩手を袖口へ引入れて火鉢の縁へ掛けたまゝ、屈託さうに俯向いて居る。

その着い筋の張つた顔を見詰めて居ると、要吉は道理もなく涙が溢み出た。

「阿母さん。」

「えと顔を上げる。」

「私は明日の朝東京へ歸らうと思ひます。」

「まア何んぢやとえ。」

「其人が死んぢや、金子の都合も出來にくから

うから、兎に角印形は阿母さんに預けて行きます。私の立つた後で好い様にして下さい。」
「如何して、急にそんな事を言ひ出すのだ。」
お絹は泣き出しような顔をして我子を見返した。

七

要吉は與三松一人連れて、未明に村を立つた。長良の橋を渡る頃、月の色が次第に薄白くなつて、四邊は一層仄暗い闇に包まれた。夜明が間近く成つたのであらう。

暗がりに來て、又暗がりに去る。何うやら身に後暗い事でもあつて、わざと人目を避けて故國を出るやうな氣がした。與三松は水漬を嚥りながら黙つて隨いて來る。二人の足下に橋板が高く聳いた。

町へ這入つても未だ人通りはない。監獄署の裏は寂然として、黒い板塀が一しほ高く見えた。それを出外れようとして、與三松がふつと提灯の火を吹き消した。薄い煙が一條横に靡いて、蠟の臭ひが鼻を打つ。何時の間にか、夜は白々と明け放れて居た。

やがて停車場へ着く。要吉は與三松の手から荷物を受取つて、

「最う可いからお歸りな。」

「へえ。」

「姉やにも宜しく言つとくれ。」

與三松は一散に駆け出した。要吉は少時其後を見送つて居たが、不圖、今朝立ちがけに門迄送つて出て悄然立つて居たお絹の顔が眼に泛んだ。明日立つと言ひ出してからはお絹は唯おるおるして、荷拵へを手傳ふ間も始終涙合んで許り居た。實際親一人子一人の仲で、長年離れ離れに暮して、偶々逢つたと思へば直ぐ別れて仕舞ふと云ふは心細いに違ひない。それを手頼なく思ふ容子が明々見えながら、口へ出しては決して留めようとしなかつた。彌々立つ前に成つて、「隅江さが今日にも來たら塵落膽するぢやらう、私が彼の娘に對して言譯がない」と、さも術なさうに繰返して居たが、要吉の口から「阿母さんの所爲ぢやない」と言つて貰ひたかつたのであらう。

要吉は泣きたいのか、笑ひたいのか、自分でも解らぬやうな氣持に成つて、四邊を見廻した。他人の中より外に自分の住む國はない。路傍の群集に紛れて、不圖行方知れずに成つたまゝ、他人の中に生ひ立つた迷兒の様に、忘れられるものなら忘れたい、生れた家も、生んだ親も――

自分が自分だと云ふことも。

不意に汽笛の音がした。

要吉は飛び上つて、足早に改札口へ近づいたが、下り列車が地面を揺がせて構内へ這入つて來た。西行―何方でも可いではないか。何處に又來へ歸る必要があらう。二たび彼の渦巻の中へ投じまいとしたら、心からあらゆる舊い絆を斷つて、新に孤獨の境涯に入る覺悟があるなら、西へ指してこそ行くべきではないか。

二三人後れて來た乗客が要吉を突除けるやうにして駆けて行く。要吉の頭の中は嵐風の様になるゝと廻つた。其中から一人の女が被れ切つた、惱怒を乞ふやうな眼差で、凝手と此方を見守つて居るかと思はれた。要吉の足は立竦んだまゝ、動かなくなつた。

其間、汽車が徐々と動き出した。

要吉はプラットフォームの上に立つた儘、各柵れの田圃の中を斜曲りながら遠ざかつて行く列車を見送つた。如何したら一思ひにあの女が捨てられよう、あの女から連れて自分の行く處へ行かれよう。それさへ覺束ないと成りや、お絹と違つた所はない、永い間の情性に壓せられて二度匂ひ上る力もなく、じりりと泥沼の底へ沈んで行く――あの自分を生んだ女と。「矢

張親の子に違ひない」口の中で呟いて、つと踵を回した。側に立つて居た驛長と面を見合せる意向でにやりと笑つた。先刻から始終自分の舉動に注意して、此方の腹の中まで見透して居られた様な気がしてならぬ。で、わざと何気ない顔をして、プラトフォームの端の方へ寄つて行つた。

彼の二人は——と、此前汽車から降りた時見かけた繩附の老爺と若い女とを想出した。あの二人は如何したらう。彼時ちらと自分の眼に觸れた限りで、二人の姿は永く人の世から隠れて仕舞つた。監獄の門をくぐつて、自分の背後に重い鐵の扉がたりと落ちる音を聞いた時は、何んな心持がするだらう。人間の社會から全く切離された獄舎の中へ這入つてこそ、初めて過去と絶縁した、新しい生涯に入ること出来るのではなからうか。

便所の側の梧桐の葉が黒く木枯れて、風の吹く度にごろ／＼と地に落ちた。要吉はそれを見て居た。又それを見て居るのでもなかつた。やがて四分の一時間許りして、大垣發の上り列車が着いた。要吉は機械的に其の一室へ乗込んで、片隅に身を横へた。此列車は貨車を連結したもので、何んな小さい驛でも一々寄つて行く。

要吉は誰とも口を利かなかつた。身體も精神もへ／＼と疲れて、別に物を考へても居なかつた。偶々顔を擧げては、其都度同じ乗客の顔が自分の前に並んで居るのを見ると、斯うして知らぬ人と一日一緒に乗つて居るのが不思議で成らぬ様にも思はれた。

百里の道は一日がかりの汽車の旅である。箱根の山を越す頃には、日も傾いて、谷間の陰が薄寒さうに見えた。大磯邊りから誰彼れて、大船でわが入つた。汽車の中で日が暮れる程淋しいものはない。此世に只一人生きて居るやうな心持が、何處からともなく身に這入る。

十四の春初めて首都へ出た時も、恰度此邊で日が暮れた。關東者の調子の高い話聲に挟まれながら、泣出しさうにして居た覚えもある。それでも新橋へ着いてからは、教へられた通り人力車を僱つて、同じ村から出たと云ふ縁故を頼りに、築地橋の袂で屋根に大釜の看板が出てゐる金物屋と訊き、お種の父親を訪ねて行つた。此處だと分つた時の嬉しさも、座敷へ上つてから——生れて初めて他人の中へ這入つた所爲でもあらうが——思つた程に落着かなかつたことも、昨日の様に忘れない。萬端世話に成つて、一年餘り其家から學校へも通つた。其

間お種とは朝夕一つ家に起臥したが、同い年でも女のことではあるし、東京に育つたのだから、田舎者の要吉なぞでんで子供扱ひにして、眼中に置いて居なかつた。それに父親の道樂から二人の娘に遊藝を仕込んで、姉は常磐津、妹は踊り、春秋のお漫へには眼の色を變へて騒ぐといふ有様であつた。未だ其外に總領の息子で、大阪役者に成つて居るのがあつたが、音信不通とかで逢つたことがない。其後木下町の芝居へ来て、成田屋の相手に「春雨傘」の丁山なぞを演つて居ると云ふことを他所ながら聞いたが、生家へは立寄らなかつた。それは預置きお種は翌年の春十五で花柳の名取に成つて、新當座の大演會に出たが、十六の歳には千葉の百姓へ貰はれて行つた。何でも先方の男とは親子程年紀が違つて居たと云ふ。間もなく父親は死んだ。姉の養子の代になつてから、内輪の苦しさが段々

人目に立つた。それでも何うやら斯うやら六七歳持耐へて居る間、或年世間一帯の不景氣から煽りを喰つて到頭店を閉めて神田の明神下へ引越した。そして其養子は元勤めて居たお店へ通ひ出した。其頃要吉も豫備門から大學へ移つて、下宿生活にも飽果つて居たから、談合の上で、お種の母親に當る小母さんと一緒に、本郷

丸山で假の所帯を持つた。それだけなら未だ可かつたが——要吉は急に深い追憶から覺めて、汽車の窓から黒い丘や藪や小家やを見詰めて居た。車輪の音は絶えず眠氣を誘ふやうに轟々と響く。要吉の心は復た昔に回つた。

一昨年の秋、お種は片附いた先方から離れて來た。唯子供が無いからと云ふ言分であつたさうな。當人は何とも云はなかつた。嫁入した時、簞笥の底へ入れて行つた小鼓も其儘一緒に戻つたが、鼓の主は別人の様に變つて居た。最早お種は元のお種ではなかつた。それを憐れと見たのが——言葉少なに控日な女の容子を物の哀れに思つたのが、二人の因果であつた。其後のことは言ふに忍びない。

併し何日迄斯んな生活が續けられるものか。新しい境涯に入るには、心を鬼にして、古い殻を脱いで棄てなければ成らぬ。それは自分から丸山の家を去る外はない。恰度好い折だ。此機會を外したら再びこんな折は來なからう。今度こそ歸つたら席の暖まらぬ間に、一思ひに足るを上げなければ成らぬ。

とは云へ、今頃は何と思つて居るだらう、母子寄つて何んな談話をして居るだらうか。今夜急に歸つたら、何んな顔をして迎へるだらう。

若し少しでも不快な顔色が見えたら——何時の間にか、汽車は都近く走つて居た。品川の沖は暗かつた。芝浦邊の街の灯がちらちらと祭の夜の様に見える。乗客は皆降りる用意をした。

新橋のプラットホームへ降りた時は、鎖で仕切られた後ろへ迎へる人が各自に提灯を振翳して山の様に簇つて居た。要吉は一人其中を抜けて、足早に停車場の出口まで來たが、思はず其處に立ち停つた。無數の街燈が蛇の舌の様にきら／＼と眼を射つて、四邊を取巻く難然たる都會の物音が、一つ／＼聴分けられる様にも思はれた。石段の上に立つたまま、頭がぐらぐらとした。

丸山の奥へ戻つたのは彼此七時に近かつた。町は未だ宵の口ながら、此界隈はどれも皆戸を閉めて、ひっそりと寝静つたらしい。人力車の音を聞附けたのか、小母さんは寝衣の上から羽織を引掛けたまゝ、駆出して、表の木戸を開けて呉れた。

「まあお歸りなさい、存外早う御座いましたね。」

「えゝと、要吉は一寸振回つたが、直ぐに自分の居間へ通つた。小母さんは後の戸締りをし

て、憐て洋燈を持つて跟いて來た。
「今晩あたり如何かしらとは思つてましたが、眞個早う御座いましたね。お故郷では皆様お變りありませんか。」

「あゝ別に、要吉は氣のない返辭をした。
小母さんは一人いそ／＼と脱棄ての洋服を疊んだり、背後へ廻つて小搔卷を被けたりして、
「では、一つお茶の熱いのを入れませう」と立上つたが、偶と衣紋箆に懸けた胴裏の紅い女の平常着が眼に附いたので、それを外して一緒に持ちながら出て行つた。

要吉もちらとそれを見たが、故と氣の附かぬ容態をした。留守中お種が泊りに來て居る筈である。先刻から顔も見せず聲もしないのは如何したのであらう。何となくそれが氣にかゝる。

机の周圍は整然と片附いて、瀬戸物の手焙から、座蒲團から、缺けた灰皿から、書散らした反古、讀み差して開けたまゝ捨て置いた書物まで、五日前に立つた時の儘をつくらしてゐる。この日々見慣れた部屋の光景が一つ／＼眼に映ると、嘗て失はれた自己の幾分が戻つて來た様な氣がして、要吉はぐつたりと其處へ倒れて仕舞つた。

八

一旦目を覺しながら、うつら／＼して居る間に又寢入つたと見えて、二度目に頭を上げた時は天井裏まで明るく成つて居た。枕頭には毎日の通り新聞が置いてある。乗合馬車の喇叭の音だの物賣の呼聲だのが、朝の静な空氣を傳つて、此處迄聞えて来る。何だか自分が故郷へ歸つたと云ふこと、其間に起つた様々の出来事が遠い時日を距てた夢の様に思はれて成らぬ。

十五分も經つて漸と起き上つた。楊枝を銜へながら茶の間を覗くと、長火鉢の向うに小母さんが坐つて、それと向合つて、一人の女が此方へ背中を向けて居た。後姿がお種であつた。二人ながら黙つて居る。足音を聞くと、小母さんは顔を上げたが、お種は益々俯向いて仕舞つた。

「今お湯を取つて上げますよ」と、小母さんは金盥に銅壺の湯を汲出して呉れた。それから拂座と箒を持つて、寢床を上げに取つて返した。要吉は含嗽して、二度茶の間へ出て來た。それを見ると、お種は少し膝を蹴つて、

「昨晩お歸りでしたさうで御座いますね。」

「あゝ、何氣ない風をして座に着いた。」

「彼方は皆様御健康ださうで、赤さんも無――」
要吉はお種の顔を見返した。女は直ぐに睫毛を伏せて黙つて仕舞つた。二人は少時手無沙汰に坐つて居たが、

「大變、顔色が悪いやうだね。如何かしたのかい」と、男の方から言出した。

「えゝ」と、お種は兩手で自分の顔を撫でて見て、「何ですかね、何うも氣分が勝れませんで、昨日も姉の宅へ行く途中から悪く成つて、先方へ着くと其儘臥つて仕舞ひましたの。」

要吉は何だか自分が其病氣に責任があると云はれた様な氣がした。

「毎もそんなぢや、早く養生をしなけりや不可いね。」

「でも、私の疾病はね、一日經てば斯うして起き居られるんですもの」と、稍々言ひ淀んで、「阿母さんが何か私のことで貴方にお願ひしやしませんでしたか。」

「何を――未だ何も聞かないよ。」

「それなら可いんですが、今後若し何か言出しても、餘り相手に成らん様にして下さいまし、ね。」

そこへ小母さんが戻つて來たので、お種は急

に口を噤んだ。小母さんは一寸二人の顔を見たまゝ、別に氣にも留めぬ様子で、片隅へ寄せてあつた朝飯の膳を出して佈めた。

それが済むと、要吉は自分の居間へ戻つた。掃除をした後で、障子がかかりと開放してある。

本理の持上つた縁側へ一杯に陽が射して、手水鉢の水が風の壁にちら／＼と映る。崖の下の小家だから今頃でなければ日が當らない。

留守中に着いた一通の手紙を持つて、縁鼻の柱に凭れながら封を切つた。神戸といふ友人から來たので、近頃君は段々僕から遠ざかつて行く。

僕の僻目かも知れぬが、何うもそんな様に思はれる。平生君が何を考へて、何をして生きて居るかも分らなく成つた。兎に角一度會つて語りたいと云つて、巻紙の末に「例の金葉會を又始めることにしたから、今週の金曜日には毎

もの教會迄來て貰ひたい」とあつた。金葉會といふのは、今年の青葉の頃から一週に一回若い女が集つて、外國文學の研究をして來たので、

神戸が會の主人であつた所から要吉をも誘つて其中へ加へた。それが追々格氣を生じて、何時

となく中止の姿に成つて居たのを又再興しようと云ふのである。要吉は一人苦笑ひをしながら

手紙を巻返して手欄の上に載せて置いた巻煙草

を吸はうとしたが、火が熄えたと思えて煙が出ない。つと振向きざま庭へ捨てた。

今朝置いた庭の霜は蜜柑の皮の蔭だけ残して消えた。小さい池の水が澄んで、底に映る金魚の影も見える。昔此家に棲んだ一葉女史が月夜に硯を投げたと日記に書いた池で、垣根の下に二本葉つて枯れた芭蕉も矢張其頃から有るといふ。要吉が永く此家に居ついたのも、一つは其様な事が心を惹いたからで、何日も神戸が来て、「君は一葉さんの家に居る間に、何か大作をしたら好からう」と言つた。それは何日出來るといふ宛もないが、此處に住むのは随分久しい。

何時の間にか、お種が十能を持つて入つて來て、火鉢に火を埋けて居たが、其儘出て行かうともせず、徐かに縁側へ出て、手欄に片肘を掛けたまゝ、同じ様に庭を見詰めた。要吉も知らぬ振をして物を言はなかつた。二人は斯うして暫く並んで居た。

一昨年の冬、恰度今日の様な日和の日であつた。要吉が學校から歸つて、何の氣もなく庭から這入つて來ると、お種は髪を洗つたと見えて、此手欄に凭れて日光に背を曝しながら、膝の上に、唄か何かの本を開いて居た。被衣の様に身

體を包む濡髪からは、陽炎が立つと思はれた。足音を聞付けると、急に上半身を振つて振向いた。明るい所から這入つて來たためであらう、女の顔は只ぼつと卵形に白う見える許りであつた。要吉は我にもなく其手を執つた。女は男の弄ぶが儘に手を借して居た。

併し女が何日も斯ういふ位置に許り居て呉れるものではない。偶々無意識で斯ういふ位置に置かれたのである。それが一たび意識して男の歡心を買はうと努める様に成つては最う堪らない。時には年紀の行つた女の甘えたやうな所作を見せられて、一種不快の念を禁じ得ないことさへあつた。それにも拘らず、其不快の念が湧くたびに、如何いふものか、却て女から離れることの出来ないものにされて仕舞ふ様な氣がした。お種は何時の間にやら持つて歸つた着物も大抵質入して、要吉の側を離れては、あの小鼓一挺抱へて街に訪ふ外はない身と成つた。それと知つた時、要吉は思はず身震ひしたが既に遅い。一日経てば一日だけ事情が絡んで、自分の爲にも成らず、女にも愛い目を見せると知りながら、心苦しい日夜を明して暮して行く。これが何日迄つゞくのであらう。「もし」と、不意にお種が呼び掛けた。

見ると、眼に一杯涙を溜めて居る。

「あの、私は今日の午過ぎに姉の宅へ歸ることになりましたから。」

要吉は尙且黙つて居た。

「餘り阿母さんが言ひますので、と、差俯向く。

「左様、親には心配を掛けられない方が可いね。」

お種は上眼に一寸男の顔を見たり限りで、何とも言はなかつた。

少時して父男から言出した。「何の方へは、新橋の家元とやらへは、此頃も未だ通つて居るかい。」

「えゝ、毎日行つてますわ。悉皆浚ひ返して貰はないと、何一つ満足には立てないんですから。」

「ぢや容易のことではないね。」

「でもね、一通遣つたことなんですから、ずんずん拂は行きますが、唯側の上手な人を見ると、彼時から何處へも行かずにみつちり稽古をして居たらと、時々思ふこともありますの。」

要吉にはそれが何だか自分への言譯らしく思はれた。で、只何とはなしに、

「それも仕方無いさ。」

「ね、とお種はやゝ調子附いて、「初めて築地の家へ入來して下すつた頃、私は未だ男髻に結

つて、袂の長い着物に繻子の男帯を貝の口に
緊めて居たでせう。幾許可厭だと云つても、お
稽古へ通ふ間はそれではけりや不可いつて、如
何しても阿父さんが承知して呉れないんですも
の。眞個頑固な人でしたよ。」

「併し面白いやないか。」

「だつて、そんな服装をして居る者はお友達
の中にも無かつたのですもの、随分可厭でしたわ
何日でしたか二階に土用干をして、其側で貴方
一人勉強して被坐したことがあるでせう。そこ
へ私がお師匠さんから歸つて来て、暮のお渡ひ
に鞍馬の牛若に出た半振袖が眼に附くと、馬鹿
ですわね、夏の眞盛りに細入を着てとん／＼踊
り出した。貴方も笑つて見て被坐したわ。」

「左様、そんな事も有つたらう。」

「たうとう阿母さんに目附かつたが、叱ること
も出来なかつたか、一緒に成つて笑つてました
のね。」

「あの時は二人ながら子供だつた。」

「罪が有りませんでしたわね。」

朝の御仕が済んだと見えて、小母さんは例の
通り太鼓を叩いてお題目を唱へ始めた。これが
毎朝小半時つく。代々法華に凝つて、月の十
三日には何用を差控いても、日和下駄に脚絆掛

けでお祖師様へ参詣するといふ女である。

九

中一日経つた。要吉は居間に閉籠つて、机の
前に倒れたまゝうつら／＼目を送つた。始終何
か考へて居るやうで、實は何も考へては居ない。
何か爲なけりや成らぬと焦躁つては見るが、何
も爲ることが無いやうな氣がする。それで身體
には何とも云はれない不快な倦怠を覺えた。
「もしと、小母さんは國の外に立つて、何か被
けてお臥みなさらないと、風邪を引きますよ。」

要吉はわざと返辭をしなかつた。

「風邪を引きますよ」と、小母さんは二たび繰返
しながら枕元に坐つて、肩に手を掛けた。
要吉は餘儀なく起直つた。

小母さんは少時其方を見詰めて居たが、「毛布
でも出しませうか。」

「いや、最う可い。」

「左様ですか」と、一寸氣を變へて、「何だか陰氣
ですわね。閉て切つて。少し明けませうか。」

片手を延して、縁側についた障子を明け放し
た。
「此間から何はうと思つて居ましたが」と、相
手の顔を見い／＼言葉をつづけて、「お故國の方

は何んな話をしてお歸りなさいました。」

要吉はぎく／＼とした。此方が愚圖々々して居
る間に、到頭先方から火蓋を切られた。

「別に如何もしない。」

「それでもお金子の話は。」

やゝ安心した。「うむ、それも打捨ちかして歸
つた。後で好い様にするでせう。」

小母さんは苦い顔をした。「それだから貴方
は不可い云ふのですよ。何でも左様いふ風だ
から、側の者が困つて仕舞ふのです。」

要吉は何とも言へなかつた。

少時して小母さんが、「私は一つお願ひがあ
るのですがね」と切出した。

「え」と、要吉は頭を擡げて、「何ですか、そ
れは。」

「先づ言つて試して下さい。」

「私は何も過ぎ去つたことを彼は云ふのではな
い。親が側について居て出来たことなら、何と
云はれても仕方がない。いろ／＼考へた上で、

お種は知らぬが私だけは諦めて居ます。彼女も
最う仕方が有りますまい。一日も早く諦めた方
が可いのです。」

小母さんは一寸言葉を途切らしたが、釋律の
袖を引出して眼の縁を拭つた。
「彼女は最う何處へも行かないで、一生獨身

で暮すと云つてゐますが、如何して女が踊の師匠なぞして遣つて行かれるものでない。彼様な事を云つてゐる所を見ると、未だ何んな氣で居るかと親の身に成れば案じられるのですよ」と、眞正面に相手を上上げて、「それでお願ひと云ふのは、私が言つたのでは聞かないから、貴方から好く得心の行くやうに、彼女に言つて頂きたいのですがね。」

要吉はお種が云つて居たのはこれだと思つた。そして蕪く胸を押鎖めながら耳を傾けた。小母さんの頼みと云ふのは、何とかしてお種が再縁する様に勧めて呉れと云ふので、段々聞いて見ると、現に姉の許へ貰ひに来て居る口がある様子で、何でも先方は深川の廻米問屋だとか云ふことであつた。

それを打明けられた時には、要吉も一種形容することの出来ない氣持に捕はれた。一人の女を二人の男で分つ——自分が關係したことのある女を、幾許先方で貰ひたいと云ふにもせよ、それに乗じて自分の身拔けをするために、自分が手傳つてまで、何も知らぬ他人に押附けようとする。そんな眞似は逆も出来るものでない。先方の男も氣の毒であるが、お種は三たび意味もなく男の手から轉々して行く。それが知

らん顔して見て居られようか。見て居られないからと云つて、未だしも左様成り行くが女の爲には仕合せであらう。それを思へば何んな卑劣な所行をも忍ばねば成らぬ。今の一時ではない、永い一生の間、其男の前には知らん顔をして過ぎねば成らぬ。——要吉は自分が道德上の墮落を目の前に見せ附けられるやうな心持がした。

「いづれ其間違つたら善く談して見ませう。」

一時逃れに左様は云つたものの、そんな事が自分の口から言はれるものでない。それだけは斷じて出来ない。

「貴方が強く言つて下されば、彼女もねえ。それぢや何分お願ひしましたよ」と、小母さんは心を残して立上つた。

足音が機の外に消えたと、要吉は急に苛々して、部屋の中をぐる／＼廻つたが、不圖これも嫉妬心ぢやないかしらと云ふ氣が附く。あれだけ女を棄てて仕舞ふ覺悟で居ながら、此方の手を引くには待設けても無いやうな都合の好い話があるからだらうか。又ごろりと机の前に倒れた。

其儘息もしないかと思はれる程静手として動

かなかつたが、二時間餘り経つと、むつくり起上つて、轡子を掴んだまゝ、ぶいと戸外へ出た。何か差迫つた用事でもあるやうに、急ぎ足で明神下の人通りの稀な横町まで来て、びつたり足を留めた。永い間突立つて居たが、又徐々となる家の軒下へ近づいた。

格子の中を覗くと、沓脱の上に赤い鼻緒の朱塗の下駄が二足揃へて脱いである。三味線の音がして、お種の聲で「禿かむろと澤山さうに」と唄つて居るのが聞えた。近所の子供に種古でもして居るらしい。何と思つたか要吉は其儘格子に掛けた手を引いて、町の角まで戻つて来たが、ぐるりと一周りして町の向う角へ出た。

「お師匠様、左様なら」と、尻上りに云ふ女の兒の聲が聞える。

「左様なら、忘れぬ様にお渡ひなさいよ」と云ふ聲が中からした。

やがてお下げとお煙草盆に結つた二人連れが手拭に包んだ扇子を赤い帯の間へ差して、格子戸を開けるや否やばた／＼と駆けて行く。

要吉は少時其後影を見送つて居たが、一今會つたところで仕方が無いと呟いて、又元來た方へ引返して行つた。

何處を通つたとも氣が附かなかつたが、矢張

正直に前と同じ道を歩いて、要吉は丸山の家の前まで戻つて来た。何だか直ぐ家の中へ這入るのが可厭に思はれたので、又引返して柳町へ出た。小石川と本郷との高臺から落す悪水を溜めて、其處に洞川が流れる、其上に架けた柳橋の袂に、露店の魚屋が戸板を並べて、悪臭を放つ魚肉の切身に附木の札をつけて隣いで居る。恰度夕飯前の人の出盛つた所で、殊に此邊は職工や労働者の集席だから、結立の鬻だけ光らせて、醬油で煮しめた様な筒袖を着た細君連が金切聲を立てて商賣と嗤み合ふ。其中に要吉は何か一人で呟いたり聲高に物を言つたりして急いで歩いた。往き逢ふ者の中には胡散臭い眼をして顔を眺める者もあった。

洞について下つて行くと、地面に席を敷いた古着屋に續いて、植木屋がある、人形焼の屋臺がある、大きな傘を擡げた飴屋もある。今日は満月満庭のお祭り日と見えて、子供や女や年寄なぞがぞろ／＼と黒門の中へ這入つて行く。要吉も其後から隨いて行くと、閻魔堂の横手の古い石塔の倒れた中に、猿芝居だの輕技だのが小屋掛けして、太鼓や銅鑼で喧ましく囃し立てて居る。けば／＼しい繪看板の下で、木戸番が聲を噴して客を招ぶ。幕の隙間からいやに白粉を塗

つた若い女が薄汚れた顔を出して、群集を覗いて居る。こんな連中が眼に留る毎に、要吉はいつても何だか自分とは餘り縁が遠くない様な心持がした。今日は殊にしみる／＼と身に沁む。若しあらゆる係累を斷つて、親も子も妻も何もない、天地の間に只一人の身と成ることが出来るなら、こんな仲間へでも這入つて、世界の果までも行つて仕舞ひたいやうな心持もした。

何時の間にやら人込に押されて裏門の外へ出た。急に人通りが稀に成つたので、初めて我に返つた様に四邊を見廻した。

「これから何處へ行かうか」と考へた。

十

砲兵工廠側の埃の厚い道を、側目も振らず水道橋の上まで来て、要吉ははたと足を留めた。道橋の下を濁つた水がゆる／＼流れる。何物の影をも映さない、又何物をも洗めて返さないといふ水である。凝乎とそれを眺めてる間に、何しに來たのか、何の爲にこんな所へ來たのか想ひ出せなく成つた。空は曇つたのか暗いのか分らない。造兵の横手の門から、ぞろ／＼と職工が歸り始めた。街一杯に擴がつて行く。何れも疲れ切つた顔をしてる。歩くのも今初めて歩き出したといふ歩き方ではない。一日歩き通して來て、今夜もこれから夜通し歩かねばならぬと云つた様な足取である。要吉も其中へ交つて何處までも行つて仕舞はうかと思つた。二三間歩いて見て、直ぐ後れて仕舞つた。茫然道端に立つてると、

「おい」と呼んで、肩を叩いたものがある。振向くと、それが神戸だつた。

「あゝ君か。」

「如何したんだな。金葉會ちや、君が來ないものだから、今迄散會せず待つて居たんだが。」

「そりや濟まないことをしたね。」

「なに、そんな事は關はないが又如何かしんぢやなからうかと思つてね、それに」と、神戸は背後を振向つた。

三間許り離れて、目に立たぬ程の綃の袴を穿いた女學生らしい女が一人立つて居た。焦茶色の毛皮の襟巻が年紀よりも老けて見える。要吉と視線が合ふと、此方へ近づいて來て、しづかに頭を下げた。

「それに」と、神戸は言葉をつづけて、「これか僕が君の許へ行くと云ふと、眞鍋さんも丸山なら歸途だから一緒に寄つても可いと云ふのでね。」

「あゝ、左様か、それぢや」とは云つたが、何となく此處から引回すのが躊躇はれた。

「いえ、私は」と、眞鍋と呼ばれた女は初めて口を開いて、「又此次にお伺ひしても宜しいのですから。」

「左様ですね。それぢや餘り晩く成る様だと不可ませんから、此處で失禮しませうか」と、神戸は剛から引取つて言つた。

女は二人に別れて、間もなく往來の群集に紛れて見えなく成つた。

要吉は神戸と顔を見合せた。

「何處か其邊を歩かないか。」

「さ、歩いてても可いね。久し振で池の端でも散歩するかな。」

二人は壹岐坂を上つて行つた。

「一體如何したんだい」と、神戸は二たび相手の容子を氣にして訊ねた。

「いや、別に、眼を地上に落して、「四五日故國へ歸つて居たものでね。」

「え。それぢや何だね、今度は皆さん一緒に。」

「なに、只一寸歸つただけなんだから。」

神戸は未だ何か言はうとしたが、餘り立入つてもと思つて控へた。

良あつて要吉は語頭を轉じた。「あの何は、此方から通ふんだと見えるね。」

「今のあれか、何でも家は白山の先きだと云ふことだが。」

「何日か君は銀座だとか云つたぢやないか。」「うむ、あれは岡部三枝子さ。何かい、君は彼の女だと思つて居たのか。」

「左様ぢやないのか。」

「別人さ」と、神戸は笑ひを含んで、「三枝子をもつと派手で、風俗が下町式だよ。此方は、左様さね、最初會員の中に目白の女子大學出たのがあると云つたらう。それだよ。」

「何といふ名だい。」

「眞鍋朋子。」

「朋子、左様か。」

「併し間違ひとしちや面白ね。如何して、又君にはあゝ云ふ顔が氣に適るのだらう。」

要吉は自分が物笑ひに成つた様な氣がした。

「あの眉と眉との間の暗い陰は、誰の眼にも附くぢやないか。冥府の烙印を顔に捺したやうな——一度見りや一生忘れられない顔だ。」

「其代り一度見りや澤山な顔だらう。」

「如何しても始終見て居られる顔ぢやないね。」

「一度見りや澤山な顔で、一度逢つたら一生忘

られない顔と云ふのだな。」

やがて二人は切通しの坂を下りて、不忍の池の畔へ出た。腐れた水は毎もの通り動かないが、空の曇つたためか、何處となく穏かでない。

蓮は大抵土に返つて、所々に枯れた莖が折れたなりに水の上へ出て居る。刻々に迫る夕暮の色に追はれる様に、點燈夫は池を廻つて走りながら、一つ／＼街燈に灯を入れて行く。それと後

に成り、前に成りして、雪見橋から辨天祠の方へ歩いて來たが、三橋寄りの所で、路傍に人群りしてる後ろへ立つて、二人は足を留めた。

その貸席らしい家の中二階に、赤と白と段だら幕を張つて、外を向けて蓄音機を鳴らしてる。歌の文句は能く解らないが、寂びのある

年の行つた女の聲を一枚に張上げて、三味線や太鼓送も合の手に、馬子唄か船頭唄か、いづれ海か山で唄はれるものらしい。其内に一曲済むと、前に立つた職人體の小僧が、「船頭かは

いーや音頭の瀬戸で」と、直ぐ歌の節を眞似しながら立つて行く。

要吉も黙つて動き出した。神戸は其後から濠水を大きく廻つて、要吉と肩を並べたが、「あんな様な墮落した女の、何と云つて可いか、コイシユハイトを失つた聲と云ふものは、賑や

かな中に何處か手頼ない所があつて、聴いて居ると、僕は身に沁むがね。」

要吉は只頷いた。

神戸はなほも言葉をつづけて、「左様ぢやないか、吾々の魔類した心持は、あんな女のあんな聲に、辛うじて共鳴を見出すのだけ。其外には言表はし様もなければ、理解される宛もない。考へると淋しいね。」

一人は黙々として行く。

「矢張人間を動かすものは、人間の聲だね、肉の聲だね。何うもあの聲には誘惑が潜んで居るよ。人を陥落させる力が有る」と、神戸はだんだん自分の聲で自分がはずんで来るらしい。

「左様か」と、要吉は誰に言ふともなく言つたが、「何が人生の快樂だと云つても、誘惑に抵抗しないので身を委せて居る位好いものはないね。」

「後で命を奪つて呉れたならなほ好いさ。誘惑を怖れるのは人生の吝嗇漢だよ——誘惑に克つたと云ふのも。日が暮れてとぼく、墓場の手前迄辿り着いてから、一生を振返つて見て、何等の悔をも残さなかつたと思ふやうな淋しさは堪へられんぢやないか。」

神戸も何處迄自分の云ふことを信じて居るの

だらう。やゝ有つて、要吉は下を向いたまゝ、「併し僕は駄目だね、誘惑に對して殆ど抵抗力が無いのだから。」

神戸は何とも言はなかつた。

西の空が切れたのか、上野の森から石段へかけて舞臺のフットライトでも廻した様に、其邊一面に明るく成つたが、見る／＼間に又暗く成つて行く。

池を廻るに伴れて、一日辨天の屋根に隠れた向側の待合の家づきが又見え出した。軒並に二階へ灯がついて、障子へ映る人影までが廻り燈籠を見るやうに、此世のものとは思はれない。不意に何處かの座敷で下方を入れて騒ぎ出した。水を渡つて聞えるためか、賑やかな管の太鼓の音が心寂しい。

「おい君」と、要吉は神戸を呼び掛けて、「一寸向側を見給へ。何だか斯う芝居の書割でも見る様ぢやないか。」

「左様」と、神戸は洋杖を立てた。

「十人斬でも有りさうだね。」

「うむ」と、又小石を踏んで歩き出したが、「近頃創作は如何した。未だ手を着けないか。」

「逆も書けさうにない。」

「餘り凝り過ぎるからだらう。矢張事實を其儘

書くんだね。平凡な様だが、眞實の事を書くこと云ふことは如何しても最後の手段だね。日記を書く積りでさう／＼遣つて見給へ。」

「日記に眞實の事が書けるかい。」

「左様か。日記に眞實の事が書けると思ふのは人間が自己に對して矯飾するものだ云ふことを忘れて居るからだらう。」

神戸は咄嗟の間に相手の言葉を説明したが、「併し自分のことは諷でも、他人の事を日記に書く時や眞實のことを書くだらうぢやないか。」

要吉は思はず相手の顔を見た。「だが、僕は他人の事に成つたら猶更書けない。矢張自分の事を書く外ないものね。」

「ぢや仕方がない、デヒヒツンゲ、ウント、ゾールハイトで書いたら可からう。」

「そりや洒落か眞面目かい。」

「何方でも可い。」

「だが僕はねえ、何うも書く人ぢやない、書かれる人に生れて來たのぢやないかと思ふことがあるよ。」

「其代り實際の生活其者が作品だらう。」

「何だ」と、要吉は苦笑したが、「只其方は値が高いからね。」

神戸は急にしんみりして、「併し誰かの言草

ぢやないが、其日送りの頓智や警句でお茶を濁して、生涯何も爲すに仕舞ふ者は、身代を銅貨に換へてば、撒くやうなものだと云ふよ。其邊はお互に戒めなけりや成らんね。」何時となく池を一周して、二たび雪見橋の袂へ出た。片側町の柳の樹の下は暗かつた。仲町へ出ると、狭い町筋の兩側の灯が入り亂れて、白晝を欺く程明るい。二人は十字街頭に立つて、一寸眼を見合せたが、ふいと又向横町へ反れた。

十一

昨宵一時頃、要吉は池の端から自宅へ戻つた。とろ／＼として目を覺したら、雨の音は止んで居たが、夜は未だ明けない。胸がむか／＼して、二日酔らしい氣持である。漸と小母さんが起きる迄床の中で辛抱したが、勝手の方でことと云ふ音が聞え出すと一緒に起上つた。

此日は一日中身體が倦怠く、机に向つても書物さへ手に觸れる氣がしない。日の暮から惡寒がして、毛の穴が彌立つので、急に夜着を引被つて寝たが、眞夜中に成つても戰慄が止らぬ。つゞけざまに夢を見て居るやうな、覺めて居るやうな心持で、手足の所嫌はす自分で注射し

て、それにつれて熱が往來するかと思はれた。頭まんじりとも爲すに夜を明した。朝に成つて、稍疼痛が去つた様だから、一寸寝返りをして見ようとしたが、膝の關節が硬張つて曲げることとも出来ない。怖る／＼膝間を持ち上げて見ると氣味の悪い程赤く腫上つて居た。かねて母親のお絹が自分を生み落した前か後かに、重い痛風に罹つて、永く煩つたと云ふことを聞いて居る。今迄そんな氣觸ひは少しも無かつたが、如何かしたらそれぢやなからうかと案じられた。

そこで近所の醫者を迎へに遣つて、診て貰ふと、矢張急性の偽麻質斯だと云ふ診斷である。其上少し激烈に來た様だから早く入院して手當をしなければや可まいと云はれた。一たび病人と成つては、醫師の言葉に従ふ外はない。其醫者の紹介で、小石川茗荷谷の奥の狩野病院といふへ這入ることに成つた。醫者の宅の電話で訊いて貰ふと、恰度病室も明いてゐると云ふので、これも好都合であつた。

其日の夕方、要吉は身の周りの物だけ持つて、一人人力車に乗つて出掛けた。小雨が降つて來さうなので幌を下させたが偶と此家へは最上歸らないのぢやないかと思つた。あれだけ此家を去る計畫をしたが、無事の日には爲す所な

く、病氣に成つて出て行くのが自分ながら笑止である。車夫は氣をつけて、徐々曳いて行く。切支丹坂は勾配が急だからと云ふので、大塚の火藥庫の側まで行つて又引返すことにした。其處迄は坂でも流石に町つゞきだが、其處からは路の上を高い杉の樹立が鎖して、車はごろごろと暗闇の中へ這入つて行つた。ところ／＼道の曲り角に街燈が弱い光を放つてゐる。何處に病院があるのか、要吉は未だ知らない。車夫も知らなかつた。石の門があるので、此處だらうかと思つて訊いて見ると、門番がこれは寺院だとほざく。寺へ來るにはまだ早いと、要吉は人力車の上でひとり苦笑したが、聲を出すだけの力ではなかつた。此様にして、兎に角無事に目指す病院へ着いた。

玄関へ着くと、看護婦が二人出て來て肩を借して呉れた。兩方から釣られる様にして長い廊下を定め、病室へ通つた。一しきり當直の醫員だの看護婦長だのが來て、いろ／＼世話を焼いて呉れた。最後に副院長が診察したが、始終心安げに物を言ふ人で何となく心が落着いた。副院長が出て行くと、間もなく又看護婦が來て、電法をするんだと云ふので、暫く足の繃帯を解いたり巻いたりした。それが濟むと附添の

看護婦一人残して皆出て行つて仕舞つた。

夜が深けたと見えて其後は森とした。時々蒸氣の通ふ鐵管の中で、かたんと吃驚する様な音のする外には、物音一つ聞えない。病室は六疊で、壁も天井も白い。電氣燈の光で見ると、毛布も藁蒲團に被けた上被ひも寒い程白い。白いつくめの中に仰向けに成つて寝て居ると、生きながら白木の棺に納めて、海の底へ沈められた様にも思はれる。一人世間から遠く隔離されたやうで、此處迄は誰も追掛けて来ないやうな氣もする。偶と若し自分が本當に死んだらと考へて見た。自分が死んだ後の周囲の者の行末を一人々々明細に眼に泛べて見た。最後に如何しても自分が一番可憫想に思はれた。

こんな事を考へて居る間も、足の疼痛は忘られない。それが疼くのもなく、やめるのでもなく、一種異様な陰性の痛みで、何とも云はれぬ不快な心持がする、氣が附いて見ると、窓の外は寒でも降つて来たのか、しとくと重い音が絶間なくつづく。それが何だか足の痛みと調子を合せるやうで堪へ難い。硝子窓を透して見ると戸外は何處迄も潤く暗い許りである。

「おい——」と看護婦を呼んで窓掛を下させよ
うとしたが、何時の間にか寝入つたと見えて返辭をしなかつた。

明くる朝に成つて見ると、要吉の當がはれた室は病院の建物の東の端にあることが分つた。庭は只平に廣い許りで、窓際のまだ突支棒を支つた青桐の外には、草一筋生えて居ない。ずつと向うの垣根に沿うて、一面に厚い植込みが見える。其處は傳染病室であると云ふことだ。この殺風景な庭を眺めて、要吉は二週間餘り明し暮した。初めの間はいちげた底寒い天氣が続いたが、後には毎日快晴に成つた。それに於て要吉の病氣も目に見えて快く成つたが、それからが何うも拂々しく行かない。自分でも快く成るのか悪く成るのか分らない様な氣がして焦躁しい。快復期に入つた病人は、健康體の時よりも、反つて心持の澄々するものだといて居たが、一向そんな覺えはなかつた。

お種は最初から眞心籠めて介抱した。今でも一日置きか、二日置き位には必ず見舞ひに來た。要吉も初めの間は、又此様にして此女の情に絆されて行くことかと、内々それを恐れて居たが、病院の單調な生活に倦んで來ると、此頃ではお種の來るのを待遠しく思ふことさへあつた。米市場の方の縁談は如何成つたのか、此方から訊くのも氣の毒な様で、女は猶更何と

も言ひ出さない。只來ては只歸つて行つた。

十二

午後一時頃である。朝から仰向けのまゝで讀み續けた小説にも飽きて鬱陶しく成つたので、看護婦を呼んで窓を開けさせた。白い窓掛が帆の様に風を孕んで、隙間から蒼い空が見える。要吉は廻つた様な心持で、蒲團の中から乗出して、久らく新鮮な空氣に面を曝して居たが、急に顔色が變つた。ぞくぞく寒氣がするので速に横に成つた。看護婦も氣が附いて急いで窓を閉めて呉れた。

そこへ一人の看護婦が廊下の入口から顔を出して、「此方が御面會に」と、一葉の名刺を差出した。

附添の看護婦が受取つて、寝て居る眼の前に寫したのを見ると、神戸直方とある。要吉は「あ」と言つて點頭した。

看護婦が引返すと、間もなく廊下に足音が聞えて、身丈の高い神戸の姿が先づ戸口に現はれた。把手に手を掛けたまゝ、一寸振向いて物を言つた様であつたが、續いて女の長い袂が現はれた。

神戸はつかつかと枕元へ近づいて、「其後

は如何だい。今日は珍らしい人を件れて来たよーと言ひく洋袴の膝をたくし上げて坐つたが、「眞鍋さん、お這入りなさい。」

朋子はしとやかに一禮して、入口の壁に近く座に着いた。

要吉が遂て起直らうとすると、神戸は、「ま、左様して居給へ」と、手を舉げて留めた。言はれるまゝに要吉は父仰向けに成つた。

「如何で被坐しやいます」と言ひかけて、朋子は稍依違つた。「未だお顔色が悪い様で御座いますわね。」

其聲が極めて優しく、調子が暖かで、眼を瞑つて聞いてゐると、恰もそつと柔かに抱かれる様な心持がする。

「左様」と、神戸は何氣なく頷いて、「先達て来た時よりは悪い様だね、又如何かしたのぢやないか。」

「あゝ昨夜から少し熱が出て」と、要吉はうつかり嘘を吐いて仕舞つた。それが口へ出ると共に努めて苦痛を装はねば成らぬ様な氣がした。

「それや不可ね、又後戻りをするやうぢや。」

「なア」と言つて、要吉は眼を半眼に閉ぢた。斯うして力の無い風を装ひながら、竊に朋子の容子を窺つて居た。

何時も物を言はぬ時の此女の癖で、少し反身に成つて、伏目に一所を凝視つてゐる。堅く閉ぢた唇はやゝ豊かに過ぎて、熱のために上皮的乾煤いだのが男の心を惹く。

「大切にしまへよ。」と言ひながら、神戸は宛もなく枕元に散らかつた書物を一冊取上げた。其下には何日か神戸が見舞つた時に、こんな際でもなけりや讀む機會はなからうからと、持つて來て貸して呉れた聖書が其儘開かれもしないで伏せてある。

「如何だ、聖書は讀んで見たか」と言つて、手に持つた書物の表紙を見たが、「オスカア、ワイルドの『サロメ』だね。」

「其方は讀んだ。」

「君のことだから左様だらう。面白い。」

「あゝ面白い。」

「矢張新約聖書の中のサロメがバプテスマのヨハネの首を盆に載せて呉れといふ、あれだらうね。」

「うむ、あの女がそれへ接吻するんだ。」

「生首にか。」

「あゝ。」

神戸は書物を開いて、出た所を二三行黙讀した。

「汝は常に姫を見る。」

「姫を見ること過ぎたり。」

「さばかり人を見てあらむは殆し。」

「何等かの怖ろしきこと起るべし。」

要吉は竊と朋子を視る眼を反した。

「眞鍋さん」と、神戸は朋子呼びかけて、「貴方ダンヌンチオの『トライアムフ、オブ、デス』をお讀みに成つたことが有りますか。小島君は此處へも持つて來て居ます」と又一冊の洋書を取上げた。

「え」と、朋子は小首を傾けたが、「それですか、いゝえ。」

「ぢや是非讀んで御覽なさい。初めから終ひまで刺戟の強いものです。綺麗な所が眼の覺めるほど綺麗なら、汚い所も鼻持の成らぬ程汚い。」

「はア」と言つた計りで、朋子は又口を閉ぢた。

そこへ看護婦が這入つて來て、院長の廻診があること告げた。

要吉は神戸に向つて、「それぢや、一寸失禮だが――」

「さ、何卒。」二人は片側へ寄つた。

看護婦は直ぐ毛布をはねて、足に巻いた綿帶を取り始めた。少時すると三四人どや／＼と這

入つて来た。院長は看護婦が差出した體溫表に眼を呉れて、一寸局部に觸つて見たが、「あ、左様か〜」と頷いたきりで、又とや〜と出て行つた。

それを機會に神戸も朋子を促して立上つた。

「ぢや、又來ようね。」

「さうか、わざ〜何うも。」

朋子の穿いた赤い鼻緒の上草履が廊下に消え、要吉は芝居の幕が降りた後の様な物足りなさを覺えて、枕に頬を押着けたまゝ、凝手と其後を見守つて居た。ざわ〜と心が落着かぬ。

間もなく朋子一人引返して來たが、入口から覗き込んで、

「あの、只今の書物はお明きに成つてませうか。」

要吉は一寸驚いて其顔を見たが、

「明いてます。お持ちなさい。」

「拜借して行つても好う御座いますか。」

「何方をお持ちなさいます。」

「何方でも。」

要吉は二たび女の顔を見た。「ぢやダンメン

テオの方から先きへ。」

朋子は云はれるまゝに、包みを開いて「死の

勝利」を入れた。

「貴方は獨逸語の方が達者だと云ふぢやありませんか。它には獨逸譯のが有つた筈です。」

「いゝえ、只家の者が皆獨逸語を遣りますから——これで結構で御座います。」

朋子が急いで玄關まで來ると、神戸は靴を穿いて仕舞つて、今其處で人力車から降りたらしい、赤兎を抱へた女と挨拶をして居た。やがて其女は丁寧にお叩頭をして神戸と別れたが、受付の看護婦に案内を頼んで奥へ這入つて行つた。

神戸は其後で朋子の方を向いて、「如何爲さいました？」

「いえ一寸と、判然言はなかつた。」

二人は門の方へ出て行つた。

前の女は看護婦に隨いて、要吉の病室の前まで來たが、此處だと教へられておづ〜扉を開けた。それを見ると、要吉は思はず聲を出した。

「隅江か、如何して來たのだ。」

隅江は子供を抱へたまゝ、其處へ小さく成つて坐つた。

「一昨日丸山の方へ手紙を出して置きましたが、

なにも、未だ見とくれやアせんかも知れんが。それでも御病氣の方は大變宜しいさうで御座いま

すなも。」

「俺が病氣だと云ふことを如何して知つた。」

「え」と、隅江は意外な面持して、「そりや貴方、丸山の小母様から知らせせて頂いたがなも。それ

貴方知りやアせんのかな。」

左様かと要吉は心の中で頷いた。今度の病氣は全快つて仕舞ふまで、故郷へも知らせて呉れるなと云つて置いたのだが、知らせた上は仕方がない。

要吉は枕の上に頭をつけながら熟々隅江の姿を見た。田舎者が田舎者らしくしてりや未だみられる、田舎者の盛装した位見苦しいものはない。着替へる位なら五分の隙もないやうで有つて欲しい。辻褄の合はぬ服装をして、それで常人は得意で居る程可厭なものはない。

其下から要吉は直ぐ何故自分は何も知らぬ隅江にこんな罵倒を浴せ掛けるのかと思つた。隅江を嘲るのではない。自分自身を嘲つて居るのだ。今其處で隅江が朋子に出會つたかと思ふと、何だか見られたくないものを見られたやうで、少からず自分の虛榮心を傷けられる。其傷けられた虛榮心に對して隅江を罵つて居るのだ。左様思ふと、如何にも自分の心掛がさもしい。

「今玄關の所で神戸様にお目に懸りましたが、今度は彼方にも大變お世話に成りやしたさうだなも。」

「うむ、まあ可いや。コートでも脱いで悠然したら可からう。」

斯う言つた要吉の聲は優しかった。

隅江は暮方迄居て、丸山の家へ歸つた。故郷の事など此方から訊きもしなければ言ひもしなかつた。

十三

其後はお種がふつとり來なく成つた許りで、又單調な日が續いた。神戸は二三度見舞つて呉れたが、朋子からはあれきり何の音沙汰もなかつた。

又三週間前り終つた。削走の末に、要吉は漸と退院して、二たび有哉無哉の間に丸山の家へ戻つた。此上寝て居る必要もないが、病後の衰弱に託けて、一間に閉籠つた儘うつらと暮した。誰も訪ねて來なければ此方から行きもせぬ。家の者とも減多に面を合せなかつた。机に向ふこともあつたが、別段何を書くでもなく、何を讀むでもない。唯始終何事かを待つて居るやうな心持がした。何事かは自分でも分らない。

不圖、此次には如何したら可からうかと云ふ氣が附く。病んで起てない間はともあれ、一旦恢復した上は、如何にかして此不自然な境遇から逃れなければならぬ。一刻も早く如何かなければ成らぬ。が、併し自分一人の力では最う如何することも出来ぬ様に思はれた。自分は自分を餘りよく知つて居る。加之、そんな事よりも、未だ根本に於て何物かが解決されずにあるのぢやないか。それを解決した日には、自分の身が如何なるか分らない。従つて目前の事など如何だつて構はない様なものである。こんな手前勝手な都合の好い理窟を着けて、無理に安心して、一日延ばしに其日を送つた。

隅江は何とも言はない。又言ひたくも言ひ得ないのであらう。要吉の方から談話をしかかければ、一日でも物を言はなかつた。故意とか、それとも其様なつもりも無いのか、成る可く要吉の側へは近寄らぬ様にして、始終小母さんの所について居た。小母さんとは割合に好く談話もした。

全體、此女は俺を如何想つて居るだらうか。要吉は時々こんな事さへ考へた。未だ此女に良人の愛情を求める心が有るのだらうか。そんなものは最う要らぬのぢやなからうか。辛抱

強いと云へば是程辛抱の好い女もない。けれども、何處迄が辛抱して保て居るので、何處からが無神經なのか分つたものでない——こんな考へが泛んだ時は、流石に自分ながら非道い心根だと思つたが、其後から又、何うもそんな様に思はれた。

夜半に隣の部屋で子供が泣き出すと、要吉も蛇度眼を覺した。まじり／＼天井を見詰めながら、この先き自分には、此儘人の良人と成り人の父と成つて、普通の生活を續けて行くだけの覺悟が有るだらうか。縦令あの女とは故障なく手を切ることが出来たとしても、それならそれで満足して、人並に人の爲るやうな家庭を營むことが出来るだらうか。安んじて一生を送られようか。此處迄考へて來て、其後は何時考へることを止めた。それから先きは成るべく暖味にして置いて、良心の隅をつきたくない。年の暮だと云ふので、小母さんが小松や注連飾を買つて來た。今朝から隅江と二人でお正月の者物やら仲餅を切るやら、どきどきとして、日影の薄い家の中も何處やら春めいて見えた。

一日居間に引籠つて居た要吉も、何を想附いたのか、廻套を手持つた儘ふらりと茶の間へ

出て來た。小母さんと隅江とは仕事をする片手に何やらひそくと話合つて居たが、それを見るに急にぱたり止めて仕舞つた。要吉は可厭な心持がして、二人の顔を一人々々見廻したが、

「一寸出て来るよ。」

「今頃から」と、小母さんは顔を覺めて、「追附日が暮れるぢやありませんか。」

「うむ、直き歸るんだ。其邊の年の市の景氣でも見て來ようと思つて。」

「戸外は風が冷たいんですよ。」

要吉はずん／＼上り框の方へ出て行つた。隅江は遽で下駄を揃へた。

初めて外出したので、何と云ふこともなく人の顔が珍らしい。足の向くまゝに本郷三丁目の方へ遣つて來ると、軒に張つた注連飾や笹葉の乾いたのがさ／＼と風にざわつく。霞でも降つて來さうな空模様になつた。往來の人は益々忙しさに駈け出した。其中を一人外套を着た身丈の餘り高くない男がのそりと急ぎもしないで向うへ行く。背後附が何だか知人に似寄つて居るので、要吉は其跡を追掛けて見ようとしたが、間もなく夕暮の同じ様な黒い人込の中へ紛れて分らなく成つた。向うの人は要吉に認め

られたと云ふことも知らないで過ぎたらう。別逢はなければ成らぬ人と云ふでもない。それが如何いふものか、要吉は妙に寂しい心持に成つて、何時までも風の吹きまくる中に立つて居た。

十四

年が明けてから第三の金曜日に、要吉は猿樂町の教會の玄関を上つて行つた。午後一時から金葉會の新年に成つて最初の會合を開くと云ふのだ。玄関は明け放したまゝ、廊下には人影が見えぬ。突當りの階段を上つて行くと、校舎の二階へつゞくのだが、未だ早いかして誰も來て居なかつた。そこへ外套と帽子とを放下して置いて、又玄関まで下りて來た。小使を呼んで見たが返辭をせぬ。

廊下の左側の扉を開けるとそこは教會の會堂で明然として人氣もない。一段高く成つた説教壇の背後は白い壁が龕の様に圓形に凹んだだけで、何一つ裝飾の無いのが奥床しく見える。説教壇の下に一臺の古い洋琴が据ゑてある。嵌硝子の窓から射す青や赤や黄色の光線が象牙の鍵の上を流れる。要吉は何心なく其前に坐つた。指を出して一つ鍵を押して見た。又一

つ押して見た。續いて鍵の上に指を走らせて見た。音樂の心得などは全然無いのだから調子を成さう筈はないが、それでも自分の指頭から音が出て耳へ傳はると云ふのが面白い。彼方を押へて見たり此方を押へて見たり、何時迄も飽かず搔廻して居た。

偶と背後に人の氣配がした様なので、思はず手を止めて振返つた。何時の間に還入つて來たのか、そこに朋子が立つて居た。前に手を重ねて立つたまゝ、靜乎として動かない。頭を下げようとせぬ。唯じろりと要吉の顔を眼を注いだ。それも要吉の顔を見て居る様でもない。何も見て居らぬのかも知れぬ。

斯うして居れば、二人ながら何時迄經つても物を言ひさうもない。何かしら言出さなければ成らなく成つて、要吉は洋琴の前を離れて立ち上つた。

「貴方、これをお習ひに成つて？」

「ほんの鳴らすことだけ。」

「ぢや何か一つやつて御覽なさい。」

「いえ、駄目で御座います。」

此時ふと男の心に浮んだことがある。何か物の本で讀んだ様でもあるし、又今自分が想ひ着いた様でもある。何方にしてもそれを言ひ出さ

なければ、一寸外に云ふことが見附からぬので、思ひ切つて言つて仕舞つた。

「貴方は、如何考へておいでですか。」

「何で御座います」と、朋子はそつと洋琴の端へ手を掛けた。

「戀の話ですよ」と早口に言つて、女の顔を覗く。

「はア。」

「笛の歌口を強く吹き込む様に、一人の女を劇しく想ふのが眞の戀でせうか、それとも洋琴の鍵盤の上に指を走らす様に、女の唇から唇へ早く移つて行つて、其間に諸音を見出すのが眞の戀でせうか。」

「そんな事は」と、朋子は靜に見返して、「先生だけは既に極つて被坐しやるのだらうと思つて居ました。」

要吉は何とも言ふことが出来なかつた。朋子の態度は落着いて居るが、顔だけはやゝ赧らめて、黒みがかつた唇が愈々黒ずんで見えた。平常地味な服装をして、努めて若い血潮の溢れるのを隠さうとして居る。それが一寸した機會にも現はれるのだらう。何うもこれに似た顔を見た様な気がする。何處かで見たに違ひない。左様だ、故郷へ歸つた夜初めて見たお倉の顔だ。

勿論兩者の間には野生の儘なものと、幾代の修養を経たのとの差別はある。併し如何しても兩者の間に相通する何物かがある。何物とも指しては云はれない。けれども其何物かを、要吉は自分ひとり捉へ得たやうな心持がした。

此時廊下にはぱつと足音がして、二三人若い女の聲がしたかと思ふと、不意に扉を開けて中を覗いた者がある。二人は何か悪い處でも見られた様に身を開いた。覗いた女は一寸要吉に目禮したが、

「眞彌さん、此處に被坐して。先刻から随分捜してよ。」

朋子は戸口を振向いたが、何とも言はないで、徐に出て行つた。

要吉は洋琴に凭れかゝつたまゝ、其うしろ姿を見送つた。「新しい誘惑といふ辭が頭の中を舞踊を亂打するやうに聞えた。それを耳にながら矢張りそれに引かれて行く。今迄も左様であつた。此後も左様であらう——」

少時すると、又廊下に足音が聞えた。

「未だ會堂に被坐しやるかも知れないわ。」

「此度左様よ。」

二人の女の顔が同時に扉の背後から出たが、直に又引込めた。其後で神戶が現はれた。

「や、何うも遅く成つて失敬した。」

「いや」と、要吉も漸と氣が附いた様に言つて、側へ近づいた。

それから皆二階の教室へ集つた。十畳に足らぬ程の小さな間で、火鉢を中央に十脚許りの椅子を並べて、それへ面々が腰を掛けた。會員は段々減つて七名だけになつたさうである。朋子の外には、目白の女子大學から來るのが三人、此教會附屬の女學部から三人、其中に兩部三枝子といふのがある。一人は三枝子の友達で、今一人は年配も五十の餘、其前身は吉原で名の賣れた藝者でおちやらと云つたさうな。如何いふものか、こんな所へ紛れ込んで、殊勝らしく讚美歌を唄つたり、種々な會の世話を焼いたりして、それを娛しみにして居るらしい。

神戶は恰度大人が一人子供の中に交つて遊んで居るといふ態度で、衆皆に相手をした。平易な話をさも面白さうに、時々は警句を言ふことも忘れなかつた。要吉には左様は行かぬ。矢張り相手よりも自分に興味の有りさうな事しか言はれない。何でも此夏前には初め希臘の劇場の話をして、それから戯曲の脚色に移つたことと記憶えてゐる。大分骨を折つて、草稿迄作つて話したが、聞いてる方では此とも面白くなか

つたらしい。手持無沙汰にして居ると、神戸が来て何か話をせよと云つた。此前、臘の話をしたからと云ふので、サツフエーの斷片について語つた。リユーカヂヤの岩角から身を躍らして海に入つた此女詩人の死は、いろ／＼異説はあつても、矢張死んだことにしたい。死因は分らぬことにして置きたいと言つた。サツフオーから想ひついで、紀元五世紀の初めにアレキサンドリヤに住んだと云ふ巾幗の學者ハイペシヤが、基督教徒のために美しい生身の肉を貝殻で削り取られて虐殺されたといふ話をした。熱い國だけに埃及の女の死方は皆／＼しい。クレオパトラは毒蛇に身を噛ませて自殺を遂げた。それはシオークスピアに寫されたが、マアロウに書かれたダイドーといふ女王は熱帯の香料を積み上げて、其中に立つて焚け死んだ。こんな風で、終ひには事實だか戯曲の中の話だか分らなく成つて止めた。

十五

此日の會を閉ぢてから、同じ方角へ歸るのは、

朋子と神戸と要吉との三人だけであつた。三人は水道橋の袂まで来た。此處で朋子と要吉とは、神戸に別れて、同じ道筋を丸山と駒込へと歸る筈である。左様成ると、要吉は今迄最う一度朋子に近づく機會があつたらと思つて居ただけに、氣が咎めて、神戸と一緒に大久保へ行かうと言出した。

そこで二人は朋子と別れて、水道橋停車場の石段を登つて行つた。倚架に腰を下しながら電車を得つた。神戸は如何したのか、凝乎と考へ込んで物を言はぬ。それを見ると、要吉は何とか言はずには居られないやうな氣がして、

「おい君」と、神戸を呼びかけた。「随分無意味な會だね。」

「何が。」

「金葉會さ。」

「如何して」と、神戸は意味ありげに笑つた。「今度此會を始めたのは、實際あの二人だよ。あの二人が言出したのだ。三枝子と朋子との會だと思へば、それだけで可いぢやないか。僕は三枝子一人の會だと思つて居るよ。」

要吉は下を向いて苦笑ひしたまゝ、返辭をしなかつた。

電車が来たので、二人ながら飛び乗つた。隅

の方に乘客が一人しか無い。神戸は又語り續けた。

「去年の暮、左様だ、最終の授業の済んだ日だ。僕が矢張此電車を得つて居るとね、背後から息を切らしてはた／＼と跳けて來た者が有るんだね。毎時あのばつとした派手な服裝だらう。長い袂が翩翩としてね。何處へお出です」と訊くと、「え、一寸信濃町迄」と言ふのさ。それで信濃町で降りるのかと思ふと、又「新宿迄参ります」と、分らない位に口の中で言つて居た。到頭新宿迄一緒に來たんだよ。僕も其時は何とも言はれない氣持だつた。君は同情が無いから他人の事なぞ注意しても居まいが」と言ひさして、神戸は要吉の方を振向いた。

要吉は黙つて腰掛けたまゝ、聞いて居るのか居ないのか分らなかつた。

「あの濃い髪の毛と、あの唇の白味がかつた邪慳らしい口元とは、今でも眼に泛べようと思へば、直ぐ泛ぶね。」

斯んなことを言つて、神戸は要吉から何んな返辭を待設けて居るのだらう。

「左様、あんな顔がフェフと云ふのだらうね」と、要吉はわざと冷淡に言つた。心の中では

ダークな顔を想ひ泛べて居た。

神戸は何とも言はなかつた。

大久保へ着いてから線路を横切つて一町計り行くに神戸の住家である。細君は持病で寝て居ると云ふことであつた。神戸は三枚子から寄越したといふ極彩色の繪端書だの歌の草稿だのを見せて呉れた。それから金葉會の連中が書いたといふ小品が五つ六つ、其中に朋子の『末日』と云ふ題の短篇が一つあつた。

「これを見給へ。君よりは旨いかも知れぬぜ」と言つて、神戸はそれを要吉に渡した。

要吉は引留められる儘に、十二時過ぎまで話込んで居た。甲武線の電車は勿論ない。新宿まで出て市街電車に乗らうとしたが、これも車庫へ歸るもの許りで、今から出ようとするのは一臺もなかつた。已むを得ず人力車に乗つた。往來の絶えた路はもう凍てついて、本郷迄二里の間冷たい風を切つて戻つた。

宿へ着いたのは夜の二時に近かつた。此位晩く成ると夜明まで寢附かれぬのが癖だから、洋燈を明るくして、持つて歸つた『末日』の草稿を讀み始めた。自意識の強い女が意氣地の無い男を振棄てて信州へ隠れに行くといふ筋だ。如何にも性急らしい淡墨の走り書きで、所々に附字さへあつた。何と思つて朋子がこんな事を

書いたものであらう。要吉にはそれが氣に成つた。何うもそんな経験があつて書いた物とは思はれぬ。そんな経験も無いのに、空想の上で、男を愛すると云ふことよりも、先づ男を棄てることを描いて居る女かも知れない。其後要吉は『末日』について長い批評を書いた。一番終ひへ持つて行つて、「傳説に依ればサツォーは顔色のダークな女であつた」と書き添へた。翌朝草稿と一緒にそれを郵便で送らせた。

一日經つて返事が來た。こんなに早く返辭が來ようとは待設けて居なかつた。それが何だか好くない辻占の様に思はれて、封を切る時の要吉の手は震へた。あの意味が朋子に通じないで仕舞ふ筈はない。通じて居て通じない風をされたら、それこそ堪へられなからう。少時手紙を持つた儘思案して居たが、思ひ切つて讀み下した。すらくとした手紙の文體で當前の事を舒べた末に只一句「此夜此頃御言葉のはしく」まで繰返して、思ひ亂るゝことの繁く候」とあつた。

次の金曜日、要吉は、又例の教會へ行つた。霜融の道の悪い日であつた。毎月の通り毎月の教會で神戸にも會つた、其外の連中にも會つた。

朋子は別段變つた容子もなく、外の人に挨拶すると同じ様に要吉にも挨拶した。要吉の眼には朋子の態度が幾様にも取れた。何だか今迄自身が勝手に描いて居た夢に冷水を注がれた様に思はれた。朋子は三枚子の姿を見ると直ぐ其手を引張つて片隅の方へ連れて行つた。何やら面白さうに話しては二人できやつくと笑つて居た。要吉はそれにも眼を離さなかつた。此女の表情なり舉動なりの何處迄が心から出るの、何處からが技巧を弄するのかわらない。

斯んな風で會は面白くもなく閉ぢられた。要吉が神戸と一緒に玄關に出ようとすると、最う先へ歸つた筈の朋子が駈けて來て、背後から呼び留めた。

「あの外達で拜借した御本は獨逸譯の方が拜借出來ませうか。矢張何うも能く解りませんので――」

要吉は一寸顔を見したが、「え、宜う御座います。此次に持つて参りませう。」

「いえ、それでは餘り何ですか、私がお宅へ伺ひまして――」

「そりや構ひませんが」と、要吉は口籠つた。家へ來られては少し好くないことがある。「では、何日頃お伺ひして宜しう御座います」

う。」

「左様ですね、明日は土曜日だから、ちや明日の午後お待ち申して居ませう。宅は分つて居ますね。」

「存じて居ります。それでは何卒。」

朋子は一人毎もの道を歸つて行つた。後の二人は何處かで、夕飯を喫べようと云ふので、ぶらぶらと元段の方へ向つた。

要吉は途々歩きながら考へた。如何いふ積りで、朋子が宅へ来ようと云つたのか、合點が行かぬ。或は先達で往復した手紙が、自分ながらやゝ矩を越えたと氣が附いて、其防禦策として、萬一としたら閉江とでも惡意にならうと云ふ考へかも知れぬ。そんな處まで氣を過して見たが、何れにしても餘り來させたくない。

御田町の郵便局の前まで來た時、一寸と言つて、神戶を外に待たせて置いて、名刺の裏に二三行走り書きした。

「あれから神戶君と語をして居る間に、金葉會のことに就いて、貴方とも御相談申したい事が出来ましたから、お差支なくば、明日午前九時までに水道橋の甲武線電車停車場へ來て頂きたい。私は其處に待合せて、御一緒に大久保の神戶君

の宅へ行きませう。書物は其節持つて参ります。」

別に懷中から一通の手紙を取出した。眞鍋朋子殿と宛名を書いたまゝ、未だ封がしてない。中味を抜いて、件の名刺と取代へながら、郵便函へ投り込んで仕舞つた。

それから神戶と一緒に夕飯を喫べたが、此事については何も言はないで別れた。

十六

外套の衣袋に兩手を突込んだ儘、要吉は人待顔に水道橋停車場のプラットフォームを何通となく往反した。電車は仕切りなしに發着する。昇降の乗客は何れも急足に要吉の前を通り過ぎた。改札係の驛夫も初め二三回はお乘りに成るんぢやありませんかと注意したが、頭を振つて側を向いたので、其後は氣にも留めぬらしい。不圖砲兵工廠の練塀に沿うて其人らしい影が見えるので、凝手と眼を離さずに居ると、段々近づいて橋の袂へかゝる頃には、似寄も附かぬ女に成つて仕舞ふ。氣がついて袂時計を出して見ると、午前九時を六分過ぎて居る。或は來ないのぢやないかと思はれ出した。要吉はまた小石を敷いた上を大跨に歩き始めた。昨日の

手紙を今朝遅く見たとすれば、九時迄には間に合はぬ。間に合はなければ見合せたかも知れぬ。來なければそれ迄だ。何事もなく済んで仕舞ふだけである。要吉はどうか左様成れば可いと思つて見た。が、若し此處へ遣つて來たとすれば——云はゞ偽つて誘き寄せたのだ——明らかに左様告げる外はない。明らかに告げた上で如何成るかは分らぬ。唯、これ迄の通りで済まぬのは明白である。

再び改札口へ來て、停車場の時計を覗いて見ると、矢張九時六分過ぎだ。要吉の袂時計が少し進んで居たものと見える。そこで又倚架に腰を下して、先刻からこれで三度目で、脇に挟んだ「死の勝利」を抜いて讀み始めた。要吉が初めて此書を手にしたのは、今から三四年前未だ大學へ退入つた當座で、餘程身を入れて讀んだものと見えて、或所は赤インキで横線が隙間もなく引いてある。赤インキの處だけを飛び／＼に讀んで行くと、大抵は戀に悩む若者の熱病に罹つたやうな續言ばかりだ。要吉は急に書物の上 hands を伏せて、自分は本當にあの女に惚れてゐんだらうかと自分の心に糾して見た。糾して見たばかりで、それに答へようとは思はなかつた。こんな疑問を出しては其儘にして置くといふこ

とが、不安の間に何とも云はれない快感を與へるのである。

この時石段を登る足音がして、裳裾の衣擦と忙しい息遣ひとを聞いた様に覺えて——或け後から左様思つただけかも知れぬ。要吉は不圖眼を上げた。其刹那石段の上に現はれた女の上半身が燃着くやうに瞳子へ映つた。朋子が終に遣つて来た。要吉は思はず立上つて二三歩前へ出たが、その儘其處へ立竦んだ。朋子是要吉と眼を見合せたばかりで、直ぐに切符を求めに行つたが、やがて驛夫に剪刀を入れさせて、首に巻いた毛皮の襦巻を取りながら近寄つた。しとやかに一體して、

「大へん御待たせ申しました。御手紙が門の受信函へ遺入つてましたのを、今朝に成つて拜見しましたから。」

「いえ、私こそ火急な事を云つて上げて……それでも能く間に合ひましたね、手紙が。大抵無駄だらうと思つて居ました。」

何氣なく言ひはしたが、要吉は自分ながら語尾が顫へた様に思つた。

「今朝に限つて、受信函を私が開けに参つたのです。それに毎も十時前でなければ家を出ませんのを、今日は九時前に大急ぎで出たものです」

から、家内ぢやア何だか變に思つて居る様でした。」

要吉はそつと女の顔を見た。急いで来た所爲か少しく上氣して、手に持つた襦巻で口元を蔽ふ様にして居るが、別段意味があつて言つたのでは無いらしい。

他人の家を訪ねるので朋子も態々着變へて来たものと見え、毎時の人を人とも思はぬ様な色合でなく、くすんだ柄ではあるが、流行の色の御仕に撫肩をしながら見せた。羽織の袖に二筋三筋真綿の絲を引いたのも、何となく懐かしげである。要吉はそれに力を得たやうな氣がした。事實を告げるなら今だと思ふ。けれども口では矢張り外の事を言つた。

「『死の勝利』の獨逸譯を持つて來ました。矢張り書入れがしてあつて汚いんですが。」

朋子はたゞ黙つて頭を下げた。

そこへ電車が着く。要吉は、「ぢや、これに乗つて参りませうかと訊いた。朋子が頷いたので、倚架の上に捨てて置いた書物を取らうとすると、「あ、それは私が持つて参ります」と言つて、手を出した。

「いやと、後ろから押さやうにして電車へ乗込んだ。」

電車の中は幸ひ空いて居たので、二人並んで腰を掛けた。要吉は努めて輕い雑談を仕向けようとしたが、二三言詰りす間には自分から口を噤んで、眞直に正面を見詰めた。頭の中は車輪と一緒に成つて忙しく廻轉する。斯うして電車に乗込んで仕舞つたからは、手を束ねて事實の露顯するのを待つ外はない。自分ながら拙い地位に降つたものだ。恰も斯う成るべき筈でないものが、斯う成つたやうな氣がする。切めて此騒つく胸を相手が悟つて呉れたらと思ふ。

あらゆる物を見逃さぬ女の眼だ。恐らく知らぬ筈はあるまい。或は心の底を見抜いて居るのかも知れぬ。見抜いた上で出て來たのかも知れぬ——自分との密會に加はるつもりで。此間も電車は猶豫なく駛る。停車場へ着く度に、乗客がどやどやと乗込む。それと押合つて降りる者もある。要吉は唯いんな物音の交つた雑然たる騒音を耳にする計りで、まるで眼前の未來を知らないで居た。

やがて電車は大久保の停車場へ近づいた。要吉はだん／＼俯向いた。朋子の足袋の爪先を見詰めたまゝ、顔を向けて居た。電車が徐々と進行を留めると、車掌が大久保、大久保と呼んだ。乗客は大抵降りて行つた。要吉はそれで

も立たうとせぬ。朋子は少し腰を浮かして、小聲に、

「あの、此處ぢやありませんか」と注意した。

それに、返辭をしないで、要吉は欄々俯向いて仕舞つた。其内電車は發車する。要吉は女の足袋の爪先を凝乎と見詰めた儘で居たが、此時の朋子の顔の表情を明々と見るやうな氣がした。

朋子は微かに溜息を洩した様であるが、又靜に腰を下して身動きもしなく成つた。此僅少の時間に二人の頭の中では殆ど數へ切れない程の感想が稻妻の様に通過した。間もなく、電車は柏木を過ぎて、中野の終點に到加した。乗客は皆降りた。二人も其後から續いて降りた。此時要吉は初めて朋子の顔を眞面に見た。

「眞鍋さん！」

「はア」と、極めて落着いた返辭をした。此女の落着く時は心の中の極めて動亂してゐる時である。

「私は貴方を欺いたのです、欺いて此處まで連出したのです。それは折入つて聴いて頂きたい事が有つたからです、若し私の爲たことをお腹立なら、何卒介はず此處からお歸り下さい。御遠慮には及びません。——それとも私の行く

處まで一緒に来て下さいませんか。」

要吉は一息に斯う言つて女の顔を覗き込んだ。

「は、伺ひませうと、朋子は眼を伏せたまま答へた。

「え、来て下さる！」要吉は人目さへ無けりや其處へ跪きたいやうな氣がした。

「實は何處へ行かうといふ宛も何も無い。唯此處迄來ただけです、兎に角柵外へ出ませうか。」

朋子はまた點めいた。

二人は乗越した分の賃錢を拂つて停車場を出た。線路に沿うて少し行くと踏切がある。それを横切ると、一面に畑が開けて、青い草が五寸程伸びてゐる。夜寒りの雨で土は黒く蒸つて居るが、空氣は清く澄んで、小春日和の暖かさに、草木の液を吸上げる音も聞えさうである。要吉はうつとりとして、初戀をして居るやうな心持に成つた。女と同じ暖かい日光を浴びて、同じ澄んだ空氣を呼吸して、人目の少ない閑道を並んで歩く。袂が擦れたり、肩が當つたりする度に、要吉の胸は遠潮の寄せて來るやうな溫柔の情にゆらいた。

やがて路が兩方に岐れてゐる所迄來ると、要吉は急に首を傾けて、

「新井の樂師は確か此路を行つた様に覺えてるが、貴方は被在した事が有りませんか。」

「ずつと以前祖母と一緒に參つたことが有ります。最う六七年前にも成りますから判然記憶えては居ませんが、屹度此方で御座いましたでせう。」

「お祖母様がお在んなさるのですか。」

「え、始終眼が悪いものですから、顔様へお參詣すると云つて、私を連れて來たのです。」

要吉は頭を圓めた品の好いお婆様が、孫娘に勞られて、お師へ參る姿を眼に泛べて見た。それに自分の記憶に残つてゐる二十年前に死んだ母が、いつも坊主で居たから左様思つたので、東京には波多に頭を圓めた年寄の無いことを憶ひ出して、直に切髪にして見ようとしたが、如何しても眼に浮ばなかつた。

「屹度善いお年寄でせう。」

「家内のものは皆善い人です。唯私だけが不善い。」

要吉は振返つた。

「如何不善いのです。」

「如何でも不善いのです。」

二人は眼を見合せて笑つたが、要吉は急に堅く成つた。眞面目な家庭に生れて、暖かい両親

の手に育つた朋子は、自分とは如何しても近寄り難い他人の様に思はれたからである。

路傍の茶の木の沿うに曲ると、急に道幅が廣く成つて、雑木林の間から藥師堂の瓦屋根が見え出した。

掛茶屋の軒から一本の棒を差出して、種々な講中の名を黃色や紺に染抜いた小旗が幾つも吊してある。

そこを通り過ぎて、山門をくいると、鋪石の上に鳩が群を爲して居た。それが人の足音を聞いて、ぱつと立つ。中には屋根の上へ舞上るのもあつた。鰯口の綱にすがつて、御堂の奥を覗き込むと、藥師の尊體は油煙に煤びて能くも拜まれないが、列を爲した蠟燭の裸火が風にまたたくと、香の煙が蛇の様にうねつて空へ上る。御堂の上では一刷毛の白い雲がなだれて、蒼空の底へ吸ひ込まれるやうに消えた。

二人は踵を廻した。手水鉢の側に、眼の爛れた小さい婆さんが、鳩に遣る豆を小皿に載せて賣つて居る。要吉は其皿を取つて二三杯鋪石の上にはら撒いた。

朋子は足許へ鳩が寄つて来るので、動くことも成らず、其處に立竦みに成つた。滌上せる程の日光を眞面に浴びて、うつとりと鳩が豆を拾

ふさまを眺めて居る。眼が濡んで、唇の色が際立つて紅い。今にも其場へ崩れさうな。要吉は手を出して扶けようとして、僅に控へた。良あつて鳩が向うへ来るのを見て、朋子は徐に歩を移した。要吉も並んで歩く様にして、

「何處かお加減が悪いんですか。」
「いえ、そんな容子に見えますでせうかと、遠てて顔を見せた。

「別に左様といふ譯でもないが、何なら一寸向うの家で休んで行きませうか。」
「先生はお勞れに成りまして？」

要吉は返辭をしないで、先づ茶屋の軒をくぐつたが、そこは餘り往來から見え透くので、庭の枝折戸を開けさせて裏座敷の縁側に腰を掛けた。少時左様して居たが、日影の射さぬ處は矢張り寒い。で、文靴を脱いで障子の中へ這入つた。二人は火鉢を中にして黙つて相對した。何か言はなければ成らぬと思ふが、偕て言出す事が無い。いろ／＼送つた舉句、

「此處は好く書生の來る所でせう、栗飯を食ひに」と言つた。直ぐに下らないことを言つたと思つた。

朋子は唯いつと白い齒を見せた許りで、別に返辭をしなかつた。沈黙は再び續いた。斯う成

ると、要吉は神經が昂つて愈々意氣地がない。けれども其意氣地のない容子が、或種の女に對しては自分に有利であると云ふことを忘れなかつた。先刻から壁一重距てた隣の部屋で、何か爺さんと婆さんとが諍々と話し合つて居る。爺さんが少し耳が遠いと思えて、婆さんが時々大きな聲を出す。それが正障りに成つて甚く煩い。今に止むかゝと待つて居たが、低く成る

かと思ふと又高く成つて、何時迄も止みさうに無い。要吉は終に背々して來た。朋子はと見ると、眞直に坐つたまゝ、顔の色がやゝ蒼ざめて、唇をきつと結んで居る。

「私の爲たことを、矢張憤つていらつしやる？」
「え」と見返したが、又靜に眼を伏せて、「此處迄御一緒に何つたぢやありませんか。」

要吉は女の顔を見た。「最一度言つて下さい、最一度今の事を仰つて下さい。」
朋子は何時迄も答へようとせぬ。また談話が途切れさうに成つた。

「私は貴方を——」と、要吉は思ひ切つて言出した。「けれども今日の様な大膽な事をする前には、何れだけでも今日の大膽な事をする前

に、私は此上他人の前で知らん顔して貴方にお目に掛けることは出来なく成つた。許し

て下さい。私は教會で貴方のお目に懸つて、貴方の側に坐つて、貴方の聲を聞くたびに、他人に云はれない苦痛を嘗めて來た。私は今こんな事を貴方に打明けたとて、決して貴方から何物をも求めるのぢやない。況して貴方の前途を如何しようといふ考へなどは少しもない。何の希望もない。何の目的もない。それは全く絶望的な執着です。私は唯貴方に會つて、此事を白狀して、若し貴方の心の隅に私といふものを記憶してさへ貰つたら、それで十分です。私はそれで満足します。」

要吉は火鉢の角を堅く握つたまゝ低い聲で囁いた。朋子は他處目には何等の感動も受けない、殆ど化石したやうな容子で耳を傾けた。壁の向うでは、少時止んで居た爺さんと婆さんとの話聲が又一段高くなつた。それを聞くと、此方の空氣まで滑稽に氣觸れさうで、要吉は腹が立つて堪らないが、不圖自分の云つてる言葉もウエルテルめいた誇張に過ぎて、感情を伴はないのに氣が附いた。何だか他人の書下した臺帳で芝居を演つて居るやうで、自分の爲に物を言ふ様な氣がしない。今迄云つた言葉がすべて空に費されたかと思ふと懶々度を失ふまで急ぎ込んで來た。

「私には心の中で思つて居ることが逆も言へない。成程私のこゝろは汚れて居る。何日か會堂の洋琴の側で貴方からも言はれた通り、從來さまぐな女——さまぐな事をして來た。それを隠さうとは思はない。貴方にそれを隠して——と言ふ下から、丸山の家の内と外に残した二人の女が眼に泛んだ。二人を凝としながら、自分もそれに描まれて身動きも出来ぬ、あの惨目な境遇から遁れようと思へば、新しい誘惑の力にたよる外はない。今の自分には誘惑に従ふ外に何の力もない。唯悪いことを重ねて行く。切めて一つの悪いことを忘れるために他の悪いことに移つて行く——其外に如何する力もない。」それを隠して、貴方から何を求めよう。私の目下の心持は宛難破船だ。此後自分の身が如何成つて行くか、私にも解らぬ。唯、貴方に依つて力が與へられたい、新しく生きる道が求めたい。」

「私はそれ程迄に思つて頂く價值があるでせうか」と、朋子は要吉の言葉の切れるのを待つて言つた。其聲は妙に變つて居た。「價値の問題ぢやない」と、要吉は押被せる様と言つた。「私が貴方を選んだのだ、貴方は選ばれたのだ。左様思つて下さい。去年の夏から一週

に一回他所ながらお目に掛つた許りだ。私は貴方を知らない、貴方が私を御存じない通りに知らない。それが如何いふものか——」

二人はまた黙つて相對した。久らくして朋子の方から口を開いた。

「先生、私からも申し上げたいことが御座います。」

「何でも伺ひませう。」

朋子は黙つてまじ／＼と火鉢の灰を見詰めて居たが、

「何卒戶外へ出て下さいまし。此處ぢや如何もお話し申されません。」

「左様、少し其邊を歩きませうか。」

「ええ。」

直ぐに女中を呼んで、茶代を渡して其家を出た。藥師堂の裏の生垣に沿うて、田圃の中まで來ると一條の街道が白くつくづく。遠い丘の上を走る雜木林が煙つて、有りふれた水彩畫の畫題に似て居る。道の下を春の水がちよろ／＼と落ちる。日は暖かいが、風は冷たい。要吉は前へ立つて歩いたが、向うから一分隊りの兵卒が、軍曹に連れられて來るのを遣り過して、

「先刻私に言ふと仰有つたのは——何んな事で遠慮なく言つて下さい。私は何時でも用意し

て居る。」

「はア」と言つたが、其儘二三問聞いて来る。最う何も言はないのかと思つて居ると、

「私——」

要吉は息を詰めた。

「先生が私に仰有つて下さつたやうな、左様いふ心持を抱いたものなら、私の方が先なんぞ御座います。」

要吉は自分の耳を信じかねた。其處に立留つたまゝ、朋子の方を振向いて見る力もなかつた。朋子は徐に後を続ける。

「先生は記憶えて居て下さいますか。金葉何で先生の一番初めの講義の時間に、白聖が無くて困つて被坐した時、私が隣の教室から取つて来て、先生のお側へ参つたことを——外の者にさせないで私が持つて参りました。」

要吉は四方に開けて何處からも見通される。二人は黙つて徐に歩みを移した。やがて道が二筋に岐れる處迄来ると、兵隊が十人餘り道祖神の前に墓を敷いて休んで居る。其前を通り抜けた時に、要吉は初めて振返つた。

「能くそんな事まで記憶えて被坐しやいますね。」

「自分の爲た事だけは記憶えて居ます。」

また个話が途切れた。それから少許行つて、道が蔭へ這入つた時、向うから葬式の行列の来るのに出逢つた。古い錦襪の袈裟をかけた老僧の車について、五歳許りの女の兒がおとなしく位牌を掲げて乗つて行く。棺の上には白と紅との小袖が重ねて懸けてあつた。若い女が死んだのかも知れぬ。見送りの人も極めて少い、僅に近親と思はれる老人が三人随いて行く許りである。二人は道の片側に寄つて行列を通した。柩が過ぎ去つた時に、不圖眼を見合せて互に莞爾とした。

再び路の上に並んだ時、要吉は何と思つたかこんな事を訊いた。

「貴方は毎も地味な柄の物ばかり着て被坐しやるやうだが、如何したのです。縮柄のことなど能くは解らないが、何だか斯う林葉の様な色合ばかりぢや有りませんか。」

「私には彼様云ふ色が一ばん能く自分を表はしてる様に思はれますから。」

要吉には此返辭が何故か不快に思はれた。

で、其通りに、

「故意とらしくて、不自然ぢやありませんか。」

「えゝ不自然なんです、私が不自然なんですもの。」

つと寄添つて、甘える様に要吉を見上げた。其眼の色は姉を賣る女でなければ見られないもので有つた。それが出たかと思ふと捉へる間もなく消えた。

「ですけれども母が華美好きなものですから、二三年前迄は、そりや華美な物許り着せられて居ました。今では姉などと一緒に他所へ参りまして、峠度私の方が上に見られる位ですが、女子大學へ這入つた頃迄は、夏もお下げにして、まるで子供見た様でした。初めて學校へ上つた日は柔皆して——」

後は早口に言つて、襟巻で口元を抑へて笑つて居る。眼の隅が濡つて、今の容子が却て子供らしくかつた。要吉は横から顔を覗く様にながら、

「如何したのです。何だか解らない。」

「あんな小さな子が来たくと言つて囁きですもの。」

要吉も聲を出して笑つた。

「そんなに小さかつたんですか。」

「えゝ、小さかつたんです。」

「今でも何處か小さい。」

こんなたわいもない問答が、要吉には二人を親しくする様に思はれた。ついでに自分が初め

朋子の姓を神戸から三枝子と取違へて園部だと教へられ、久しく左様思つて居たと云ふことを話した。尤も、神戸が何故取違へたか、そこ迄は言はなかつた。朋子はそれを聞いても別に感ぜない様であつた。

それから幾度も村へ這入つたり畑へ出たり、幾度も道を尋ねて、それでも何行過ぎて随分廻り道をしたりして、目の稍下の頭柏木の停車場へ着いた。其處から又お茶の水行の電車に乗つた。二人の間に未だ外の人が窓に晒掛けられる位の間隔を置いて腰を掛けた。朋子は腰の上に「死の勝利」を載せて其上に長い鼠色の手袋を穿めた兩手を重ねたまゝ窓の外を眺めて居る。何時の間にか書物が朋子の手に渡つて居たと云ふことが、要吉には譯もなく嬉しかつた。やがて大久保へ電車が着くと、又どや／＼と人が這入つて来た。其中で要吉の前に腰をかけた、古ぼけた廻套を着た小柄な男がじろ／＼眺めて居たが、「小島さんぢや有りませんか、久らく」と元氣な聲を懸けた。

「あ、久らく。つい失禮して居りました。」

要吉はやゝ遮て挨拶した。この人は狭山と云つて、永く文壇に名を知られた小説家で、要吉も一面識があるのだ。

「先夜の清原寺侯爵の招待には、貴方もお出の様に聞きました、如何でした。兎に角新聞ぢや大變ですね。」

要吉は弱身を持つた身のつとめて他所事を言はうとした。そして衣囊から巻煙草を取り出した。

「いや如何もと言つたきり、狭山さんは一寸朋子の方を見て、氣の乗らない様子である。

要吉は懐中が無いので、取出した巻煙草を持扱つて居たが、思はずが／＼と噛み碎いた。少時して狭山さんは市ヶ谷で降りた。要吉は朋子をかへり見て、

「今の人は神戸君の慈意な、あの狭山楓葉です、解りましたか。」

「えゝ、大抵御容子で解りました」と笑つて居る。

二人は次の牛込停車場で又電車を捨てた。

十七

二人は見附を這入つた。九段の富士見軒へでも立寄つて、一緒に夕飯を喫べて歸ることにした。だら／＼坂を登りかけて、朋子は一寸足を留めた。

「私の小さい時通つた學校だから見て下さいま

し。」

要吉も振向くと、玄關に掛けた富士見小学校といふ横額が目にとまつた。

「随分遠方まで來たんですね。」

「え、元此先の番町に家が在つたものですから。」

こんな話から要吉は朋子の生ひ立ちを聞いた。一家の事情も知つた。左様しながら歩いてると、何時の間にか中坂の上へ出て仕舞つた。招魂社の鳥居前へ出る積りだつたので、

「來過ぎましたね。最少し後の曲角から右へ折れるんでしたらう。」

「えゝ。」

「えゝと云つて、知つてながら見て被坐したのか。左様、貴方は此邊は好く御存じの筈でしたね。」

「ですけれど、先生がずん／＼前へ被坐しやるから。」

要吉は其儘踵を回さうとしたが、朋子は立つたまゝ動かない。

「如何したのです。」

「私、最う此處で失禮したい。」

「何故、如何して急にそんなことを？」

二三押問答の末に、朋子は又後から隨いて來

た。馬場を横切つて目指す家へ着く。

二人は階下の二室へ導かれた。廊下越しに見上げると、二階の硝子窓は西日を受けて燃ゆる様に輝いてるが、此處は早くも隅々から薄ぼんやりして、部屋の中を物語めかして見せた。要吉は白い食卓被けを挟んで、斜めに女に向ひ合つて腰を下した。

「勞れたでせう。」

「いえ、其んなでも」と、朋子は言葉数を少く返辭した。

要吉は身體に程好い倦意を覺えて、何だか斯う西洋の小説の中で見るやうな、兩人が馬に乗つて羅馬の郊外でも遠足した歸路に、路傍の小ぢんまりした客舎へでも立寄つた様な氣がして成らぬ。それを口へ出して言はうか止さうかと思つてると、朋子が偶と、

「ハイヤシンスの香がしますでせう」と、四邊を見廻した。あ、其燵の上に。」

斯う言つたまゝ、額を押へて伏目に成つた。見ると二三歩離れた燵爐棚の上に小さな白い花を着けた鉢植がある。

「此香が不可い？　ぢや、給仕が來たら彼方へ持たせて遣りませう。」

「いえ可いんです、可いんです。慣れさへした

ら何でも有りません。」

給仕が食卓の上に皿を並べて去つた。

要吉は卓刀を執つて麵包を割いた時、つと眼を上げて、相手の顔を見詰めたが、貴方の前で食事するのは、これ限りに成りやしないでせうね。」

朋子は僅に頷いて見せたが、「先生、御酒召上るんでせう。何卒御遠慮なく。」

「そんな事を——神戸君からでもお聞きでしたか。」

「いえ、左様ぢや有りませんが、大抵上るだらうと思つて——」

「少許は飲らないことも有りません。」

「何卒御遠慮なく。」

「それぢや」と云ふので、給仕を呼んでウキスキイを命じた。

「貴方も」と言ふと、笑つてゐる。

「ぢやキユラソーでも。」

やがて大小の洋盃は運ばれて、白と赤との兩種の酒が允された。如何するかと思つて見て居ると、朋子は臆病らしく小さい盃を唇に觸れて、其儘下に置いた。

「一緒に飲みませうか」と言つて、共に盃を衝んだ。要吉は滿盃のウキスキイを一息に乾し

たが、朋子の盃には半分許り残つた。それを下に置いたまゝ、半巾を口に當てて、嚙せて苦しうに笑つた。

要吉は何か言はうとしたが、再び給仕を呼んで盃を允たさせた。朋子も黙つて盃を出した。要吉は思はず其顔を見た。

「貴方は平常飲るのか。」

「如何思召す。」

「さ。」

「止ませうか。」

「召上れ。」

要吉は幾度も酒盃を重ねた。朋子も三杯目には其方のをと言つた。言ふが儘、ウキスキイを注いで渡した。恰も酔ひの廻るのを娛しむやうに、凝手と酒盃を見詰めた女の瞳は重くして動かない。一體此女は身體が弱いのか、強いのか。病上りの女の様に倦怠さうでもあれば、並外れて健康さうにも見える。それが代るゝ左様成るので、何方とも着かぬ處が沒義道に人の心を悩ませる。

「ねく成りましたでせう」と、朋子は片手で頬を抑へて、ふいと顔を上げた。

要吉は返辭をしない。其眼は大膽に女の唇の上に注がれた。それを見ると、朋子は直ぐ眼

を反した。けれども自分が男の欲望を燃しつゝあると云ふ自覺は女の胸を擾さずには置かなかつた。

二人ながら物を言はない。要吉は段々高く心臓が波を打つて、今にも呼吸が塞がるやうな氣がした。此上黙つて居ようとするれば、直に慾望の満足を求める外はない。

「私は死にさうだ」と、口に出して言つた。一熱砂の上に百合の花が咲く。今週ダンスチオを拾ひ讀みしたらこんな處があつた。見る間に咲いて見る間に凋む。其蕊を開いて見ると、大抵の花には蟲が一足づつ強い香に惹かれて死んでると云ふのです。香に惹かれて死ぬ、好いちやありませんか——彼處邊は最うお讀みに成りましたか。」

「いゝえ、未だ」と答へたが、其實朋子は書物を借りて行つて、机の上に載せたまゝ、未だ一頁も開いて見ないのだ。

「それぢや、今度お讀みに成る時、氣に入つた所が、あつたらア نداアラインして置いて下さる。赤インキぢや不可い、貴方の指の爪で、裏

へ透るほど深く傷痕をつけて下さい。」
こんな事を要吉が云ふのは、印度古劇に見え
るシャクンタラ姫が、戀人に送る手紙を蓮の葉

に指の爪で刻み附けたといふ話を想ひ出したからで、今之れを懸つて朋子に強ひようとしたのだ。

朋子はそれを聞いたのか、聞かないのか、指先を冷たくして、知らん顔で林檎の皮を剥いて居る。やゝ俯向き加減に成つてゐる爲に、頤が二重にくゝれて、少し右へ寄つた所に自立たぬ程の黒子一つある。要吉は息を詰めて其横顔を眺めた。給仕は隅の臺の上で頻に皿を重ねたり積んだりして居たが、漸とそれを持つて去つた。要吉は息はず腰を浮かして朋子に近づかうとしめた。給仕が又戻つて來た。又舌打して腰を下した。

[illegible]

間もあられせず、潮聲に驚いて、さと兩方に分れた。要言は故と、高に給て、煙草を吸付けて置いて、さて靜に朋子と眼を見合せた。

このとき女の顔は凄じいほど充血して、雨氣を含んだ空へ大火のどかりと映つた様に見えた。聖吉の胸も波打つ様な動悸が止まない。

二人は向ひ合つたまゝ、少時口を利かなかつた。此次には何を言出して、何としたものか。要古は所在なきに巻煙草を取つて火を點けた。

「**朋子**は黙つてそれを見て
「**私**も——可いでせう。」

「えゝ煙草？」

要吉は巻煙草を載せた金皿を押して遣つた。

朋子は其中の一本を取つて、小さい煙の雲を吐出して居たが、一寸相手の顔を見て、

「私が煙草喫むことをお聞きなさいましたか。」

「左様、聞かないでもない。」

「教室の火鉢に吸殻があつたと云つて、外の生徒が騒ぐんですもの。最う大抵知れて仕舞ひま

した。」
斯かう言いつて、朋とも子こはひとり面おも白しろさうに口くちを抑おさ

へて笑つた。其聲は平常に戻つて居た。勿論
女が煙草を吸つたとて、それが要吉には珍らし

くもない。只此女は自分の前で故とそんな眞似
をして見せるのぢやないか、それが解らない。

「手て附つきがお上じやうず手てですね。お内うちでも喫あがるんですか。」

「いえ」と強く打消して、「内ぢやア最う決して

其そんな事ことはありません。諛うそぢやないんです。内うち

ぢや私本當に好い子に成つてゐるんですから、

母なんぞは私が其んな事をすると言つたつて信じますまい。」

稍あつて朋子は又言葉を續いだ。

「それだけの事はして有るんですもの、内ぢや私本當に能く働くんです。」

「働くとは？」

「厨房も手傳ひます、雑巾がけもします。」

「何だか本當の様ですね」と、要吉は片頬に微笑んだ。

「本當ですもの。父は砂糖を喰べませんから始終サツカリンを使ふんですが、父の喰べる物だけは太抵私が拵へる様にして居ます。」

要吉は返辭をしなかつた。そして何も知らない女の家庭を想像に描いて見ようとした。少時して偶と氣が附いて時計を出して見た。

「餘り遅く成つても——ぢや出掛けませうか。」

給仕を呼んだ。朋子は靜に立上つた。片方の手を延ばしながら、徐に手袋を穿め始めた。

平常よりは身丈が高く見える。するくんと玄關へ出て行く。

街へ出ると、夕暮の風が肌へ沁みる。二人は黙つて別々の事を考へながら並んで歩いた。互に傍に居る者のことを恐れて居る様である。やがて中坂を下りて、三崎町から水道橋へ抜け

ようとする頃には、家々の軒に燈火が點いて、往來の人の顔が朧に見え出した。朋子は少し背後へ下る様にして隨いて來たが、此時不意に聲を掛けた。

「先生！」

「え」と足留める。

「これから如何なさいます。」

「如何とは——お家の近くまで見送つて歸らうと思つて。其外には何も考へて居ない。」

「私、此儘ぢや否、此儘ぢや歸らない。」

要吉は女の顔を覗き込む様にして、相手の心を讀まうと焦躁つた。

「ぢや、如何しようと云ふのです。」

「如何かしたい、如何でも先生の爲さる様にしたい。」

「それぢや何處へでも行きませうと、思ひ切つて言つたが、唯頭の上に星の光る處へ、ね、それが可いでせう。」

朋子は黙つて頷いた。

僅の距離に幾度か電車を乗換へて、朋子と要吉とは上野公園の三橋へ着いた。此時日は名残なく暮れた。瓦斯と電氣との光が街頭の寒空に煌ついて、ひとり電車の鈴の音が忙しない。二人は明るい賑やかな街を後に、暗がりの木蔭を

指してずん／＼這入つて行つた。廣小路から眞直ぐに博物館の前へつゞく大路は、玉川砂利が薄白く光るのに、觀音堂の邊り蔽ひ被さるやうに老楓が茂つて、其下が底の知れない淵かとも怪しまれる。

要吉は竊と女の手を執つた。朋子も其儘にして居たが、指先は冷え切つて石の様に冷たい。それが一通りの冷たさでない。すべての血が脈管から退き去つた死人の掌の様に冷たい。

要吉は思はず足を停めて朋子の姿を眺めた。高い木の梢には風が渡つて、四邊の樹々は海の底の植物の様にゆらぐ。要吉は物の本で見る妖姬に倣はれて、不應なしに他界へ連れて行かれる様な氣が仕出した。斯うして女と手を繋いで歩いて居ながら些とも自分の身が仕合せだとは思はれない。

「何處まで行つても果しない森の奥へ這入つて行くやうな氣がするぢや有りませんか。何處か二度と戻つて來られない所へ行つて仕舞ひたいやうですね。」

斯う口に出して言つて見たが、其聲はやゝ顫へを帯びて居た。朋子は返辭をしないで、強く男の手を握り緊めながら、一步步々身體の重みを凭せ掛けた。或は要吉が左様思つただけかも知

な人の海は足許まで押寄せて、直ぐ目の下には汽笛の音だの、車輪の響だのが絶間なく騒々しい。

二人はかうして何時迄も無言のまゝ坐つて居た。時間が鋭い羽音を立てて飛び去るのが、耳に聞える様に思はれた。

「最う歸ります、もう歸らないと内の都合が悪う御座いますから。」

斯う言つて朋子は立上つた。其聲音には冷やかな失望の色が含まれた。要吉はぎくりとした。此方にも未だ言残したことがある、仕残したことがある。が、今夜は最う如何することも出来ない。今夜ばかりでないと思ひ返して、自分も立上つた。

途々も稀に言葉を交すばかりで、女の素振は何となく素気なかつた。要吉も物の度を過した時に感ずる一種の哀愁を感じた。多分女もそんな心持がするのであらうと思つて、僅に安んじた。

胸込妙義坂の上まで来た。二人が袂を分たうとした時、要吉は二三歩女の行く方へ一處に歩きながら、

「此次は何日會へるでせうね」と訊いた。「何日でも。」

「ぢや明日。」

「明日」と、朋子は稍躊躇して、「今夜こんなに暗く成りましたから、午前の中は出られないかも知れません。」

「それぢや午後でも。」

そこで、翌日の午後一時から二時迄の間に、矢張水道橋の停車場で落合ふことにした。

「私は今夜は眠られさうもない」と言ひかけて、要吉は偶と想ひ出した。「あの片方の手袋を私に下さい、切めて貴方の手に能く似た物でも持つて居たいから。」

朋子は直に渡さなかつた。

「え、如何して、不可い？」

一旦執られた手を引込めさうにしたが、急に脱いで要吉の掌に握らせた。

山の手の草深い町だから、早仕舞ひして、大戸を下して寢た家が多い。要吉は坂の上に立つたまゝ、朋子の姿が其邊の店屋から射す灯火の中へ出たり、又暗がりへ隠れたりするさまを見送つて居たが、其間に分らなく成つたので、漸と踵を回した。

夜風に吹かれながら、要吉は一人白山坂を降りて行つた。ひどく興奮しているが、頭腦は妙に明晰して来た。心の隅まで隈なく見ると其

に、軒燈の屋敷などが眼に着いて成らぬ。今朝家を出した時とは、女にしても勿論左様だらうが、自分の心持にも大變な相違を來した。一日の間に斯んな極端まで押詰めようとは流石に思ひも掛けなかつた。殆ど眼を閉いで溝壑を躍り越えて仕舞つた。其結果が如何成るか、そんな事は今考へた所で仕方がない——自分は熱く自分を知つて居る。到底一人の力で自分を救ひ得る男ではない。目下の變則な境遇から自分を救つて呉れるものは、矢張誘惑の力に有る。唯罪惡のみが自分を罪惡の淵から救つて呉れる。自分はそれ待つて居た。そして、今それを見出したのかも知れないが、此處に少し氣がかりなのは、今日の一日を振回つて見ると、何處か不合理な所がある。自然の成行でない。朋子の仕草にも、何だか強ひて矯飾した跡が見えないでもない。少くとも彼の女の遣つてゐることは皆自分で意識して遣つて居る様に見える。それでも構はない。無意識でして居られるよりも、意識した上で遣つて呉れる方が可い。それにしても彼の女の烈火の様な情熱は何處から來るのだらう。あの性急な燃え立つやうな情火を煽つたものは——が、初めてそれに觸れた者は矢張自分を置いて外にあるまい。左様思ふ

と、稍自ら媚びられぬでもない。要吉は幾度か途の上に立停つたり、又急に歩き出したたりなどした。

丸山の家へ戻つたのは未だ九時前であつた。小母さんは頭痛がすると云つて、宵から寝て仕舞つたさうだ。隅江はひとり寂しさに待つて居たが、火鉢の前の向ひ合つて坐つたまゝ、何處へ行つたとも訊かなければ、此方から言ひもしなかつた。要吉は洋袴の膝を胡坐かいて、注いで出された湯呑の茶を啜つて居たが、

「洋燈をもつと明るくせんか。」

別段饑食に言つた譯でもないが、始終氣がねしておどろ／＼して居る隅江は叱られた様にでも思つたらしい。遽て洋燈の心を思ひきり上げたが、要吉の顔を一目見て、直ぐ膝の上へ眼を落して仕舞つた。それから又油煙が氣に成ると見えて、心を少し引込めて見たが、直に又元の通りにした。要吉は無言でそれを見て居た。何と云ふことはなしに、一種の憐憫の心が浮ばずには居られなかつた。只憐れむ心である。少しも自分の非を悔む後悔の念は起らない。女を憐れむ心の下には、自分を憐れむ心が隠れて居る。要吉は涙が胸先へ突掛けて、つと聲に出さうなのを辛うじて喰ひ留めた。自分を憐れむ位涙

を誘はれ易いものはない。

「最う寢ようか。」

「はい、寢床はちゃんと取つて御座います。」

「左様か」と立上つて、茶の間を出て自分の部屋へ潜入つた。灯を點すのが面倒なので、暗がりの中で上衣を脱ぎかけたが、其儘机に凭掛つて静手と頰杖を突いてると、一日の光景が續々と眼に泛ぶ。

「併し不思議な女だ。まるで噴火山の様だ、灰も噴く、火も噴く。近寄ると硫黄臭い煙の中へ捲込まれさうだ。」

少時黙つて居たが、「いや、處女だ。如何しても處女に相違ない」と呟いた。

十八

水道橋停車場の石段を上つて行きながら要吉は自分にも氣が附くほど胸の動悸が早まつた。今でも矢張り初戀か何ぞして居る様に、女に逢ふ前には我にもあらず胸の謹くのを禁じ得ない。何時迄こんな心持を繰返すことであらう。

石段を上り詰めると、生憎プラットホームに朋子の姿は見えなかつた。最う一時半にも成るが、矢張家が出難いのかも知れない。要吉は直ぐ思ひ返して、倚架の上に腰を下した。昨日

と今日と同じ所と同じ様にして、相手の女の來るのを待つ。何だか自分ながら顔が眺められるやうな氣がした。仕方がないから、強ひて自分の今遣つてゐることに考へを向けまいとした。何でも好いから耳目に觸れる物に心を寄せて、自分が何の爲に此處へ來たかも忘れて仕舞はうとした。初めは昇降の乗客をまじり／＼見て居たが、やがてそれも飽きて、今度は欄干に凭れて、石垣の下を通る物資や通行人を眺め出した。支那の學生が通る、豆腐屋が喇叭を吹いて行く。三崎神社の拜殿では三四人の子守が手を繋ぎ合つて、「つぽんだ、つぽんだ、葎華の花が拵んだ」と、寒さにもめげず遊んで居る。要吉は凝手とそれを見守つた。斯うして成るだけ永く辛抱して此方に向いてゐると、何時の間にか朋子が遣つて來て、背後から聲を掛けるかも知れない。

朝から曇つて居た空は今にも崩れさうに成つて、風がいよ／＼冷たい。子守連は何時となく姿を隠した。顔の皺だらけな下駄の齒入が、破れた鼓を敲いて、寒さうに車を引いて行く。と見ると、其膨れた袖無しの背巾を掠めて、はらはらと霧が降り出した。要吉は初めて振回つた。土手の上の吹き曝しで、北風を眞面に受けるか

ら、寒さは彌が上に寒い。乗客も遽で歸路に着いて、プラットフォームの上には人影も途絶えた。

「若し愈々来ないとしたら」と、要吉はひとり考へた。左様考へても、初めは腹が立つよりは却て微笑まれた。女に待ちぼうけを喰はされて、霧まじりの寒風に吹かれながら立つてゐるのが、自分だとは如何しても思はれない。自分の作つた小説の中の人物の様な気がする。自分が作つた小説の主人公を自分が虐待してゐるやうな氣もする。左様思へば一種の抒情詩的な情緒が湧いて、何も彼も忘れて溶けて行く様な氣持に成つた。

要吉は柱に凭れかゝつたまゝ、砲兵工廠の高い煙突から代糖色した汚い煙がわく／＼と立上つて、横に一町許りなだれた末は、空を吹く強い風に吹散らされて消えて行く様を見詰めた。胸の內衣囊には、昨夜の手囊が燃える様に熱して居る。要吉は須臾もそれを意識せずには居なかつた。手囊のことを思へば、指先の細つた、手の甲の指の附根の所が子供の様に凹んだ小さい手が眼に浮かぶ。此處へ来たら、如何いふ態度で迎へて、何と言つて遣らうかと、そこまで細かに豫想して準備した、其計畫が悉く畫餅に歸し

たかと思ふと耐れない。興奮した欲望の充たされない所へ加へて、痛く自尊心を傷けられた様な氣もして、苦痛は一しほ鋭い。

秋時計を出して見ると、二時迄と約束した時間が七分許り過ぎて居る。昨日來たのも恰度これ位であつた。若し此處へ息を喘ませて駈けて來たら、何んな風で何と言つて來るだらう。難解を聞くのも娛しくないではない。要吉は再び好奇心と妄想とに捉はれた。

又半時間許り經つた。彼は些の間で降り止んだが、空の氣色はいよ／＼悪く成つて、日が暮れる様に四邊が薄暗い。要吉も最う來ないものと諦めた。改札係の驛夫までが、今更自分をじろじろ見る様な氣がするので、つとめて平氣な顔を装つた。この平氣な顔を装はねば成らぬと云ふことが、更に要吉の不快を増した。何んな事があつても、今日は償はねば置かぬと心に誓つた。

此儘、同じ改札口から未だ使用しない切符を驛夫に渡して出るのが、何だか可厭に思はれたので、恰度そこへ電車が來たのを幸ひに乗込んだ。初めは大久保の神戸でも訪ねようと思つたが、こんな時に友達に會つた所が先方も此方も面白くあるまい。そこで又氣が變つて、四谷

見附で降りた。市内電車に乗換へる積りで立つて居たが、停電と見えて何時迄待つても來ない。其邊まで行く間に來るだらうと、外濠についた廣い路を又水道橋の方へ向つて歩き出した。雪がちら／＼降る。

電車は未だ來ない。雪はだん／＼繁く降り出した。地面の上は降る後から消えて行くが、電車道の敷石の上は淡く靴の踵にくつつく程溜つた。

到頭水道橋まで來て仕舞つた。外套の肩から胸へかけて眞白に積つてゐる。要吉はそれを拂ひ落さうともしないで、暫く道の中央に立つて居たが、急に辻待の車夫を呼んで丸山迄歩いて行けと吩咐けた。

家へ着くと、小母さんが出迎へた。「毎日遅く成りますねえと、答める様な口調で言つた。それを聞き流して部屋へ這入ると、近掛ける様に、「お手紙が來て居ますよ。」

「うむ」と言つたまゝ、机の上を見ると、四角な状態に見覚えのある朋子の手蹟が眼に着く。故と落着いて上着の袖を脱ぎながら、「使が持つて來たか。」

背後から手傳つて脱がせて居た隅江は、「御當人が持つてらした様でした。私は出ませんでし

たが。」

「何でも大變遷で息を喘ませて被坐したやうですよ」と小母さんが側から口を出した。

悠然帶を緊めてから座に着いて、兩女の去るのを待つて、封を切つた。薄い書簡用紙五六枚にペン先の細字で認めた長い手紙である。二三行讀むと、直ぐ顔の色を變へて、思はず手紙を下に置いた。又取上げて一氣に讀み下した。

失禮などと申すことは、最早必要な文字の様に思はれますから、申しません。只私の眞の告白を何でも聞いて頂きます。

昨日の私の行爲のいよく出でていよいよ虚偽の多かつたことを御許し下さいませ。

是非なし、我顔に百千の鞭をも加へたまへ。私は云ふべきだけのことを云ひ、

受くべきだけのことを受くる外ありません。眞實の我姿を解せられずして愛せられる程苦しいものはない。眞を申せば、私の世界には戀も愛も同情も皆無意義の文字に過ぎない。残れるものは只理解と云ふことだけ、人と人との關係は理解といふことだけ。それで私は理解といふこ

とを心配して申すのです。先生から愛されようが憎まれようが、それは第二の問題で、理解が同情を生むかも未知数のです。理解の結果が如何成らうと、只理解それだけが唯一の幸福なのです。途中で何んな御心を害ふ様なことが有つても、長たらしき告白を是非忍んで讀んで頂きます。

われとわが眼を閉ぢ、耳を閉ぢ、色相界を遠ざからむとした自分は、それだけの點に於ても、死の淵へ一步近寄つたのです。斯う外界と絶縁した身ながらに、昨夏以來先生に對して何等かの接觸を感じて、何度となく怪しき思ひに襲はれたのは疑ひなき事實です。私は他人の服装、言語、素振などには無頓着な方なのに、先生のことは妙に些細のことまで氣が着く。友達と先生方のお噂をする時私は何時も無遠慮な出鱈目を申すのです。それを眞に受けて聞ける友達を見ても面白いのですから。併し先生のこととは一番好く承知して居ながら、如何しても口を切つて小島先生と云ふことが何だか出来なかつた。友達から云ひ掛けられ

た時も私は強ひて冷淡な風をして、何事も知らない様に「然うですかそんな事がありましたか」と申して居た。それも事實です、お許し下さい。『昨日金葉會で『死の勝利』の獨逸譯の方を拜借したいと申したのは、全く其場の諳でした。何の爲に諳をついたのか、私にも解りませぬ。獨逸語は四年前に家で厭々ながら『メーレン』の一冊位は讀まれたことも有りますが、英語でさへ解らぬ所が如何して獨逸語で解りませう。それを先生が明日の午後待つてからと仰つた時は、流石に申譯なく成りました。何故眞實が語れなかつたか——唯ひとり我胸の奥に自由に先生を思はせて頂きたかつたのです、決して口外したくなかつたから。私は逆もそんな事を口外する資格は無いのです。私は逆も熱い酒を盛る器ぢや無い。ダブル、キャラクタアに惱まされて居る身は戯れにも左様いふ事は口外し難いのです。假初に戀といふ字に唇を借すは、我理想とする戀の手前恥かし、自他を欺くものなれば。戀とは純一無雜なものでせう。自分を形造る

幾億萬の細胞の一つ／＼が、等しきヴァイブレーションに燃えた時に名附けべきものでせう。私は左様いふので無ければ満足しません。永遠などといふ思ふかなことは望まない迄も。只一轉瞬でも左様いふ純な境界に入りたい。成らうと努力しました。遂に駄目でした。

お許し下さい。昨日私は禁じられて居る酒を三杯まで一滴残さず頂きました。後で何様に成るか、全く無経験で豫期は出来なかつたのですが、私は寧ろ狂して見たかつたのです。上野へお伴したのもあの儘では自分に對して自分が少なからず不満足であつたからです。まつたく暗い所へずん／＼這入つて行つて、道に迷ひでもしたら好いと思ふ様な心持でした。けれど、駄目です。如何したつて私は駄目です。胸が一杯に成つて居ても、はつと全我を提げて投じることが出来ないので。波瀾は始終絶えないのです。底には絶えず同じ方向に靜に流れる潮流が有るのですから。昨日は自分はまだ駄目だといふコンクリューションに來て仕舞つたのです。それが他から境

遇に依つてせしめられたと云ふのならばですが、原因は内なる我に潜んで居るのですから、先天的なものでせう。若し罰あらば私一人に受くべきものと覺悟しました。

けれど切めて、切めて先生だけ——此處に私の云ふに云はれぬ苦しさが昨日あつたので、私が彼様な事を遣つたのも御許し下さいませうか。いよく／＼酔ふことの出来ない自分を確めて、切めて先生の御胸に凭つて、日頃の苦しい涙を思ひざま流して樂みたかつたのです。で、あんな事でもしてもつと／＼泣きたかつたのです。

泣かうとしても泣けませんでしたが、哭泣するなんて事は何んなに成つたら出来るでせう。随分切實に感ずる苦痛に對しても涙を次第々に禁じられて行くのであらうか。私は自分と自分に失敗して、もう歸りますと申上げました。切めて一秒でも長く御側に居て、堪へ難い思ひも味ひたいのを、遅く成ると家で叱られますから」と申しました。諒です。あれは眞實が語られなさに、左様云つたのです。家が何です。両親の前に頭を下

げて小言を聞くのが唯一の苦痛の様な身に成つて見たい位です。母は勿論不興な額附をして種々申しましたから、私は母が云ひ終らない間に、面白さうに種々話して聞かせたのです。新井の塾師へ久しぶりに行つたこと、天氣が好かつたの、空が何うだの、雜木林だの、麥畑だの、鳩だの、のべつに饒舌つたのです。そして眞實に面白かつたから、今度又行つて見ませうと勧めました。

私は自狀しますが、家では稀な孝子として、両親が唯一の誇りと成つて居るので、勿論それだけの事は盡しますから、非常に親切な子だと思つて居るのでせう。私の心を以て親に對し家に對しては何することも出来ませんから、切めて無意味な器械的な勞働を以て報いてる迄なのです。いやもつと／＼酷い事も考へて居るのですが、それは自分にも怖ろしいから竊に思つて居るだけで、言葉には出しません。こんな者の爲に、先生は何んな犠牲でも拂ふとまで云つて頂いた。只他人に犠牲を強ふことを何とも思はない方が、

自分で犠牲を拂ふことが出来ますでせうか。昨夜私から着上げた手袋は頂戴した御本の代りに——あの御本は如何も私が頂戴したやうな感じが頻にあつたものですから——着上げたので、其外に意味は無いものと思召せ。

私は中庸といふことは出来ないのですから、火かさらずば水、而して火は駄目だと確めたのです。水です、雪です、雪國へ突進します。先生は未だ火に付き給ふか、斯くて焚死する力がお有りですか。若し左様ならばそれ迄です。併し水に付き給はゞ、あゝ氷獄の中に白骨を負うて阿々大笑するを面白しとは思さぬか。

私は興味を持って居ます。自分で造り上げた氷獄の裡に、前も後も左も右も雪々、氷塊、氷雨の音絶えず、其中で遊ぶのです——堪へられるだけ堪へて凍死するのは面白い様です。己の如く天地を化したらうといふのは人間誰しもの欲求でせう。若し先生の世界が私と合致したならば、氷獄の水れる戸を開いて迎へます、喜んで何でも致します。

こんな取留めもない事を書連ねたら、他

人は皆笑ふでせう。併し先生だけは御笑ひ下さるにしろ御怒り下さるにしろ、愛想つかしを遊ばすにせよ、何處かに私の心を吐いてる所を御酌取下さると信じて申したのです。これに對しては屹度屹度御返辭を下さい、それ迄は御目に懸りませぬ。

二月二日

朋

小島先生 御許に二伸。申落しましたが、昨日中野の停車場へ降りて、先生が久久保と云つたのは諺です、貴方を偽つて——と仰有つた時は、私は——私には先生の御聲とは聞えなかつた。私の聲です。私が實は勇氣の無い爲に云はれずに居たことを、代つて云つて下さつたのです、甚く自分の胸に徹へて彼時は反抗する力が逆も無かつたのでした。

手紙をそこへ放下して置いたまゝ、要吉は震ふ手先で巻煙草に火を點けたが、一口吸ふと、指頭は灰の附くほど火鉢の中へ押込んで仕舞つた。其儘身動きもしなく成つた。

良あつて氣が附いた様に落散つた紙片を拾つ

て、重ねて摺みながら、「如何も文章が生硬で不可い、同じ事でも何故もつと女らしく書けないだらう。」

斯う呟くやうに言つて、折角揃んだ手紙を又擴げた。「理解せよ？ この上何を理解せよと云ふのだ。莫迦な單純に理解其者に伴ふ享樂なら、理解する方にあるんで、される方に有るんぢやない。理解されたいと云ふのは、それからして既に何物かを待設けて居るんだ。」

要吉は強ひて他所事を云つて見たが、胸に徹へたのは其んな物ぢやない。女は見事に昨日の一日を覆して、而もそれが一步でも退いたのぢやない。却て男に肉薄して居る。

因より要吉も終局のない戀を夢想しては居なかつた。何時か如何なる方法に於てか、終局を來すべきものと思つて居た。若し手際よく失戀することが出来たら、それでも構はない。唯こんな素早く女から先んじられようとは思はなかつた。尤も昨日の朋子が言葉にも仕打にも、何處か故とらしい所はあつた。短飾した跡はあつた。要吉も流石にそれと氣附かないでもなかつたが、まさか程迄に出抜かれようとは思はなかつた。斯うなれば戀愛も單に知力上の争ひに過ぎない。それが機才に於ても、明か

に男が打敗られたのだ。要吉は自分の置かれた地位が滑稽に見え出すと共に、心の底から屈辱を感じずには居られない。

其中から男は矢張女に心を惹かされた。女に對する情慾が加はるに伴れて、奇妙にも女に對する慾望が鋭く成つて、昨夜の生々しい記憶が去らぬ。何んな風に手を廻して、女の足が如何成つて居たか、細かな姿勢まで眼に泛ぶ。髪の毛の頬に觸れた跡がうづく様に思はれる。「私は逆も熱い酒を盛る器ぢや無い。」そんな事は言はせない。

彼時は煽られた情熱のために、底の汚い心が半ば神祕的な薄絹に掩はれて居た。それが今は赤裸々な情慾と成つて頭を擡げた。××××××××××××××××××××××××。これだけでは如何することも出来ない。要吉は復讐のためにも抑鬱のためにも、何んな手段を盡してでも、今一たび逸した鳥を捕へなければ置かぬと誓つた。

要吉は直に筆を執つて、必死に成つて長い手紙を書いた。「餘りに早く解剖を急ぎ給ふものかな」と書き始めて、成るべく先方の自尊心を傷ける様な痒々しい言葉を運んで、これを讀んだら逆も其儘静手としては居られぬ様に筆を廻

して書いた。眞夜半頃迄かゝつて漸く書き終つた時は、大分心も落着いて居た。初めから讀返して見ると、如何も面白くない。皮肉が皮肉に成つて居ない。到る所此方が負けて居ながら、それを無理に隠しているのが見え透いて、如何にも見苦しい。要吉は筆を投げて溜息を吐いた。

一體此女は何者だらう。此手紙の劈頭に女は欺いたといふ。而も男を弄ぶのでなく、自分で自分を弄んで見たのだと云ふ。只、何のため左様しなけりや成らぬか、其理由は一言も洩らさない。

いや、種々書いてはある、寧ろ誇大してまで並べてある。併し昨日此女を動かしたものは、矢張好奇心に過ぎない。始終新しい刺激に飢ゑて居たので、男の爲に何んな境地に持つて行かれるか、それが見たさに、此危険な遊戯に加はつたのだらう。生れ付き爲の強い、容易に人に屈しない女が好奇心に驅られたら、何事をも敢てしないものは有るまい。其上此女は自分の鋭敏な趣味性に従つて、實際は醜い平凡なものを理想化する特殊の手腕を持つて居る。昨夜なども詰り火花が烈いたために、氣紛れ

が情熱とも見えたのだ。此女の感情位性急に燃え上るものはない。宛然と燃えるやうだ。あの天上の炎の様に見える淨い情火の下には、汚い肉慾が隠れて居ないとは如何して云はれよう。

此處迄考へて来て、要吉は思はずぶるゝと身震ひした。女は昨夜何を求めて居たのだ。何故それに氣が附かなかつた。いや、氣が附いて居ても、何故其機會を掴むことが出来なかつた。女から身を振附ける様にされて、未だ如何することも出来なかつたではないか。

どうも彼の女は肉體が精神か、何方か平衡が取れて居ない。

斯んな風に容赦なく女の心に突込めば突込む程、要吉は自分の心に突込んで居た。女を解剖してと思つたが、矢張自分を解剖して居たのだ。二人の性格の間には、それだけ類似の點が見出される。初めの憤怒が消えると共に、だんだん女の仕打があつた儘でも好く成つた。女が何處迄も自分を齟齬ぶ氣なら、弄ばれても遣らう。其代り此方も弄ばずには居まい。つまり弄れたり、弄んだりして、其間に餉迄満足を求めるといふ、往々賭業婦の仲間に見るやうな下劣な心持に成つた。

それから筆を執つて、一字づつ紙に落す様に、長い間かゝつて、別に次の様な短い手紙を認めた。

「啓、留守中に御持参相成りし御狀一通り拜見致候。今更御合せいたす顔もなき次第に候。只、お互に自分が蒔きたる種子は自分で刈るだけの覺悟は致居候。兎に角今一度御目にかゝりて、申残したることも申上げた、明朝猿樂町へお出の節、私は教會前の珈琲店にて御待ち申し度候、以上。」

署名は故と省いたが、明朝の明を今と改めて、丁寧に封じて、上に宛名を書いた。少時左様した儘で居たが、氣に懸ると見えて、又最前の朋子の手紙を取上げた。同じ事でも、此女の云ふ事には力がある。一種の鬼氣があつて人を襲ふ様に思はれる。初め讀んだ時からして何やら氣に成つたが、そこともなく古い牢屋の隅から吹き上げる様な、陰森な氣が紙面を離れぬ。第一此女をコーケツトとして、單に近代文學に感染れた生物識として見ることは、如何もあの顔のあの表情と一致しない。要吉はそれを何とも思ひ別けかねたが、強ひて考へまいとして、息を強めて洋燈を吹き消した。

十九

土居の松林の下の生壇に添うて、要吉は先刻から立盡してゐる。空は藍色に暗れて、朝の日光が吸ひ附くやうに射すので、昨夜積つた雪がもう地面から溶け始めた。靴の底で踏んだ跡が濕々する。要吉は溝石の上に立つて見た、又二足三足歩き出した、氣を苛立つて居たが、少時すると向角から車夫が一人妙な腰附をして駆けて來た。

「行つて参りました。」

「如何だつたなと、努めて平氣な顔をした。『行く』と直ぐお嬢様が玄關へ出て被坐しやいまして、お手紙を差出しますと、其場で披いて讀んで、確に受取りましたと、それだけ傳へて呉れいと仰有つた。それだけで可いと云ふことで、へえ。」

車夫は小腰を屈めて、要吉の顔を見上げたまま、別に笑ひもしない。

確に受取つた。それだけでは分らないと思つたが、直ぐ思ひ返した。いや來るんだ、斯う成つては來ずに居られる女ぢやない。

「左様か。や、御苦勞だつた。それぢやアと、矢張猿樂町の教會まで行つて呉れ。」

「は」と、車夫は威勢よく斷出して、半町許り手前に乗捨てた人力車を引張りに行つた。

それから半時間餘り後には、要吉は教會の赤煉瓦の建物と相對した珈琲店の二階で、ひとり紅茶を吸つて居た。綿紗の窓掛を通して横様に朝日が射すと、ヨーロッパ式の模様を畫いた壁紙が明るく見える。白い卓布の上の籠に盛つた林檎に埃がかゝつてゐる。要吉は紅茶の茶碗の前に据ゑて、それから立つ湯氣を見詰めて居たが、又立上つて食卓の前を歩き出した。

「來たら先づ何と言はう、如何して迎へてやらう。——第一先方が何んな風をして造つて來るだらう。」

要吉は面を見合せた時の有様を豫想して、二三の會話を作つて見ようとしたが、全然何とも考へ得られなかつた。

餘程興奮してると見えて息が詰る様な氣がする。鏡の前へ立つて、一寸自分の顔を寫して見た。いかにも悄氣返つて、昨夜は終夜眠られなかつたといふ容子が、何處かに見えないく都合が悪い。眼は充血してゐるか、頭髮は亂れてゐるか、顔の色も女の注意を惹くほど蒼醒めて居なけりや成るまい。

こんな事は別段悪いこととも思はないで、

自然に要吉の心に泛ぶのだ。未だこれ位ではない、戀の目的を遂げる爲なら、何んな虚偽でも詐略でも敢て尻込みしようと思はない。唯それが荷じると、われを忘れて、自分が計畫んだ虚偽で自分を欺いて、自分が掛けて置いた係蹄に自分が掛つて、自分の刃で自分が傷く迄行かねば止まぬ。恰度自分が織る蜘蛛の絲に十重二十重と絡まれる、シャロットの妖姫が拙い果報に似たとも云へよう。それが又今日まで要吉がすべての戀に成功すると共に、又必ず失敗して來た所以でもあるのだ。

折柄教會の屋根の大神計が閑かに七時を打つた。要吉は今迄向つて居た鏡を離れて、窓際へ近寄つた。窓掛で身體を隠す様にして、斜めに街を見下した。積つた雪は大抵掃寄せられて、日の當る所は地面が乾きかけた。女學生が多勢右からも左からも集つて來る。それが教會の入口で出會つて、互に頭を下げては一緒に中へ這入つて行く。講師らしい西洋の婦人が遣つて來ると、其方へ駈けて行く年紀の若い女學生もあつた。要吉は眼を離さず見守つて居たが、其中に朋子が交つて居ない。追々出校する女學生の數も稀に成つて、やがて玄關に人の影も見えなく成つた。小使が一人ひよつこり出て

來て、振鈴を持つたまゝ後を見廻つて居たが、直ぐ又何處かへ行つて仕舞つた。

それから五分許り經つた。要吉は良失望の氣味で窓を離れようとした時、急に胸が波打ち出した。朋子がひとり後れて遣つて來た。因よりに要吉が此處に居ることは知つてるのであらうか、殆ど側目も振らず眞直に道を歩いて、教會の玄關を上つて行つた。間もなく又姿を現はして、石段の上に立つたまゝ外面を見廻して居る。要吉は急いで珈琲店の二階を降りて行つた。

一寸朋子の顔を見たまゝ、教會の前を通り抜けるやうとすると、女も後から隨いて來た。十間許り歩いて町の曲り角まで來ると、

「私一寸お友達に會つて、傳言を頼むことが有りますから——直ぐ戻つて参ります。」

「左様ですか、何卒。」

朋子は駈けて教會へ引回したが、言つた通り直ぐ戻つて來た。そして懷から端書を二三枚出して、角の郵便函へ入れた。要吉にはこの何でもない日常の動作が小僧らしく見えたが、何とも言はないで、前に立つて大跨に歩いて行つた。電車の鈴の咄しい大通りを離れて、九段中坂の急な傾斜にかゝると、要吉は歩調を緩めて、初めて口を開いた。

「眞鍋さん——」

「はア。」

「私達の何は——左様だ、ま、戀だと云はせて下さい。私達の戀は宛然イブセンの戯曲の様ですね。始まつたかと思へば既に終局に來て居た。」

要吉は口元に寂しさうな笑ひを泛べて、女を振向いた。朋子は俯向いたまゝ返辭をしなかつた。

二人は其儘何とも言はないで、九段の廣場を抜けて、招魂社の裏手へ廻つた。立停つて見渡したが、樹にも岩にも淡い雪が溜つて、四邊の物靜かな中に、噴水の音だけが絶えず動いて止まない。

「今日私の行く處迄來て下さいませんか。何うもこれぢや腰掛けの場所も無い。」

「は、何方へでも。」

「尤も郊外まで出る氣にも成りませんね。如何でせう、其邊の料理屋へでも行かうと思ひますが、貴方はそれで宜う御座んすか。」

「私なら何處でも構ひません。」

そこで二人は又招魂社の境内を出て、直ぐ其處の板塀を廻らした門構への家の軒をくぐつた。まだ朝の間で、男衆が入口の三和土の上を

洗つて居た位だから、外に客らしい者は居ない。

裏の小座敷へ通された。家が大きいのに天井など煤びて、持つて出る器具も古い。如何やら廢れた驛路の本陣へ着いたやうな感じがする。それが要吉の心を惹いた。

女中の去つた後は、二人ながら何とも言ひない。朋子は膝の上に手を重ねて端然として坐つて居る中にも、何處か不決定な容子が見える。男から口を切るのを待つて居るらしい。

「私は如何することも出来る人間ぢやない。弱い男です。それだけは貴方も安心して居て下さい」と、要吉は投出すやうに言つた。「一寸女の顔色を窺つたが、又言葉の綴いで、「一昨日新井の塾師で、彼の様なことを一旦口外した上は、私は貴方の前に全然抵抗力を失つたも同様です。貴方から総合何んな取扱ひを受けても、如何することも出来ない。」

「それは私の方が尙更な様ぢや御座いませんか。」

要吉は凝乎と女を見据ゑた。何の積りで斯んな事を言ふのか、矢張負嫌ひが手傳ふ竹筵返しに過ぎないのだらう。

「其代り貴方は相手の腕を縛つて如何すること

も出来ない様にしたぢやないか」と、要吉は自分で自分の手を掴んで、「私は最う貴方の身體に觸れることさへ出来ない。」

朋子は只黙つて居る。

「ね、理解せよとは——お手紙の中にあつた理解せよとは、何を指して云ふのです。貴方が私を——愛することが出来ないといふ、それですか。ね、愚癡らしいが、最う一週面の當り聞かせて下さい。」

「左様ぢや御座いません」と、女は伏目に成つたまゝ言つた。

「ぢや何です、何を理解するのです。」

「私はもう駄目な女で御座います。」と言ひ切つて、朋子は自分の膝の上に俯向いて仕舞つた。

要吉はまじり／＼女の髪の水色のリボンを眺めて居たが、「貴方は私に如何したら可いのです。既う斯う成りや、如何も斯うも無いと云ふことは解つて居る。それが解つて居ながら、私は如何することも出来ないぢや有りませんか。」

そつと女の肩へ手を掛けて、女の耳の側へ熱く成つた唇を寄せた。「貴方は斯うしてこれきりで、二人の關係が濟んで仕舞ふものと思つておいでですか。」

朋子は俯向いたまゝ頭振を掉つた。

要吉は燃みかけて「では先夜上野でのことは如何です。まさか冗談にして仕舞ふ積りぢや無いでせう。」

「私は一生懸命でした。」

何か言はうとすると、女は又言葉を續けて、「一生懸命でも、如何することも出来ませんでした。」

要吉は女の肩に掛けた手を離して溜息を吐いた。

「仕方がない。私は自ら招いたのだ。自ら招いてこんな地位に陥つたのだ。貴方に不足を云ふ筋もないが、貴方も餘り大膽に振舞つて下さつた。」

「先生も、それは——」

「だから何とも言はない。けれども私の態度に不眞面目な物が有つたにせよ——縱しんば貴方を欺かうとしたのにもせよ、私は全力を擧げて人を欺かうとしたのだ。決して餘裕が有つた譯ぢやない。全力を擧げて人を欺かうといふことは、もう欺くんぢやない。眞面目なものでせう。ね、察して下さい、私は其爲に貴方の前に自分といふものを全然曝け出したので、斯う成つては隠れるにも隠れやうがない。貴方はそれで好からうが、私は如何成ります。」

「私がこれだけ好いと思つて下さいまして？ 私だつて好くは有りません。」

要吉は兩手に堅く女の兩手をつつた。「ね、私を憐れんで下さい。愛することが出来なけりや、切めて憐れんでも下さい。それも出来なけりや。切めて——切めて私を欺いてなりと下さい。」

言ひさして聲を満せた。これ程までに自分を卑しくしたかと思ふと、自分の聲で自分が悲しく成つた。其儘又つゞけて行く。

「私は欺かれるだけで澤山な人間かも知れない。始終機會さへあれば自分で幻影をつくつて、自分を欺いてる。幻影の中に生れて、幻影の中で死んだら思ひ残すことは有るまい。貴方も他人を欺くと共に何故自分を欺かうとは爲さらんか。お互に生きようと思へば自ら欺く外に道はない。」

斯う言つて、女の顔を覗き込む様にしたが、朋子は矢張押黙つて居る。

要吉は竊と女の手を離して、「それぢや貴方は如何しても徹骨徹髓に醒めた女だと云ふのか。けれども醒めて見た所で、矢張新しい幻影の中へ起きるに過ぎない。縱し本當に底の冷たい水に觸れることが出来たとしても、そりやナツシ

ングだ。無に立脚する外はない。」

「無かも知れませぬ。無に堪へようと思ひます。」

女は短刀の如く言ひ切つた。要吉は少時其聲を睨めて居たが、昨宵此女の手紙を讀んだ時と同じやうな、底に一貫した、峻烈な、冷刻なものがあつて、人の心を襲ふのに氣が附いた。此女を動かさうとするのは容易なことぢやない。要吉は火箸で灰を搔均しながら、ちり／＼と考へ込んで仕舞つた。

何時迄經つても二人ながら物を言はぬ。二人ながら自分を不幸だと思つた。而も其不幸の原因ははつきり意識に上らない程漠然として、こん／＼からつて居るが、壓迫だけは鈍々と身に迫つた。

北向の窓へ風が吹き附けるたびに、腰硝子の障子ががた／＼と鳴つた。其音が如何にも慍々／＼に聞える。要吉は黙つて腕組して居たが、急にぶる／＼と身を震はせた。

「如何爲さしまして」と、朋子が氣遣はしうに訊いた。

「え」と、要吉は蒼醒めた顔を上げて、「如何もしません。」

「御酒でも召上りませんか。」

「左様です」と、氣の無い返辭をしたが、直ぐ又「飲ませて下さいませう。」

「え」と、朋子は落着いて笑つて見せた。

「其代り私酒盃ぢや飲まない。」

「ぢや、何で——」

要吉は黙つて火鉢の縁に掛けた女の兩手を見詰めた。手の甲に着いた筋が淡く透いて見える。

「何でも可いから、片一方の手を前へ出して御覽なさい。」

朋子は言ふが儘に左の手を出した。要吉はつと其手頸を握つて、指を揃へて掌に凹みを作らせた。衣袋から小さい罐を取り出して、其處へ強い酒を注ぐ。それ迄爲れるが儘にして居た朋子は、酒が掌に充つると同時に、ぱつと指を開いた。酒はだら／＼と火鉢の中へ滾れて、白い灰が立上つた。要吉は身を反して避けた。

「ぢや止ませう。」

朋子は片手を前へ出したまゝ、顔を背向けて笑つて居たが、急に笑ひ止んで、

「いえ、今度は眞實に」と、掌を要吉の前へ突附ける様にした。

「お終ひ迄大人しくして居なけりや——」

「え、此度。」

たが、其儘濡れた掌を男の口髭にねたくり附けた。要吉は手巾で其手を抑へたまゝ、何時迄も離さうとせぬ。餘り唇顔に見詰めて居られるので、女は花の咲く様に次第に唇をほころばせた。

「一體其齒は如何したのです。」

「え、是れ？」と直に手を引いて口元を隠した。目だたぬほど上反つた齒は一枚置きに義齒を入れて、物を言ふたびに煙々と人の眼を射る。「何時か元祿が流行りましたでせう。あの時に遣らせたのです。」

「莫迦な」と口では言つたが、何かしら始終思ひ切つたことをしなけりや一日も居られない女だから、そんな事も遣りかねないかも知れぬ。

女は男の稍惻れた顔をしたり顔に見て居たが、「いゝえ、左様ぢや御座いません。眞實は永く齒を病んで困つたものですか。」

「何故そんな、ちよいと小刻みに諷を吐くです。女は皆そんな所に興味を持つてゐるんですね。」

「ぢや、此れからは最う申しますまい」と、朋子は俯向いて素直に言つた。

少時して要吉から又口を開いた。「今のことね。」

「え、何なんです。」

「今爲たことでき。あれはね、矢張ダンスンチオの中で讀んだので、切めて貴方に左様でもして貰ひたかつたから——けれども、最うあれ以上に貴方から與へられようとは思はない。」

斯う言つて、相手の顔附を熟々見守つて居たが、「貴方は眞實に小説なぞ讀んだことはないのか。」

「え、小説といふものは全く手に取つたことが有りません。」

「何故。」

「だつて、私は一人で澤山ですもの、他の女の話などは如何だつて構はない。小説の中の男や女と一緒に成つて、泣いたり笑つたりすることは、私には逆も堪へられさうもない。」

要吉は黙つて聞いて居ながら、ひいと胸を打たれた。斯んなに自我の強い、他途自分自身の生きる道を歩まねば止まぬ女が、空想の中なら知らぬこと、呼吸をする現實の世界に有るだらうか。此女の小さい頭の中の秘密程解らぬものはない。

「私はね、左様は云ふものの、貴方も近頃流行る小説や戯曲など随分讀み散らしたんだらうと、實は今迄も疑つて居た。ね、眞實に讀まない？」

女は黙つて點頭した。

「ど、如何して斯んな女が出来たと、要吉は思ひ入つて、引寄せるやうに女の手を執つた。朋子は膝を崩して、男の胸に凭れ懸るかと思ふと、ばら／＼と煮える様な大粒な涙を男の膝に灑いだ。

「私——ひとりで斯んなに成つちやつた。」

凡て女は其最も深く自ら恃む所に媚びられた時に泣く。媚びられて泣かぬ女はない。要吉は膝の上に急激の如く落つる女の涙を見て、何とも云はれない満足を感じた。少くとも女は動かされた。自分の力の反應があつた。此涙さへ見れば、最早何物を失つても惜しくないと思つた。而して女を捕虜にし得たりと信じた時は、即て自分自ら捕虜に成つた時であることを忘れて居た。

要吉は女の泣く儘に泣かせて置いて、竊と後れ毛を撫上げたり撫下げたりして居たが、髪の毛の一筋々々が極めて細いの、如何したのやら切れた短い毛が多い。それが爲に、一體に頭髪が薄うさへ見える。久らく左様して居たが、

漫ろに言出した。

「私は最う如何しても貴方と離れることが出来なく成つた。此儘元二人が些とも知らなかつた

時の様に永い一生を暮して行く、そんな事は逆も出来ない。」又聲に力を入れて、「貴方はそれが出来ると思ふか。」

朋子は男の腕に顔を埋めたまゝ頭を掉つた。

「ね、貴方は何人をも愛することが出来ないんだ。それなら強ひても私を愛して下さい。私は待つて居る。貴方が愛して呉れることが出来る迄待つて居る。」

「何時迄待つて下さいまして、私は駄目で御座います。」

要吉は思はず女を引起して、擬乎と其顔を見詰めた。「何故、如何して？ 私はそれ程迄に貴方から——」

「先生ぢやないく。私が——私」と、泣膨した眼を伏せて、男の視線を避けるやうにしながら、「幾許強ひても——そんな要求が起らない身體ですもの。」

「なに？」

「私はぢやない。」

其儘下に突伏して仕舞つた。

要吉は眞蒼に成つた。ざらりと電光を頭の中へ送られた様な心持がした。少時は立上る力もない。聲を出さうとしても聲が出ない。——今に成つて初めて理解の外に人事關係がない

と云つた女の意味が解つた。冷酷な手紙の謎もよく解つた。突々と燃上つては、空をも焦すやうに見えながら、どこか油が無く燃える火の様に思はれた、彼の劇しい情熱の秘密も解つた。

此女の眼に映じた世界は何んなに空漠な、寥廓としたものであらう。氷と雪に閉ぢられた獄舎と云つただけでは、未だ云ひ盡されたとは思はれぬ。其身に成つて見なければ、他人は兎ふことも想像することも出来ない。要吉には理なくも亡父が想出された。尤も父の顔も、何んな人と云ふこともおぼえて居ない。が、父の眼に映つた世界は矢張こんなものでは無かつたらうか。目前に左様いふ世界が存在すると知りながら、自分は唯彼等の世界の閉ぢられた扉の前に立つて戦慄するに過ぎない。

二人とも物を言はなかつた。其間、長いやら短いやら解らぬやうな時間が経つた。やがて、「あゝ、左様だつたか」と、要吉は太い息を吐いて、「貴方の言ふことが爲すことの意味が初めて能く解つた。私は斯んな怖ろしい現實の事實に接しようとは思はなかつた。」

又、少時言葉を途切らした、が、「私は最う貴方を自分の方へ引込まうとは云はぬ。何處でも可

い、連れて行つて下さい。私は貴方の行く處へ行く。」

「来て下さい」と、堅く男の手腕を掴んで引寄せた。掴まれた痕が痛い。此世に恨恨を残して死んだ亡霊が、行逢ふ人を手當り任せに黄泉の國へ引摺り込むやうな氣もする。引寄せられて、要吉は固より幸福ではなかつた。けれども、斯う成つては最う仕方が無い、如何することも出来ない。

「私は貴方に云ふ事がある」と、良あつて要吉が言出した。「一昨日貴方は内の者は皆善い人で、自分だけが不善い——自分だけが一人違つて居ると言つたでせう。」

「えゝ、言ひました。」

「其時は唯それだけの軽い意味に聞いた。私は自分の暗い過去に思ひ合せて、明るい家庭に生れた貴方が羨ましいと云ふよりも、只自分とは遠いものの様に思はれた。が、左様ぢやなかつたのですね。二人は生れながら同じ様な運命を背負つて居たのですね。」

暗い波の上を夜駛る二般の船——互に相手を捜して居ながら、此儘知らずに過ぎたら、一生逢ふ期はなかつたかも知れない。——「私を何んな身だと思つて呉れる」と、要吉は

聲に力を入れて、「私も矢張呪はれた身だ。ね、聞いて呉れますか。」

女は點頭いた。

「私の身はデレマの上にある。私は——正しい父の子で無いか、それでなけりや生甲斐のない身か、何方かです。何方かは誰も知らない。又知りたくもない。いや、唯一人知つた者があるが、私は其女を憎まずには居られない。」

斯う言つて、相手の容子を眺めた。朋子は身動きもしない。

「それは私の母です。勿論私は」と、急に苛々して、「私は斯んな事を打明けた所で、それに依つて貴方の同情を買はうとするのではない。勿論憐愍を求めるでもない。人を愛すること、人に同情することも出来ない貴方だと知つたから云ふのだ。私の此秘密を知つてる者は固より私ひとりだ。今貴方に話せば、貴方と私と二人だけだ。」

女は聳と手に力を入れた。

「貴方は此秘密を口外することは出来まい。つまり私の此秘密を握らせて、貴方を私から離れることが出来ない様にしたのだ。解つたか。」

若し女がそれを「餘り残酷だ」と言つたら、「貴方の方がもそつと残酷だ」と言ふ積りで居た。

併し女は何とも言出さない。

二人はそれ限り物を言はないで、何時迄も離れなかつた。一時に塌られた感情が漸次に沈靜して行くにつれて、何とも名狀し難い心の空虚を感じた。同時にそれが終に充されないことも知つて居た。

何時の間に障子の日影が移つた。

「最う大分遅いでせうね。」

朋子はそれが聞えたと思つて眼を上げて四邊を見廻したが、ちらと前歯を見せたきりで、其儘倦怠さうに男の腕に凭れかゝつた。斯んな媚めかしい嬌態が若い素人の女に如何して出来るのか。要吉には何とも思ひ分らない。只、此上何時迄かうして居た所で、如何にも成らない、それだけは解つて居る。勿論女の側には居たいが、時として女から離れて、一人に成りたいこともある。

「最う立ちませうか。」

男は低い聲で囁いた。

「え」と、女も振回つた。

そこで女中を喚んで、身繕ひして立上つた。

二人の腰は手を着けられずに残つて居る。要吉は先に立つて襖を開けようとしたが、急に振回つて其處に立つて居る朋子の肩に手を掛けた。

「私は如何しても理解だけぢや満足が出来ない。私の望むのは貴方のデスバイズする——あれだ。それを知つて居て呉れるか、ね、それを。」

女は上眼に相手の顔を見返したまゝ點頭いて見せた。要吉はそつと其項に唇を附けた。

其儘、二人は梯子段を駈下りて街上へ出た。再び馬場を抜けて中坂の上に立つた。日は沈んで、脚下の町の屋根根から向ひの高臺へかけて、一面に薄白い霧が懸つて居る。其中からニコライの圓蓋が黒く浮出して見える。大都會は今が埋葬の間際かと思はれた。此寂かな夕暮の空に彼方此方工場の煙突から幾條となく煤煙が立つ。遠いものは段々灰色にかすれて、霧と見分け難いものあれば、近いものは盛に黒煙を上げる。中にも砲兵工廠の高い煙突から吐出したのは、三四町計り瑠璃色の空を横様に靡いて、凄じい勢ひで廻轉して行く。二人は立停つたまゝ眼を放つた。

「煙が好う御座いますね。私、煤煙の立つのを見てると、眞實に好い心持なんです。」

「貴方の心のこの動搖を象徴的に表はしてる様だから。」

朋子は返辭をしないで、凝手と煙の渦を眺め

てゐる。要吉は言葉をつづけた。

「貴方は何日か海岸で浪の音を聞くのが嫌ひだと言ひましたね。」

「え。」

「あの根煙は音の無い波浪だ。眼に見える形は如何にも猛烈で、強い力が籠つてゐるやうだが、それと共に飽迄静謐だ。何の音も立てない。そこが貴方の氣に入つたのでせう。」

朋子はなほ黙つて煙に見惚れて居る。殆ど男の側に居ると云ふことも忘れて、只黒い煙の渦巻が風に靡いて散つて行くさまに心を奪はれて居る。

要吉は炭手と女の様子を見守つて居たが、何時迄も押黙つて居られるのに堪へなく成つて、「何を考へてゐるのか」とやゝ語氣を荒くして訊いた。

「え。」と、朋子は例の遠い所から呼び戻された様な顔附をして、男を見返したが、「何にも考へては居ません。」

要吉もまたび押しして訊く氣はなかつた。成程自分は此女の祕密を知つた。が、同時に此女の世界から押出されたやうなものだ。何と思つても、最う仕様がなにかも知れない。——要吉は遠い空を眺めながら、一種の漠とした世界、苦

に打たれた。

中坂を下へ降りた所で、腕車を雇つて女を先へ歸らせた。朋子は男の言ふがまゝに一人腕車に乗せられて行つた。車夫が棍棒を上げるのを見て、要吉は直ぐ電車の線路傳ひに女と反對の方角へ歩き出した。何處へ行く宛もない。只何處かへ行かなければ成らぬやうな氣がする。日が暮れかゝつたので、行き逢ふ街上の人の足音が小忙しい。電車の鈴も一層喧しく鳴る様に思はれる。何と云ふこともなく胸膨れがして、唯訴へたい、懺悔したい、聲を上げて泣いて見たい。神壇の前に跪いてなどとは云はぬ。自分と同じ様な生きた人間の前でも、聞いて呉れる人さへあれば、あらゆる我執を離れて正直に懺悔し得られると思つた。幾年にも斯んな心持に成つたことはない。十字街頭の横るが如き往來の中に立停つて、地面を見詰めて居ると、後から来る人々が皆追越して行く。何時の間にか兩眼に一杯涙が溜つて居た。

見ると、向うに老人の乞食が一人、寒い風に吹かれながら尺八を吹いて行く。毎時見掛けを乞食で、毫碌巾を被つて、大きな包みを背負ひながら、牛の匏ぶ様に緩く歩む。尺八の音は枯れがれて殆ど聞取れない。要吉は側へ近寄

つた時、不圖背中の荷物の上に小さい板切を結び附けて、何か書いてあるのが眼に着いた。永の間風雨に曝されたものと見えて、字體が磨滅して能くは讀まれない。それでも暮れ残る光に透して見ると、此爺さんは小田原在の者だとある。一人の娘が家出して行方が知れない。娘戀しさに家を疊んで廻國に出た。娘の年紀は十九、名前と人相とを書いて、見附けた人があつたら此親身に知らせて呉れとある。そして、最後に明治二十三年何月何日相州足柄郡何村役場とある。二十三年に十九の娘なら、生きて居ても最う好い年頃だらう。それにしても、此盲目の爺さんは二十三年から今日迄雲を掴む様な尋ね物して、夏の日、冬の夜、街衢の風に曝されて來たのか。恐らくは生を終るまで捜しても再び廻り逢ふことはあるまい。要吉は人間の強い執着と弱い力とを面の當り見せられたやうな心持がした。知れないものを、何うせ知れないと知りながら、なほ追窮せずには居られないのは、獨り此爺さん語りではあるまい。要吉は前へ廻つて爺さんの顔を見ようとしたが、頭巾を眉深に被つて俯向いたまゝ、餘念もなく笛を吹いてゐるので、能く分らなかつた。其儘二三歩行き過ぎて、何心なく懷へ手を入れて紙入を

出さうとしたが、又思ひ直して止めた。
折柄電車が来たので、背後も振向かずに、それへ飛び乗った。

要吉はのそり家の閤を跨いだ。誰にも物を言はないで、自分の部屋へ這入った。飯も要らぬと云った。燈火も持つて来るなど云った。座敷の真中へ仰向けに倒れたまゝ、灰白い障子の紙を見詰めて居ると、日は暮れて行く。一度暮れては永劫明けないかと思はれるまで、徐に暮れて行く。

やがて素直に起上った。洋服を脱いで平常着に着代へた。何時の間にか手焙に火も入れて、西洋燈も燈火を細くして、部屋の片隅に置いてある。一寸それを見遣つたが、顔を灯に背けて机の前に坐つたまゝ、長い間身動きもしなかつた。眼は開いてるが何を見居るでもない。涙は内に向つて静に音もなく流れる。絶えず落ち、絶えず流れる。貴い上人の夢に似たとも云へるやうな、穏かな悲哀が身に迫る。斯んな心持に成つたのも、餘り肉感的な刺激に勞れた一時の反動に過ぎなからうとは、自分ながら危まれぬでもない。幾度か斯ういふ心持を経験して、能く其經過には熟して居た。如何すれば、

如何成ると云ふことも知つて居た。けれども此度計りは如何も行着く所へ行着いた様に思はれる。これが生涯の一轉機を劃して、今度こいよ、新しい生活に這入るのではなからうか。これ迄の事を思へば、自分ながら怪しい。只無理にも左様思ひたい。

尤もこれ迄も、一日として人並に喝れやかな日を送つたことはない。絶えず自分の背に負はされた暗い影に脅かされながら生きては來た。が、それも憎れては唯刺戟として意味があるに過ぎない。それだから要吉は自分の不幸を人一倍知つて居ると共に、又其不幸を忘れて居た。で、だん／＼其刺戟にも憎れて來ると、又新しい刺戟を求めて走つた。この常に刺戟を求めて止まぬ習性の底には、卑しい慾望の衝動が潜んで居ることは争はれない。それを墮落した文學に耽つて養つた想像力に依つて、修飾し複雑にし、又銳利にした。加之、それを辯護することさへおぼえた。

それが今日の打撃に會つたのだから堪らない。要吉には此打撃が如何しても偶然だとは思はれなかつた。豫め自分の爲に用意されて、如何しても其處へ行着く様に定められて居た様な氣がする。朋子が自分に對して言つたこと爲

たことが、斯程迄に深刻な意味で虚構であらうとは誰が知つて居ようぞ。あゝあの女の涙――あの涙には毒が有るやうだ、あの涙が自分の頬に痕跡を残さなかつたのは、正に不思議と云つても可い。

眼を瞑ると、朋子の面影があり／＼と泛ぶ。それが如何しても生きた顔が泛ばない。何遍描いて見ても、女は冷たく成つて、眼を閉ぢたまゝ、寢床の上に横はつて居る。朋子は今でも死んで居るのだらう。親類の人らしいのが大勢枕元に寄つて居る。皆打撃つた容子をして、一人も物を言ふ者はない。要吉は來るべき所でない所へ來た様な氣がして、一旦は引返さうとしたが、又立戻つて、凝乎と女の顔を見て居た。仰向けに寝かされた女の死顔は蠟の様に蒼白い。髪は綺麗に梳れて白い敷布の上に垂れてある。要吉は我を忘れて枕元へ近づいた。人々の騒いでる間に、倒れかゝる様にして死體の唇へ接吻した。見る／＼死毒が身體へ傳はつて手足が利かなくなつた。四邊がぼんやり暗く成つて行く。

二人は影と日向と別々の世界に住んで居る。死ななければ接近することは出来ない。朋子は自分の方へ來て呉れと言つた――來て呉れとは、

死んで呉れと云ふ外に意味はない。

夜は更けた。室内は火氣に蒸されて春の様である。何時の間にやら戸の外は風が出て、家をも木をも揺がすばかりに、どうつと吹き、又どうと吹く。どうつと吹く木枯の中を白衣を着た人夫に昇がれて、しづくと板が行く。音もなく、聲も立てず昇いで行く。これはわれ自らの板ではないか。眼を開くと火桶の炭は白う成つて、身體は水から上つた様に勞れて居る。此儘靜乎としてさへ居れば、如何しないでも死んで行けさうに思はれた。

床へ入る前に、要吉は巻紙を舒べて、今宵の幻影を細々と書いた。未だ女に送るとも送らぬとはつきり決めたのではない。

二十

戸の陳間の白む頃、要吉は蒲團の中で不圖眼を覺した。最う寢附かれない。昨日一日の出来事が潮の如く頭の中へ戻つて来る。あの様な著しい日の後にも、毎日の通り夜が明けるといふことが、何だか瞞されたやうな氣がして物足らない。

九時頃、漸と床を離れた。一人朝飯の膳に向つて、不味さうに煮詰つた味噌汁を啜つて居る

と、縁側へ隣家の女の兄が姉妹連れで遊びに來た。自家に乳香兒が有り出してから、近隣の子供が寄附くやうに成つた。初めの間は寄つてたかつて赤ん坊をあやして居たが、やがてそれにも飽きると、日の當る縁側へ陣取つて、二人で手毬をつき出した。

つツつきつたの掘井戸は、ほうそり細りと掘る時に、お仙のやぐらに火が着いて、火いちやあるまい紅である――

こんな唄につれて、障子に映つた影が搖れる。池の金魚が水面に泛んで、ゆらくと陽炎の立つやうな天氣であつた。

要吉は少時二人の影に見惚れて居たが、だんだん昨日の出来事が遠く見えて、まるで別世界で起つた事の様に思はれた。自分は矢張自分の想像に弄ばされて居たものでは有るまいか。日頃から環未な物の末に拘泥したり、又は誇大して見る癖が着いて、眞直に物の真相を掴むことが出来ない。そんな事も今更氣にかゝる。

が、それも押詰めて考へて見るだけの根氣はなかつた。只病上りの病人の様に、うつら／＼として一日の日を送つた。不圖、書棚から精神病學の備忘録を取出して、彼方此方翻つて見て

居たが、未だ所要の項目が見附からぬ間に、何を目前に搜して居たのやら忘れて仕舞つた。

日暮前に郵便脚夫の手から一封の書を受取つた。朋子から來たのである。要吉は上書を見ただけで、何となく悪い前兆を掴まれたやうな氣がした。何時か上野の森で逢つた夜の明くる日と云ひ、又昨日の今日と云ひ、何うも好い音信とは思へない。

で、指先を震はせながら、封を開いて讀んで行くと、先づ初めに、「昨日は誠に有難く、年來になき記念すべき一日にて候ひき」と書き出して、お蔭で人生の内容を殖したのだ、私は實世間に對しては直接の興味しか持たないのだ、何も人に強ひられて斯く成りしにも候はねば、今更人に強ひられて左右し得るものにも候はずだの、私は何でも彼でも嫌ひな様なれど、又何でも彼でも所好なれば、何時何處へ行くか其時々放任いたし置くべく候だのと、一尋にも餘る長さを並べて末に、「私只今此手紙を書きながら、少からぬ興味を覺え居候。多分自分のこと許り申居候故なるべしとも考へ申候」と書添へてある。

要吉は長い間黙つて其手紙を見詰めて居た。別段腹も立たなければ騒ぐ氣もない。只、何の

爲にあの女はこんな眞似をするので有らう。此上欺いたり欺かれたりしたとて、何の得る所が有らうぞ。此方で思ふ心の甲斐なきを知ると共に、女に對しても、索然たる感に打たれざるを得ない。

其夜更けて同じ人から又一通の手紙が来た。床の中で寝ながら讀み下すと、次の様な文句が簡単に認めてあつた。

是非御目にかゝりて申上げたきことの候
まゝ、何卒明日午後三時より四時迄の間、水道橋停留場まで御越し下された
く、御日にかゝりたる上、何處へとも御供申上ぐ可候。

「これも待設けて居た通りだ。」

要吉は手紙を枕元に抛り出しながら呟いた。何でも男は此方の思ふ通りに成るものだと思つてかゝつて居る様なのが忌々しい。が、一方には、女の意の儘に右したり左したりするのは、面白いと云ふ様な氣も動いた。女の掌の中に纏弄される——先方の奴隷に成つて、相手を支配する——そこに一種の粗廢した快感がないではない。

明るく日は朝から大學の圖書館へ行つた。薄暗い書庫へ這入つて、紙が朽ちて塵に成る臭ひ

を嗅ぎながら、彼方此方あさつて居たが、宛にした本が見當らぬ上に何うも心が落着かない。何となく池の縁へ立つて、老樹の幹の間から青黒い水を眺めて居た。午後の三時が打つと、遽て風呂敷包みを抱へながら急ぎ足に赤門を出た。壹岐殿坂を下りて、水道橋の方へ歩いて行く。土手の上を走る電車が眼に着いた時は、何と云ふこともなく可厭な心持がしたが、自分は矢張斯うするより外に仕方が無いんだと思ひ返して、又足を早めた。橋の手前から最うブラッ
トフォームの上に其人らしい影が見えた。近頃何處となく踏み慣れた石段を上つて行くと、朋子は五十餘りの被布を着た切髪の婦人と何やら話して居たが、急に談話を切上げたと思つて、其女は丁寧にお叩頭をして別れようとした。朋子も媚やかに禮を返した。要吉は少し離れて足を留めたまゝ、兩女の挨拶振を眺めて居たが、此時程朋子の様子が女らしく見えたことはない。昨夜受取つた手紙の主と同一だとは如何しても思はれない。そんな事を思つて居たので、朋子が側へ来て何か言つたのも能くは聞取れなかつた。やがて急に氣が附いた様に、

「餘程お待たせしましたか。」

「いえ」と言つて、朋子はしばらく言葉途切ら

したが、「私、今日被入して下さいますとは思つて居ませんでした。」

要吉は黙つて女の顔を見詰めた。

「眞個左様いふ心算ぢやなかつたんですから——濟みません。今日はどうしても日暮まで

に歸らないと不可せんから。」

朋子は他所見をしながら早口に斯う言つた。

それなら何の爲にこんな眞似をしたのか。單に男の心を試して見たのか。それとも一時の出来

心から、何日ぞや露の降る中に男を待ちぼう

けさせた、其同じ場所でも自分も來ぬ人待つて

見たかつた——それが餘り容易く自分の希望を

充されたので、勝手な女の常として、どこか物

足らないと云ふのか。要吉は頭の中でいんな

想像を忙しく働かせながら、女の顔を見返して居たが、

「ぢや、御一緒に歸りませう」と、無造作に言つた。

で、二人連立つて石段を降りた。要吉は一寸

女を振回つて、「毎日の道を歸るのも何だから、

お茶の水の方から廻つて歸らうぢや有りませんか。」

朋子は唯慎まじやかに體の上部を曲げた。

それが又女らしい素振に見えた。水道橋を渡ら

ないで、眞直に駿河臺へ上つて行くとして、
「先刻貴方と話して居た人は、御存じの方なんですか。」

「え」と解らなさに、男を見返したが、「彼方ですか。初めて彼處で會つただけなんで御座います。」

「左様」と言つたまゝ、又五六歩歩いた。やがて、「何日かのお手紙にダブル、キャラクタアといふ事がありましたね。如何いふことなんです、あれは？」

朋子は黙つて居た。

「只性格に極端な両面を有すると云ふことか、それとも心理学などでダブル、バアンナリテイと云ふ様な意味なんですか。二つの人格が代るゝ働いて、其間に連鎖がない？」

「何方だと思ひに成つて？」と、突込む。

「そんな事は私には解らない。後者なら丸で病理的な状態だし、又性格に二つの側がある」と云ふだけのことなら、大抵の人は皆二重にも三重にも持つてゐるんでせうね。」

二人は黙つて歩いた。すべて戀人は無言で居る時に最も了解し合ふと云ふではないか。それに、要吉は黙つて居る時ほど、相手の心を探らうとして、氣の焦躁することはない。勿論、二人

は戀人ではないので有らう。

お茶の水橋の袂へ出た時、朋子は急に想ひ附いたやうに、

「ね、ニコライへ行つて見ませうか」と言出した。

「え、行つて見ませう。」

又一町許り東へ行くと、黒い鐵の扉の閉つた石の門がある。脇の小門が開いて居たので、そこから這入つて、禮拜堂の前へ出た。二人は玄關を上つて行つた。圓天井の下は唯ひろゝとして、軽く踏む足音さへ胸を冷す許り高く四邊に反響した。高い窓から射す薄い光線に照されて眩い程塗立てた正面の金箔の色が落着いて見える。眞中にある聖晚餐の繪を初め、基督一代の奇蹟が隙間もなく畫かれて、其前に並べた黄金の大燭臺が人の眼を惹く。

男と女と、二人の不信者は人氣のない祭壇の前に並んで立つた。要吉は正面の聖晚餐の繪から眼を離して、徐々として朋子の方を振回つた。

朋子も漸次に男の方へ眸を向けたが、二人の眼を見合せた時、片頬に薄く笑つて見せた。要吉は女の顔に何とも云はれぬ不快な雲がかゝつて居ると思つた。カインの刻印だと、心の中で叫んだ。女の笑顔が消えて行くと共に、自分の

生命の精を奪ひ去られるやうな氣がした。

「最う出ませうか」と、良あつて朋子が言つた。

二人は踵を回さうとした。其時迄誰も居ないかと思つて居たが、祭壇の下に長い白髯を生やして、小倉の袴を着けた老人が眠つたやうに靜に腰掛けて居るのが眼に着く。堂の番人であらう。

禮拜堂の横手へ出て、二人はその石段を駈降りるやうにして下つた。門の扉の前に立つて、今一度下から禮拜堂と其他に立つた高い鐘樓とを見上げた。空の穏かな日であつた。

「石段が好い。寺でも社でも門前に石段のないのは好くない。」

「鎌倉は石段の多い所ですよ」と朋子が言つた。

「あゝ、貴方は鎌倉がお好でしたね。」

「夜分に好く八幡様の石段の上へ行きました。」

「夜分に？」

「鳩がよく啼いて居ました。」

又お茶の水へ出て、本郷三丁目から退分迄來た。二人は袂を分つた。

「明日金曜日ですね。」

「先生被入しやいますか。」

「参ります。貴方も。」

朋子は頷いた。

二三間來てから、要吉は何だか言ふべきことを言殘して來たやうな氣がした。別れた後では、毎もこんな氣がする。いつそ後戻りして、追掛けて見ようかとも思つたが、やつと押縁へて歩き出した。

二十一

「園部さんは？」と、若い女子大學生が不意に言出した。金葉會の連中が皆其席へ着いた時である。

「今日は被入しやらないのぢやなくつて？」と、一人が應じた。

「いゝえ、今し方階下へ來て被入したのよ。何だかお加減が悪さうだつたから、最うお歸りに成つたかも知れないのよ。」

「でも可訝しいわねえ、誰にも何とも言はないで歸つたのかしら」と、前のが鼻聲を出した。「見て來ませうか」と、最初の女學生が立上つた。

「私も」と、今一人が一緒に立上つた。二人はばたくと廊下を走つて、梯子段を駈降りる音がした。

神戸は一寸其後姿を見送つたが、何氣ない體で又談話を續けた。

「澤井さん、貴方へ差上げた切符は最う無くなりましてでせうね。無く成れば、幾許でも後をお願ひします。」

切符と云ふのは、此處の女學部が何うも不振な所から、其勢力を張るために、廣告がてら演奏會でも開かうと云ふので、既に其日取も極つて、生徒やら關係者やらに切符の擴め方が頼んであるのだ。

「私なんかあれだけでも持餘してるんですから、最う澤山で御座います。」

「左様ですか」と、神戸も苦笑した。「皆様が随分困つてらつしやる様ですよ。餘り多いんですもの。」

「眞鍮さん」と、神戸は眞向に朋子に話を向けた。「如何です、貴方にも願はれますまいか。」

「はア」と、朋子は今迄他所事を考へて居たと云ふやうな顔を上げた。如何したのか、左の眼に細帯をして居る。

そこへ又廊下に入聲がして、前の二人の後から、三枝子が靜に這入つて來た。

「何處へ行つてらして、三枝さんと澤井が懐かしさうに訊いた。」

「えゝ一寸」と言つたきり、三枝子は座に着いた。派手な何處となく險のある顔で、下町風な

扮装が目立つた。誠に袴など着けたことはない。それで居て眼鏡をかけてるが、別段苦にも成らなかつた。

湯沸しの湯がたぎり出した。朋子は自分であつて紅茶を入れながら、皆衆の前に一つづつ茶碗を配つた。乾葡萄酒の皿が眞中へ出された。

斯んな事をしてる間も、朋子は全力を盡して平靜に、飽迄も冷淡に見るやうに努めてるらしく思はれた。要吉は眼もて女の後を追ひながら、幾度か其眼を捕へようとした。が、何うも思ふ様に行かない。

階下では音樂の練習を始めたと思へて、洋琴の遠音が空氣に波狀を起して二階へ傳はつた。

やがて神戸は立上つて、何日になくクリスチナ、ロセッティの短い詩の話を二つ三つした。

若い女連は各自其席へ着いて、備忘録を出して、一語も漏すまいとそれを書取つた。

要吉も隅の方へ坐つて、片手に額を支へながら耳を傾けた。時々流む様にして朋子の方を見遣ると、海の波の様に變り易いムードを抑へて、表面は節制冷靜に構へて居る。神戸の細い力のある聲は斷續して聞えて居たが、漸次に其意味が解らない。手帳を出して、其端へ鉛筆で、「われは執拗に君を愛す」と書いた。「執拗に」とい

ふ言葉が、如何にも赤々しく響く。幾度も同じことを書いては黒く塗り消して居たが、其次へ持つて行つて、如何に愛するも其甲斐なきを知ればなり」と附加へた。それから次々に書き足して、斯んな手紙を書上げた。

「われは執拗に君を愛す。日夜に君を想ひ、君を慕ふ。いかに想はむも其甲斐なきを知らばなり。君より愛せらるゝ日の永劫來らざるべきを知らばなり。これもしも戀なりとすれば、世に斯かる望み絶えたる戀を爲せしものありや。知らぬ、知らぬ、爲す所を知らぬ、出づる所を知らぬ、逃るゝ所を知らぬ。戀それ自體が刑罰なり。切めてもわれは永く其刑に服してあるべし。永く君が冷酷なる瞳子の中に生くべし。されど唯一昨日の手紙の様なるは堪へじ。君の手に成らずとせば、冷酷を過ぎて寧ろ輕薄に流れたるものとも云はまし。昨日の君が態度の如きも、如何に解くべきか。冷酷は尙堪ふべし、輕薄に至りては終に堪ふべからず。われ獨り居て君を想ふ時、毎に君が早く死すべきを思はざる能はじ。君は若くして死ぬ人なり。君の如くにして何時迄か

生くべき、何時迄か生くべき。」

それを手帳から引裂いて、小さく燃んで衣袋へ入れた。間もなく神戸の話が濟んで、皆が又椅子を火鉢の周圍へ引寄せようとした時、要吉は何氣なく朋子の名を呼んだ。

「はア」と言つたまゝ、朋子は立停つた。

「あの先達てのお訊ねのダンマンチオですが」と、要吉も二三歩近附いた。

「ダンマンチオの？」

「彼處は大抵斯ういふ意味だらうと思ひます、今一寸書附けて置きましたから」と早口に言つて、紙片を朋子に手渡しした。

朋子はそれを受取つて、黙つて頭を下げた。

一寸神戸の方を振回ると、最う他の女生徒を相手に今度の演奏會の話をして居た。要吉もそれに加はつて、少時難談に耽つて居た。何と思つたのか、朋子は少し用事があつて急ぐから、一人先へ戻つて行つた。

神戸は座談に長じて居た。特に自分よりも劣つた者を相手にする時、其成功は目ざましかつた。常に好んで未來を語つたけれど、心は飽迄現在に繋がれて居た。それが爲に、餘り目前の効果を収めることに焦躁り過ぎる嫌ひはあつたが、其少し瘡せた顔に紅を潮して、自分の言

つてることに確信を持つてゐるやうな聲音で語り出すと、聴手は唯酒にでも酔はされるやうに見えた。殊にそれが若い女であらうものなら、神戸は一層眞面目に成つた。苟も婦人の前で冗談を言はないと云ふのが、日頃此男の格箴であつた。

此日西の窓に日影が薄く成る頃、やつと散會した。神戸は小使を呼んで、跡の掃除を爲せる様に吩咐けて置いて、要吉と一緒に教會を出た。水道橋まで來ると、

「何うだ、最少一緒に話さう」と言出した。

要吉は黙つて其意に従つた。人通りの少い飯田河岸から、外濠の土手に添うて番町の方へ歩いて行つた。途々神戸は毎も口癖の「時代が悪い」といふ話を仕出した。思ひの儘に自己を發揮することの出来ないのは、時代と自分の關係が悪いんだ。自分が悪いとは如何しても思はれない。又思ひたくない。斯んな話から、如何しても雑誌を經營して見たいと言出した。『批評』といふ題で、一つ純批評の雑誌が拵へて見たい、極手薄な物でも可いから、内容のしつかりした、何人もそれを讀まずには居られない、縦し讀まないにしても、見得にでもそれを購ると云ふやうな、それ位な力ある雑誌にしたい。

それから未だ其雑誌の経営について、誰に書かせるとか書かせないとか、實際そこに物を捉へたやうな委しい話をして居たが、急に調子を落して、「これも僕のことだから計畫だけで、何時實行するかも分らないが」と、自分で自分を嘲る様に言つた。

「左様さ」と、要吉も軽く受けて、「片手に戀をして片手に仕事をするのは些と難かしい。トルストイが言つたといふぢやないか、そんな邪魔なしに戀をするのは結婚するに限るんだと。」

「トルストイの言ひさうなことだ」と言つたが、神戸は何か想出したやうに、「ね、吉野貞子は此頃彼方で分焼したと云ふことだね。」

「へえ」と、振回つて、相手の顔を見ながら、「随分病身だつたと云ふぢやないか。」

「病身だつて子供を生まないと限らないさ、君は時々面白いことを言ふよ。だが、子供を生んだが爲に性來虚弱なのが健康に成ることもあるとは云ふね。それからだん／＼肥立つて、頑丈に成つて、存外長生きでもされたら——」
 「そして曾日自分が美しかつたと云ふことも忘れて仕舞ふ様に成つたら——少し悲慘だね。」
 斯う云つて、二人は顔を見合せた。話題に上つた貞子といふのは、昨年三人の名で歌集戀

衣を出した中の一人で、一番若く、美しく、そして一番先に人妻と成つた女であつた。

「で、何かい」と、要吉は相手の顔を見詰めたまま、「最一人の——彼人は矢張京都に居るのかい。」

「左様だらうよ」と言つたが、神戸は一寸空を見上げて、「似てるだらう、え、君は左様思はんか。」

「三枚子にかと、少し肯ひ難い顔をした。

「君は一々について見るから不可い、ばつと映つた顔全體の印象さ、あの派手な趣味も似てるぢやないか。」

「左様言へば、左様さね。」

神戸はなほ三枚子について、いろ／＼語つた。そして最後に、

「斯うして、君に話して此處に戀を再現すれば、直接相對して居る時と、殆ど同様の享樂が得られる所から見れば、吾々の戀は如何しても藝術的だね。何うも眞面目とは云はれない。」
 「眞個左様だ」と言つたが、要吉は未だ自分のことは一言も云つて居なかつた。人に語るには、儼然に手頼ない戀である。

「時に君達は電車で狭山に達つたさうだね。」
 要吉は一寸友達の顔を見返したが、「達つた

よ。」

「何でも君が煙草を逆さに嘸んだのを見て居たさうだよ。『煙草三本』と云ふ題で短篇を書かうかと言つて居んだ。」

「さ、書かれても仕方がないかも知れないね。」

「それから、これは何日か君の言つたことだね、舊い羈絆を絶つために新しい羈絆をつくると云ふことが、あの仲間で近頃流行つてゐるさうだよ。」

「僕はそんな事を言つた覚えはないさ。」
 かう言つて、要吉は苦笑ひに紛らした。

二十二

明くる日の朝、家の中は森として人氣もない様に見えた。

阿江は吾を立てぬ様に竊と障子を掛けて、隅の上に膝を突いたまゝ、及び腰に一封の郵便を枕元の新聞の上に置いた。其儘障子の枠に手を掛けて、少時良人の寝顔を見詰めて居たが、喚び起したら又冷やかな眼附で自分を見られよう、左様思ふと、聲さへ掛けられない。何だか張合の無きさうな容子をして、徐々と障子を閉めた。やがて勝手へでも立つて行つたものらしい。表の街には、午の豆腐屋の喇叭が彼方にも

此方にも聞えて居た。

「此女も黙つて苦しんで居る。俺のために、黙つて小さい胸を痛めて居る。」

要吉は遠ざかる足音を聞きながら、心の中で思つた。先刻から寝た振をして、隅江の素振を一々見て居たのだ。尤も苦痛と云つた所で、此女に相應した取留めもない不安に過ぎなからう、此女を慰めて、其苦痛を除いて逃る位のこととは譯もない。それだけの事すら自分は仕ないで居るんだ。が、愁じそんな事をするのが却て残酷の様に、可哀想の様に思はれる。それでは迄も打捨つて置いた。隅江に取つては、斯うして何とも言はないで忍んで居るといふことが、一番此女の身に適つたことかも知れない。それが最も好く此女の美しい所、尊い所を發揮するのだ。自分はそれを知らぬではない。恐らくは當人すら思ひ及ばぬ程に認めもし、同情もして居るんだ。それだけでも隅江は酬いられて餘りあるではないか。——要吉は斯んな論理の不當なことも、爲我一點張であることも気が附かぬではない。時には自分がエゴイズムの化身でも有る様に怖ろしく見えることもある。が、自分で自分が安心するために、何處迄も此理窟を押し通して見ずには居られない。

で、頭を上げて見ると、手紙は誰から來たといふことが直ぐ眼に着いた。

先生、私歸宅を急ぎそは〜と歸りしこと可訝しと御覽遊ばされてか。「これはあのダンヌンチオの」と、先生の御手より白き紙片の我手に落ちたる時、我胸の中にては「否々」と響き候。其大騒ぎの中より「何で御座います」と再び御問ねいたし候時、先生は又「ダンヌンチオの」と仰せられ候。「否々」と、私は眞四角に頭を下げて御禮いたし候。傍には神戸先生あり、岡部姉其他あり、興ありと思召しか。私一刻も早く家に歸りて開きて見たく成りし故にて候。人は冷酷とも不貞操とも不真面目とも云はゞ云へ、最早私には何等の痛痒なし。さはれ〜先生の御辱よりは決して二度とは云はせまじく候。冷酷は尙忍ぶべし、輕薄は堪ふ可からずとは、私より申出たき言葉に候。私の冷酷なるは事實に候。時には輕薄なる言葉さへ、仕打さへ、ひよい〜と出ることも能く承知の上にて候。されど先生だけは、よもそれを咎

め給はじ、寧ろ如何にして斯く成りしかを恨れみ下されても然るべしと存候。辯解を好む者には候はねど、先生に對してはお煩元くとも飽迄辯解もいたしたく候。自分以外の總ての物に興味を失ひし絶望の結果はインデフアレントには候はずや。何が何でも、如何でも好く成りしに候。若し私の仕打に輕薄とも見ゆるものあらば、此「如何でも好い」の形を變へたるものに過ぎず、今後は「又か」とでも御注意下されたく、私全く知らぬ間に意味もなく口を洩れ出づるものに候。曾ては普通以上に自信心強き者なりしも、今はそれさへ用ひ盡して既に死せる針金に候。情なき者に候。斯んな矛盾だらけの私、生涯自らより外なる人に解されむこと夢にも想ひかけざりしに、今宵の如く幸福に感じ候こと、生れて初めてに候。多分初めの終りなるべく、過去二十年の無意味なりし生涯も、今にして思へば生甲斐ありしよと涙も飛び出で申候。内に向つて流るる涙は寝ても覺めても絶えざりしに、近頃はそれが溶けて外に出づる様に成り

申候。

さは云へ、矛盾は自らも持餘しものに候。矛盾に矛盾を重ねては終に無に歸する外なく、こゝに至つて、私は却て心持よく感じ居り候。無なり、空虚なり、我なく、人なく、思ふものなく思はるものなし。全くピヨントの境なり、思惟の外なり、想像を絶せり。それが好く候、それが好く候、それを我れ握れりと思ふ思ひに生き申候、私の最後の興味は涅槃寂靜の日に繋がれ居り候。此日を味ひ樂まむがために候。日夜様々な事を考ふるも、最後はそこに歸し申候。私に取りては死が唯一の嚴肅なることに残り居候。されば却々容易き事にては死するを惜しと思ひ申候、眠るが如く死ぬるやうな不考は考へて見るだけでも可厭に候。却々未練多く、死に行く最後の最後の我まで、肉も骨も微塵に成りて飛散し盡す滅絶の最後まで、靜に見届けて味ひ盡したく候。今こそ斯くてあれ、來らむ其日を思へば、漫ろに怖ろしくも覺え候。——我れ寂滅の日は、やがて君が寂滅の日と覺悟したまふや。餘り氣が立てば、我なが

ら何を書くやら覺束なく候、かしく。

要吉は思はずむつくり起上つた。更紗模様の夜着の上に、長く巻紙を擡げたまゝ、何時迄も動かなかつた。胸の中は攻鼓を打つ様に動悸を打つ。因より女から受取りたいと思つたのは斯んな消息ではない。女はあらぬ方に逸し去つて、而も尙自分に纏らうとするやうな風情を見せて居る。それがむづ痒い、節足らない。只、此女の言ふことは、考へると同時にそれを實行しさうな氣勢が見える。思想が感情を伴つて居る。頭で考へるのでなく、心臓で考へる。尤も、此手紙にも故と誇大したやうな所がないでもない。それが幼稚にも淺薄にも見える。が、一たび此女の背後に潜む黒い影に想ひ及んで見ると——如何しても、此女は自分の手に自分の生命を握つて居る。何時でも自分は自分の主人で有ると云ふ自覺を持つて居るらしい。要吉は首を傾げながら、幾度か心の中で最後の一句を繰返して見た。「我れ寂滅の日は君が寂滅の日と覺悟したまふか。」やう／＼氣が附いて、平常着に着換へようとした時は、一重の寝巻を透して、身體が氷の様に冷たく成つて居た。

二十三

其後一週間許り經つた。要吉は圖書館からの歸途に大學の正門を出ようすると、街一杯に砂塵を捲上げて、一時は向側も見えない。少時立停つたまゝ、風が通り過ぎるのを待つて居たが、偶と朋子の後姿が眼に着いた。五六歩其方へ隨いて行く。向うでも側見もせず、ずんずん足早に歩いて行くので、一町許り行つて漸く追附いた。朋子は要吉を見ると、一寸足を留めたが、何とも言出さない。「大學の前から隨いて來たんです」と、おづ／＼相手の顔を見ながら言つた。「些とも存じませんでした。」女の舉動は何となく素氣ない。何時迄立つて居ても果しがないので、「其處まで一緒に参りませうと、男の方から言出した。」二人は足を緩めて、別に談話をするでもなく、追分の酒舗の前迄來た。要吉は此處でも別れる氣に成れなかつた。やがて人通りの少い町へ這入つた時、「今日は如何して此方の道をお歸りなんです」と、訊いた。

「自家から少し買物を頼まれましたからと、朋子は尋常な答をした。」「それに、お茶の水の學校へ通つた時分は、毎日此道を通つたんです。」

其頃は女生徒の中の運動家で、テニスの選手であつたさうな。女子大學の家政科へ移つてからは、三年の間、毎日試験管弄りばかりして暮した。それから寮舎の生活やら校長の晩など一人面白うに話をつづけた。要吉は俯向いたまゝ黙つて歩いて居たが、不意に、

「何故」と訊き返した。

「何です」と、女も顔を上げた。

「いえ、唯貴方がね、試験管いぢりが所好だと云ふこと——それが如何云ふ理由かと思つて。」

「えゝ、それは、あんなに結果が精確に出るものはないから——」

要吉は何か言はうとしたが、思ひ直して、其儘顔を背向けた。此女は何を試験管の中へ入れて驗した見たので有らう。此女自身である。此女自身の魂で有る。此女は自分の魂を試験管の中へ入れて、あからめもせず、凝手と其反應を見守つて居たに違ひない。其結果は如何なる！ 狂人だ。狂人でなくとも、狂人に成る外に行く道はない。

やがて二人はやつちや場の坂の上迄來た。要吉は黙つて團子坂の方へ歩を曲げると、朋子も何とも言はないで隨いて來た。漫ろに往き行いて、谷中の五重の塔の下から日暮里へ出ようとする薄暗い木下闇の坂へ送しかゝつた時、

「先達てのお手紙は確に頂きましたと、要吉は思ひ入つた様に言つた。少時黙つて歩いて居たが、又言葉をつづけて、「成程二人の行く道は並行して居るかも知れない。が、それだけに、何處まで行つても出會ふことは有るまい、ね。」

「えゝ、私ね」と、朋子はぐるりと振向いた。「お友達の中に疾うから先生に御紹介したいと思ふ方が一人有るんですよ。其方はそりやア面白い性格で、峠度先生のお相手が出来るに違ひない。」

何を——何を言ふのか。要吉は思はず相手の顔を見返した。此女は自分が何を求めて、此處へ來たと思つて居るのだらう。あの顔、あのはいやいだ聲——矢張自分を調戲つて、外らかに仕舞ふ了簡かも知れない。

が、此方の心持が眞面目だけに、何だか張合ひのない心持がした。二人は又墓地の下の線路を横切つて、日暮里の通りへ出た。と有る牛舎の横手から小徑を傳

つて行くと、田圃の中に、『兩忘庵』と横に自然木の組を掛けた小門が有る。朋子は其庵室に友達が居るから寄らうと言つたが、何となく氣が進まないから止めた。庵室の裏から三河島一帯へ掛けて、ところ／＼に腐つた稻の籾が残つて居る許りで、荒れ果てた田野の中には眼を遮るものもない。二人は畦道を傳つて歩いた。朋子は幾度か下駄を泥濘に吸ひ取られたり、折角來ても狭い溝のために半町の餘も後戻りを爲せられたりした。

空は薄曇つて、午後一時頃の弱い日影が射して居た。遠くから見れば、二人の影は夫婦のやうに纏れたり、離れたりした。海岸線の鐵道線路が向うに高く見えて白く塗つた柱の樑木が下つて居る。汽車が停車場へ着くのであらう。

二人は兎角して線路の上へ出た。少時其土手の上を傳つて歩いたが、路切のある所から小路を通つて、三河島の村中へ這入つた。中寝をしたやうな寂かな村である。少許行くと千住へ通ふ往還へ出た。それに隨いて又少許行くと、道が二文に岐れて、其角に石の地藏尊が立ててある。何心なくそれを左へ取つた。村を出離れると、淋れた田圃の中を一筋眞直な道がつゞく。道の盡くる所に一構への目に着く

やうな建物があつて、赤煉瓦の高い煙突が屋後の屋根から突出して居る。要吉はそれに眼を附けたまゝ、

「火葬場でしたね。」

二人は目じろきもせずそれを見詰めたまゝ、其方へ足を運んで行つた。此不吉な建物は此寒い日の此寒さうな四邊の風物と相應じて、何事かをしめし合せて居るやうに見えた。

其時背後から一挺黒塗の籠が来て、二人を追越して前へ出た。それに續いて二三臺の脚車が行つた。何れ身寄の者を焼きに持つて行くのであらう。人足は息杖をついて、足の續くだけせつせと歩んで行く。脚車は見る／＼遠ざかつた。急に地から湧いてでも出たやうに、ばらばらと乞食の群が飛んで来て、此一行を取巻いた。しばらくは腕車と一緒に成つて、何處までも隨いて走つたが、其間一人後れ二人後れして、一行は離なく白く塗つた火葬場の門をくぐつた。

二人はそれを見送りながら、別に何とも言はなかつた。偶と足許に物乞ひの聲がする。見ると水膨れた垢黒い顔をした男が、故と不具の足を露出しにして、額にまるく白い砂を着けながら、底の濁つた聲で人を喚ぶ。要吉は手早く紙

入を出して、銅貨を其前へ投げて遣つた。其儘行かうとすると、又一一人老婆の乞食が物憐れな聲で強談りながらくつついて来る。指が三本しか無い手を此方の身體に觸る迄差し出して、頻に頭を下げる。要吉は胸が悪く成るやうな思ひをしなげら、又紙人から小錢を遣らうとすると、急に前の老婆を押退けて、他の奴がそれを奪つて仕舞つた。老婆は喘み附くやうな聲を出して、前にも増して執拗くせがんで来た。要吉は仕方がないから又出して遣つた。それを見ると、前に簇つて居た乞食の群がわつと一緒に成つて押寄せて来た。

「彼方へ行きませう、先生、煩いから彼方へ参りませう。」

朋子は泣聲を出した。二人は逃げる様にして横道へ反れた。二三町行くと、其處迄は流石に乞食も隨いて来なかつた。只、此細い路を傳つて行つても何處へ出られるか分らない。一歩毎に東京から遠ざかることだけは確だけれど。要吉は最う一度振返つて、火葬場の煙突を眺め遣つた。人を焚く煙は未だ出て居ない。「ね、阿蘇の噴火口へ」と言ひかけて、側に立つて居る朋子を見た。

「え」と、女は乾いだ肩を開く。

「一彼處へ身を投げると、見る／＼人間の身體が灰に成つて降るといふことですね。つまり自然の儘に捨てて置けば、三年なり五年なり掛つて行はれる分解作用が、僅に五分間に行はれるといふんです。」

朋子は只黙つて居た。要吉もそれ限り何とも言はないで、又歩き出した。

路はうね／＼と曲り紆つて、又町の瓦屋根が向うに見え出した。成るべくそれへ近寄るまいとしても、一筋路は次第に其方へ近附いて、やがて千住大橋の袂へ出た。此街道は都會と田舎とが直接接觸する所だけに、眼に見ゆる物の色が皆日に褪せて、何處やら埃臭い。橋の上に立つて、どろ／＼した水の面を眺めて居ると、荷車の通る度にゆき／＼と橋板が揺れた。昔から幾人此橋の上に立つて、あの暗い水底を眺めたらう引汐と見えて、水は井を泛べたまゝ、ずん／＼下へ流れて行く。此水を五分間つゞいて眺めて居たら、蛇皮其中へ引込まれて飛込むに違ひない。要吉は何か言はうとして止めた。

二人は橋を渡つて、青物市の立つ北千住の町へ這入つた。午過ぎの市場ほど氣の抜けたものはない。只凸凹した街の上に、一匹の野良犬が尾を垂れて走つて行くのを見かけた。町の中程

から左へ折れると、荒川堤の上へ出た。土手から河面まで四町許り、一面に枯れた蘆が生えて居る。

二人は風に逆つて歩いた。自づと眼に水が溜る。

「土手の下へ降りませう」と、要吉は風上から背後を向いて言つた。朋子は手に持った包みを充つて、風を避ける様にしながら、何か言つたらしいが、言葉は唇から風の爲に吹きちぎられて能く聞えない。

要吉は堤の小段迄駆け下りて、黄色く枯れた草の中に腰を下した。朋子もついで降りて、其側に小さくしゃがんだ。土手がくの字に曲つてゐるので、此處だけは風も通らぬが、前はざわざわと囁く蘆の葉擦れの音が絶えない。それが皆生きてゐるやうに思はれる。自分達と同じ様に考へて居るんだと思はれる。只、何故とも知らず怖ろしい。

朋子は眞直に自分の前を見詰めて居た。鬢の毛が風にそよけて、唇の色が濡んで見える。要吉はじろくく女の横顔を見遣りながら、幾度も言出して見えては止めた。何だか女の方では男が傍に居ると云ふことも忘れて居るらしい。だん／＼男の心の中には、楯の火から薄

い煙が昇る様に嫉妬の念を生じて來た。あゝ息が塞るやうで堪らない。何れにしても、吹く風の中で逢ふに應はしい女だ。闇の中で逢ふに應はしい女だ。

「私は初め」と、やゝ有つて、要吉は重い口を開いた。「私は初め貴方の心を自分といふもので充たしたと思つた。それが私の此世で抱いた一番大きな望みだつた。併し最う其望みも捨てました。」

斯う言つて、口元に淋しい微笑を浮べながら女を見た。又言葉を續けて、

「ね、私は最う貴方に愛して貰はれようとは思はない。如何して貰はなくとも宜しい。唯、これから貴方のために私が如何變化して行くか、それだけを見て居て下さい。ね、見て居ると言つて下さい。」

要吉は泣聲に成つた。涙含んだ眼に、凝つと相手の返辭を待つて居た。女は少時もち／＼として居たが、やがて、

「今は見せて頂きます。」

「今は？ 何故左様ですと、要吉は詰めるやうにして、「今はでなく今はだけ取消して下さい。」

「それなら皆取消します。」
要吉は無言で女の顔を見詰めた。其儘長い草

の中へ仰向けに倒れて仕舞つた。

朋子はそれを見遣つたまゝ、別に介つて呉れようとは仕なかつた。こんな田舎廻りの役者めいた表情に依つて、女の心が動かされようとは男の方でも思つて居ないが、假令言葉や素振に虚偽はあるにしてもこの心持——この遺溺のな

い心持に虚偽はない。何故この心持が素直に眞實の儘人に傳へることが出来ないのだらう。若しそれが如何しても出来ないとなれば、左様云ふ約束を持つて生れて來たとすれば、眞個一人置いて行かれたやうな氣がして心の底から淋しく成らずには居られない。

要吉は起直つて、久らく俯向いたまゝ黙つて居たが、やがて投出す様に、「えゝ貴方が見て下されなければ、私が見せるまでです。」

又言葉を途切らした。やゝ有つて、「あれは如何いふ意味です。最後のお手紙の一番終ひの所にあつた、あの一句は？」

朋子は一寸相手の顔を見返したが、又其眼を反して、「あれは唯、あの時あんな事が書いて見たかつたのです。」

「ぢや、あれもあの時きりの話ですね。」
それには返辭をしなかつた。日頃言葉少なな女ではあるが、今日は殊に初めから口を噤んで

堅く自分を護らうとしての様に見えた。二人はそれから半時間餘りも草の中に坐つて居た。其の間風は止んだが、それ迄薄い暮を服つた様な空に太陽がぼんやり圓く見えて居たのも、何時の間にか隠れて見えない。

「歸りませうか」と、要吉が不意に立上つた。

「え」と女もつといて立つた。

未だ何か言ひ残したやうな、物足らないやうな心持もするが、斯うして二人一緒に居た所が如何にも成らない様に思はれて、途々談話もなく、さりとて急ぐでもなく、やがて北千住の停車場まで来た。此處で又小一時間待つて、漸と汽車へ乗込んだ時には、硝子窓に細かい雨滴が間を置いてばらばらと斜めにかゝるのが見えた。

上野の停車場を出ようとすると、雨が暮れかけて小雨がしとくと降つて居た。腕車を備つて、朋子を先へ乗らせたが、車夫が容赦なく幌を下げるので、やゝ俯向き加減にした女の顔が見えなく成つた時は、何だかそれが消えて行く様に思はれた。二臺の腕車は池の端迄来て、雨の中を右と左とに別れた。

其夜要吉は雨滴の音を聞きながら、ひとり机の前に坐つて居た。別れて見ると、何の事もな

く唯逢ひたい、顔が見たい、聲が聞きたい、息が停る程……。今日自分が朋子に對して言つたことと爲たことは、今に成つて見ると皆心にもない虚偽ばかりの様な氣がして、それが齒痒い。今度逢へば決してあんな事をして、あの様にしては別れまい。左様思へば、如何しても今一度逢ひたい。逢はずには置くまい。要吉は直に巻紙を舒べて、言ひ残したことがあるから、是非今一度逢へる様に都合して貰ひたい、時と場所とは選ばない。返辭さへ来れば、何時、何處へでも行く。それ迄は唯此儘斯うして坐つたまゝ、返辭の来るのを待つてると書いた。それを持つて夜深に雨傘を翳して、角の郵便局迄入れに行つた。

二十四

明くる朝雨は上つたが、空は未だ霽れない。

要吉は午前中自分の部屋に閉ぢ籠つて居た。午過ぎ別に行先を告げないで、ぶらりと戸外へ出た。毎月の水道橋へ出て、濠に添うて下つて、お茶の水から萬世橋を経て、橋をもう二つ許り見たが、急に戻りたく成つて、其處に居るよほど爺さんの禿ちやけた腕車に乗つて歸つて来た。家では隅江と小母さんと二人して着物の綿を入れて居た。小母さんは肩に眞綿をくつつけ

たまゝ出て来て、茶籠笥の上から手紙を取つて渡した。故と其前で封を切つて見ると、

「本日午後四時に上野公園西郷銅像の下まで御越し被下たく、かねて淺草の親戚へ参る筈に成り居り候へば、其前には如何しても時間の餘裕これなく、早々。」

今は最う四時を餘程過ぎて、五時に近い。要吉は手紙を持つたまゝ、慳貪な聲で、「これは何時頃着いたのか。」

小母さんは返辭をしなかつた。隅江は小母さんの顔を見て、一寸ためらつたが、

「貴方がお出掛けやアすとき直きでした。」

「左様か」と言つたまゝ、要吉は手紙を袂へ入れて、又下駄を穿いて出掛けようとした。隅江は只浮かぬ顔をして、それを見送つた。

要吉は上野の入口で腕車を降りて、石段を登つて行つた。日の短い頃ではあるし、空模様も怪しいので、竹の臺は掃いた跡の様に人影もな

い。それでも足の向いたまゝ銅像の下まで行かうとすると背後から呼ぶ者がある。振返ると、それが朋子だつた。何時になく絨絨のコートな

ぞ着て居たが、何を急いだのか息を喘ませて居る。

「用事で手間取つて、私も申上げた時間に間

に合ひませんでした」と、背後を振り返つて、「今丁度そこで先生をお見掛けしたのです。」

「左様でしたか」と、要吉も冷淡に言つたまゝ、黙つて考へて居たが、「それぢや、兎に角御家の方へ歩いて行きますせう。又遅く成つても可ませんから。」

二人は動物園の前へ出て、谷中の齋場から團子坂の方へ行く道を取つた。途中で朋子は着て居るコートを引張りながら、

「可笑しいでせう、袴を穿いて斯んな物を着てから。私一人です。」

「昨日お風邪でも引いたのぢや有りませんか。」要吉は在外眞面目に言つた。朋子は左様だとも左様でないとも言はなかつた。やがて團子坂の方へ曲る角迄来たが、それを曲らないで、

何とはなしに兩側に松の生えた閑かな道を五重の塔の下迄行つた。又踵を回さうとした時、

要吉は並んで引添うて居る女に顔を背向けたまま、

「私は昨日貴方に別れてから、如何しても堪へられなく成つた。堪へぬ、堪へぬ。私は、私一人で貴方を占領したい——貴方に愛されたい。貴方の眼に私と外の男との間に區別がない様なことは逆も堪へられない。」

斯う言つて息をつきながら相手の返辭を待つ

た。朋子はたゞ黙つて居る。二人は茶屋の裏まで来て、根岸へ抜ける路を左へ取つた。墓地の中は木の葉迄じめ／＼として薄暗い。頭の上では、大きな星が一つ雲の途切れに光つて居たが、間もなく消えた。二人はそれを見なかつた。

「ね、先生はこんな様な経験がお有んなさいませんか。」朋子が不意に言出した。

「えゝ？」と、要吉も振返つた。「何んな経験？」

「夜なぞ、一人で坐つて居ると、四邊がきらきらと海の底の様に輝く。左様すると、今迄混沌とした頭が一時に爽かに成つて、眼もはつきり」と物の裏迄見える様に成る。」

要吉はぎく／＼とした。此女は何を言ふぞ。癪の發作前には好くそんな症候を見るものだとドストイエフスキイの小説でもたび／＼讀んだ。が、此女にそんな病が——

「ね、そりやア」と、少時して訊いた。「自分で故と左様しようとして左様成るのか、それとも自然に成るのか。何方です。」

「何方でも」と、女は男の側へ寄添ふ様にし

て、「曾日はわざと左様したのが、今では自然に左様成る様に成つた。自然に左様成る時は、幾許それに抵抗しようとしても力が及ばない。」

「ふむ」と要吉は吐息をついた。成程、如何かす

ると、此女にはそんな病氣が有るかも知れない。が、併しそれが何だ。要吉に取つては、女の身の上よりも自分の身の上である。何時迄もそんな事を考へては居られない。

「愛させる／＼、何處迄も愛させる」とやがて自分と自分に言ふ様に言つた。「私は斯うして此様に貴方を思ふのが、貴方の前に新しく跪くやうな氣はしない。今迄奪はれて居たものを取返すやうな氣がする。」

又二三歩行つて、「だから私の戀は復讐だ。痛切な復讐だ。」

路は樹蔭へ這入つて、いよ／＼暗い。辻の常夜燈が赤く見え出した。要吉は前に立つて歩いたが、折々朋子の足音が聞えない様な氣がして、

振返つて見ると、直ぐ背後へ／＼ついて来て居る。其儘又向き直つて歩き出した。

「此戀を今初めてするとは思はぬ。一度有つたことを繰返すやうに思はれてならぬ。それが此世で有つたことぢや無いかも知れぬが、生前或因果の鏈で縛られた、其因果を今果して居る、それでなけりや、斯んな冷たい——どうせ無駄と分つて居ながら、斯んな苦しい戀を繼續しなけりやならぬ等はない。情ないやうだが、私は貴方に對して最う嫉妬心さへ持つ様に成つた。」

それが何だか正當な道理がある様に思ふことさへある。」

御院殿の坂を降りて、其下の路切を越した。

其處に毎も腹饑張りの茶店があるのが、今は店を仕舞つて縁臺も伏せてある。二人は立寄つて其端に腰を下した。雨の降つた後で、板が濕々する。

朋子は何時迄も物を言はない。

折柄上り列車が人の耳を聳するやうな、氣味の悪い音を立てて、二人の顔に生暖かい風を打附けながら通つた。

汽車の音が長く尾を引いて、森の彼方に消えた後は、一しきり魔物の通つた後のやうな沈黙がつづく。女は石の様に黙つて居る。要吉には、それが自分ならぬ外の者——恐らくは此世ならぬ他界の者と、他人には解らない會話をひそひそと續けて居られる様に思はれて、遺瀨がない。いよく此女に近寄る望みを捨てなければならぬかと思ふと、胸は大石で抑へられたやうで、只最う子供らしく其處へ泣き倒れたい。

「如何することも出来ない、私は如何することも出来ない。」

要吉は前へ廻つて兩手で女の肩を掴みながら、前後不覺に滅茶々々なことを言出した。貴

方は私を騙した、誑かきだと言つた。貴方は如何しても私を愛するんだ、愛せずには居られないとも言つた。朋子は肩を掴まれたまゝ、靜に男を見送した。仄暗い管閣の下に、顔の色は能くも分らぬが、男の顔にかゝる女の息は火の様に熱かつた。

「貴方は私を愛するんだ、愛せずには居られない。」

要吉は執拗く繰返した。

「私覺悟しましたと、朋子は初めて口を利いた。手早く包みの中から短い小刀を取り出して、要吉の手に握らせた。

「これで何處でも可いから、私の肉を裂いて——血を吸つて下さいまし。それより外に、兩人が一つに成る道はありません。」

要吉は小刀と一緒に女の手を支へたまゝ、少時物が言へなかつた。肉を裂いて血を吸る。趣味としても可厭な趣味だ。一種の偏狂かも知れない。

「そりや」となほ堅く女の手を持つたまゝ、「そりや私に、一緒に死ねと云ふことか。」

斯う言つて擬手と女の顔を見詰めて居たが、「私は死ねる。貴方と同じ因由でなら死に得る。併し貴方は貴方のために死に、私は私のために

死ぬ。そんな事は連も堪へられない、そんな事ぢや連も死ねない——ね、私と同じ因由で死んで呉れるか、同じ道に來て呉れるか。」

女は俯向いたまゝ、何時迄も返辭をせぬ。それを見ると、要吉は心の底から女に對して憎惡の念を持たずには居られなかつた。如何して、此女を如何して呉れよう。かうして眼を睜いたまゝ、自分が手を下した、女の死骸を前にして、突立つて居る自分の姿が明々と眼の前に浮ぶ。血に濡れた髪の毛が額にねばり着いて、顔はまだ生命が去つた許りで生けるが如く見えるが、唇だけは氣味悪く歪んで居る。

要吉は闇を透して女の顔を見定めようとした。ひやりと雨が落ちて來た。其儘後が續かぬから急に降り出しさうでもないが、夜氣は肌に通るほど冷たい。

要吉は黙つて立上つた。よろ／＼と宛もなしに歩き出した。朋子も次いで立上つた。二人は又谷中の墓地を抜けて、兩側に寺の多い坂を根津の方へ降りようとした。此時迄朋子は黙つて後から隨いて來たが、偶と途の上に立停つた。

「私、今夜家へは歸れない。」

「先達ての晩も、最少しで方々へ使を出す所でしたから、今夜は先生のお宅へ最う母が参つてゐるかも知れません。」

「阿母様か？」

「え、上れば母が参ります。」

要吉は黙つて二足三歩を移した。朋子も後から隨いて來た。

「私の様な者が——これ迄家に居たのが間違つてゐるんですから仕方が有りません。」

坂下の新道へ曲る角迄來た時、要吉は立停つて、凝乎と女の顔を見守つて居たが、

「何處かへ、何處かへ行つて仕舞はうか。」

朋子は頷いた。

何處へ行く。唯都の外へ出たい。懷中に持

合せもないが、錢の有るだけ汽車の切符を買つて、出来るだけ遠く東京を離れたら——汽車を

降りると、直ぐに流行せずには居られまい。

女が頷くのと見ると、要吉は自分にも考へる

違を與へないで、根津の新道を南へ急ぎ足に歩き出した。夜も深けたらしく、街の上にも灰白

う霧が降りて居るが、人通りは割合に多い。二

人は其中を縫うて漫ろに歩く。

四五町行くと、朋子は背後から呼び留めた。

「私、失張歸ります。」

要吉は濃い夢の中から見様に女を見詰めた。

「今夜は歸りますが、何うせ自宅には置きます

まいから、明日の朝王子に居る友達の所へ、一時遣つて貰つて、正當に家を出るやうに計ひます。」

「それぢや——え、左様成さる方が可いですう。」

二人はしばらく顔を見合せたまゝ、途の上に

立つて居た。其儘、又踵を回した。

王子に居る女の友達といふのは、朋子が唯一

人持つて居る友達で、「私のためには何んな事

でもして呉れる、此女なしには私は手も足も動かせない。で、若し其友達の計へ引取ること

が出来たら、直ぐ知らせるから逢つた上で何と

でも爲よう。手紙も其友達が取次いで呉れる。」

途々朋子はこんな話をした。要吉は黙つてそれ

を聞いて居た。

土居の松林の蔭まで來て、二人は急に立停つ

た。

「ぢや、最う歸りますか。」

朋子はうじくして居たが、「ね、先生、此儘お目に懸れなく成つても、又出られるやうに成つたら逢つて下さいますか。」

要吉はそれには返辭をしなかつた。「貴方が死ぬ時は——何日でも好い——屹度私と二人きりの所で死ぬと約束して下さい。私の胸の上で死ぬと。」

折柄人の近づく足音がした。朋子はさきと別れて其方へ近づいた。自宅から迎への人と見えて

何か二言三言言葉を交した上、連れ立つて歸つて行くらしい。要吉は「傷いた鹿」のやうに樹蔭へ遁れ去つた。

丸山の家へ戻つて、表の戸を開ける迄、要吉は

唯今日の續きはかり考へて、今日の一日を振回

つて見ようとはしなかつた。しばらく上り框に

突立つたまゝ待つて居た。茶の間に灯火が點いて居るまゝで、家中寂として物音もしない。や

がて障子を開けて、何氣なく隅江が出て來たが、

邊で、「お歸りなさいまし」と言つた。

障子の外から茶の門を覗くと、小母さんは眼

を上げて一寸要吉を見返したまゝ、黙つて火鉢

の前に座蒲團を直した。何かに氣に障つた事がある

と、物を言はないのが此女の癖だ。要吉は中へ這入らないで、其儘自分の部屋へ戻らうと

した。

「今頃迄何處に居たのです」と、背後から小母さんが浴せかけた。「他所からも訊ねに被入しや

るぢや有りませんか。のそ／＼女と一緒に彷徨き廻るなんて、身を持った者のする業ぢやない。」

要吉は一寸立停つたが、何とも言はないで自分の部屋へ戻つた。隅江は後から洋燈を持つて這入つて来て、机の上に置いた。それから留守中に來た往復端書と封書とを要吉の膝の前に差出した。再び立つて行きしなに、

「あの、毎もの瓶のお酒を持つて参りますか。」

「うむと、要吉は頷いた。近頃癖が悪く成つて、寝る前に強い酒を飲まないと容易に寢附かれなく成つた。」

隅江が去つた後で、手に取つて見ると、往復端書は書肆の招待狀で、封書は故郷の母親からの手紙であつた。其方は封を切らないで下に置いた。故郷から手紙が来る毎に、一晩位は封を切らないで延ばして置くのが常であつた。餘りに自分の身に近いことは、好い事でも悪い事でも聞くのが怖ろしい。

間もなく隅江は盆の上にウキスキイと煙した青魚とを載せて持つて來た。良人の常ならぬ顔色に氣附かぬではないが、何事に依らず自分の方から訊ねることの出來ない女だけに、盆を前に据ゑたまゝ膝の上に手を置いて、何時迄も黙

つて坐つて居た。

「若し今夜あの儘で歸つて來なかつたら——」

要吉は心の中で想つた。固より半ば空想で夢の中を往來して居た様なものであるが、それが又如何しても取返し附かぬ重大な事件の様に思はれる。自分の居なく成つた後で人々の周章でさまや、其後長い一生の間、隅江がみじめな生活を送る姿がまぎ／＼と眼に泛ぶ。自分が手を下して自分と自分の周囲の者との前途を暗黒にして行く。これが如何しても免れぬ自分の約束かも知れない。

「お酒、注ぎませうか。」

斯う言つて、隅江は瓶を手に持つた。

「酒？」と、要吉は夢から醒めたやうに、今迄殘酷な想像を描いて居た女の顔を見詰めた。「酒なら、今夜は最う止さう。」

隅江は瓶を下に置いて良人を見上げたが、目頃から大きな眼が濕みを持つた爲に一層大きく見えた。毎時の事で慣れても居るから、隅江は其儘何とも言はないで盆を下げようとした。髪も油氣が脱けて、手附が倦さうに見える。

「お前、何處か加減が悪いのか。」

「いゝえと言ひかけたが、「はい、少許——」大切にしないと不可いよ。」

女は俯向いたまゝ、ぼたりと一雫大粒な涙を膝の上に落した。其儘盆を持つて出て行つた。

家族は主人の出來心の犠牲とせられべきものではない。思へば、要吉が妻の手に觸れなく成つてから最う幾月だらう。今度隅江が這入つて來たら、突然其手を取つて顔中燃ゆるやうな唇を押附けて遣らうか。囁言が分らなく成つて間違々することだらうが、又何んなに喜ぶことで有らう。ああ、此女の息が詰つて蒼く成る所が最一度見て遣りたい。

斯んな勝手なことを想像しながら、偶と机の上を見ると、硯箱の蓋が開いて、其側に書き損ひの封筒が落ちて居た。何心なく取上げて見ると、隅江の手で宛名は自分の實家へ遣らうとしたのだ。要吉は可厭な心持がした。

二十五

昨夜は何處か身體の工合を損ねたと見えて、折々子供が夜泣きをした。隅江は徹宵眠らなかつたらしい。朝飯が済んでから小母さんと相談した上、二人で子供を連れて、傳通院の小兒科の醫者へ診て貰ひに行つた。

其後で、要吉は一人留守居をして居た。生欠伸が出て、何うやら自分も寢不足らしい。机

の上に頬杖を突いたまゝ、ぼんやり障子の紙を見詰めて居たが、不圖案内の聲が聞えたやうな気がして振返つた。出て見ると、神戸が入口の隅の上に立つて居た。

「や、這入りたまへ」と言ひながら、要吉は足を退いた。

神戸はフロックコートの洋袴の膝を窮屈さうに坐つた。成程、今日は猿樂町の教會に演奏會のある日だと思つたが、わざと黙つて居た。

神戸もじろ／＼相手の顔を見守りながら、

「如何した、一人か」と訊いた。

「あゝ、皆醫者へ行つてね。」

「醫者?」

「なに、昨夜から少し子供が悪いんだよ。」

「子供が——そりや不可いね」と言つたが、相手が餘り氣乗りのせぬやうな様子を見て、其儘口を噤んだ。

それから別な題目について、いろいろ話して見たが、毎時の様に談話がはずまない。如何やら互に戀と云ふ言葉を避けて居るやうな氣もした。やがて神戸が洋袴の膝をずらしながら、こんな事を言出した。

「何だね、他の者に向ひ合つて居る時に、かうして話が途切れると、非常に窮屈に感じるもの

だが、君だけは左様でもない。これは戀人だけだね。戀人と一緒に歩いて居て、何かの拍子に偶と言ふことがなく成ることが有る。そんな時は却てそれが好い。」

「ふゝむ」言つたまゝ、要吉は返辭がつかなかつた。唯俯向いて火箸を弄つて居た。

間もなく、隅江と小母さんとが子供を伴れて戻つて來た。隅江は子供を抱いたまゝ、障子を開けて、一寸挨拶に顔を出した。神戸が親切らしく子供の容態など訊くにつれて、「へえ、お

醫者様ではなも」と、何やら言ひ掛けたが不圖要吉の顔を見返したまゝ、言葉を途切らした。そして冷えた茶碗を下げながら、そこ／＼に廊下へ消えた。

午後一時頃、午飯を済してから、二人は猿樂町へ出掛けた。空は拭つた様に晴れて、綿のやうな電話線にふくら雀が結つて居る。神戸は何と思つたか、要吉を追掛ける様にして、「僕が斯うして君を引張り廻すやうに、三枝子は毎も澤井を引張り廻して居た。澤井でないにしろ、自分一人で都合の悪い時は、屹度誰かしら一緒に連れて來た。」

やゝ有つて、「あの女は今日來るんだらうね。」「さ」と言つた許りで、要吉は來るとも來ないと

も言はなかつた。

教會へ着いた時には、最う會堂に一杯の聴衆が集つて居た。女學部の主事は神戸の顔を見

ると、
「貴方待つて居ました。最う時刻ですから何卒開會の辭を述べて下さい。」
神戸はにや／＼笑ひながら演壇へ上つて行つた。

聴衆は大抵婦人ばかりで、一面に赤や黄や紫の色が揺いで、がや／＼と騒めく物音と共に若い人香が立上つた。其中を胸に紺紐の花を着けた人々が周旋する。要吉は群衆の中に交つて、ひとり隅の方に坐つて居たが、椅子に掛けたまゝ、地の底へ落ちて行くやうな寂寥を感じた。當に心の寂しさではない。身體までがずんずん減入つて行く様に思はれた。

かく自分自身の中へ退き込んで、四邊の經過を忘れて居る間に、數番の番組が演じられた。何の位時間が経つたかも知れない。急に拍手の聲が一隅に起つた。眼を上げると、恰度今紫がかつた派手な裾襷を着た提琴弾きが二たび呼び返されて、壇の上に立つて聴衆に會釋をして居る所であつた。それを見ると、今頃自分が如何してこんな處へ來て、こんな人々と

顔を合せて居るのか、自分ながら解らないやうな心持がした。

此時偶と向側の窓に近く坐つた女の横顔が眼に着いて、思はず立上つた。朋子に相違ない。今日此處へ朋子が来て居ようとは思ひ掛けない。昨宵あゝして彼様に言つて別れながら知らぬ顔して此處へ来て居る、如何云ふ心算で、何爲に——要吉はわく／＼しながら、女の顔から眼を離さないで、竊と腰を下した。先方では既う要吉が此處に居ることも知つて居るらしい。正面を向いたきりで、此方を向かない様にして居るが、始終男の眼で見詰められて居ることは自分でも意識して居る様に思はれた。

若い神經質な眼附をした樂手が壇に上つた。詰様の洋服がほつそりした身體に好く似合つた。番組に依ると、シヨパンの即興樂が始まるらしい。

要吉は竊と座を立てて廊下へ出た。その石柱に凭れて腕組をしながら、一人考へに沈んだ。一體あの女が昨宵歸つてから、自宅の首尾は如何なんだらう。自家の首尾が如何で有つたにしても、彼様して平氣で出て来たところは、何だか此方の存在を無視して、自分は自分の生活を營んで居る、此方とは没交渉だと云ふことを無

言の間に見せ附けられたやうな氣もする。それにしても彼の女の眞實の生活が知りたい、掴みたい。いよくそれが出来なければ——

急に會堂の中で拍手の聲が起つた。ざわざわと人の立上る氣合がしたが、最初に扉を開けて出たのは朋子であつた。直に背後を振向いて、續いて出て来た三枝子と抱き合ふ様にながら、何か高聲に話して居たが、其儘手を引き合つて表の方へ出て行つた。要吉は入れ違ひに會堂の中へ這入つた。

で、一わたり番組が済んだ時は、そろ／＼薄暗く成つて居た。あの後朋子は一度も會堂の中に姿を見せなかつた。どや／＼と歸つて行く群衆に押されながら、要吉が茫然立つて居ると、背後から神戶が来て、「一寸二階へ来たまへ」と言つて、連れて行つた。並んで階段を上りながら、

「眞鍮は早く歸つたね。」

「左様か、僕は全然知らない。」

「何でも氣分が勝れないのを無理に來たとか言つて居たよ。家から迎への腕車が来て、早く歸つたんだが、一體當人が悪いのか、それとも阿母さんが悪いと言つたのか、能く分らなかつた。」

二人は階段を登り盡して、二階の休憩室へ這入つた。其處には名の聞えた學者、文士、畫家、それに若手の音樂家などが聚つて、しつとりと煙が渦を巻いて居た。要吉も神戶を通じて大抵知合であつた。神戶はこれから皆三河屋へ行つて晚餐を遣るから、君も一緒に附合へと言つた。

要吉は何氣なく承諾したが、其言葉の下から直ぐに後悔した。自分が行くべき所でもないし、行つた處で仕度もない。それでも行くには行つた。幸ひ誰も注意するものがないから、要吉は自分の爲に他人の興を殺ぐといふ心配も入らない。只まじり／＼連中の顔を見てさへ居れば可かつた。

夜の十一時頃、やつと散會した。神戶と要吉とは酒のしぶきと煙草の煙との立置めた室を出て、眞黒な駿河臺を上つて行つた。線路の上はひっそりとして、偶にしか電車が通らない。お茶の水迄来て、二人はその停車場へ這入つた。室の様に成つた薄暗い石段を降りて行くと、深淵の長いブラツトフォームの上へ出る。神戶は此處から電車で大久保へ歸るのだが、いざ別れると成ると、未だ談話が残つて居るやうな氣がして、要吉も水道橋まで一緒に乗つて行くことにした。

電車は幾臺も着く。直ぐ方向を轉換しては、又發車する。二人は倚架に腰を下したまふ、何時迄も動かなかつた。何だかひどく勞れたやうで、折々言葉が途切れる。夜が深けたのと、少し飲んだ酒が醒めかけたのとで、白い息も眼に見える様に、ぞくぞくする程肌寒い。

「寒いね」と、要吉が口を開いた。「眞個錢が無い様に寒い。」

「魂でも賣るさ。」

「左様と、何やら考へて居る。」

神戸はつく／＼相手の顔を見守りながら、「買手があつて、眞實に賣る氣だから君は怖ろしいよ。」

「ふん」と、要吉も鼻の先で笑ひながら、「併し凄く晩だね。魂の買手が來さうな夜だ。」

二人は言葉を途切らしたまふ、漱乎と對岸を見渡した。ちらほらと電柱の灯がついて、濠の水は平に死んだものの様に動かない。

「君」と、要吉は又友達と呼びかけて、「生きたい、命が惜しいといふのが動物性本能なら、死にたいと云ふのも本能ぢや有るまいか。何だか近頃そんな無理が言つて見たいね。」

「如何だか、動物は自殺しないよ。」

「だが、自殺するものも有るといふことだ。」

斯う言つて、うつそり笑つて居たが、「ま、本能が不可ければ、衝動でも可い。寧ろ藝術的衝動だと思ふね。だから、死ぬ奴には皆芝居氣が有る。一味の芝居氣なしぢや、何うも人間は死ぬるものでないらしい。スターン、リアリテイに壓迫されたぢや——死なない。」

神戸は眞直に自分の前を見詰めたまふ黙つて居た。やがて、「君は如何だ。僕は近頃自分

思ふんだが、何うも自殺すると云ふ患れは無く成つたやうだ。そんな時期は最う過ぎた様に思ふね。」

「さ、僕も左様は思ふが」と、まじ／＼相手の横顔を見遣りながら、「どうも自殺する患れはない様だが、何だか他人から殺されさうな氣がする。」

誰に殺される？ 要吉はまじ／＼と女の顔を眼に泛べて居た。が、わざと打消す様に、「それも愚な事で、何の因縁もなく——」

「人遣ひか何かでね」と、神戸は何氣なく笑つた。

「餘り未練を出して、いはつてると、何だか其んな事で片が附いて仕舞ひさうにも思はれるね」と、少時して又神戸が言つた。「併しそれぢや何うも思ひ切れない。死ぬ時は矢張自分が世

間から捨てられたやうな心持ちや死にたくないね。世間は自分に捨てられた様に思はせて遣りたい。ニイチエが癡狂院へ入れられた時は、世間がニイチエを捨てたのぢやない、ニイチエが世間を見棄てたのだ。」

半ば装へるが如き神戸の憂鬱な顔は、電燈の光が遠い所爲か、一層蒼味を帯びて沈鬱に見えた。

「君と僕とは矢張違ふね」と、要吉はつく／＼言つた。「僕は世間に如何見えようが、そんな事は構はない。自分が氣違ひに成るか——人は如何して氣違ひに成つて、如何して自殺するか、それが問題なんだよ。」

神戸はじろりと見返したまふ、「君は自分が氣違ひに成るやうな氣がするか。」

要吉は答へなかつた。

「僕は自分が狂人に成るとは思はない。狂人に成る間際迄じり／＼押寄せては行く。併し今一步と云ふ所で、如何しても知覺を失ふ譯には行かない。」

「つまり的を射越すことが無いんだね。左様さ、僕の箭は毎でも的を越して仕舞ふのかも知れない。」

又少時して、「だが、二人ながら中らないこと

は同じだねー

謎のやうな談話が途切れると、又激入込む様に四邊が森とする。やがて車掌が側へ来て「終電車が出るから、乗るなら、早く乗つて下さい」と注意した。

二人は遅て乗込んだ。

電車の中へは、二人の外に乘客もない。神戶は釣革に掴まつたまゝ、
「君、其後戀愛事件は如何した？ 少し聞きたいね。」

「そりやア訊かないで呉れたまへ。言へる様な事があれば、此方から言はずには居ない。君こそ如何した？」

「さ、ルデインは危機に荏んでる。併しルデインの事だから如何するか分らない。」

其間次の停車場へ着く。

「それぢや」と言ひながら、要吉は一人別れて電車を降りた。

其足で水道橋を渡らうとすると、丁度今聖堂の森を離れた月の色がいに赤い。洪水が漲つて暴風雨の來る微かと思はれる様に赤い。やがてそれも町の屋根に隠れた。雨の爲に柔かく成つた土が凍て始めて、踏む度にぎざぎざと音がする。

神戸に氣違ひに成るやうな氣がするかと訊かれた時、要吉は自分のことよりも、寧ろ朋子のことを思つて居た。此女の精神に異狀があることは、何うやら疑はれない。又、精神に異狀があればこそ、普通の人には窺ふことすら出来ない、別な世界を持つて居るのであらう。それを癒すには忍びない。此女の病氣を癒すのは、此女を殺すやうなものだ。昨宵——昨宵のあの女の仕業を見て、何うもモノマニツクな所があるとしか思はれない。眼を睨ると、朋子の姿が宛ら涯もない北極の水の野に、ひとり香木が米れる天を焦して、火の柱の様に燃えて居る様に思はれる。自分は火を弄んで居るやうなものかも知れない。果は自分も一緒に焼け死ぬ外に術はないかも知れない。それが如何成らう。

二十六

要吉は何時の間にか自宅の前に立つて居た。それと氣が附いた時、何となく足が竦んで、其儘退出したいやうな氣がした。

今朝から小兒の容態が急に變つた。うつらうつら眠つて居るのが却て氣掛らしい。隅江は只おろ／＼して居る。午過ぎ、通診に來て呉れる筈の傳平院前の醫者は未だ見えない。小母さ

んが心配して、去年の暮、要吉が入院する前に、一寸かゝつたことのある近所の町醫者を迎へに行つた。幸ひ其人は直に來て呉れたが、どうも病氣の性質が善くないから、事に依ると腦膜炎に變症するかも知れない。此儘昏睡狀態に陥つて仕舞へば、如何もなと云つて頸を捻つた。兎に角自宅では手當も届くまいから、一刻も早く入院させる方が好いと、大學病院の小兒科と駿河臺の瀬川病院とへ宛てて、紹介狀を渡して、近頃は斯ういふ小兒の病氣が流行るから、如何かすると大學の方は病室が明いて居ないかも知れない、其時は駿河臺の方へお出なさいと言殘して歸つた。

それを持つて、要吉は直様自身で出掛けることにした。門口を出ようとする、郵便配達夫に出逢した。呼び留めて、一封の手紙を受取つたが、一寸上書を見ただけで衣袋へ捲ち込んだまゝ、向う裏の人力車屋へ寄つて、先づ大學病院迄走らせた。小兒科の應接室で、紹介狀を宛てた助手に會つた。容態を問はれて、是々と云ふと、顔に手を當てながら、どうも近頃は左様いふ患者が多いので困つて居る。殊に小兒には傳染の患ひがあるので隔離しなけりやならぬから、今は病室が塞つて、如何しても

收容することが出来ないといふ挨拶。強ひて頼んで見た所で、如何にも成らぬらしい。それに此助手の口振に依ると、左様成つた患者は大抵助からぬもので、只病院へ死にに來られるやうなものだから、大分面倒臭いらしかった。で、それぢや駿河臺へ行つて見ませうと立上ると、彼處も大抵一杯でせうと言はれた。それを聞いて急に落膽したが、兎に角行つて見ることにした。

瀬川病院の受付へ行つた頃は、冬の日も薄れて、うそ寒い玄關には誰も出て居ない。潮と通りかゝつた事務員らしいのを捉まへて、來旨を告げると、案の如く此方は一杯だから何卒江東病院の方へ行つて貰ひたいと、にべもない。

要吉はすごとと玄關を出た。暫く立つて居たが、どうも彼んな小さな病人が、それ程重意に成つて居るものを、丸山の奥から兩國の向う迄連れて行く氣にも成れない。で、最う一度大學へ引回し往診を依頼して行くつもりで、車夫には先へ歸つて、病院へは這入れない内へ出來るだけの手當をする様に用意せよと言傳して歸して遣つた。

小兒科へ行くと、幸ひ未だ前の助手が残つて居たので、それに面會して用件を頼んだ上、要吉

はひとり運動場の柵の横手まで來たが、どうも足が進まない。御殿の前の芝原の上へのめる様に倒れたまゝ、ぼんやり低い空を見上げた。空想の世界と現實の世界との餘りに劇しい接觸に、目の眩ふやうな氣がして、自分ながら如何して可いか解らない。昨日迄は殆ど小兒のことも忘れて居た。これが人の親だらうか。空は一面に飽えた牛乳のやうな雲が張つて居る。夕ぐれなれば人も通らない、木も草も動かない。要吉も頭の中一杯に薄白い雲が張つたやうで、何一つ考へては居ない。

要吉はつと起直つて、衣袋から二つに折つた最前の手紙を取出した。集鴨の消印があるから王子に居る友達とやらの手を経て來たものらしい。封を切つたまゝ、芝生の上へ俯伏せに成つて、何か悪い物でも見る様に、片端から讀むに従つて巻紙を引裂いては、手の中へ丸めて行つた。

「君は初めより翻弄する氣で居たまひしなれば、よも人の君を欺くを咎めたまはじ」と、最初から書出して、「この上御院殿の森陰にて二人の演じたやうな喜劇を續けるに堪へない。何日ぞや家で許さぬのを押して演奏會へ出た時は、懷に長い手紙を持つて居た。あの時も餘程決

心して出たのだけれど、お顔を見ると、流石に何とも言へなく成つて、其儘立歸つた」と、此處迄讀んで來て、要吉は思はず手紙を掴んだまゝ立上らうとした。

「一たび逢つて別れてから、殆ど前の事を覆すやうなことを言つて寄越すのは、あの女には最早珍らしくない。長い手紙を懷にして居たといふ。それが白い紙の上に黒い墨で書いたものか、左様でないのか、何れにせよ、顔を見ると何とも言へなく成つて歸つたといふのは、言葉が簡單なだけに、此方が傷けられたことは一しほ深い。

なほ讀み續けて行くと、「あの夜から母は持病で病みついて、未だ枕が上らない。今も枕邊に介抱して居るが、私は斯んな事すら最早僞善なしに爲ることが出來なく成つた。私の爲に氣を揉んで呉れる周囲の人々の苦痛を長びかすのは、一層残酷だと思ひながら、未だ私が卑怯で、一思ひに親を殺すことが出來ないから、斯うしてじり／＼母が弱つて行くのを見て居る外はない。介抱する者もされる者も、互に理解の絶えた仲程辛いものはない。」此處から又急に筆を轉じて、「私は香を焚くことが所好だ。殊に線香が好い。斯うして凝乎と線香の燃えて行

く様子を見詰めて居ると、灰が折れて下へ落ちるたびに乾坤を這がすやうな大きな音がする。あれ、庭前へ大の仔が二疋来て、面白さうに狂つて遊んで居る。早く来て下さい、二人であの様に遊ばせようと、手紙は此處で終つた。

線香の灰が落ちるたびに大きな音がする。夜半に心を鎮めて見て居たら、實際そんな音がするかも知れない。何時かの夜も、室中が照り渡るとか、音ばかりの夢を見たことがあるとか訊いて居た。如何かしたら、彼の女は幻視や幻聴を持つてゐるのかも知れない。が、これは左様ぢや無いらしい。書いて有ることといひ、人を愚弄するやうな口吻といひ、要吉の心の底で何か解つたやうな気がした。解つたが、何うもそれをはつきり意識の上へ浮べたくない。

霽れた朝、草山の上を、さら／＼と冷たい夕風が通つた。要吉は兩手に紙片を握つたまゝ、久らく動かかなかつたが、偶と氣が附いて立上つた。立上ると共に、遠てて池を廻りながら、表門の方へ出て行つた。丸山の家の近く迄来て、町の角で小母さんに出會つた。

「小兒は」と訊くと、
「大変好いんですよ。眼も動く様に成りまして

ね」と、言ひ捨てて水を買ひに走つて行つた。

要吉は小兒の容態が快く成つて居ようとは思ひ掛けない。それを聞くと、偶と自分の心の底で其死を願つて居たんぢやないかと云ふやうな気がした。そして、酷しく否々と打消した。

隅江と看護婦とは、蒲團の兩側に坐つて、黙つて病人を見守つて居た。要吉が部屋へ這入らうとして閤の上に立つと、隅江は立上つて側へ来た。

「病院は不可ませんでしたさうだな。」

「うむ」と言つたが、やがて、「彼方のお醫者さんは見えたか。」

「え。」

「何と言つてだつた。」

「今夜は寝られませんでした。」

「左様か、如何も少し手後れだつたと見えるな。」

「私が悪い御座いましたと、直ぐ派聲に成つた。」

「左様でも無いやな。」

「でも、先刻灌腸してから元氣が出て、眼も動かすし、泣きもしまするがな。」

要吉は病人の枕元へ行つた。米糞の下で、小さな頭をくる／＼と動かしづめにして、時々

苦しさに口端を歪める。未だ訴へることを知らないだけに、慘めて見て居られない。

元氣が出たと思つたのは、矢張容態で、明くる日の午過ぎから薄く白眼を開いたまゝ、全く動かない様に成つた。只口元へ手を遣つて見ると、微かに息が通つて居る。注射をするたびに、黒い腫子が動くやうに見えたが、それもほんの少時で、別段数日は無いらしい。三日日には食鹽の注射をした。太い針を小さな股にづぶりと刺して、見る／＼蛇が蛙を呑んだ様に膨れ上るのを見ては、女どもは皆面を背向けた。

固より口からは何も通らない。只灌腸だけで生きて居るのだから、寢れて行くのが眼に見えるやうで終ひには顔に小兒らしい所が失せて、宛然年寄の様に淺猿しく成つた。

隅江は夜の眼も合せなかつた。要吉も流石に主観的な空想を走せる暇も、殘酷な思索に耽る餘裕もない。隅江と同じ事を愛ひ同じ事を喜んで、一切の餘事を忘れることが出来た。只、要吉の心持は變り易く、自分で自分の主人でない。死に顔した病兒のために、折角開かれた此優しい感傷的な情緒も――それは自分の性質の好い方面を代表したものが――こんな生活を續けて居たら、又何時の間にか乾れて仕舞ふのだ

らう。要吉はそれを自覺して、且怖れて居るが、自分ながら如何することも出来なかつた。

四日目の日暮は、夏子は最う此世に居なかつた。夏子といふ名は、此子の爲に神戸が選んだので、名に因んだ一葉女史が、元の佐住居であつたといふ同じ家の、女史が臨終の間であつたといふ同じ部屋で、一歳に足らぬ小さい兒は、掌に載せられた鼓が消えてでも行く様に、ほつりと息を引取つた。隅江は蒲團の上から抱くやうにして、しばらくと留度なく涙を零した。女どもは皆泣いた。要吉は腕組をしたまゝ、それを見て居た。

看護婦が白粉壺を持つて来て、死顔に白粉を塗つて、唇に紅をさした。眼窩は凹んでも、未だ頬の肉が落ちないのか、見違へる程可愛らしく成つて、口元が今にも笑ひさうに見えた。何だか玩具の様に、此儘何時迄も藏つて置きた

い。夕闇が部屋の中を罩めて行く。人は灯火を點けることを忘れた。

二十七

次の日の夕べ、夏子の遺骸を一片の茶毘に附した。隅江の實家から、村の墓地へ埋めて、後

つ中ひも此方でしたいからと云つて奇感したので、初七日の済むまで骨壺を寺へ預けて置いて、其間隅江に持たせて旅郷へ歸すことにした。

薄白い晒れたやうな日の後に、又薄白い夜が明けて、幾日も同じやうな日が續いた。隅江は殊に身の置所もないらしく、何處に坐つて見ても落着かない様に見えた。要吉もしばらく戸外へ出ないで、成る可く隅江とも言葉を交すやうにしたが、如何いふものか、隅江の方が要吉を避けるやうな素振が見えた。此女がこんな素振を見せたことは是迄にない。夏子の居た頃は、要吉が少しなり子供をあやす眞似でもしようものなら、心から嬉しさにして寄り纏つて來た

ものだが、淺薄な女氣の、子供が失く成ると共に、纔に繋かれた夫婦の情愛も絶えて仕舞つた様に思ふのかも知れない。それにしても、こんな世間知らずの妻の良人に對する依頼心を失はせたものは、誰でもない、矢張要吉である。要吉自身が仕向けたのである。要吉は自分が手を下して左様して置きながら、それを罪惡だと感ずる前に、又妻の頼りない心細さを察して遣る前に、自分の身の寂寞に堪へないやうな心持がした。それが他人の所爲ではない、悉皆自分の心柄だと思ふと、一層取返しが附かないやうで、

寂しさの底が知れない。兩より同情には、値しないが、こんな男でも、矢張不幸の人の數には洩れまい。

初七日もやがて過ぎた。要吉は毎日隅江の顔を見ながら、何日立ても言はなかつた。今度立たせて遣れば、それが一生の別れに成るやうで、二たび呼び戻すことが自分ながら覺えない様に思はれて、何だか歸したくない。少くとも自分からは言出し難い。斯んな風で、一日づつ、妻の歸國を延ばした。勿論隅江の方からは何も言出さない。

三月、桃の節句が過ぎて二日目、今日は夏子の二七日で、隅江は小母様と連立つて寺詣りに行つた。其後に要吉は一人留守居として居たが、つと立つて障子を開けた。日の入方の空は拭つた様に晴れて、一塵を留めない。電話線が縞の様に霞んで見える。此二三日は風も吹かず俄に時候が暖かく成つた。海の向うから燕の來るのに間もあるまい。

此不穩な天地に對して、何うも心が落着かない。胸の中の動搖と周囲との不調和が際立つて、宛もなく飛出したい。飛出して、何處迄も一直線に行つて仕舞ひたい。

不圖郵便脚夫の足音がしたやうな氣がして、

出て見ると、上り櫃に切手を二枚張つた重い郵便書が届いて居た。要吉は平容することの出来な妙な心持で、胸を躍かせながら封を切つた。別に一本の手紙が其中に這入つて居た。王子の友達の前へ轉送を頼んで遣つたが、何と思つたか返して来た、彼人の仕さうなことです、今ついでに送るから讀んで呉れとある。先づそれから開いて讀むと、例の思ひ上つた調子は毎時とも變らない。其中に、「さりとて君は今何を爲したまふか、何を思ひたまふか。我には時間の中に於て候。互に遠き世の思ひに候。想像せむも怖ろしく候はずや。されば君が眼とわが眼と相會せる時、近寄り難き二つの世に思ひの術なさよりは、却々に今は心易くも覺え候。半月の沈黙は自らつくりなせる虚構の世界に對する執着をいよく増し申候。わが最後の息はこの世界の外ならじと迄誓ひ申候」などと言ひてある。今一つの手紙には、「今日は桃の節句にて、主人役に白酒を過して、後の心持悪しく、何をしても後に悔いるが私の常に候。悔い得る人は幸なりと人の申せし」と書き連ねて、尙々書には、此返事は淺草の海禪寺へ宛てて呉れとあつた。

海禪寺と云へば、東都に於ける臨濟の巨刹で

あるとは、要吉も豫々聞いて居た。朋子も此寺へ出入するとすれば、此前の手紙に線香の灰が落ちる音だとか、犬の仔と遊ぶとか、禪學の公案めいたことが書いてあつたのも、折々手紙の中に女らしくない粗大な文句が挿まれたのも、此女の手蹟が男性化して居ることも、それ許りではない、最初から此女の常軌を逸した振舞が、すべて裏書された様に思はれた。尤も、こんな疑ひは是迄もたび／＼要吉の心に泛んだ。が、毎時懸命にそれを打消して来た。女の上に自分でつくつた女影を壊されるのが惜しさに、兩手で捧げる様にして来た。それ迄にして、漸とイリュージョンをつづけて来たものを、今女の手づから無残に壊されては、何とも言ひ様のない心の空虚と、自我の屈辱とを感ぜずには居られない。

此女は又視又は又聴が有る様に思つたのも、時には癩痢の症狀が有るのでないかとさへ疑つたのも、考へて見れば、皆此疑ひを打消すためであつた。此疑ひを打消して自分の方へ引附けて置く爲で有つた。此女が禪學の支配の下に有るとは、如何しても考へたくない。縱令相手が人間でなくとも、自分以外の或物が此女のことを占領して居ると考へるのは堪らない。で、

如何がな禪學から引離して、自分の方へ引附けたさに、此女をアブノーマルのものにした。自分の家系が一種の幻視に陥まされて居るのを顧みては、此女も左様したかつた。

父の墓碑に縊死した男と出逢つた時、何と言ふこともなく、それが自分の半身の様に思はれた。大都の眞中に初めて朋子を見た時、何うもそれが偶然に出逢つたものとは思はれなかつた。此日自分と逢ふために、今日迄此世に生きて居たものの様にも思ひたかつた。そして、只自分だけが此女を知り得た様に思つて居た。

が、何と思つた所で、當人がそれを裏切る氣な仕方がない。加之、此女は大方參禪が得意なやうでも有る。何の位修業を積んだのか知らぬが、自分も禪學の狂信者に用はない。

併し——左様思ふ傍から、又それに逆行するやうな考へがむく／＼と頭を擡げた。自分には心からあの女を偶像の様に崇拜して来た。あらゆる熱情を捧げて来た。此儘では——何うも此儘では諦められない。

あれも迷へる女だ。縱し癩痢でないにしても——癩痢は餘りだから撤回しても可い——あの女の面影に異狀が有ることは争はれない。あの怖ろしい程過激な神經を有しながら、自家

の行爲の責任を知らない様に見えるのも、或はそれが爲では有るまいか。今の世に新しい女は幾許でも有る。あの女は普通の新しい女ではない。あの女の言動を裏附けるものが何かなければ成らぬ。何か暗い影が——黒い星の下に生れて、黒い運命に支配されなければ、こんな女は出来ない。

要吉は机に向つて長い手紙を書いた、これが最後と思つて書いた。先方が幻影を壊す氣なら、此方にも其覺悟が有る、此手紙は只それを壊されまいとする努力に過ぎない、左様思ひながら書きつけた。何時の間にか二人が戻つて來て、附江が佛へ洋燈を持つて來たのも知らなかつた。

影、久し振りにて御狀に接し、例の臆病にて、暫しは封も得開かず、只々打盹め居候。それに近頃は事繁く、殘念ながら氣根衰へて、今手紙を書出して、何を言ひやら筆の跡さへ覺束なく候。理性にては、矛盾せる二つのもの同時に存在するを許さずと申せ、感情ばかりは然らず、明かに矛盾せる感情の兩つながら一時に身に迫るが堪へがたく候。

半月の沈黙は、君自らつくりなせる虚構の世界に對して執着を増さしめしとのたまふか。さりとて其虚構の世界が何なりやは能くも解らざれど、何が故に今更虚構の世界とはのたまふぞ。君自ら君の世界の眞實を疑ひたまふか。君の世界は恐らく夢ならむ。されど夢の如く眞實なるにあらずや。眼に見ゆる現實の世こそ、夢の如く虚構と成りしれりとは、西の國なる新しき詩人どもの新しく唱ふる所に倣ふ。

かくて空想の世界は日に／＼現實の世界に迫る様に覺え候。近頃心の中で考へただけのことが、事實と成りて現はる手續の易々たること、我ながら怖ろしき計りに倣ふ。時としては、未だ考へても見ぬことさへ、夙くも取返し難き事實として目前に現はるゝこと、魔性のものありて人の心を豫知するかと疑はるゝまでに候。

何時ぞや、二人して都を出でむと、霧の街を彷徨ひ歩きし夜を記憶したまふか。私はあの儘眞實に死ねもし、殺しも出来るやうな心持に成りたりしに候。其後氣

力衰へてうつら／＼暮す間には、あの夜のことを思ひ續けて、一時の衝動に依らず、十分なる省慮の結果として、なほ人を殺すに至る迄わが心の壞れ行くさまを考へなど致候。一種の罪人心理に有之べく候。

今は隠すも詮なければ云ふべし。あの折霧の中を歩きながら、私は——場所も貴方の所好だといふ鎌倉鶴ヶ岡の社前にて——貴方を手にかけて殺した幻影を泛べて居た。其時如何いふものか、私は生き残つた、生き残つてゐる必要がある様に思つた。十二年間——十二年といふに根據はない——權太なる集落監の水に閉ぢられても、まだ生き残つて居る必要がある様に思つた。——私は詩人である、藝術の徒である、美の崇拜者である。君を殺す、君を滅する瞬間に於て、我々人は何んなに美しく我眼に映するか。總て美しきものは其滅ぶる前の瞬間に於て最も美しいといふにあらざるや。私は許されざるものを見る第一の人で有らなければ成らぬ。

貴方ばかりとは云はぬ。私は貴方を殺し

たといふことが、私自身の上に及ぼす影響を見えた。何物の前にもたじろがぬ科學者の好奇心を以て、自分の心理に及ぼす反應が見えた。只、科學の研究は實驗者其人に取つて最も危険なものである。私は其儘永久に歸つて來ないかも知れぬ。そんな事は私の知つたことではない。

或人は近代人の人生觀は厭世でもない、樂天でもない、樂天と厭世との接近であると言つた。極度の戀愛は極度の憎惡と伴ふ。私は貴方を愛することの深ければ深いだけ、貴方を憎んで居たのかも知れない。私は貴方の身に殘忍な行爲を加へたい。そこに初めて切なる愛の表現を見出さうとした。埃及のハイベシヤが美しい生身の肉を貝殻で削り取られた様に――否々、今夜私の頭は平調を失つて居る。

併し何を言つても、今と成つてはすべてを過去の渦巻の中に葬る外はない――

此處迄書續けて、ぼつりと思想の絲が途切れた。頭の中に書きたい事がうじやう有るやう

で、而も何を書かうとしたのか想ひ出せない。巻返して、書いただけを讀直して見た。初め書簡文體で書出して、後の方では言文一致に成つて居る。要吉は眼瞼の熱く成つた眼に、少時紙の上を見詰めて居たが、其儘引裂いて、ぐるぐる巻いて封筒に納めた。直に出して仕舞はないと、又思ひ返して出さなく成ると思ふから、宛名を書くと共に立上つた。恰度そこへ隅江が夕餉の膳を持つて來たが、

「郵便なら入れて參りませうかな」と訊く。「うゝむ」と、それを聞流したまゝ、自分で出て行つた。

間もなく、要吉は戻つて來た。膳の前に直された座蒲團の上に坐つて、器械的に箸を上げたが、何を喰つてるか自分でも知らない。時々物忘れでもした様に考へ込む。隅江はそれに氣が附いても、故と見ない振をして、凝手と俯向いたまゝ、膳の上の給仕盆をまさぐつて居た。

今と成つては、總てを過去の渦巻の中へ葬る外はない。

唯、如何してすべてを過去の中へ葬るか。それが要吉の身に剩された一つの課題である。夏子は世を早くした。恰も意あつて世を早めた様にも思はれる。此父らしからぬ父は、自分の手

を下して自分の前途を開闢にして行く。それを何者かが居て傍から手傳ふとしか思はれない。何者かとは矢張自分の意志に違ひなからう。人の意志が其人の外へ出て働くことも無いとは云はれぬ。故らに或坂道をつくつて、それに着くといふ傾向が止めようとして止められないのも、想ふにそれが爲では有るまいか。

何れにしても今は我が身一つを處分すれば可い。何時か――一週間も前でも有つたらう――或人の許で清國の四川省に傳教師の口があるといふ話が出た。北京から未だ五十日の餘も蜀の棧道のやうな路をはるゝ興に早かれて行かなけりや成らぬ所だと聞いて、稍心を動かされたが、其時は何とも言ひ出さないで歸つた。一人でそんな懸離れた所へでも行つて、物を言ふ相手も無く、只生きてだけ居たら、其間には口を利くことも忘れ、頭も鈍く成つて、大方片が附くかも知れない。

隅江は要吉が駄つて差出した茶碗に、飯を盛つて渡さうとした。

「あ、お茶だつた、御飯ぢやない。」一寸見返したが、別に湯呑に茶を注いで出した。

要吉は初めて此女を見附けてもした様に、隅

江の顔を見送つた。自分は此女を捨てようとして居る。而もそれが一時の氣紛れではない。それなら未だ知すべき所もあるが、豫め今日あるを知つて、永い間其計畫をつづけて来た。唯、自分は決して此女を嫌つて居るのではない。一生を通じて隅江を忘れることは無からう。恐らく眼を瞑る瞬間に於て、自分の口端に上る女の名は隅江を掛いて外にあるまい。

やがて隅江は膝を下げようと、背後へ退る様にして障子へ手を掛けた。

「隅江」と、要吉は女の名を呼んで留めた。

「え」と、振回つたが、相手が何とも言ひさぬので、「何ぞ——用で御座いますかなも。」

「うむ」と、又行詰つた。良久つて、「少し言ふことが有るんだ、眞面目に。」

「今直ぐ——」

隅江は障子を閉めて、其側に坐り直したが、眼の遣場に困つて、凝手と良人の顔を見返した。

「お前、明日にでも故郷へ歸るか」と、要吉は思ひ切つて言出した。

「へえ」と、言ひさして、隅江はしばらく返辭をせぬ。

要吉は女の素振を見て、自分の言つた言葉の

意味が相手に通じたなと思つた。それと共に、人殺しでもする様に手が震へ出した。

妻を捨てるのは妻を愛せむが爲に外ならぬ。

要吉は自分にもそれを承認させようとして、幾度も心の中で繰返した。別れて後こそ、妻を愛する心も惻々募るだらう。永く女を愛して變

るまいと思へば、其女を捨てる外に道はない。唯、そんなにして迄女は男から愛されたいものか如何だか分らない。それに附けても、男の愛といふものが、愛せらるゝ者のために愛する

のでなく、愛する者自身の爲に愛するのだと言ふことは争はれない。それが又如何することも出来ないものであらう。

妻を捨て置いて、妻を愛したい。故らに妻を不幸に陥れて置いて、妻を憐れんで見たい。

四川省の山深く分け入つて、永久に歸らなく成つた時、隅江の上を思ひ遣つたら何んな心持

がするだらう。固よりこれは半ば空想に過ぎない。但だ空想程世に怖ろしいものはない。

が、斯んなに迄心置なく隅江を虐待するこ

とが出来るのは、心の底で此女を一番深く愛して居る證據ではあるまいか。尤も、それを又口實にして虐待を重ねようとするのだから、自

分ながら浅ましい。

「随分お前にも苦勞させたが、最う愛想が盡きたらうね。」

「何故なも? そんな——」

見る／＼隅江の睫毛に露が宿つた。それを見ると、要吉の眼も熱く成つた。

「お前には濟まない、眞個濟まない。勘忍してお呉れ、な。」

要吉はつとめて聲を漏せた。相手が眞面目なら此方は無理に出さうとしても、心持を仕

向けてさへ行けば、涙は自ら出るものだ。隅江の顔が霞を透して見え出した。今一息では

はらと頬に傳ひさうに成つた。此涙を隅江に理解されようとは思はぬが、切めて女から憐れま

れたいといふ一念は失せない。要吉はじり／＼と身體をずらして、影に成つた自分の顔を洋燈の光に照し出した。

其時、急に涙が出なく成つた。あゝ人の性格は宿業に於て容易に改め難い。隅江は終に良

人の涙を見ずして濟んだ。

二十八

新橋停車場の古い石造の建物は、雨氣を持つた月夜の空を背にして黒く眠つた様に立つて居た。只、北に向つて昇降口だけが明るく見え

る。折柄二臺の人力車が駈けて來た。石段の下へ梶棒を卸すと、先づ立上つたのは要吉で、續いて隅江も降りた。白い布片に包んだ五寸四方位の箱を、大切さうに兩手に抱へて居たが、良人の後に跟いて、おづく石段を上つて行く。

午後十一時の發車には未だ間があるかして、待合室にも二三人の旅客しか見當らない。皆遠方へ行くらしく、大きな荷物に凭れて坐睡つて居る。隅江は其前を擦り通る様にして、やつと片隅の倚靠に腰掛けた。それを見ると、要吉は直に立つて机賣場の方へ出て行つた。停車場の時計と自分の時計とを合せなどして、何と言ふこともなく其邊を見廻して居たが、やがて元の處へ戻つて來た。隅江は膝の上に小さい箱を載せたまゝ、しよんぼり荷物の側に坐つて居たが、良人の顔を見ると、

「未だ餘程間がありますかね」と訊く。

「うむ、一時間足らず有る様だね。」
隅江は黙つて眼を伏せた。要吉も並んで腰を下したが、洋杖の頭に兩手を掛けたまゝ何とも言はない。此期に及んで餘計な事を言ふのは、女に對しても氣の毒な様に思はれたからだ。今夜子供の骨を持たせて故郷へ歸すとはいふものの、暫く別れて暮す約束にして、荷物も當座

入るものは大抵纏めて來た。昨夜それを言出した時に、隅江が案内物易く承知したのを見て、一方では重荷を卸した様にも思つたが、同時に何だか物足りない心持もした。暫くと言ふ暫くが何時迄に成るか、それは分らない。要吉はこれが永い別れだと思ふ。少くとも空想の上では、一期の別れを演じて居るやうな氣がして成らぬ。それに自分だけは空想の種りで芝居を演つて居たのが、後からどしどし返しの着かない事實と成つた類例は從來の経験でも數多い。そんな斯んなで、今夜八時の汽車で立つ筈であつたのを、外に準備も後れはしたが、要吉からぐづぐづと時を後らして終に十一時にして仕舞つた。併し明日に延ばす心はない。女の一人旅ではあるし、何だか心配だから明日にしてはと、小母さんが強つて止めたのも諸かなかつた。

平生人込みのする待合室だけに、がらんとして居るのが、一層際立つて見える。最う煖爐も焚かなく成つたのか、白い灰だけが鐵網越しに見えるのも、却てうそ寒い。煖爐棚の上に掛けられた大鏡が冷たさうな光を反射して居る中に、時々白衣の人影が出没して、宛ら他界の姿を覗いて見る様に思はれる。要吉は凝乎とそれを

見て居た。長い間鏡の中を見詰めたがら、偶と此中へ自分と隅江と、二人の行末が映りはせぬかと云ふやうな、變な心持がして來た。今、自分の側に坐つて、微かな呼吸をして居る女と自分との間に、何かの因縁が有るとしたら、一瞬の後に別れて、一生の間再び相見る期がないといふ今はの際に、女の行末が自分の眼に映らぬとは云はれまい。

隅江は其處に居るか居ないか分らぬ程、靜に音も爲せないで居る。要吉は振向いて女の顔が見たいやうな氣もしたが、故と其儘にして女の上を想ひつづけた。いよ／＼自分が行方知れずに成つて仕舞つたと聞いた時、女は何んな心持がするだらう。恐らくは隅江自身にも解るまい。固より側の人に解らう筈はない。自分にも解らず、人にも知られないで、矢張り暮れて夜が明けるだらう。一年、二年、三年日には、人の妻と成るだらう。又新に人の母と成つて、其日々々の小さい出來事に心を奪はれて暮す間には、何時となく頭に霜を置いて、腰も曲れば齒も落ちるだらう。其時に成つて、萬一年寄の夜話に若い頃の話でも出たら、何卒今夜のことが想ひ出して貰ひたい。恐らくは此女の生涯に唯一のローマンスたるべき自分との關係が、

老眼の霞を透して遠い灯でも見るやうに、ちらと泛ぶことが有つたら、其時は——今から願つて置く——數十年前に土と成つた自分の上に好意と温情を持つて想ひ出して貰ひたい。

不圖、足許に聲がしたので振ると、それは驛夫が水を撒きに來たので有つた。要吉はつと腰掛を離れて、隅江の前を彼方此方と歩き出した。こんな埒もない想像に耽つて今の別れの重大な意味さへ切實に感じ得られなるとすれば、自分ながら何處迄墜落して居るか方圖が知れない。今夜此女に背いて、明日から何に手頼らうとするのか。われから闇黒を求めて行く。それが最後迄堪へられるもので有らうか。こんな單純な女を空想の性とする男の心は、禽獸にあらずして何だらう。自分は怖ろしい淵に陥んで居る。——泣いて呉れ、人目も構はず泣いて、取締つて呉れたら、それに依つて、此處迄切迫した二人の運命を變じ得たなら！ あゝ、自分の方が此女から頼れなれたい。要吉は腕組をしたまゝ、隅江の前に立停つた。何故泣かぬ、何故黙つて居るのだらう。此女には終に空想を容れる餘地がない。

何時の間にか、待合室には旅客が一杯たかつて來た。要吉も切符を買つたり手荷物を預けた

りした。間もなく振鈴が場内に鳴渡つた。ざわざわと人の足音が改札口へ近づいて、雪崩を打つてプラットフォームを押して行く。要吉も漸と隅江を列車の中へ乗込ませて置いて、窓の前に立つて居た。

時は刻々に移る。隅江は膝の上の小箱に手を掛けたまゝ、要吉の顔から眼を離さなかつた。今でも——今でも可い、隅江が客車の中から飛出して來て、泣いて取締つて呉れたら、そして二人は救はれるのだ。要吉は女の顔を見返したまゝ、それ計り思ひ詰めて居たが、口では儼然何とも言はなかつた。

跨頭列車が動き出した。「それぢや氣を附けて行くが可い。皆様に宜しく言つとくれ。」

「貴方も御機嫌好う。」隅江は延び上がるやうにした。要吉も五六歩列車に隨いて歩いたが、白いペンキ塗の柱の側に立停つた。と、急に踵を廻したまゝ、駈けるやうにして改札口を出た。

夜半に雨滴の音を聞いて、要吉は偶と眼を覺した。暫く蒲團の中で耳を澄ましたが、

「雨だな」と、獨言を言つた。程經て隅江が今汽車で雨の中を進行してるの

を想ひ出した。今頃は矢張膝の上から小箱を離さないで、ぼち／＼眼を開いて居ることだらう。これだけ長く抱いて居たら、肌の暖味が小箱を透して、更に甕を透して、其中の死灰に傳はるかも知れない。要吉は肘を立てて、枕の上に顔を伏せたまゝ、夜の白む迄身動きもしなかつた。

二十九

次の日の午後、要吉は久しぶりに金葉會へ出て朋子と落合つた。朋子も彼の日からずつと缺席して、今日初めて出て來たのださうな。後れて來た男の姿を見ると、一寸目隠したまゝ、二たび正面を向いて、教壇の詰に聴き惚れて居た。二週間あまり見ない間に、元から纖細だった肩の邊りが一層ほつそりした様にも見えるけれども、其外には別段變つた容子もない。先般出した手紙の返事も未だ呉れないが、何と思つて如何いふ氣で居るのか、それは解らない。要吉も敢う自分で自分の頭を苛むに勞れたやうな氣がして、わざと他所見をしながら黙つて居た。

散會後、神戶と要吉とは朋子を待合せて、一緒に教會を出た。カ關の石段を降りた時、三枝子が澤井を引張る様にして、後を追うて來た。

毎も歸る途とは方角が違ふので、何處へ行くのかと神戸が訊くと、「え、一寸病院へ」と言つたまゝ、取澄して居る。其外険らしい白い唇が男の眼を惹く。

で、五人がひろい街の上を横に一列に並んで、がや／＼言ひながら水道橋迄進つて来たが、神戸は一人別れて甲武線の電車で歸らうとした。澤井は神戸に隨いて行かうか、それとも三枝子と一緒に歸らうかと、少時迷つて居たが、三枝子が左様ならと、お叩頭をしたまゝ、ずん／＼土手について坂を登つて行くのを見ると、

「まあ三枝さん、酷いわねえ」と、速てて其後を追掛けて行つた。

要吉は朋子と二人だけに成つた。一町餘り黙つて歩いて居たが、喜岐殿坂の下迄来ると、「彼方へ廻つて歸りませんか——今日もと言出して見た。

朋子も黙つて點頭いた。

要吉は一步退る様にして並んで歩きながら、何遍同じ事をして、如何成るものかと云ふやうな味氣ない心持がした。と言つて、引回す氣にも成れない。不圖、此女は毎日自宅で何を爲て居たらうと、それが氣に成つて、

「此間はお雛様の祭でしたつてね。貴方が主人

役で？」

「ええ。」

「お客様は如何云ふ連中ですか？」

「親類の子や近隣のもの——皆がきやツキや騒いで、そりや面白う御座いましたよ。」

要吉は竊と女の顔を見遣つた。こんな事を言つて、對手の話を外らかすのも此女の癖だ。

「ぢや、何ですね。貴方はそんな家庭の行事にも興味を有つてゐるんですね」と言つたが、又二歩三歩行つてから、「で、お裁縫は誰が爲さるんですか？」

「自分の事は自分で爲る様にして居ます。」

如何だかと思つたが、自分でもわざ／＼自分を欺いて、餘計な事に拘らつて居るやうな氣がしたので、急に口を禁んだ。

途中、たび／＼話が途切れたが、それでも湯島へ出て上野公園迄来た。正面の石段を登つて、彰義隊の碑の背後から蒲鉾山の方へ、肩を並べて行く。

要吉は一人じり／＼した。何か言ひたい、言はなくちや成らぬと思ひながら、妙に心持がこじれて口へ出ない。「貴方と會つても、私は最う幸福ぢやアなく成つた」と、打逆るやうに言つて見た。「併し會は

ずに居るのはなほ苦しい。」

女は只聞き流した。男は更に言葉をついけた。

「此頃中、私は支那へ行かうと思つて奔走したのですが」と言ひ掛けて、不圖、それが此女に何の關係があるかと、急に又勇氣が挫けた。が、言ひ掛けたことは仕様がなない。

「他に人が有つて、それは駄目でした。此頃又或本屋の手代に成らうかと思つてます。左様成れば勿論文學などは絶縁して、全く商賈に成つて仕舞ふ了簡ですから——私などに成れるか

成れんか知らぬが、兎に角金葉會へ出て、貴方のお目に掛けるのも永くはない。」

「それよりも、肉屋の手代の方が好いでせう」と朋子は白ばつくれたやうな調子で言つた。

要吉は思はず足を停めた。が、又思ひ返して歩み出した。何故そんな物の言様をするのか。尤も朋子の言葉が林枝を折つて投げつける様に素氣ないのは、今始まつたことではない。それを何か深い意味でもある様に迎へて思つたのは此女が先天的の境遇に魅せられたのだ。一たびそれが他の修養から導かれるのだと知つては、そんな言葉は聞くに堪へない。

やがて、二人は兩大師の廣場へ出た。言ひ合

はさねど、足は自ら何日ぞやの夜の石の方へ向つた。偶と見ると、其石には女學生が一人腰掛けて、長い袖の中から袖の袖を出したまゝ、何やら讀んで居るらしい。二人は其側を擦り通つて、右の方へ曲つて行つた。

「お宅では御不幸が有つたさうで御座いますね」と朋子が不意に言出した。

「其んなことを、神月君からでもお聞きでしたか。」

「いゝえ」と言つた許りで、何處から聞いたとも言はない。

要吉は話題を轉じようとして、「ね、何時かのお手紙に淺草の親戚へ行くからと有つたでせう。あれは海禪寺のことなんですね。」

「えゝ、あれはねと言つたまゝ、少時口籠つて居たが、彼處は只私が王子の友達と時々寄つて話をするために、一間借りて居るんです。そりやア坊主ばかりで、本當に存氣ですよ。」

要吉はじろ／＼女の横顔を見守りながら、「ぢや、貴方は坊さんが好きなんですね。」

「えゝ、唯想へば所好です。空に描いて見れば所好ですが、實際見ると大抵は嫌ひです。」

「左様、昔の物語の中へ出て来る僧都や圓闇梨などは大概好い。」

こんな風に合點は打つたが、朋子の才走つた返辭は男の心に餘り好い感じは與へなかつた。何うせ最う此女は駄目だ、如何成るものでない」と知りながら、矢張如何がなして、最う一度自分の力へ引寄せて見たさに、

「ね、貴方は——貴方は癩癩の患者が昏睡状態に陥る際の經驗を聞いたことはないか」と、女の顔を覗き込むやうにしながら言出した。

「私はね、貴方は癩癩病者の症候が有るんだとばかり思つた。ね、左様ぢやないか。私一人で左様考へたのかも知れんが、私は如何しても貴方に左様思つて貰ひたい。」

朋子は黙つて五歩行き、又十歩行く。良久しうして、やつと顔を上げたが、「死の勝利」の中へ出て来る女は、矢張癩癩を持つて居た様で御座いますね。」

久しい以前に讀んだので、それとも心附かなかつたが、矢張知らず識らずの間に並行を求めて居たのではなからうか。要吉は少時物が言へなかつた。

女は氣味よげに男のげつそりした顔を眺め遣つた。

「うむ、左様でしたねと漸と俯へを立直しながら、要吉は先に立つて歩き出した。

ずつと廣場を一周りして、又元の石の側へ戻つて來ると、前の女學生は何處かへ行つたと見えて、其邊に居なかつた。二人は石の上に並んで腰を下したが、要吉は直に又立上つて、前の木柵に凭れた。朋子と顔を見合せる。

あの夜のことが子供の時に見た遠い夢の様に一つ／＼戻つて來た。すべてが自分の描いた幻影に過ぎないやうな。あの夜女が一つとして自分の待設けのないやうな事を言はなかつたのも、それが爲では有るまいか。兎に角、自分が

女の上に小説を描いて居たことは争はれない。自分はたゞ女の口から、自分の思想や感情を、自分の言葉と論理とで言はせて、それを樂しんで居たに過ぎない——

併し今此石に腰掛けた女は、あの夜の女ではなからうか。此手、此體たらしいやうな、堅く結んだ唇は自分の心の中に描いた朋子を描いて、他に持つ者は有るまい。——偶と朋子が毎も巻いてた毛皮の襪を止めて、別の肩掛を掛けて居るのに氣が付く。

「あの、毎もの襪巻は如何なすつたと言ひ掛けて、不圖、天啓の様に頭の中へ閃くものがあるつた。「ね、引裂いたよ」

朋子は一寸顔を襟につけて、肩掛をいちづつ

見たが、に、と笑つて點頭いた。

「何日、あの夜、一ばん終ひに別れた夜？」

「ええ。」

それきり、二人とも又黙つて仕舞つた。要吉は左様して居ても氣が落着かない。對手の落着いて居られるのが腹立しい程落着かない。で、われにもなく立ちませうかと言出した。

朋子も直に立上つたが、何やら懶げになよなよとして見えた。

二人は又毎日の路を戻つて行つた。要吉は歩きながらも氣が苛つて、何か言ひたい、言つて仕舞ひたい様に思ひながら、偕て何を言はうにも、口へ出せば皆修辭的に成つて、今の自分の心持を本當に傳へ得ないやうな氣がして遺瀾がない。

谷中から園子坂へ降りる坂まで來ると、朋子は急に立停つて、

「先生、今日はお急ぎなんですか。」

「何を？」

「いえ、此方へ過つて歸らうかと思ひまして」と言ひながら、つと花見寺の方へ曲つた。要吉も黙つて隨いて行つた。しばらく行つても、朋子が何とも言出さぬので、

「ね、如何したのです」と、後から聲を掛けた。

「ええ？」と、女は顔だけ振向いた。

「如何したのです。私には解らない。」

「唯あの道を通るのが可厭でしたから、餘り度々通つたので——」

要吉は何と言ふこともなく自我の屈辱を感じた。だん／＼空模様は變に成つて、日も暮れるらしい。生塙に添うて、田舎に似た路がつゞく。

「私は一つ如何しても聞きたいことがある。」

良久らくして、要吉は四邊を見廻しながら言出した。朋子は返辭をせぬ。

「これだけ聞けば可い。貴方が九段の上で私に言つたことは——貴方自身の上に就いて——あれは事實か、それだけ聞かせて下さい。」

朋子は兩の様に黙つて仕舞つた。只管路を急いで行く。田圃一面、途の上にも夕鶯がかゝつて、しつとりと袂も染れたらしい。

二人は動坂の上で別れた。別れる時も、朋子は何とも言はなかつた。

三十

明くる朝、要吉はやつと九時前に寢床を出た。櫻枝を銜へながら茶の間を覗くと、小母さんは餉臺の上に小皿や茶碗を伏せて、其上に布巾を

被けたまゝ、ぼんやり待つて居る。其儘流元へ降りた。が、又氣を變へて、金盥と手拭とを掴んだまゝ、のそ／＼と水口から井戸端へ出て行つた。

井戸は門の内側に在つた。門の外を刻限に後れたらしい造兵の職工が、ちらほら通つて行く。要吉は釣瓶の水を汲んで、何處となく頭の後ろを冷して居たが、やがて筆を切つて立上つた。それから乾れた手拭で摩擦りながら、二たび金盥を下げて戻つて來た。茶の間の毎も坐る所に坐つて見たが、前の日の被れが持越して、朝から物を喰べるやうな氣はしない。で、型ばかりに筆を上げようとした時、不圖戸口で案内の聲がした。女の聲らしい。小母さんが出て、

「あの失禮で御座いますが、何方様で」と、訊いて居たが、間もなく顔の色を變へて這入つて來た。

「到頭遣つて來ましたよ。」

「うむ」と、要吉も息を喘ませた。

「ね、如何します？」

「如何もしない、通すさ。」

かう言つて、自分で出て行つた。土間に立つて居る朋子と顔を見合せて、一寸とぎまぎした

「何卒」と言ひながら、自分の居間へ招じた。

二人は向ひ合つて座に着いた。何方からも何とも言出さない。要吉は、それでも、思ひ掛けな

い女の來客が氣がかりで、如何して來たのか、早く其所因が知りたい。が、女の突詰めた容子と、充血した眼の色と、熱病にでも極つたやうな紅い唇とを見ると、迂闊にそんな事も訊かれない。朋子は目じろぎもせず男の顔を見返して居る。時々氣にしては、人並よりも引詰めた襟を無理に搖合せた。最う黙つて居るのが息苦しい。

「そこへ小母さんが茶を煎れて持つて來た。二人の顔を見較べながら、二たび機を閉てて出て行く。朋子は一寸其後を見遣つたが、「お邪魔ぢや有りませんでしたかと、初めて口を開いた。

「いえ、そんな事は有りません。」

其儘又話が途切れさうに成つた。要吉は机の上から象牙のペーパー、カッターを取つて、やけに頬邊へ押附けながら、

「ね、貴方は如何思ふ」と、漫ろに言出した。「神と人間との間には未だしも融通がある。それは左様でせう、人間が神を造つたのですからね。併し人間と人間との間には、それだけの融通す

らない。一層神祕的で、一層怖ろしいものぢやアないか。」

朋子は一寸眼を伏せたまゝ、別に何とも言はなかつた。

「が、併し如何することも出来ない。何うも仕方がない」と、要吉は續いて打捨る様に言つた。又ひとり呟く様に、「神が人間を造つたと云ふのは諺かも知れんが、人間が神を造つたと云ふことは爭はれない。」

何故こんな事を言ふのか、要吉は自分でも能く解らなかつた。が、てれ隠しに強ひて理窟にも成らぬやうな理窟を並べた。朋子はそれを辛抱して聴いて居たが、其眼は絶えず、左様ぢやない、そんな談話をするためにわざ／＼此處へ來たんぢやないと、不服と輕蔑とを讀つて居るらしい。要吉もそれに氣が附くと、相手の顔を見返したまゝ、俄に口籠つた。一時上氣した血の氣も漸次に落着いて、皮膚の底に暗い色を持つた女の顔は、傷けられた傲慢の象徴たる魔王の様に近寄り難い。

朋子はなほ四半時間も左様して居たが、急に、「最う歸ります」と言つて立上つた。

要吉はそれを停めるだけの力もない。で、ぐづ／＼上り框迄送つて出ると、女は下駄を

穿きながら、男の顔を見上げる様にして、

「ね、先生は是迄他人の夢を自分が見るやうな氣のしたことは御座いませんか。」

「他人の夢を自分が見る？」と、要吉は只繰返し

た。朋子は少時之間に立つて思案して居る様に見えたが、急に頭を下げて、後も振向かずに出て行つた。

要吉はそこに突立つたまゝ、ぼんやり其後を見送つた。女の姿が見えなく成ると、つか／＼と居間へ戻つて、のめるやうに机の前に倒れた。又すつく／＼と起直つて、何やら想出した様に机の抽斗を搔痒して居たが、やがて片々だけの女の手袋を取り出した。未だ眞新しいと思つて居たが、明るみで見ると大分手擦れがして、指の頭が黒く汚れて居る。要吉はそれを眼の前へ持つて來て、飽かず見入つて居た。

女は來た、此處に坐つて居た。何のために來たのか、それは最う考へたくない、考へるだけの精も根もない。只、あの女に取つて自分は何だらう。要吉は初めて此問題を自分の前へ出して見た。が、答ふるに堪へない。あの女のために自分は弄ばれ、苛まれ、又侮られもした。併し愛されたとは——女が自分の上に興味を持

つたと云へようが——愛されたとは幾許虫眞目にも思へない。それなのに、自分は却て女の冷酷な態度を喜んだ。女が自分に對して冷酷であればある程、却て心を惹かされた。今日迄自分が女に依つて心惹かされたものは、不安と猜疑との長い連續に過ぎない。が、この免れ難い猜疑の去つた時は、即ち女に對する興味の去つた時で、此戀を續けようと思へば、何時迄も猜疑の性となる外は有るまい。畢竟自分は性に過ぎない。而も同時に其目撃者だから堪らない。これが戀だらうか。斯んな戀はない。一種の病だ。昔から自分一人の病だ。

併しこの上幾度逢つたところで、矢張同じ事を繰返すに過ぎない。これを始めた者が、これを終らなければ成らぬ。それには禪學といふものに對する自分の反感を誇大して、二人の關係を茶番にして仕舞ふ外に道はない。只、それが堪へられようか。人は自分を道化視して尙生きられるものでは有るまい。

要吉は二たび茶の間へ戻つて、ひとり冷えた膳に向つた。何やら氣拔けがして、物の味も好くは解らない。で、箸を下に置くと、急に小母さんを氣き立てて洋服に着代へたが、「一寸其處まで」と言つたまゝ、街上へ出た。

最初番町の或家を訪ねて、かね／＼頼んで有る丸善の店を訊かうとしたが、折悪しく不在だと云ふので、言置をして其家を出た。新見の土の上に立つてぼんやり見渡すと、土手の草が青く萌え始めて、外濠の電車が仕切りなしに往來する。何だか自分だけは社會の傍觀者のやうな氣がして、名狀し難い寂しさが心の底から湧くと共に、ぽか／＼と背中に當る日影も怪しい。衣袋から時計を出して見ると、針が動いて居ない。時間も分らないが、午刻近い頃だらう。一人坂を降りて行く。

「ひとりだ、人間は終に一人だ。」

こんな言葉を口に出しても考へて見た。實際一人に成らうとして國の上に立つて見ると、一生の長いのが今更の様に悔らしい。

要吉は地面を見詰めたまゝ、こつ／＼洋杖の尖で小石を突きながら、淨瑠璃坂を登つて行つた。かねて隅江を故郷へ歸したら、自分も住み舊した丸山の家を出ようとして居た。寺住ひか、一人者の世話を見て呉れる間借りでもして、生活狀態を一變したい。で、方角の知れない大路小路を宛もなしにぶら／＼歩いて居たが、一向目に留めて搜すでもなく、何時しか余丁町の先から郊外の田圃の中へ降りました。

二たび坂を上つて、四五町行つてから植木屋の垣根について曲れば、神戸の住家だ。がら／＼と門のくぐりを開けたが、格子戸の前に立つたまゝ、主人を喚び出した。神戸は聲に應じてあらはれたが、

「まア這入りましたまへ。」

「這入つても可いが、少し其邊を歩かないか。」

「左様だねと、少し考へて居たが、やがて帽子を被つて出て來た。」

二人は鐵道線路に添つて雜木林の中へ這入つた。西に向つて眞直に走る四條の鐵路が、夕日を受けて白刃の様にきら／＼と閃く。要吉は神戸と肩を並べて、久らくそれに見悅んで居たが、又想ひ出したやうに足を上げた。

「寂かだ」と、獨言の様に言つたが、「何だか人が懐かしい日だね——終りの日が近づいたやうに。」

神戸は先に立つて歩きながら、不意に、「僕の戀も終つたよ」と言出した。

「如何して」と、要吉は思はず友の顔を見遣つた。

「なに、矢張豫期したやうな結果を見たのさ」と、又二間前へ出たが、一來月學校を卒業すると、大阪の親類へ嫁に行くといふんだがね。僕

のことだから、大概それで幕を閉ぢることだらうよ。」

要吉の眼には、昨日水道橋で別れた時の三枝子の容子がちらと映つた。が、別に何と言様もない。たゞ黙々として隨いて行く。

良あつて、神戸は又言出した。「此間僕がひとり教員室に居る所へ遣入つて来てね、初めは唯黙つて立つて居た。それから前の椅子に掛けるには掛けたが、凝手と俯向いたまゝ、何も言はずに手に持つた紙表紙の書物をざり／＼と唄つて仕舞ふんだよ。それを見た時は、何とも言はれない心持だつた。」

「左様だらう。」

「左様だらうは、少し同情が無き過ぎるね」と一寸後ろを振り回つた。「尤も、他人の戀といふものは同情の出来るものぢや無いかも知れない。」

要吉と神戸は顔を見合せて笑つた。が笑つた後は一層寂しいやうな氣がした。

「それぢや」と、十歩にして、要吉が言つた。「兎に角終つたのは此方だけぢやないと見えるね。唯、僕のは最初から始まらないと云つた方が可い。」

神戸は要吉の顔をじろ／＼と見詰めたまゝ、「又君の方から複雑にして仕舞つたのぢやな

いか。女は單純を望んでるよ。」

「如何だか」と、相手の眼を避ける様にながら、「僕は何時も胡粉を塗つた張子の岩に凭れて、臺詞をいふ積りて、戀でなけりや出来な人間だらうよ。」

「だが、それはね、何んな戀にも幾分か左様云つた要素の含まれないものは有るまい。草刈の戀も、二面から見れば藝術だらうぢやないか。」

「まア如何でも可いさ」と、ぼんやり四邊の野を見廻して居たが、「それよりも、僕は此頃何の女にも愛されたことが無いやうな氣がして成らんよ。」

「何の女をも愛したことが無いからだらう。」

「な様、愛しない者は愛されない。」

何時の間にか、四邊はほんのり黄昏れて、一軒家の障子に灯火が射した。二人は田の中の小徑を辿つて、ばつたり溝に行當つたが、何方を見ても橋がないので、それに添うた畔路を夕闇に包まれて行く。

「おい」と、要吉は背後から神戸を喚んだ。「君はド、キンゼイの『鴉片喰ひ』を知つてるか」

「知らない」

「僕も知らない。が、あの頃の連中はラムでもコールリツヂでも皆鴉片を吸入したもんだつて

ね。」

「うむ、鴉片は好い、少くともアブサンよりは好いだらう。」

「一寸飲んで見たいね。だん／＼量を多くするにつれて、意識が朦朧として、影が薄く成つて行くのは好いぢやないか。」

「漫性の日殺か、それも好いだらう。」

二人の話はしばらく途切れた。

村を一周りして、二たび神戸の家へ近づいた。座敷へ上り込んで、又尻を落着けたが、何うも談話が湧えない。何だか最後の言葉と言つた後のやうな氣がして、別段言ふこともない。

其夜十一時を過ぎて、要吉は漸く友の家を辭した。水道橋迄電車で来て、そこから砲兵工廠の練場について歩き出したが、角の交番に人簇りがして居る。何心なく立寄つて見ると、一人の醜漢が調査に小突かれて、何やら聲高に喚いて居たが、手早く突倒されたと見えて、地面に平這つたまゝ、急に聲を上げな／＼成つた。死んだものの様に口も利かなければ身動きもしない。

見物人は詰らなさうに一人散り二人散つた。

要吉も足を留めて見て居たが、

「此男の遣方の方が手取早い」とひとり呟いて、又すた／＼と歩き出した。

三十一

桃の花の色を褪まして、春の淡雪が降つた。朝の強い日影に照されて、早や乾きかけた街の上には、ちら／＼と水蒸氣の立上るのが見え

た。此日、要吉は小舟町の或銀行へ行つて、故郷から取寄せた小切手を金子に換へた。又泥濘の道を大通りへ出て、雷車で精樂町の教會迄來た。今日は此處で金葉をひらく日である。尤も、女學部は學年試験を卒へて、二三日前から春の休暇に成つた。教會の窓は盲目の目の様に閉されて、玄關の戸だけ一枚開いて居るが、會堂の中はたゞ薄暗い。要吉は街の真中に突立つたまま、少時思案して居たが、つと振回つて、向側の珈琲店へ這入つた。朝の間だから他に客もない。毎時掛ける片隅の椅子に腰を下したが、其儘兩肘を立てて額を支へながら、凝乎と考へに沈んだ。

最う一度朋子に逢はうと思つて此處へ來た。二人の關係を終るには、切めて藕切なりと好くしたい。出來ることなら言ふことも言ひ、聞くことも聞いて、すべて精算した上で二たび相見ないやうに成りたい。併しそれは無理な註文か

も知れない。實際世の中では何事に據らず、斯うしてぐ／＼と片附いたとも片附かないとも分らぬ間に、何日となく済んで仕舞ふものでも有らう。それを思ふと堪へられないが、其可厭な心持さへ何日迄續くものでもなからう。人間が絶望するのは未だ好い。絶望の悲哀よりも生き延びるのは堪へ難い。——斯んな事を思ひつづけて、給仕の女が持つて來た珈琲茶碗の冷めたのも知らなかつた。

此時、不意に入口の戸を開けたものがある。要吉は額に當てた手を外して、ぼんやり女の顔を見上げた。朋子は血相變へて齒を咬ひしづたまゝ、眞直に要吉を口寛けて、這入つて來たが、突然懷中から四角な狀袋を出して、

「今直ぐこれを讀んで頂きます」と、男の前に突附けた。

「これ迄の手紙とは違ふのですから——これが私の言へるだけの眞實の心持なんです。今朝からひとり教會の二階にお出を待つて居ました。讀んでお仕舞ひに成つたら何卒彼方へ來て下さいまし。屹度御返事が伺ひたい。」

斯う言ひ捨てて、其儘男の返辭も待たずに出て行つた。

懷中の長い手紙は終に出された。要吉はそれ

に手を懸けたまゝ、少時思ひ煩つたが、思ひ切つて取上げると直ぐに封を切つた。一尋に餘る巻紙に苛々した鉛筆の走り書きがつゞく。

先達て不意に御宅へ伺ひしこと、何と思召し取り下さつたでせう。私は最う堪へられなく成つた。是迄先生を欺き、自己を偽つて、心にもなき言葉に行為に、侮迄自己を晦まし得る積りで居りましたが、最う駄目です。私は無残に敗れた。血と肉との續く限り争つて見ましたが、最う自分で自分を制御することが出来なく成つた。此前お目にかゝつてから今日迄、一週間は全く夢中で生きて居た。徹宵靜坐も續けて見たが、何の甲斐もない。昨日は朝から家を出て、王子の友達に會ふ積りで海神寺へ行かうとしましたが、途中で會つても仕様がなかつた云ふ氣がしたから、圖書館へ這入つて、一日人と物を言はないで暮しました。今日も一日目白僧閣へ行つて、彼處の欄干に凭れて、網の様に成つた木の間から冬ざれの田圃を瞰下して居たが、矢張如何することも出來ない、如何しても日頃の冷靜な自己を

取返すことが出来ないで、又ふら／＼と其處を出て、宛もなく街の中を彷徨う間に、二三度も轉けて路上に倒れた。其儘意識を失つて、再び立たなかつたらとも思つた程です。

此頃は家の者も心配仕出したので、取分け母の顔を見ると氣の毒で堪へられませんでした。今夜も早くから自分の居間へ閉籠つて、誰が來ても動かない様にして居ますが、私は最う駄目だ。先夜の夢は戻つて來た。何度でも繰返して執拗く戻つて來る。空虚な夢は紙に肉附けられねば止まぬ。最う抵抗する力が無い。私は永遠に失はれた。

私は失はれた。此手紙は胸に取返し附かぬ痛傷を受けて、死者狂ひに成つた女が最後の努力である。書く、書く。この上は只書けるだけ書いて、一步でも先生に接近する道を求める外はない。

何日ぞや先生は私をスフィックスのやうな女だと仰つた。先生は最うおぼえて被坐しやらないかも知れない。が、何故私はスフィックスのやうな女に成らなければ成らぬか。敗北したことを切りに感

じたからです。私はスフィックスのやうな態度を装つてならば、何時でも先生と握手する資格がある。けれども、今これを書く間は、先生と眼と眼を見合せることは逆も出来ない。私の苦痛は私の口から誰に向つても言へない、無論言つた所で同情同感などして呉れる人が有る筈もない。私には友達もない。家もない。一人で堪へて來た、最後迄聞ふつもりで生きて居た。若し私に自分を非我の地位に置いて觀察する習慣がなかつたら、疾うに狂したか、今頃は如何成つて居たか分らない。唯、私は一方バツションに驅られて動いて居ると同時に、他方には餘裕のある我が見て居た。餘りに怖ろしい迄勃發しきうに成ると知つた時は、大抵意力で制御して仕舞ふ。私は自分を制御する上に始終坐禪の力を藉りて居る。私は禪の思想を口にする資格はない、只自分を制御する上に使つて居る。

何日ぞや御同行した日暮里の兩廂庵は、私がい物好から彼處へお連れ申したとも思つて被坐したかも知れませんが、あれは私が三年前夢中に成つて坐つて見

性した所なのです。それで先生と闘ふ時、彼の家を一度見て置きたく成つたのです。先生もお聞き及びでせう、釋宗活と云ふ坊さんを。

けれど、それも最う駄目です。私は最後迄來て仕舞つた。最早私には何物も残されぬ、有るものは只恐怖と不安との連續である。靜に自分の最後を味つて死ぬと云つたけれど、それさへ今の状態では覺束ない、最う叶はぬ。私は先生の御手にかゝつて死ぬ——殺して頂く。

勿論、日夜それ許り考へた上で極めたのですから、此決心は動かぬ。只一つ遺憾なのは、私が死んでから先生が如何變化して行くか、それを見ないのが残念で堪らないのですけれど、斯う成つた上はそれも仕方がない、思ひ切る外はない。

三月十九日夜半
小島先生
御許に

此手紙は直接手から手へ渡すべきものだ。

一昨日の眞夜中に書いたものらしい。要吉は

一旦ずつと眼を通して、又初めへ戻つて二三行読み掛けたが、わな／＼と震ふ手に巻返した。終に其日が來た。自ら招いた總ての力の壓迫を一身に受ける日が來たと思ふ許りで、頭の中は白紙の様に何の考へもない。何の感情も動かない。不意に帽子を取つて立上つた。又想ひ出した様に紐入から珈琲の代を出して拂つた。其儘後をも見ないで街の上へ飛出したが、急に足を緩めて、

「殺せと云ふのは、斷念せよといふ他の言葉ぢやないか」と、われにもなく呟いた。

兎に角教會の玄關を這入つた。二階へつゞく梯子段を絞首臺へでも上るやうに、一段づつ刻んで、俯首れながら登つて行く。其時上からも朋子が降りて來た。互にそれと知りながら、なほ一足つつ近づいて、二人は梯子の中段で行逢つた。要吉は下から女の顔を見上げた。見る見る女の眼の下から大粒な涙が持上つて、はらはらと頬から襟に傳はつた。朋子はそつと欄干に凭れて顔を背向けたまゝ、それを拭はうともしない。要吉は眼の常り人間の魂の苦痛を見るやうな氣がして、暫く物が言へなかつた。無言の間に五分間経つた。やがて男は女の顔から眼を離さないで一步退つた。朋子も一步隨

て來た。二人は梯子段を降りて、こつそり其下の扉をあけて這入つた。

人氣の絶えた會堂の中は、人の肉を得て、急に四方から陰森の氣が迫る様に思はれた。要吉は椅子を引寄せて、女の座を設けたが、朋子はそれに掛けようともせず、男の傍に立つて居た。少時して、要吉は口を開いた。

「お手紙は——確に讀みました。」

女は涙を一枚溜めた眼に男を見返したが、只點頭して見せた。

「貴方に接近する爲なら、私は何んな事でもする。何んな事でも踏がぬ積りだ。唯、あれぢや未だ解らない、あれだけぢや——」

朋子は屹と成つた。

「ね、あれだけぢや」と、要吉は言葉をつけた。「あれ以上言へないのか、あれより外に言つて呉れることは出来ないのか。」

女は靜手と睫毛を伏せたまゝ、何とも言はない。要吉は苛々しながら女の返辭を待つて居たが、何時迄も黙つて居られる苦しさ、

「それぢや聞かない、強ひて聞かなくとも可い」と投出す様に言つた。「私はどうせ何も知らず貴方に隨いて行くのでせうよ。」

朋子はつと男の腕に取纏つた。男は片手を

出して支へながら、「只あの夢とは？ 夢とは何です。」

一歩背後へ傾けたまゝ、女は凝手と男の顔を見詰めた。

「あの夢とは、手紙の中の夢とは？」

「それを私の口から——」

「言へない？」

女は點頭した。がたりと椅子の倒れる音がして折重るやうに、二人の……

「私は負けた。あゝ、最う私は——」

女は男を抑退ける様にして立上つた。

此女の愛は——愛は此女に取つて勝利である。自分が此女から愛せられるのは、此女が負けた時である。血汐の中に打ち廻つて居る時である。そんな風で愛せられるのが何の嬉しからうぞ。要吉はデレマの上に立つた。少時敵意を有つた眼に女の顔を見据ゑて居たが、

「それぢや」と、何やら不圖想ひ着いた様に前へ乗出して、「何日かの朝私の許へ飛んで來たのも——」

「矢張悪い夢に醒はれた後でした。」

男はたい息を詰めた。

「そりやア生死の争ひだつた——海の暴風

雨の様に怖ろしい」と、女は夢見る様につづけた。「私は最う一人で生きていることが出来ない。」「二人で生きていることも——？」と、要吉は相手の顔を覗き込む様にした。女は石の様に動かない。

「何故、如何して？」

「この上生かして置くのは餘り酷い。一日生きて居れば、一日だけ悲惨な死方をするだけです。」

斯う言つて、思はず延上る様にしたが、「先生だけは知つて居て下さると思つた。それでなけりや上野の森で、あんな真似は出来ない。」

「上野の森で？」

「解つたでせう」と、塔から飛び下りるやうな聲で言つた。

「私は最う自分の疾病と争ふのに勞れた。私の運命は米の墓か、癡狂院か、二つに一つを選ぶ外はない。」

火か、さらずば水——それは最初に此女から聞いた言葉だ。それぢや、此女の正體は火で有つたのか、火は駄目だから水に着くと言つたのも、左様云ふ意味で有つたのか。火が火に着けば、自ら亡びる外に道は有るまい。

「それで」と、要吉の聲はかすれた。「それで水

の墓を選んでのか。」

「先生も——私を癡狂院へ送るやうなお心持は無いでせう。」

要吉は黙つて女の顔を見詰めた。人並外れて思ひ上つた女が、自他も辨別も無く成つて、鐵の棒を立てた檻の中で荒れ騒ぐ——そんな怖ろしい將來の運命を明かに見ながら、じり／＼と自分を制御する力が衰へて、負けて、狂つて行く。それを又自分で眼を離さず見て居る。何といふ奮闘を續けて來たものだらう。而も一人で、全く一人で、絶望的に——最後の勝利は米の墓の外はない。

要吉は黙つて手を出した。朋子はつと其手に縋つたが、其儘男の膝に顔を埋めた。それが如何にも狂人の残酷な心から、相手を誘惑して同道に引摺り込まねば置かぬ、一緒に狂ひ死にさせねば置かぬと云ふやうに見えた。

何れにもせよ、自分は性に過ぎない、此女の性に過ぎない。

「私は殺せる、貴方なら殺せる。」

他から促されてもするやうに口走つた。此女を失ふまいと思へば、此女を殺す外はない。

朋子は眼を上げて、屹と男の顔を見違つたが、二たび顔を伏せたまゝ、聲を立てて獻辭く。要

吉は手を掴んで女の泣き止むのを待つて居た。其間、少し落着いたのを見て、

「其日は？」と、小さな聲で訊く。

「何日でも、先生の好きな時——」

「早い方が好い。」

女はむつくり起直つて、少時考へて居たが、

「明後日の朝十時迄に、海禪寺へ来て下さいまし。私はそれ迄に其處へ參つて居ります。」

朋子は起直つたついでに、袖で涙を拭いて、居る。要吉も並んで腰を掛けたが、身體が甚くがつかりして、恰度二人が難船して無人島の荒濱へ打上げられたやうな氣もした。何

も言ふことがない。玄關から吹込む風に煽られて、入口の扉がぱたんと大きな音を立てて閉まる。又開いて、又閉まる。二人はそれに見枕れて居た。

やがて朋子が振回ると、自分の顔を見て居られたので、眼に露を有つたまゝ、につと唇を締めたが、二たび男の腕に凭れようとした。

「最う此處を出ようか。」

「えゝ。」

二人はそつと立上つた。金葉會の連中が申合せた様に出て來ないので、會堂の中はひっそりとして居る。で、玄關を降りようとした時、

何かに躓いたと見えて、朋子はよろ／＼と地面に膝を突いた。髪の毛の根元迄顔を赧らめながら、袴の泥を拂ひ／＼立上るのを見送つて、

「え、負傷をしない？」

「いゝえ」と、傍へ寄つて来て、「此頃は好く轉ぶんです。」

何やら想ひ出した様にくす／＼笑つて居た。要吉も片頬に笑ひながら、一町餘り一緒に來たが、町の曲角迄來ると、

「ぢや、此處で」と立停つた。一人に成つて考へたかつたからだ。

朋子は泥濘の道を一文字に歩いて行く。少時其後姿を見送つて居たが、又ぶら／＼飯田橋の方へ向つた。一人に成つて見ると、又何がなしに淋しい。未だ言残した事があるやうな氣もして後を追掛けて見ようかとも思つたが、思ひ返して止めた。

飯田橋の上に立つた時、不圖今朝出掛けから難ひに行く心算で居た或亡友の遺族のことを想ひ出した。今度其友の遺族を出すについて、本屋との交渉も略纏まつたから、旁それを知らせに行くのだ。其人達は牛込の奥に住んで居る。で、ぶら／＼神樂坂を登りながら、要吉の眼には去年の夏爛れたやうな炎天の下に、こつ

そり友の柩を送つた寂しい行列が泛んで來た。友は人を愛せず、又人にも愛されなかつた。大學を出て間もなく死んだので、其名を記憶する人も有るまい。今頃遺稿など出されるのは、故人の本意でないかも知れない。自分も——萬一そんなことに成つたら——後に何物も残したくない。嘗て此土の上に足跡を印したことがないかと思はれる迄、清潔に此世から忘れ去られたい。

友の家では母屋を他人に貸して、裏の離座敷めいた小家に住んで居た。阿父さんは非職軍人とかで、縁側に火桶を抱いて坐つて居たが、眼だけぎよ／＼として、むくんだ顔が何處やら病らしい。要吉の來意を聴いて、やつと安心した様に重たい口からぼつ／＼と自家の事情を語つた。死んだ息子ばかりでなく、其兄弟が皆虚弱で、後から／＼と一人づつ取られて行く。此後に男の子とて季の第一人しかないので、健康やら活計上の都合やらで、近く一家を擧げて沼津へ引越すのださうな。こんなじめ／＼した話を聴いて居ながら、要吉は妙に心が浮ついて居た。何だか自分の役でない役目を勤めて居るやうな氣もした。

其家の門を出た時はほつと息を吐いた。枳殼

の垣根についてそろ／＼足を運びながら、兎に角、生前にすべき事を一つだけ済ましたやうな氣がした。同時にそれだけ前途が詰つたやうな氣もした。何時の間にやら日もとぼ／＼と暮れて、空は曇つたのか暮れたのか、毛筋のやうな雨が降つて居る。

それにしても——要吉は二たび女の上に戻つた。それにしても、あの女の言ふやうな、そんな事が有り得ようか。長い間心に被さつて居た重荷の除れた嬉しさに、一も二もなく女の言ふことを承認して來た。けれど、女の通りだとすれば、あの女は——何日ぞやあの女の口づから、自分は女でない、如何してもそんな要求の起らない身體だと聴いた。それは全然裏腹だ。が、それ迄にして女が男を譴弄する——何うもそんな事は考へられない。「女でない」と言つたのも、只わが身の苦しさに、太様ふふ境地を夢みながら、辛うじて生きて居るのだとすれば、極端から極端に走るあの女の性癖として、さのみ不思議ではない。それに上野の森で見たあの女の狂態も、強ひて女の言ふ様に解すれば解されないでもない。が、それにしてもエロトマニヤとは彼様なものだらうか。何うも左様は思はれない。あの女にしても、あの怖ろしい多感

性が自制を困難にして感情の暴ぶが儘に任せた時は、自分ながら不安の念に堪へないことも有らう。それが爲に苦悶が内部に湧いて、烈しい倫理上の葛藤に對する不完全な渴望から、自分を動物性に墮落したものと想像して娛しむ——そんな事がないとも言はれない。若し左様だとしたら——それだけの事だとしたら——が、併し——と、やゝ有つて又考へた。その女の狂氣を此方から癒すことが出来ないといれば——あの女を自分の手から離すまいとすれば、あの女をあの女の言ふが儘に狂氣にして置く外はない——あの女の言ふことが事實にもせよ、想像にもせよ、何方にしても同じ事だ。自分はたゞ一刹那あの女と同化し得れば可い。只一瞬間。それに依つて萬事休す矣。實際、自分は女を殺さうと言つた。そんな怖ろしい事を口にする自分は、それぢや怪物か。いや、犠牲に過ぎない。あはれな、性に過ぎない。あの女はあの女自身のために死ぬ、死はあの女に取つて一種の勝利である。それに自分は——自分はあの女を手に掛けるかも知れない。が、殺されるものはあの女ぢやない、自分自身である。あゝ、自分は今日迄他人が自分の爲に死ぬものだと思つて居た。自分が他人の爲

に死なうとは夢にも思つて居なかつた。何んなロマン스에於いても、自分が主人公になれると思つた。脇師の役を勤めようとは思はなかつた。が、それも成行なら仕方がない。只切めては自分が死んだと聞いたら、後から隨いて死ぬ女の一人位は有りたいたい——要吉は後に遣して行く女の顔を一人々々心に記て見た。そして小雨に濡れながら江戸川の終點に立つて、ぼんやり電車を待つて居た。松ヶ枝町で電車から下りた時は、雨がびしよびしよと降出した。頭からづぶ濡れに成つたまま明神下の横町を曲つてお種の家の格子戸の前に立つた。こと／＼といふ足音を聞附けたのから、上り框の障子を開けて羽織を着た女がすりと立つた。——まア大變！」お種は大業に男の姿を眺め遣つたが、下駄を穿いて、格子戸の框を外して呉れた。要吉は黙つて土間へ這入つた。上り框に腰掛けて、雨水に濡つた靴を脱ぎ難さうにして脱いで、女が外套を受取つて縁側の竿に掛けに行つた間に、茶の間へ通つたが、灯火が一つ點いてる許りで、誰も居ない。お種は戻つて来て、速てて座蒲團をすゝめた。

雨はしと／＼と降る。要吉は氣味惡さうに何處も半巾を出して、頸筋の邊りを拭つた。お種はそれに氣が附いたが、平時と容子が違つて居るので、時々男の顔を偷むやうに見遣りながら、其譯を聞かうともしなかつた。要吉も別に説明しようとはしない。「何様は？」と、少時して口を開いた。「今一寸お湯へ」と、背後を見返つたが、又元の通りに向直つた。「皆様お變りはないか。」「えゝ相變らず。」「要吉は最う何も言ふことがない。何の爲に此處へ来たのか、自分でも解らなく成つた。折柄、又格子戸の開く音がした。お種の姉が湯から上つて来たものらしい。茶の間の障子を開けて、何氣なく顔を出したが、「おや、被入しやいまし」と、下町の主婦さんらしい丁寧な挨拶をして、「何卒御免なさいましよ」と、石鹼や濡手拭を掛けに行つた。やがて又茶の間へ戻つて来て、長火鉢に寄添ひながら、「何だか鬱陶しい御座んすねえ。おや、濡れたまゝで被入した？ 何故着代へて頂かないんだ

え。あれが未だ一度も手を過ぎないから良人のあれが好いよ。」

「私なら直ぐ歸るから」と、要吉は口を挿んだ。「まあお宜しいでせう。良人も直き歸つて参りますから、今夜は何卒御寛り遊ばして。」

「姉さん」と、お種は姉の顔を見て、「あれは如何なの？ 此間阿母さんが持つて来たのが、今日漸と仕立上つたから、未だ重しが掛けてあるけれど。」

「左様、そんなものが有るんなら早くお出しなさりや可いのに。」

お種は向うの部屋へ行つて、仕立板の下から銘仙の袴を持つて来た。要吉が去年着たのを洗ひ張り出したので、何日の間にか此處へ持つて来て仕立直したものと見える。要吉もそれを着て見るやうな心持に成つた。で、立上つて手を通すと、姉妹二人がかりで仕附絲を取つて呉れた。姉はなほ袖だの裾だのを引張つて見て、

「好い、好い、よく出来た」と獨言の様に言ふ。お種は下を向いて附捨て洋服を纏んで居た。

こんな夜は小さい時分の事が憶ひ出されると言つて、二人の姉妹は火鉢に鐵網をかけて、か

き餅を焼いた。お種は割合に言葉少なにして居たが、姉は一人ではいまいだ。要吉もたうとう十時頃まで居た。始終自分が如何して斯様にして斯んな話をして居られるかと疑ひながら、矢張りぐづぐづと相手に成つて居た。そして、何も言ひ出さないで、杜時計が十時を打つのを聞いて立上つた。

雨傘をさして寂靜まつた町の中へ出た。物足らぬといふ感じの外に何も残らない。何と思つて女に會ひに行つた。たゞ女の涙が見たかつた。女が遺飯の上に注ぐ涙を生前に見て置きたかつたのだ。併しこんな不純な心持が本當に死を決した人の心に泛ぶもので有らうか。眞個要吉は死よりも死が齎すものを望んで居たらしい。

三十二

中の一日は、朝からじめ／＼と雨が降り續けた。要吉は居間に閉籠つて、これ迄自分が關係した仕事の中で、早速片附けて置かねば他人の迷惑になるものだけを調べにかゝつた。平氣で死ぬ準備をする云ふことに、一種の興味をおぼえながら傍目も振らず手と目をを働かせた。小母さんは一二度茶を煎れて持つて来たが、そ

れも邪魔に成ると思つたかして、直に引退つた。夜の十一時頃迄に漸く一通り片附いたので、茶の間へ行つて見た。近頃は小母さんも年を取つたのが目に立つ。努めて何かと話しかけたが、頻に睡さうで氣が乗らない様に見えた。洋燈も油が乏しく成つたと見えて、幾度心を上げて見ても見る／＼四邊が薄暗く成つて行く。要吉は云ふべき言葉もなく、老婆の病せて陰影に成つた顔を眺めて居た。間もなく居間へ戻つた。

其日は来た。雨上りの空が蒼く暗れて、櫛の枝に露が滴つた。彼岸の入りだと云ふので、小母さんは心ばかりの用意をした。要吉は平時の様に朝飯の膳に向つたが、何氣ない體で、「今日は千葉迄行つて来ようと思ふが」と言出した。「千葉へ？」と、小母さんは眼を睜つた。

「急な用事が出来たから」と、速てに言辭をしながら、「今夜は歸らないかも知れんが、明日は屹度歸る。」

直に立上つて身支度をした。小母さんは飽氣に取られなばら手傳つた。

要吉は小母さんの氣が附かね様に、一昨日銀行から受取つた金子の折半と、それが用途を指圖した一封の手紙とを用筆筒の中へ入れて置いた。

門外送つかくゝと急ぎ足に出て、一寸橋の上に立停つたが、其儘後を振向かなかつた。

三丁目から電車に乗つて、浅草の門跡前で降りた。わく／＼しながら、松葉町の寺を訊ねて行くと、海禪寺は容易く分つた。門を這入る時、偶と自分は此寺へ何爲に來たのだらうと思つた。何爲にとは、要吉が最も考へるのを恐れた所だ。成るべくなら終ひ迄自分が何を爲てるかも忘れて居たい。

境内は閑かに、一株の老松が四邊を支配して居た。只左の方に學校か寄宿舎か、ペンキ塗の不恰好な建物が見えて、庭に石炭殻を敷いたのが稍うとましい。

要吉はぼんやり玄關の前へ立つた。御立を一枚立てたきりで、開放しだから奥の方まで見透せるが、森として物音一つしない。二三度聲を掛け、誰も應ずるものがない。不圖、朋子は來て居ないのぢやないかと云ふやうな氣がした。本當に彼の女が來て居なかつたら、最初から自分を騙したのだとしたら——只自分が騙されたといふだけで、實際にも何事も起らずに済む。未だそれにも咄くはない。——要吉は裏心自分がそれを費つて居るやうな氣がして、思はず後を振回つて見た。

其時、腰衣を着けた若僧が一人鋪石の上を横切つて駈けて行く。喚び留めて、これ／＼の人はと訊くと、直様心得て走つて行つた。女は矢張來て居るらしい。

間もなく廊下の向うから、朋子が小走りに出て來た。敷臺へ降りて一禮したまゝ、二人は顔を見合せて立つた。やゝ有つて、

「ぢや」と要吉は片足引いた。

「少し、少し待つて下さいまし、友達が來て居ますから、一寸左様申して参ります。」

要吉は黙つて點頭いた。朋子は其儘引回したが、やがて二たび現はれた。

玄關を降りる時に、朋子は小さい女靴を穿いた。服装は二人が初めて水道橋で用違つた日に着て居たものらしい。

二人は門を出た。要吉は何處へ行くとも告げないで前に立つて歩いた。門跡前から裏前の通りへ出て、須智橋詰の或銃店の前迄來ると、つと其店へ立寄つた。少時經つて其店を出たが、路傍の柳の下に待合せた女の側へ來て、

「ね、拳銃は賣るが彈丸は賣らないさうです。近頃新聞などの廣告を見て、警察の認可證が無くとも可いことに成つたんだらうと、一人極めて極めて凡たんですが——」と言ひながら、何だ

か自分の行爲がわざとらしいやうな氣がして、女の手前恥かしかつた。要吉のつもりでは、只かうして自分をぐん／＼引返し難い境地に連れて行きたかつたのだ。

「左様でせう」と、女は平氣で居る。

「左様だ、貴方に訊けば分るんでしたね、お宅には屹度有る筈だ。」

「えゝ、ですが父の居間に所藏つて有るんですから。」

二人は足の向いた方へ宛もなく歩いて行く。

「それでなけりや不可いんですかと、やゝ有つて、朋子は一言づつ區切りながら言つた。「短刀なら、私が持つて居ますが。」

短刀！ 要吉は右の腕が痙攣するやうに覺えて、竊と自分の掌の甲を見遣つた。

「此處に？」

「吉く自宅へ歸つて取つて参ります。」

男は稍躊躇つた。

「是非それにして、是非——私はそれが好い」と、女は急に子供の強請るやうな容子をして見せた。

「ぢや、私は何處で待つて居ませう？」

女は腫れぼつた眼臉を伏せたまゝ、少時考へて、「停車場なら、田端が一番近いんですが！」

「田端に？」

二人は落合ふ先を約束した。それから又雷車に乗つて、上野山下まで来た。男は人力車を備つて女を乗せながら、

「貴方の来るまで、私が耐へさせられる苦痛を記憶えて居て下さい。」

朋子は眼で點頭いた。女の乗つた車は見る間に屏風坂の方へ走り去つた。

それを見送つたまま、要吉は二たび上野の停車場へ出て汽車で田端へ来た。

岸についた坂を上つて、道の二筋に分れる處に、一軒御休憩所とした家を見附けた。二階へ上つて見たが、氣ならぬ儘に又其家を出た。

其邊の雑木林の中へ這入つて、小路といふ小路を隈なく歩いた。

午後一時に成つた。前の家へ戻つて見たが、朋子は未だ来て居ない。何よりも考へるのが怖ろしいので、又引返して村の中へ這入つた。裏の菜畑の中に的を設けて白髪隠居と酒屋の御用聞きらしいのが夢中に成つて大弓を引いて居た。其處にも久らく立つて見て居た。

何時の間にか、空がどんよりと曇つた。二歩と村を出て、われにもなく駒込へ行く道を辿つた。此邊は一體にいい先頃迄田圃の中であ

つたが、兩側に新しい借家が建つて、だん／＼

町を形造つて行くらしい。今も屋根に梯子を掛けて、「酒醬油卸小賣所」と筆太に看板を書いて居る男があつた。大が二尺断けて来て、往來の眞中に咬み合つて居たが、又向う裏の明地へ断けて行つた。何だかこんな些細な事にも心を

取られるのが自分ながら可訝しい。

駒込避病院下の坂まで来て、一寸立停つたが、又你々上つて行つた。

避病院の側の細い路を曲つて、板塀の盡きる所迄行つて見たが、又中途迄引返した。塀に添うて立てた往來安全の角燈の下に、長い間行き所の無い人間の様に佇んで居た。衣袋から巻煙草を取出したが、生憎燐寸が無い。四邊は日が暮れる様に薄暗く成つて、霧が二つ三つ帽子の縁を掠めてはら／＼と降つた。又半町許り歩いて、駄菓子だの草履だのを賣る店の前に立つた。裏口まで見透せるやうな小さい家だが、

火の氣の無い火鉢の側に、六つ許りの女の兒がしく／＼と泣いてる許りで、店の人は居ない。

「燐寸をお呉れ。」

女の兒は兩手を眼から離したまゝ、戸口に立つた人の顔をじろ／＼眺めて居る。

「燐寸をお呉れでないかと、要吉は故と微笑む

様にして言つた。

つか／＼と立つて薄汚れた手に燐寸を掴んで差出した。

「幾許？」

「一錢お呉んな。」

要吉は鼻口から錢を出して拂つた。其處を去つて、富士神社の前から吉祥寺の通りへ出た。雨まじりの霧がばら／＼と降つては、又小止む。

町の角に小さい稻荷堂がある。此處を曲れば朋子の家に一町とはない。一寸足を留めたが、顔を見知られぬを幸ひに、其家の前まで行つて見ようかと云ふ様な心持に成つた。二三歩足を移した時、その人力車宿からつと一人の女が出て来た。女は朋子だつた。平常着に紅い帯を締めて自宅の使ひにでも出たものらしい。

朋子は男と顔を見合せたまゝ、側へ寄つて来て、「十時迄には屹度出て参りますから——十時迄に。」

何やら醜く昂奮してる様に見える。要吉は唯黙つて點頭いた。そして直に踵を回した。女も急いで戻つて行つた。

男を待たせて置いて、平常着に變へて平氣で自宅の用をして居る。要吉も變に思はずには居

られない。が、一旦家へ戻つたら、そんなに容易く出られない事情も有らう。それには又家の人達に油断を爲せる必要が有るかも知れない。左様思ひ返して、女の言ふが儘に待つことにした。

が、それにしても――要吉の考へは再び同じ所を彷彿た。此處で若し朋子に逢はなかつたら、二人の運命は如何變じたらう。それは自分にも解らない。何だか此處で逢つたと云ふことだけが、二人の運命を支配して居る様にも思はれる。併しかう成つた上は仕方がない、仕方がない。

十時まで――それ迄は何處かに時間を消さなければ成らぬ。やがて退分へ出たが、今朝出た丸山の家も程遠くない。あの家にも六年近く棲んだ。他所ながら最一度見て行きたい様にも思はれる。が、それと心を決しかねて居る間に、又大學の前迄來た。

「二たび此土を踏むことは有るまい」と、そんな思ひを味ひながら、街の上に立つて見渡した。不圖、向うから一人高い襟をした男の遣つて來るのが眼に着く。要吉を見て、遠方からにやにや笑ひ掛けたが、通りすがりに帽子を脱つてお叩頭をした。自分を知合と思つて居るらしい。

何と思つたか要吉は青木堂へ寄つて、ウキスキイの大壺を購つて下げた。又三丁目へ出て、切通しの坂から池の端の賑やかな街を抜けて、二たび上野の停車場へ着く。汽車に乗つて田端へ戻つた。

崖の家の二階へ上つて、障子を開けると、冬枯の樹の間から八州の平野が見渡される。窓の闕の上に肘を突いて、暮れて行く空と野原とを見守つた。

「此日は二たび來ない。自分は取返しの出來ぬ一步を踏み出した。」

こんな感じが蘇々と胸に迫つた。自分は此日を失つた、過去を失つた。總ての持てる物を抛つて、一瞬時に殉じようとして居る。其一瞬時は未だ來ないのに、既に總ての物を失つた。生れて、此日ほど取返し難いと思つたことはない。

要吉はつと立上つて、薄暗く成つた部屋の中をぐるぐると廻り出した。そこへ女中が洋燈を持つて來た。で、又其前に坐つたまゝ、凝手と火影を見詰めて居た。死刑囚が刑の執行を俟つ間の苦しみは何んなものか知らない。要吉は一生の間に此一夜を経験した。

やがて又女中が膳を持つて來た。づぶの山出

女と見えて、何かと物を言ふたびに、いッいッといゝと身體を揺つて殆ど聲を立てないで笑ふ。それが側目の日にも苦しさうに見える。要吉は可厭な心持がしたので、箸を附けたまゝ、直に膳を下げさせた。

又一人と成つた。死の覺悟して、ひとり火影に對する人の心持は斯んなものだらうか。昔から死んだ人の心理を書いたものはない。有れば皆、死なない人の書いたものだ。自分は死なない人の空想を實現しようとして居る。死を決したから總ての物を捨てたのぢやない、死を決する爲に總ての物を捨てたのだ。何を捨ててもあの女の運命について、最も重大なものを我手に握りたいと思ふ。唯此思ひに、人間に許されざることを敢て爲ようと決心した。此決心は神迄動搖しない積りだ。唯、此決心が動搖しなければしない程、如何いふものか、それが不合理で、奇怪で、てんで遂げられない事の様にも思はれた。勿論自分では、一番善い道を執つて居る、此外に執るべき道はないと信じて居るのに、自分の意志に反して、そんな心持が絶えず頭を擡げた。が、これ迄自分の生涯は一つとして此處へ到着する準備でないものはない。一步々、此處へ近づいて來たのだ。今日迄の何

れの日も取返されない様に、明日も最早動かされぬ。運命は二人を連れて行く處迄連れて行かねば止むまい。

が、併し——と、要吉の心は再びわれに反つた。此處迄出て來てから、なほ運命に依頼し、相手に依頼して居る自分は、何といふ卑怯者ぞ。此上は只朋子が待遠しい。早く朋子が來て呉れば可い——

九時を打つた。要吉は外套を被つて戸外へ出た。木下闇の暗い坂を降りて、停車場の時間表を見に行つたが、十時五分に高崎行の終列車があることを見定めて戻つて來た。此家の勘定を済まして、何時でも立たれる様にして置いて、壁に凭れたまゝ眼を閉ぢた。

戸外の夜風が耳に附く。幾度か物音に驚いて立上つた。最後に一輛の人力車の駈けて來る音がして、坂の上で停つたかと思ふと、車夫が聲高に物を訊ねる聲がして、車上の女の聲も交つた。

要吉が梯子段を駈け降りた時には、車夫が氣たゝましく大戸を叩いて、女中が建てて戸を開ける所であつた。朋子は黒絨のコートを着て、せいゝゝ息を切らしながら土間へ這入つて來た。

二人は二階へ駈上つて、少時顔を見合せたま、何とも言ふことが出来なかつた。

朋子は終に親の家を棄てた。要吉は人の世に許されざる罪を犯した。あゝ、二人とも失はれた。

女は男の腕に身を委ねたまゝ長く離れなかつた。

「ぢやア直ぐに。未だ終列車には間に合ふ。」朋子は點頭した。其儘二階を駈け降りて、戸外へ出たが、終列車は恰度凄じい音を立てて停車場へ着く。二人は轉ぶ様にして暗がりの坂を降りた。停車場の入口へ着いた時、死ぬ場所と云ふことが此間際になつて急に頭へ泛んだ。

「山か、海か。」要吉は聲に力を込めて叫んだ。直ぐに切符賣場へ行つて、西那須野驛行の切符を二枚買つた。

「山」と女は一言答へた。

女は此時既に架橋を渡つて居た。要吉は後から走り着いた。車掌が二人を乗込ませて、橋と戸を閉めた時、汽車は動き出した。

二人は車室の片隅に座を占めて、ほとと息を吐いた。二三の旅客は頭を擡げて此方を見遣つたが、何やら倦げに呟いて、又背後へ凭れる

のも横に成るのも有つた。何だか沙漠を彷徨いて、隆商の天幕の中へでも闖入したやうな心持である。

汽車は武藏野へ出た。平野の時間を劈いて走るので、車輪の音が一層大きく聞えた。それが遠くく成るかと思ふと又自分の身體の上へ突掛ける様に大きく成る。天井から下つた薄暗い洋燈の光を見詰めて居ると、汽車は前へ進むのか後へ退るのか分らない。

其薄暗い洋燈の下に、殺す人と殺される人とは無言で相對した。女の顔は影に包まれて動かない。男は二たび殺さるものは女ぢやない、自分だと思つた。女が憎い、汽車は此二人だけ乗せて、時間の中へ突入つたまゝ、再び歸らない様にも思はれる。

やがて大宮へ着く。要吉は女を促して汽車を出た。明日の朝汽車を待つて東北へ向ふ積りである。他に行くべき場所も手段も残されないやうに、此處で降りたのは何の爲か分らない。二人は停車場を出て大通りを一町許り行つたが、何處の家も寢靜つて居る。唯一軒大戸を開けた家を見附けて、其二階へ上つた。

要吉は女中が出て行くのを待ちかねた様に、何か言はうとして、不圖女の容子に眼を留めた。

女は座蒲團の上に端然と坐つたまゝ、二人で考へて居る。何を考へて居るのか、それも解らない。が、そんな筈ぢやない、何うもそんな筈ぢやない、――折角言ひ掛けたことも言ひそぐれて、少時手持無沙汰にして居たが、やがて、

「今日途中で逢つた時は、何をして被坐した？」
「彼岸だもんですから牡丹餅を作らされちやつたんです。」
それを聞くと、要吉は初めて女の家庭に面したやうな心持がして何とも言はれなく成つた。

「二人とも失はれた。今夜は再び回らない」と、獨言の様に言つて見た。

「一週間計り私の容子が變だものですから、内者の氣を附けて居るので、故とそんな事を爲て遣つたのです。」
かう言つて、少時考へて居たが、「私はつひぞ子供なぞを抱いたことが無い。それが子供にも分ると見えて、偶には抱いて遣らうと言つても、向うから嫌つて抱かれないんですが、今日は如何したのか急に抱いて遣りたく成つて、姉の兒を遊んで遣つて居ると、餘り強く抱き締め

「お宅ぢや最う知れたらうか。」
「今夜は大丈夫でせう」と言つて、やゝ俯向き加減に成つた。「表の方から出ようとする、一寸開けても門が鳴る様に成つてますから、裏から出たんです。夕方雨戸を自分に閉めて、わざと一枚だけ残して置いて――」

「姉は私と違つて、母に似て好い女なんです。」
「貴方には一人のお姉さんでしたな。」
「私が子供を抱いてると、姉が母の側へ行つて、私のことを、何だか平常の様ぢやない、彼方の部屋で泣きかけて居たと、そんな事を言つて告

「それでお家の方の氣が附かない？」
「えゝ、でも少し狭過ぎたから、それを開けるに氣が苛つて、大變でした。」

「何卒、私は斯うして居ますから。」
男は思はず女の顔を見返した。何と思つても思つても言ふ事がない。少時して、

「お宅ぢや最う知れたらうか。」
「今夜は大丈夫でせう」と言つて、やゝ俯向き加減に成つた。「表の方から出ようとする、一寸開けても門が鳴る様に成つてますから、裏から出たんです。夕方雨戸を自分に閉めて、わざと一枚だけ残して置いて――」

「何卒、私は斯うして居ますから。」
男は思はず女の顔を見返した。何と思つても思つても言ふ事がない。少時して、

「お宅ぢや最う知れたらうか。」
「今夜は大丈夫でせう」と言つて、やゝ俯向き加減に成つた。「表の方から出ようとする、一寸開けても門が鳴る様に成つてますから、裏から出たんです。夕方雨戸を自分に閉めて、わざと一枚だけ残して置いて――」

「何卒、私は斯うして居ますから。」
男は思はず女の顔を見返した。何と思つても思つても言ふ事がない。少時して、

「お宅ぢや最う知れたらうか。」
「今夜は大丈夫でせう」と言つて、やゝ俯向き加減に成つた。「表の方から出ようとする、一寸開けても門が鳴る様に成つてますから、裏から出たんです。夕方雨戸を自分に閉めて、わざと一枚だけ残して置いて――」

「何卒、私は斯うして居ますから。」
男は思はず女の顔を見返した。何と思つても思つても言ふ事がない。少時して、

「ね、就寝みませうか」と、要吉は後を見送りながら言つた。
「何卒、私は斯うして居ますから。」
男は思はず女の顔を見返した。何と思つても思つても言ふ事がない。少時して、
そんな眞似をするのか。女は斯うして一身を衛らうとして居る。それだけなら未だ可い。此期に及んでなほ自分をそんな男だと思つて居られたら――最う取返しが附かない。が、まさか此女にそんな事もあるまいと思ひ返して、
「えゝ、それぢや私も起きて居ませう。」
春の宵ながら、夜深けては底冷えがして曠野の一つ家の様に四邊が森とした。二人は膝を突合せたまゝ、少時物を言はなかつた。やがて、

「あれは、あの物は持出された？と、男の方から訊く。

女は黙つて、左の手に懷を抑へて見せた。

「それぢや、此包みは？」

「先生からのお手紙が滑入つてゐる。」

「最初からの？」

女は點頭く。男は微笑みながら手に取上げた。

「私先生に済まないことをしました。」

「何を？」

「あの『死の勝利』を、日記だの、其外いろんな物を庭で焼棄する時に、つい間違へて火の中へ抛り込んで仕舞ひましたから。」

要吉は再び女の顔を瞻めた。

「其方が好い」とは言つたが、何うも知らずして焼いたものとは思へない。星月夜の下に、女が半身を火影に照されながら、反古を焼く姿が眼に泛んだ。

「貴方は始終日記をつけて居るのか。」

「えゝ」と女は微かに點頭いたが、「私には本當に談話の出来る友達がないから、友達と談話をする代りに日記を書く。そして三箇月位に焼いて仕舞ふんです。」

「何故。」

「其位経つと、自分が書いたものの様な氣がしないから。」

朋子は急に黙つて仕舞つた。

今夜家を出る前に、女は手紙と一緒に焼くつもりで、久しく捨て置いていた日記を取出した。一枚づつはぐつて行く間に、不圖、一月末の或日の下に眞黒に塗消した跡を見附けて、胸を騒かせながら、遡て其前後を讀んで見た。あゝ、あの日から始まつた、あの日から——だが、此様にして自分にさへ隠さうとした事を、何うして男の前に打明けたのか、男の手に自分の生命を委ねたのか。矢張自分は弱かつた——左様思ふと堪らない。男に對する女の信憑はいよく、容赦がなく成つた。女は自分を滅した男を滅さずには置かない。

日記の反古が白い灰に成つたのを見済まして女は筆を執つて二三行書下した。

我生涯の體系を貫徹す。われは我がミツ君に因つて斃れしなり。他人の犯す所に非ず。

三月二十一日夜

眞鋼 朋子

今一枚には

拜啓、我が最後の筆蹟に候。今日學校に行きませんと申せしは、實は死すとの事に候。願はくば君と共にらざるを許せ。

君は知り給ふべし、われは決して戀の爲に人の爲に死するものに非ず、自己を買かむが爲なり、自己の體系を全うせむが爲なり、孤獨の旅路なり。天下われを知るものは君一人なり。我が二十年の生涯は勝利なり。君安んぜよ。而して蕩事を許せ。さらば

明治四十一年三月二十一日

宛名は正子の女にした。併し讀ませるのは相手の男で有つた。自分が息絶えて、男の心中の記憶と化した後、此遺書を讀んだとしたら、男の失望は何んなで有らう。若し又光の薄い獄窓の下で讀んだとしたら、恐らく悶え死に死なない者は有るまい。女は自分の死後になほ男の運命を支配する力を自覺して、一層を囁んだまゝ、片頬に刃のやうな冷笑を泛べた。

朋子は今其時の形相を自分ながら眼に見るやうな氣がした、何でも可い、最う何でも可いから早く決行して仕舞ひたい。

「出ませう、早く此處を出ませう」と、俄に男の腕を掴んで飛立つやうにしたが、又うつとりと

坐り直した。

わが生命を爆發させて、相手の生命を碎かうとする。男は女がそんな恐ろしい報復の手段を執つて居ようとは知る筈がない。

「如何したので、え。」

「いえ如何もしない」と言ひながら、朋子はぼんやり座敷の隅を見詰めた。

隣の室か、それとも一つ置いて向うの室か、有らう。野獸の寝て居るやうな鼾の聲に交つて、時々齒をきしむ音が聞えて居たが、

「あゝ」と、不意に遺溺のない女の聲がして、

「最う間に合はない」と明白に聞えた。

二人は思はず顔を見合せた。後はむにや／＼と寝惚けた欠伸に代つて、鼾の音もはたと止んだ。曉方近い空氣は身を斬るやうに人の肌に通つて來た。

「お寒かア有りませんか」と、やがて女は襟を振合せながら言つた。

「えゝ」と、要吉も一寸女を見返したが、頭の中へ群がつかつて來る感想を掃ふやうに、「ね、談話を爲ませうよ。貴方の小さい時分の話をして下さい。私は未だ貴方のことは何も知らない。」

「小さい時分の？」

「二人が現在爲て居ることとは全然關係のない事だ。」

「朋子は少時黙つて居たが、

「私のこれれ」と襟に刺した煙銀の襟留を弄つて見せて、「五つの時から失くさないで持つて居んです。」

「そりや何です。」

「四葉の首飾でせう。これを持つて居る者は何だと云ふぢや有りませんか。」

「えゝゝ」

「心迄も捧げるんだつて」と、一人で笑つた。

「私は知らない。で、それを。」

「父が佛蘭西から歸つた時、土産に呉れたのです。これと女持の時計とを姉妹の前へ出して、お前の方が小さいから何方でも好きな方を先へ取れと言はれて、私は此方を取つて仕舞つた。」

要吉はまじ／＼と其襟留を見詰めたまゝ、黙つて聞いて居たが、女の言葉が途切れたので、

偶と眼を見上げて其顔を見遣つた。

「それからもつと外に。」

「えゝ、姉は其時分から私に親切でしたが、私は矢張不好い性質の女でした。」

かう言つて、女は男の眼を避けるやうに顔を背向けながら、「何日かも姉が大切に飼つて居た

金絲雀を殺して仕舞つたことが有るんです。矢張七つか八つの頃でしたらう。何を怒つてだつたか、今は記憶えて居ません。姉の居ない間に鳥籠の中へ手を突込んで、金絲雀の頭へ留針を打込んだのです。二三度ぱた／＼と羽翼を動かしたきりで、鳥は死んで仕舞つた。血も出ないし、利かい毛が被さつてるので、留針も分らない。到頭如何して死んだか知れずに仕舞つた。

今でも未だ私が殺したとは誰も知りませんまい。」

「今でも」と要吉は息を詰めた。

「併し姉は最うそんな金絲雀のことなど忘れて居ませう。」

男は兩手に女の兩手を把つた。そして、初めて見る様にしげ／＼女の顔を見守つた。

遠方で一番鶏が啼く。

三十三

やがて猶でも起出たと見えて、階下ががたつき出した。ぱた／＼と廊下を歩く草履の音も聞える。要吉は何度も女を呼んで見たが、皆忙しさうにして返辭をしない。

「如何したのでせう。昨夜一番汽車で立つからと言つて置いたが」と、又時計を出して見ながら、「最う汽車の着く時間ですね。」

朋子も何やら落着かぬらしい。で、
「此儘立ちませうか。」

「ええ。」

二人は身支度をして立上つた。

街には朝霧がかゝつて、未だ人通りはない。
人力車の立場らしい家の軒から一本の竿が出て
其頭に汚い旗がしつとりして垂れて居る。楊枝
を銜へた男が車の輪を拭いて居る。

停車場の振鈴が鳴る。二人は遽て駈附け
た。プラットホームに立つて、待つ間程なく
上野發の一番列車が霧の中から現はれた。

二人は又北に向つて行く。朝の夙いためか、
同乗の客は肥つた商人體の男一人きりで、大
きな革鞆に凭れたまゝ、昨夜の夢を續けて居た。
時々手枕の肘を外して、ぼんやり赤い筋の張つ
た眼を開くが、直に又うとくと寝附く。

二人は湯婆の上に足を揃へて腰掛けて居た。
晨朝の寒さは一しほ身に徹へる。

「これを着ては」と、要吉は手に持つて居た女の
コートを差出した。

「いえ、これで可いんです」と、朋子はそれを受
取つて、「ぢや斯う爲ませう」と、言ひながら、
二人の膝の上に被けた。

其下で二人は手を繋いだ。

何時の間にか、客車の中へ朝日が射し出し
た。霜枯れた田圃の上に、煙の渦が影を落して、
千足の猿が狂ひ廻る様に後へくと轉がつて行
く。要吉は久らくそれに見惚れて居たが、不圖
女が口元に笑つて居るのを見て、
「何？」

「ええ、唯。」

朋子の視線は前の男に注がれて居た。昨宵か
ら初めて女の顔を目影の下で見た。朋子は一寸
羽織の袖を翳して、
「こんな色全然私とは調和しないでせう。」

「なに、單色だから？」

「ええ、何日か紺紐の此色が所好だと仰有つた
でせう。だから態々これを着て出たんです。」

女の髪には、濃いお納戸の花の紺紐が差して
ある。男がそれに眼を遣ると、一寸右の手を上
げて頭髮を抑へる眞似をした。

「あゝ其手義は——」

「これ？」と男の前へ其手を出して、「早く一
對にして下さいな。」

要吉は衣囊から手袋を出して、片方の手に一
本づつ指を持つて穿めて遣つた。女は黙つて左
様されながらだん／＼男の腕へ凭つかゝる様
にした。何だかそんな事で男の心を繋がうと

するものらしい。

やがて宇都宮へ着く。其時迄軒の音を立てて
眠つて居た商人體の男は、急に眼を開いて、大
革鞆を提げながら、あたふたと降りて行つた。
少時窓の外に物賣の聲が騒々しい。

やがて汽笛が鳴つて、列車はがたりと動き出
した。今度は二人の外に乗客もない。汽車は
平野の中を駛つた。

何をしに行く。二人に成ると共に、一層厳し
くそれが男の心に迫つた。女を殺しに行く。最
初自分が貴方なら殺せる」と口走つた時、女は
一番自分に接近して來たやうに見えた。彼時か
ら見ると、今は又ずつと離れて仕舞つた。終局
に於いて人間は矢張り一人のものかも知れない。
一人だ。が、一人だとすれば、此女とした約束
を果すには、自分の女に求める力——愛の力に
據る外はない。併し酬いられざる愛の力が、そ
れ程力有るものであらうか。

で、それが駄目だとすれば、後は只一種のエ
キスペリメントとして、藝術の徒の好奇心に手
頼るばかりだ。好奇心の犯罪——此上は只狂人
に成る外はない、飽迄自意識を失はぬ狂人に成
る外はない。

男は凝乎と女の横顔を見詰めた。赤い絲のや

うなものが、一筋女の首を周つて連なる様に見えた。女は堅く口を結んだまゝ物を言はない。一人で考へて居る。自分が自分の事を考へて居る様に、此女も自身の事を考へて居るので有らう。只黙つて居られるのが氣懸りで堪らない。

「二人は」と、男は思はず口に出した。「二人は別々の事を考へて居るのだらうか。」

「え」と、女は何やら解らなさうな顔をしたが、急に男の手頸を掴んで振りながら、「別々ぢやない、別々ぢやない。」

「ふむ、別々では死ねない。」

二人は長い間無言をつづけた。汽車は小さい停車場へ着く。

やがて又汽車の出るのを待つて、要吉は獨言の様に言出した。「二人の何が——これが、普通の金に詰つたとか、添ふに添はれぬとか云ふやうな、左様いふ原因で死にに出たのなら、こんな厭迫は感じまい。其方が何の位好いか知れないだらう。」

朋子は一寸男を見返したまゝ返辭をしなかつた。男も其儘口を噤んだ。

幾つと同じ様な小さい停車場がつづく。新に田舎者らしい三人の客が乗込んだ。要吉はぼん

やりそんな人達の容子を眺めて居たが、「ねえ」と、女の方へ振向いて、「貴方は東北を旅行したことが有るか。」

「え、一度平泉まで。」

「ぢや、衣川や高館の跡も見て来たんですね。」女は鷹揚に點頭した。

夏草やつはものどもが夢の跡。要吉は目の前に死後の長い時間と廣い空間とを茫々として見た。で、何か言はうとした時、汽車が停車場へ着く。西那須野驛と聞いて、女を促して、遽てて客車を降りた。

うね／＼と東北の野に向つて遠ざかり行く列車を見送りながら、二人は停車場を出た。別に行くべき處もない。車夫の親方らしいのが傍へ来て勧める儘に、人力車を二臺鹽原まで急がせた。鹽原は此處から五里に餘るといふ。

那須野は只ひろ／＼と霜枯れた草野がつづく。一面に灌木の木の葉が赤く枯れて所々に若い松の葉が交つた。行手の雪を被つた山脈から吹卸す風は春のものとも思へぬ。

一筋の街道が枯野の中を眞直に走つた。上りだといふので、車夫は緩々と曳いて行く。同じ何んな人を乗せて行くかは知る筈もない。薄い日影が女の肩を照して居た。

原の眞中で、朋子は俄に人力車を停めさせた。「如何かした？」と、後の人力車に乗つた要吉が訊く。

「いえ、只風が眼に沁みて痛いから。」二臺の人力車は又駛り出した。山の麓に杉の樹立がある。此村迄来れば道の半ばだといふ。少時そこで休憩した後、いよいよ坂道へ差懸つた。雨の降つた後で泥濘が多い。

山路は元九折に紆つて、深い谷底には笹川の淺瀬も見え出した。湯の宿へ近づくにつれて、山の氣が冷やかに、山蔭に雪が積つて、木の葉の落ちた枝が黒い網の様に連なつた。車夫はくど／＼と鹽原の名勝を説く。煩いから黙つて居ると、心得て更に言葉を繼ぐ。

日暮近く湯の宿に着いて、二階の新しい座敷に案内された。山國の朝夕寒く、大火針に炭火の青い炎を上げるのが懐かしい。二人は其側へ寄つて坐つたが、酷く勞れた様で、向ひ合つたまま物を言はない。一夜の合宿に知らぬ同志が泊り合せたら、斯んなものかも知れない。

下駄が来て、「お風呂へ御案内しませう」といふ。山國の男が着るやうな袴を穿いて居る。要吉は黙つて朋子を見返つた。女は頭振を掉

つたので、

「後にするから」と、断ると、

「それでは、直ぐ御膳を差上げます。」

白い圓笠の華洋燈が持出された。二人は其下で夕餉の箸を上げた。

「私は是迄貴方の前で何度物を喰べたらう。彼時此時、殆ど數へられる。これから何度喰べるか。」

朋子はたゞ下を向いて居た。

やがて食事を終つた。長い廊下は寂として、客は二人の外に有りとも覺えぬ。早くから雨戸を繰つたが、山嵐は絶えず庇を吹きまくつて、早瀬の音が耳につく。

「一寸其手紙を見せて下さい。」

「え、是れ？」

女は包を開いて手紙の束を男に渡した。

「随分有る」と、要吉は自分を冷笑ふやうに言つた。

「尤もヂョールヂオは二年間に一人の女へ二百何本といふ手紙を書いた。」

「えゝ、でも私達はそれより烈しいことが有つた。一日に二本のことも。」

二人は洋燈の下に頭を寄せた。要吉は其中の一本を手當り任せて取つて中味を抜き出さうと

したが、偶と今見たら修辭的な誇大な文句許り並べて、死んだ人の墓銘を見る様に、空虚な文字に代つて居るやうな氣がしたので、手に持つたまゝやゝ躊躇した。

「何だか出して見るのが怖い。寧ろ止めませうか。」

「お止めなさい」と、女は引たくる様に取上げた。

そこへ宿の主人が出て、茶代の禮を述べてから、宿帳を出して引退つた。要吉はそれを取上げて、有體に二人の住所姓名を記けた。

朋子も傍から見て居たが、に々と笑つたまゝ、何とも言はなかつた。又自分一人の中へ引込んで、相手の男のことも忘れた様に見えた。要吉は少時それを見守つて居た。何も言ふことがない。強ひて言へば、此場に應はしくない聯想を招くのが心苦しい。

「湯へ入らうか」と、やがて男が堪へかねた様に口を開く。女はたゞ頭振を掉つた。

「汽車の煙にも吹かれたから、一寸汗を流して置いた方が可い。」

「お留守番をしますから、先づ行つてらして。」

「ちや、後からね」と、男は立上つた。

「えゝ、清冽な湯だつたら」と、追掛ける様に言ふ。

それを聞捨てたまゝ、手拭を下げて湯殿へ降りる。板の間に着物を脱いで、浴槽の中に立つた。槽は木の臭ひのする程新しい。湯は絶えず樋を傳つて流れて来て、槽の縁を越して落ちて行く。天井の下に立置めた湯氣は夜深の変さに凝つて、一しほ息苦しい。

要吉は片肘を槽の縁に託したまゝ、柱に掛けた洋燈の火影を見詰めて居た。濃い湯氣の玉が其前をぐる／＼と廻つて、月堂のやうな輪をゑがく。眼を離さないで、凝乎とそれを眺めて居ると、だん／＼燈火の光が遠く成つて行く。かうして幾重にも白い湯氣に包まれて、其奥に閉籠められたまゝ、自分は二たび歸られないので有らうか。だん／＼氣も遠く成つて、樋を落ちる湯の音だけが、山の猪が來て水を飲むやうに、べちや／＼と聞えて居る。只、それだけで此世に繋がれて居るやうだ。此儘、水の上に泛んだまゝ、二たび眼を開かなかつたら——二たび二階に残した女を見なかつたら——

不意に湯殿の戸の開く音がして、われに歸つた。誰やら這入つて來たらしい。恰度洋燈の下に立つて居るので、男とも女とも見分け難い。

何か物を言つたらしいが、好くは聴取れなかつた。間もなく、板仕切を距てた女湯の方から、ひそやかに湯を使ふ音が聞えて来た。

要吉は匆卒に濡れた身體を拭いて風呂場を出た。薄暗い廊下傳ひに、裏梯子から二階へ上つた。何の部屋も灯火が點いて居ない。

座敷へ戻つて見ると、有明を二つ點火して、二つとも寢床が延べであつた。何處へ行つたのやら、朋子の姿は見えない。要吉はひとり火鉢の前に坐つて待つて居た。

やがて女も湯から上つて来た。髪を洗つたと見えて、ちびれ毛が肩に波を打つて居た。其足で衣桁に濡手拭を掛けて来たが、眞中へ鏡臺を持出して、其前に坐つた。油氣のない髪だから直に束ねようとするらしい。要吉は只その女らしい手附を眺めて居た。あの長い髪をあの細い頸に巻附けて、力任せに引いたら——ふらふらと、そんな心持にも成つた。恰度女は彼方を向いて居る。何だか腕の力が抜けたやうな氣がして、纔に擦げた腰を下した。今自分が何を爲て居るか、それを知つて居て人殺しが出来うか。無意識に成る外はない、一瞬の誘惑に驅られる外はない。自分の力で、自由意志を以て、人間が人間を殺せるものか。殺すものは——何

か知らぬ——自分以外の或物だ。或物の道具と成らなけりや殺せるものでない。

「ね、髪を束ねないで、其儘で居て下さい。」男が急に聲を掛けた。

「え」と、朋子は振返つた。

「髪を垂れた方が美しい。」

女はつと立上つて男の側へ来た。男は女の背へ手を廻して抱へた。指が濡れた髪の中へ這入る。不圖それが血汐のぬめりのやうな氣がした。其時女は男の腕に身を委ねたまゝ、そつと懷の短刀を出して、男の手に握らせた。有明の灯に透して見ると、黒鞘の短い懷劍である。

「早く、早くして。」男はそれを握つたまゝ、思はずたじくと成つた。此儘では——此儘では如何することも出来ない。

「ねえ、貴方は」と、水に濡れる人のやうに、女の手を掴みながら、「貴方は私の爲に死に、私は貴方の爲に死ぬ。左様言つて下さい。私を愛すると、唯一言。」

其一言で自分は採はれるのだ。我を忘れることも出来る。そしたら——けれども、女は只黙つて居る。

「言へない、え、言へない？」
「其時迄、其時迄言へない。」

要吉は女を引起して、凝乎と其顔を見入つた。

女は其眼を避けるやうに、彼方此方自分の顔を持扱ひながら、つと男の膝に突伏して泣く。涙は着物を透して煮える様に熱い。

男は女を抱へたまゝ、何とも言はれない苦悶を経験した。何故言へない、何故其一言が此女には——が、言へぬものなら仕方がない。今更何と言つた所で、それが如何なるものか。女は一直線に思ひ込んで居る。それに自分は——自分は生温い水だ、熱くもなければ冷たくもない、其唇の口から吐出されるやうな生温い水だ。一種の實驗として、人殺しの出来るやうな超人でもなければ、又それを忘れて狂暴を敢てするやうな狂人でもない。矢張自分には人間以上の力はなかつた。そんな物が有る様と思つたのは、眞個一時の妄想に過ぎない。あゝ、自分は一生の危機に臨んで居る。何と言つた所で、自分は此女を失ふ外ないかも知れない。此女を失ふばかりでなく、自分といふものの靈魂をも——

斯くて夜の白むまで、二人は此姿勢の儘動かなく居た。それは人間の一生の様に長たらし

い、又人間の一生の様に短い夜で有つた。

二人は又次の日の光を見た。

有明の丁字が落ちて、ぼつと薄白い炎を上げたが、其儘夢の様に消えた。火皿に油が盡きたのだらう。何處かで雨戸を繰る音が聞える。

女は男の腕に顔を伏せたまま、息があるものとも思へない。要吉はそつと身體を揺振つて居た。

「ね、又夜が明けた。」
女は動かない。

「今頃御宅ぢや——阿母様には何んな夜が明けたらう。」

「そんな、そんな事を言ひ出しちや、可厭だ。」

女は男の口を閉ぐやうにして、泣く。

「實はね——要吉は女の背に手を掛けたまま、夜が明けたら御宅へ電報を打つて、迎へ

の人に來て貰はうと思つて居た。其人遂に貴方を渡して置いて、私は——矢張北を向いて、山

越えに行ける所まで行かうと決心した。

「そんな事をされちや耐らない」と、女は頭を上げて、手當り任せに獅噛みつく。

「其外に仕様ない」と投出す様に言つた。「私は思ひ違ひをして居た。死ぬ時は、互に手を取つて、めそ／＼泣き合つて、溶けて行くやうな心

持に成らなきや死ねない。私の爲に泣いて呉れる相手でなきや手は下せない。」

何か言ふだらうと思つて待つて居たが、女は突伏したまま、返辭をせぬ。又じろ／＼女の耳の後ろを見守りながら、

「貴方は未だ私に對して敵意を持つてゐるんだ。」

「敵意——と、聲の下に呟く。」

「敵意さ。昔から打解けたことのない——兩性間の舊い怨恨」と、ぼつり／＼言つたが、「敵

同士ぢや一緒に死ねない。」

「左様ぢやない／＼。そんな事は十九日から解つて居て呉れた筈だ——あの手紙を読んで呉れたら。」

「それぢや何故——と、男は思はず腰を立てた。

不意に襖を開けて、下女が有明を下げに來た。二人はつと座を開いたが、顔を見合せたまま、少時物を言はなかつた。

やがて女は想出した様に、男の手を執つて揺振りながら、

「私は行く、先生の被行しやる所まで行く。」

「樺太迄も？」と、男は女の顔を見返した。

「何處へでも。」

「死ぬ處まで。」

女は笑顔を見せて點頭く。

要吉は何やら考へて居たが、

「ねえ、御宅では田端停車場に氣が附きはすまいか。」

女も一寸考へて見て、

「参ります、屹度参ります。」

「それぢや、あの晩の終列車で、二人が西那須野驛までの切符を買つて乗込んだことは、直に知れる理由だ。」

「朋子も不安らしい容子をして聞いて居たが、早く立ちませう、早く。」

「左様、猶豫しては居られない。」

二人は立上つた。折柄戸を繰りに來た宿の男を急ぎ立てて、あたふたと出立の用意をした。

三十四

朝霞の給仕に出た下婢に、それとなく様子を知ると、此奥の道は尼花峠と云つて、會津へつづく街道、冬の間は雪が丈餘も積つて、月を越さなければ人は通れないといふ。

二人は近邊を見物すると言ひ置いて、宿を出た。上の鹽原迄は、昨日の人力車に乗せられて行く。山の中の寢惚けたやうな町であつた。昔

風な湯の宿が何軒も並んで居る前を、がら／＼と町外れ迄曳いて行つたが、後の車夫は急に振回つて車上の人を見上げながら、

「もし、旦那、何方へ着けませうか。」

要吉は夢から覺めたやうに四邊を見廻した。

「うむ、最う可いんだ。此處で卸して呉れ。」

「でも、何方かお宿を——」

「うむ、可いんだ。此邊を散歩してから勝手に宿を取るから、最う歸つても可いんだよ。」

「左様ですか。」と、車夫はしぼ／＼桿棒を卸した。

町の町外れに、壊れかゝつた木の橋がある。

二人は橋の袂に立つて、空車が歸つて行くのを見送つて居たが、其影が見えなく成ると、速くて橋を渡つた。又北へ向つて行く。

麓の村迄は三里だといふ。二人は落人の様に道を急いだ。街道は爺川の土流に添うて絲の様に續く。早瀬の水の激む邊りに、二人の男が岩の上に踞んで、禪定に入れる人の様に黙々として絲を垂れて居た。十三三の女の子が、背中に赤ん坊を結び附けながら、弟の手を引いて來た。二人とも裁附を穿いて居る。其外には減多に人にも出逢はない。

空が晴れて、雪の積つた山の嶺が白くくつ

きりと際立つて見えた。あの山越しに行くのである。朋子は袂を上げて袂に滲む汗を拭いた。山から吹いて来る風は冷たいが、日はほかく／＼と暖かい。

谷合の平原はだん／＼迫つて、やがて麓の小村へ着く。村外れの軒家で、簀に草鞋を吊して、障子に煙草の葉の描いてある家を見附けて、要吉は女をかへり見ながら、つと園を踴いだ。ついで女も這入つて來た。其後から直に障子を閉て切つた。

「一寸休ませて貰ひますよ」と、縁鼻に腰を掛けしたが、誰も應ずるものがない。家の中はがらんとして居る。

不圖園廻りの側に蹲つて居る爺さんに目を附けて、最一度聲を掛けて見た。

「ねえ、一寸休ませて貰ひましたよ。」

「え、と、爺さんは頓狂な顔を上上げた。眼の縁が赤く爛れて居る。

「これは／＼、お出なされや」と言ひながら、急須の茶を煎れて、二人の傍へ持つて來た。

「如何でせう、峠は未だ雪が深いでせうね」と、要吉は爺さんに眼を附けながら訊いた。

爺さんは耳が遠いらしい。要吉は聲を大きくして最一度訊いて見た。

「あ、峠か」と、爺さんはきよ／＼として、「峠の開くのは、左様ぢや、月を越して十日も経つてからかの」と言ひながら、二たび園廻りの側へ戻つた。

其儘うつら／＼として居たが、又急に眼を開いて、

「左様ぢや。一昨日もな、一人旅商人のやうな若衆が峠を越すと云うてぢや、俺が強つて留めたが、無理に振切つて出掛けなぢや。あれも無事に越せりや可えがと、案じて居るぢやわい。」

「でも、戻つて來なけりや無事に越したのでせう。」

要吉は口を插んだ。が、爺さんは矢張聞えないらしい。

「裏山が難所でな」と、獨言のやうにつづけた。「上り一里にくだり三里、三里の下りが難所でな。それに午前ぢやと未だ可えが、これから日が下りかけると、雪の下が緩んでな。裏山の雪崩れ、此奴が怖ろしいぢや。」

要吉は朋子と顔を見合せて點頭き合つた。雪崩れの下に葬られる——自然の手に身を委ねるほど容易いものは有るまい。自然の前に人間の意志はない、不和も憎悪もない。凡てを混沌の

裡に狎ることが出来る、暗黒の裡に——あゝ未だ此處に最後の手段が残つて居た！

二人は少時思ひ／＼の考へに耽つて居たが、やがて一人が、

「立ちませう」と言出した。

一人も直に立つた。

要吉は幾許かの茶代を下に置いて、

「爺さん、何うもお邪魔でした」と聲を掛けた。

爺さんは眠つて居るのか返辭をしない。其儘其處を出ることにした。

二人は又目の前に山を見て急いだ。村を抜けて板橋を渡れば、直に山路へかゝる。本道は栄だ人が通らない。炭焼小屋の在る處まで、抜路の方が却て道が開いてると聞くまゝ、山の麓から右へ折れて、谷川に隨いて登る。山は浅いが、鳥も啼かぬ。雪の下行く谷水に添うて、炭焼の通路は林木の中を縫うて走つた。

水の中の石を傳つて、背負梯子に炭俵を背負つた男が、むず／＼と谷川を渡つて來た。二人は此方の岸に立つて待つて居たが、其男は通りすがりに、被つた手拭を取つて、

「御免なされや」と挨拶した。

「炭焼小屋まで、道程は何の位かな」と訊く。

「左様さ、最う五六町も有らうかな。つい其處

ぢやいな」と言ひ捨て、又のそ／＼と行く。

不圖、女の紺紐が水に落ちた。くる／＼と渦を巻いて、見る間に下の巖蔭へ隠れた。女はそれとも心附かない。

二人は又雪を踏んで登つた。谷間の行詰つた處に、二つ三つ炭焼小屋が見え出した。其前迄通り着いて、小屋の中を覗き込むやうにした。

土の中へ圍欄裡を切つて、自在鍵に煤びた茶釜を懸けてある。燃えさしの槽の灰が白い。

要吉は入口に立つて、二三度聲を掛けた。

「おゝ」と小屋の裏から炭焼の女房が出て來た。

「湯が一杯無心したい。」

「湯かいな」と、女房は無愛想な返辭をしながら、茶釜の湯を汲んで出した。

二人は小屋の前の丸太に腰を掛けた。樹の間を洩れる日影がちら／＼して、茶碗に罅は入つても中の水は美しい。

上の山路から、五つ許りの女の兒が素足に藁沓を穿いて、よろ／＼降りて來たが、二人の前に立停つた。時々湧汁を吸り上げながら、日曜きもしないで、代る／＼二人の顔を見上げて居る。

朋子も莞爾して、

「何か遣りませうか。」

「左様。」

「でも、何も有りませんのね。」

「お錢でも可いでせう。」

女は墓口から銀貨を出して、子供に持たせようとした。

「お出／＼、これを上げるから。」

子供は手を出さぬ。立上つて、側へ行かうとすると、わつと泣き出した。

「何を泣くんだよ、これを遣るとぢやに。」

小屋の中から女房が出て、遽て子供に代りに受取つた。此女房が取上げて、汗臭い巾着にきり／＼巻いて、何時迄も所藏つて置くらしい。

要吉は息苦しいやうな心持がした。

日も何かう。二人はやがて其處を立つた。本道へ出る路だと教へられたまゝ、小屋の裏から坂を登りかけたが、勾配の急な上に、未だ人の通つた跡もない。三町とは行かぬ間に、路が雪に埋もれて、何方へつゞくとも分らなく成つた。

少時途方に暮れて立つて居たが、丁々と斧を揮ふ音が御に響いて、谷の向ひの雪の上に木を伐る黒い男が見えた。

「おうい」と呼べば、やゝ有つて、

「おゝ」と應へる。

一人はしばらく雪の中に倒れて居た。又起直つて歩み始めた。路の上は雪が平なので、道には迷はないが、一足毎に膝の上まで踏み込む。女は其足跡を辿つて隨いて來た。一時に休み、百歩に休み、又五十歩に休んだ。休むたびにウキウキを呟いで僅に息を續ぐ。

山の腹を周るとて、幾度も上から土砂を落して来るのに出逢つた。雪崩れの跡と見えて、路が半ば壊れたまゝ、谷間へ落込んだ所も二三箇所あつた。

到頭道は絶壁に消えた。要吉は手に持った
 外套を雪の上に敷いて、其上に女を坐らせ
 て置いて、懸崖の縁を傳ひながら、半町餘り先
 迄路を求めに行つた。岩角に手を添へて瞰下
 せば、數十丈の深い、谿底に枯木の柱が見えて、
 鼓を打つやうな水音が微かに聞えた。

彼方あちこち此方みまは見廻みまわしたが、逆さかも路みちが續つづいて居ゐさう
にもない。又岸傳またのりづたひに戻もどつて來きた。

「^{つか}勞れたのと、男^{をとこ}が訊^きく。

「いゝえ、先生こそ。」

女の顔には、明々と疲勞の色が現はれて居た。それが爲に、一際誘惑の力を加へて、別人の様に見える。男は女を見詰めた。家を出てから、未だ此女の唇に觸れない。

二人は××××××××。

やがて、つと離れて、互に顔を見合せたが、

又 $\times \times \times \times \circ$

空には不快な雲が湧いて、おひく日影も薄

く成つた。暮れるに間も有るまい。

二人は又よろくと立上つた。一町許り後

へ戻ると、土砂交りの雪に埋まつて能くは見分

けられぬが、路は左へ折れて、坂の上へ續く様

にも見える。左右して坂を登つた。山巔迄雪に

敵はれて一本を留めぬ草上の腹を路にしい

の
か
蛸
蛸
と
つ
い
く
。

目が落ちてから、急に朋笑を感ぜた。目の中

路傍に一本取残されたやうな白樺が立つて居る。兎に角其下迄辿り着かうとして、男は泳ぐ

様にして前へ出たが、兩足とも一時に雪の中へ

踏込んだ。其儘ぐらくと眼が眩む。

「あゝ、ウキスキイを——」

女は前へ廻つて、掌から男の目に衝ませ

要言はしばらく横に倒れたまゝ、物を言はな

一可
ノ
ハ
ナ
ニ
、
ハ
イ
フ
心
寺
は。
一

男は度した頃に笑つて見せて、

男は、木村の顔に笑つて見せて、
「最う好い。僕、動きたくない。」

雪ゆきの山やまは寂せきとして暮くれて行いく。

ふたり
一人は黙つて、
黒い夜の色の襲ひ来るさまを

眺めて居た。

「手紙を焼きませう」と、女は意を決したやう

な聲音で言つた。男の顔を覗き込んで、一最う

宜いでせう、ね、ね。

要旨も點頭いた。

女は包みを解いて、手紙の束を雪の上へ投出

した。其上へウキスキイの残りを注ぐ。男は

踞んで燐寸を擦つた。小さな青い火がぼんぼんと燃えて、其儘うすうと煙を出して消えた。二たび擦る。燐寸が半ばから折れた。三たび、四度目に燃え上つた。男の戀を連ねた文字が燃える。黒く煙つて消えようとしては、又ぶす／＼と燃え上つた。

要吉はそれを見詰めて居た、眼も離さず見詰めて居た。いよいよ黒い灰と成つて仕舞つたのを見済まして、不圖女をかへり見たが、自分の顔に泛んだ失望の色が自分の眼にも見えるやうな氣がした。

俄に山嶺からどつと風が落ちて來た。灰を飛ばし、雪の粉を飛ばし、われも人も吹飛ばして仕舞ひさうな。二人は轟と相抱いた。風は山を鳴らして吹きに吹く。

「死んだら如何成るか、言つて／＼。」

女は男の胸を掴んで、噎れた聲に叫ぶ。

「言つて／＼。」

「私には——言へない。」

女は凝乎と男の顔を見守つて居る。それを見ると、男の心には又むら／＼と反抗の心が起つた。生きるんだ／＼、自分は何處迄も生きるんだ。

つと內衣袋から短刀を取り出して、それを握つ

たまゝ立上つた。女は其氣色を見て、

「如何するんですと、突走る様に訊く。

「呀哉と言ふ間もなく、要吉は谷間を見棄けて短刀を投げた。

「私は生きるんだ。自然が殺せば知らぬこと、私は最う自分ちや死なない。貴方も殺さない。」

二人は顔を見合せたまゝ聲を呑んだ。天上の風に吹き散らされて、雲間の星も右往左往に亂れて見えた。女は又叫ぶ。

「歩きませう、もつと歩きませう。」

「うむ、歩きませう。」

二人は雪明りをたよりにして、風の中を行く。風のために雪が氷り始めたやうだ。只、其上層を破れば、底迄踏み込まずには置かない。やつと半町程進んだ時、ぱたりと背後で倒れる音がした。朋子は崖を踏み外したまゝ、聲を立てずに居る。邊で、それを引上げようとして、一緒ににず／＼と摺り落ちた。三間ばかり落ちて行つたが、危く雪の洞に引かゝつた。

二人は折重つたまゝ動かかなかつた。だん／＼風の音も遠く成るらしい。要吉は腰の邊りから冷たい水が沁み込んで来るのを覺えながら、ついうと／＼とした。其後は如何成つたか知らない。

不圖、誰かに喚び起されるやうな氣がして眼を開いた。朋子が凝乎と自分の顔を見守つて居る。

「ね、歩きませう、もつと歩きませう。」

女は急に男の手を持つて、同じ事を繰返した。

要吉は黙つて立上つた。見返れば、月天心に懸つて、遠方の山々は宛ら大洋の濤が其儘氷つた様に見えた。わが居る山も、一面に雪が氷つて、きら／＼と水晶のやうな光を放つた。あゝ氷獄！ 氷獄！ 女の夢は終に形を與へられた。到頭自分は女に伴れられて氷獄の裡へ來た。——男の心には言ふべからざる歡喜の情が湧いた、最う可い。最う可い！ 二人は手を取合つたまゝ、雪の上に坐つて居た。何も言ふことはない！

二人は又立上つた。啞く氷つた雪を踏みしだきながら、山を登つて行く。

山嶺も間近に成つた。

だん／＼月の光がぼんやりして、朝の光に變つて行く。

(明治四十二年)